

国と指導者

下 卷

E・G・ホワイト 著

清 野 喜 夫 訳

福 音 社

PROPHETS AND KINGS
by
ELLEN G. WHITE

Fukuinsha
Yokohama, Japan

目次

第三二章	暗黒時代をもたらしたマナセ王と改革の星ヨシヤ王	1
第三三章	律法の書の発見	14
第三四章	立ちあがった預言者エシミヤ	29
第三十五章	破滅が近い	43
第三十六章	ユダ王国の最後の王	58
第三十七章	バビロン捕囚	69
第三十八章	暗黒を貫く光	80

第三九章	バビロン王宮の四青年・	91
第四〇章	ネプカデネザル王の夢・	102
第四一章	火の燃える炉からの救い・	112
第四二章	真の偉大さとは何か・	122
第四三章	目に見えない守護者・	130
第四四章	主義に固く立つ・	148
第四五章	バビロン捕囚から帰る・	159
第四六章	敵対者に直面して・	174
第四七章	大祭司ヨシユアと天使・	188
第四八章	権力をこえる力・	198
第四九章	王妃エステル決心・	203
第五〇章	学者エズラに導かれた改革・	210

第一章	精神の大覚醒・・・・・・・・	220
第二章	総督ネヘミヤの活躍・・・・・・・・	230
第三章	市街の建てなおし・・・・・・・・	237
第四章	搾取に対する譴責・・・・・・・・	247
第五章	隣国の陰謀・・・・・・・・	254
第六章	律法の公布・・・・・・・・	262
第七章	改革が始まる・・・・・・・・	269
第八章	救い主を待望する人々・・・・・・・・	279
第九章	理想のイスラエル・・・・・・・・	305
第六章	栄光にみちた国が来る・・・・・・・・	322
〔解説〕	イスラエルの預言者・・・・・・・・	337
	聖句索引・・・・・・・・	355

第三十二章 暗黒時代をもたらしたマナセ王と

改革の星ヨシヤ王

ヒゼキヤの時代に繁栄したユダ王国は、長年にわたるマナセの悪政の間に、またもや衰微した。その時に異教主義が復活し、多くの人々が偶像礼拝に陥った。「マナセはこのようにユダとエルサレムの住民を迷わせ、…国々の民にもまさって悪を行わせた」(歴代志下三三ノ九)。先代の輝かしい光の次に、迷信と誤りの暗黒が続いた。はなはだしい罪悪が発生してはびこった。暴政、圧迫、あらゆる善に対する憎しみが起こった。正義はまげられ、暴力は勝ち誇った。

しかし、そうした邪悪な時代にあっても、神と正義のための証人がいなかったわけではなかった。ヒゼキヤの治世にユダが無事に通過してきた苦い経験は、多くの人々の心に強固な精神を啓発させたので、それが今、広く行きわたった罪悪に対する防壁となったのである。真理と義に対する彼らのあかしは、マナセと権力を握った彼の取り巻きたちの怒りを買った。彼らは反対の声をすべて沈黙させることによって、悪行をなおも続行しようと努めた。「マナセは…罪なき者の血を多く流して、エルサレムのこの果から、かの果にまで満たした」(列王

紀下二一ノ一六。

最初に倒れた者のひとり、半世紀以上にわたって、主の任務を受けた使者としてユダの前に立ったイザヤであった。「なおほかの者たちは、あざけられ、おち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、（この世は彼らの住む所ではなかった）、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた」（ヘブル一ノ三六―三八）。

マナセの治世下において迫害された人々のある者は、譴責と審判に関する特別の使命を伝えるように命じられた。預言者たちは、ユダの王は「彼の先にあつた…すべての事よりも悪い事を行」ったと言った。マナセの王国は、彼のこの悪行のゆえに、危機にひんしていた。やがて国の住民はバビロンに捕らえられて行き、そこで「彼らはもろもろの敵のえじきとなり、略奪にあう」のであつた（列王紀下二一ノ一一、一四）。しかし主は、異邦の国で主を自分たちの支配者なる神として認める人々を、全く捨て去られることはない。彼らは大きな患難に遭つたことであるが、神はお定めになった時と方法において、彼らを救い出されるのである。神に全く信頼する者には、必ず避難の場が与えられる。

預言者たちは忠実に警告と勧告を続けた。彼らは恐れることなく、マナセと国民とに語った。しかしその言葉はあざ笑われた。背信したユダは耳を傾けようとしなかった。悔い改めないでいるならば国民に何が起こるかという証拠として、主は彼らの王がアッシリアの兵隊たちの一団によって捕らえられることをお許しになった。「彼らはマナセを…青銅のかせにつないで、バビロンに引いて行つた」。バビロンは彼らの仮の首都であつた。この

苦難によって王は我に返った。「彼は…その神、主に願い求め、その先祖の神の前に大いに身を低くして、神に祈ったので、神はその祈を受けいれ、その願いを聞き、彼をエルサレムに連れ帰って、再び国に臨ませられた。これによってマナセは主こそ、まことに神にいますことを知った」(歴代志下三三ノ一一―一二)。しかし、この悔い改めは著しいものであったにもかかわらず、長年にわたる偶像礼拝の腐敗的影響から国家を救うには時すでに遅すぎたのである。多くの者はつまりき倒れ、二度と立ち上がらなかったのである。

マナセの致命的背信の結果、取り返しのかないほどにその生涯の経験が形成された者の中にマナセの息子がいた。彼は二十二歳の時に王位についた。アモン王について次のように書かれている。「すなわち彼はすべての父の歩んだ道に歩み、父の仕えた偶像に仕えて、これを拝み、先祖たちの神、主を捨て」た(列王紀下二一ノ二一、二二)。彼は「その父マナセが身を低くしたように主の前に身を低くしなかった。かえってこのアモンは、いよいよそのとがを増した」。悪王は長く国を治めることを許されなかった。彼は即位してからわずか二年後、その大胆な邪悪さの最中に、宮殿で彼自身の家来によって殺害された。そして「国の民はその子ヨシヤを王となして、そのあとを継がせた」(歴代志下三三ノ二三、二五)。

ヨシヤは三十一年の間、国を治めることになったが、彼の即位によって信仰の純潔を保ってきた人々は、国家の没落が阻止できるという希望を持ち始めた。なぜならば、新しい王はわずか八歳であるにもかかわらず神を恐れ、最初から「主の目にかなう事を行い、先祖ダビデの道に歩んで右にも左にも曲らなかった」(列王紀下二二ノ二)。ヨシヤは悪王の子として生まれ、父の足跡に従うような誘惑に取り囲まれ、正しい道を歩むように彼を励ます助言者もいなかったにもかかわらず、イスラエルの神に忠誠をつくしたのである。彼は過去の時代の過ちか

ら警告を受けて、彼の父や先祖たちが陥ったような罪の低い水準や墮落に陥らずに、正しいことを行うことを選んだ。彼は「右にも左にも曲らなかつた」。彼は信任の地位を占める者として、イスラエルの王たちの指導のために与えられた教えに従う決心をした。そして神は、彼が服従したので、彼を尊い器として用いることがおできになったのである。

ヨシヤが治め始めた時、そしてその久しい以前から、ユダの国の心から神を信じる人々は、古代のイスラエルに対する神の約束は果たして成就されるのだろうかと疑っていた。人間的見地からするならば、選民に対する神のみこころはほとんど達成が不可能のように思われた。過去幾世紀間にわたる背信は、年の経過と共にいよいよその力を増していった。十部族は異教徒の間に離散してしまった。あとに残ったのは、ユダとベニヤミンだけであつた。しかもこれらの部族でさえ、道德的に国家的に破滅寸前にあつた。預言者たちは、ソロモンの神殿があり、国家的偉大さについては地上のあらゆる希望の中心であつた、麗しい都の全滅を預言し始めていた。神は、ご自分に信頼する者を助けると約束されたことを、撤回しようとしておられるのであるうか。義人に対して長く続いた迫害や、一見悪人が繁栄しているかのように思われることなどに直面した、神に忠実な人々は、将来よい日が来ることを望むことができたであろうか。

こうした切実な疑問を預言者ハバククは発した。彼はその時代の忠実な人々の状態を見て、彼の心の重荷を表現して次のようにたずねた。「主よ、わたしが呼んでいるのに、いつまであなたは聞きいれて下さらないのか。わたしはあなたに『暴虐がある』と訴えたが、あなたは助けて下さらないのか。あなたは何ゆえ、わたしによこしまを見せ、何ゆえ、わたしに災を見せられるのか。略奪と暴虐がわたしの前にあり、また論争があり、闘争も

起っている。それゆえ、律法はゆるみ、公義は行われず、悪人は義人を囲み、公義は曲げて行われている」(ハバクク書一ノ二―四)。

神は忠実な民の叫びにお答えになった。神はご自分が選ばれた代弁者の口によって、神から離反して、異教の神々に仕えた国家に罰を下れるという決意をあらわされた。将来の事について神にたずねていた人々のある者が生きているうちに、神は奇跡的に地の強国の状態を導いて、バビロン人が支配権を握るようになさるのであった。「きびしく、恐ろしく」これらのカルデヤびとが突然神の命によるおちとして、ユダの国を襲つたのであった(同一ノ七)。ユダの君たちと最も優れた人々は、捕虜としてバビロンに連れて行かれた。ユダの町々、村々、耕地は、荒れ果てるのであった。それは何一つ容赦しないのであった。

この恐ろしい刑罰の中にさえ、その民に対する神のみこころはなんらかの方法によって成就されることを確信して、ハバククは啓示された主のみこころに心を低くして従った。「わが神、主、わが聖者よ。あなたは永遠からいますかたではありませんか」と彼は叫んだ。そして「バククは、信仰をもって間近に迫った将来の悲しむべき状態のかなたを眺め、神に信頼する民に対する神の愛をあらわした尊い約束を把握して、次のようにつけ加えた。「わたしたちは死んではならない」(同一ノ一二)。彼はこの信仰の宣言をもって、彼自身の運命とすべての信じるイスラエルの人々の運命とを、あわれみ深い神のみ手にゆだねたのである。

ハバククが強い信仰を働かせたのは、ただこの経験だけではなかった。ある時彼は、将来のことを瞑想して次のように言った。「わたしはわたしの見張所に立ち、物見やぐらに身を置き、望み見て、彼がわたしになんと語られるかを見る」。主は恵み深く彼にお答えになった。この幻を書き、これを板の上に明らかにし、

走りながらも、これを読みうるようにせよ。この幻はなお定められたときを待ち、終りをさして急いでいる。それは偽りではない。もしおそれれば待つておれ。それは必ず臨む。滞りはしない。見よ、その魂の正しくない者は衰える。しかし義人はその信仰によって生きる」(ハバクク書二ノ一四)。

あの大きな試練の時代に、ハバククおよびすべての聖徒たちとすべての義人たちを力づけた信仰は、今日、神の民を支えるのと同じ信仰であった。キリスト信者は、最も暗黒で最も陰悪な状態のもとにあって、すべての光とガの源に寄り頼んでいることができる。日ごとに神を信じる信仰によって、希望と勇気を新たにすることができる。「義人はその信仰によって生きる」。神の奉仕においては、落胆も動揺も恐怖も必要である。主は彼に信頼する者のどんな大きな期待にもまさることをなしとげてくださるのである。主は彼らに必要な様々の知恵をお与えになるのである。

使徒パウロは試練のうちにあるすべての魂に豊かな助けが与えられることについて、雄弁にあかししている。彼に、「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」という確証が与えられた。試練の中にある神のしもべパウロは、感謝と確信をもって答えた。「それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。だから、わたしはキリストのためならば、弱さと侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである」(コリント第二・一二ノ九、一〇)。

われわれは預言者たちや使徒たちが試した信仰を抱いて、それを強めるようにしなければならない。それは神の約束をしっかりと把握して、神がお定めになった時と方法によって救いをお与えになるのを待つ信仰である。

預言の確かな言葉は、われわれの主、救い主イエス・キリストが、王の王、主の主として栄光のうちに再臨なさるときに、完全に成就するのである。待望の期間は長く思われるかも知れない。心は失望的状况下に圧倒されるかも知れない。また、信頼されていた多くの人々が、途中で倒れてしまうかも知れない。しかしわれわれは、未曾有の背信の時代にあつて、ユダを励まそうと努力した預言者と共に次のように言おう。「主はその聖なる宮にいます、全地はそのみ前に沈黙せよ」(ハバクク書二ノ二〇)。「この幻はなお定められたときを待ち、終りをさして急いでいる。それは偽りではない。もしおそばへ待ってあれ。それは必ず臨む。滞りはしない。…しかし義人はその信仰によつて生きる」という励ましの言葉を常に覚えていよう(同二ノ三、四)。

「この年のうちにこれを新たにし、

この年のうちにこれを知らせてください。

怒る時にもあわれみを思いおこしてください。

神はテマンからこられ、

聖者はパランの山からこられた。

その栄光は天をおおい、

そのさんびは地に満ちた。

その輝きは光のようであり、

その光は彼の手からほとばしる。

かしこにその力を隠す。

疫病はその前に行き、熱病はその後に従う。

彼は立って、地をはかり、

彼は見て、諸国民をおののかせられる。

とこしえの山は散らされ、永遠の丘は沈む。

彼の道は昔のとおりである」。

「あなたはあなたの民を救うため、

あなたの油そそいだ者を救うために出て行かれた」。

「いちじくの木は花咲かず、

ぶどうの木は実らず、

オリブの木は産はむなくなり、

田畑は食物を生ぜず、

おりには羊が絶え、

牛舎には牛がいなくなる。

しかし、わたしは主によって楽しみ、

わが救の神によって喜ぶ。

主なる神はわたしの力である。

（ハバクク書三ノ二一六。一三。一七一―一九）

輝かしい希望の言葉を語り、現在の刑罰と共に将来の勝利について語ったのは、ハバククひとりではなかった。ヨシヤの治世に主の言葉がゼパニヤに臨み、背信が続くならばどのような結果を招くかを明示し、真の教会の注目を輝かしい将来の展望に向けさせた。ユダに切迫した刑罰についての彼の預言は、キリストの再臨の時に悔い改めない世界に下る刑罰について、同様に適用することができる。

「主の大いなる日は近い、

近づいて、すみやかに来る。

主の日の声は耳にいたい。

そこに、勇士もいたく叫ぶ。

その日は怒りの日、

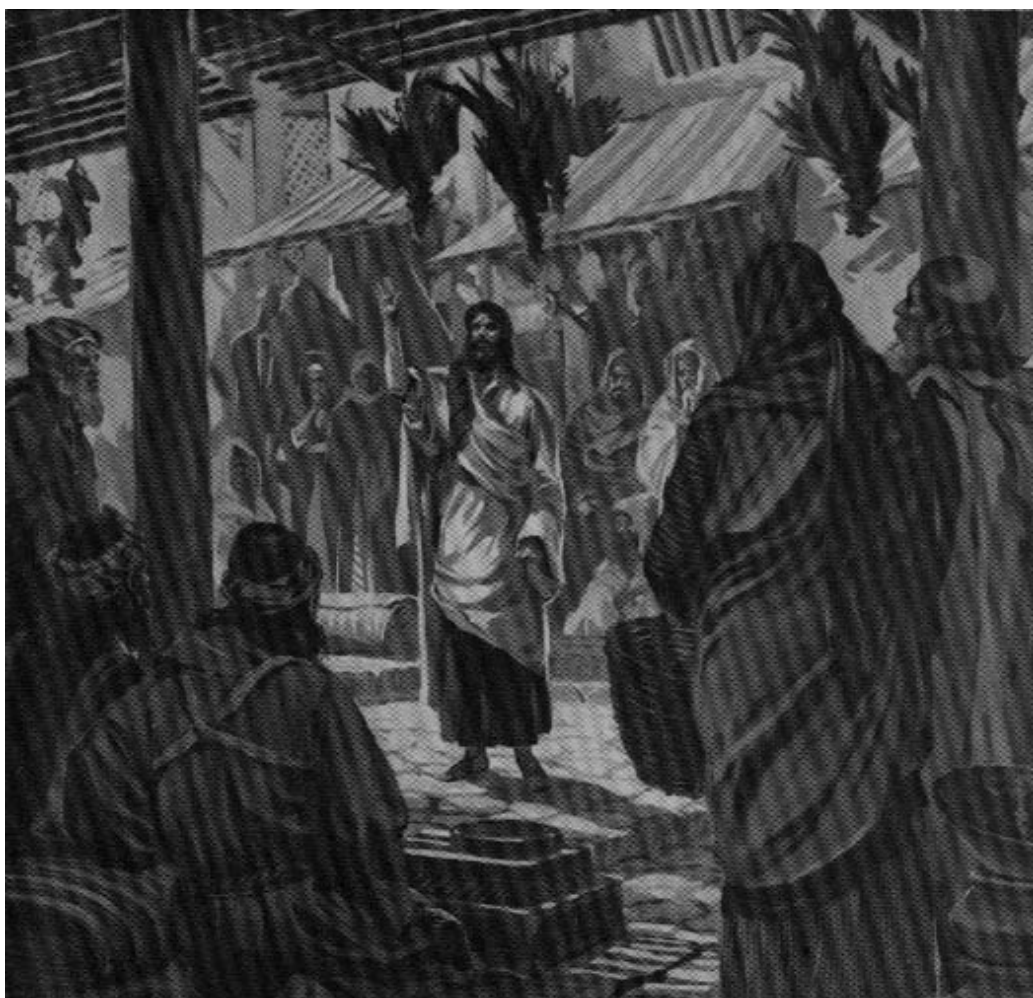
なやみと苦しみの日、

荒れ、また滅びる日、

暗く、薄暗い日、

雲と黒雲の日、

ラッパとときの声の日、



ゼパニアは民の不信を責め、改心を呼びかけた。「主の大いなる日が近い」と彼は警告した。

堅固な町と高いやぐらを攻める日である。」

(ゼパニヤ書一ノ一四―一六)

「わたしは人々になやみを下して、盲人のように歩かせる。彼らが主に対して罪を犯したからである。彼らの血はちりのように流され、…彼らの銀も金も、主の怒りの日には彼らを救うことができない。全地は主のねたみの火にのまれる。主は地に住む人々をたちまち滅ぼし尽される」(同 一ノ一七、一八)。

「あなたがた、恥を知らぬ民よ、

共につどい、集まれ。

すなわち、もみがらのように追いやられる前に、

主の激しい怒りがまだあなたがたに臨まない前に、

主の憤りの日がまだあなたがたに來ない前に。

すべて主の命令を行うこの地のへりくだる者よ、

主を求めよ。

正義を求めよ。

謙遜を求めよ。

そうすればあなたがたは主の怒りの日に、

あるいは隠されることがあろう。」

(同 二ノ一三)

「『見よ、その時あなたをしえたげる者をわたしはことごとく処分し、足なえを救い、追いやられた者を集め、彼らの恥を誉にかえ、全地にほめられるようにする。その時、わたしはあなたがたを連れかえる。わたしがあなたがたを集めるとき、わたしがあなたがたの目の前に、あなたがたの幸福を回復するとき、地のすべての民の中で、あなたがたに名を得させ、誉を得させる』と主は言われる」(ゼパニヤ書三ノ一九、二〇)。

「シオンの娘よ、喜び歌え、

イスラエルよ、喜び呼ばわれ。

エルサレムの娘よ、心のかぎり喜び楽しめ。

主はあなたを訴える者を取り去り、

あなたの敵を追い払われた。

イスラエルの王なる主はあなたのうちにいます。

あなたはもはや災を恐れることはない。

その日、人々はエルサレムに向かって言う、

『シオンよ、恐れるな。

あなたの手を弱々しくたれるな。

あなたの神、主はあなたのうちにいまし、

勇士であって、勝利を与えられる。

彼はあなたのために喜び楽しみ、

その愛によってあなたを新にし、

祭の日のようにあなたのために喜び呼ばわれる』」。

(同三ノ一四―一七)

第三十三章 律法の書の発見

預言者たちが語ったバビロンの捕囚に関する言葉によって引き起こされた、静かではあったが強力な影響は、ヨシヤの治世の十八年に起こった改革に大いに貢献したのである。切迫した刑罰が一時回避されたところのこの改革運動は、長年の間、不思議にも置き忘れて失われていた、聖書の一部の発見と研究とによって、全く予期しない方法で起こったのである。

約百年近く前に、ヒゼキヤが最初の過越の祭りを行ったときに、教育に当たる祭司が毎日、律法の書を人々の前で公に読むことが定められていた。それはモーセが記した律法、特に申命記の一部を構成する契約の書に与えられたものを守ることであった。これがヒゼキヤの治世をあのように繁栄させたものであった。しかしマナセは、これらの律法を大胆にも破棄してしまった。そして彼の治世の間に、神殿用の律法の書の写本が、不注意な怠慢の結果紛失してしまった。こうして一般の人々は、その教えを受けることができなかつたのである。大祭司ヒルキヤが、ヨシヤ王の神殿の保存計画に従って建物の大修復を行っていたときに、長く失われていた写本が、神殿

の中で発見されたのである。大祭司はこの尊い書物を書記官のシャパンに渡したので、彼はそれを読んだ。そしてそれを王のところへ持って行って、その発見のことについて報告した。

ヨシヤはこの古い書物に記されている勧告と警告を初めて聞いたときに、深く感動した。彼は神がイスラエルの前に「命と死および祝福とのろい」をこれほどまでに明確に示されたことを自覚したことがなかった(申命記三〇ノ一九)。そして彼らが生命の道を選んで、地上において人々の誉れを受け、すべての国民の祝福となるように、何度となく勧告されていたことをこれほどまでに自覚したことはなかった。「あなたがたは強く、かつ勇ましくなければならない。彼らを恐れ、おののいてはならない。あなたの神、主があなたと共に行かれるからである。主は決してあなたを見放さず、またあなたを見捨てられないであろう」とモーセはイスラエルに勧告した。

(同三二ノ六)

神は心から神に信頼する人々を、喜んで完全に救ってくださるという確証が、書物の中に満ちあふれていた。神は彼らをエジプトの奴隷生活から解放されたのと同じように、彼らを約束の地に確立させて、地の諸国の頭とするために力強く働かれるのであった。

服従の報賞として奨励の言葉が与えられていたが、不服従に対しては刑罰の預言が伴っていた。そして王は靈感の言葉を聞き、彼の前に描き出された光景を見たときに、それが彼の王国内に実際に存在する状態に似ていることを認めたのである。彼は神からの離反についてのこれらの預言的描写に関連して、災いの日が速やかに訪れ、救いの道はあり得ないという明確な言葉を発見して驚いた。その言葉は明瞭であった。言葉の意味を取りちがえることはあり得なかった。そして書物の終わりに、イスラエルに対する神のご処置のしめくりとして、将来の

出来事が繰り返して述べられ、これらの事が重ねて明確にされた。イスラエルのすべての者が聞いているところで、モーセは宣言した。

「天よ、耳を傾けよ、わたしは語る、

地よ、わたしの口の言葉を聞け。

わたしの教は雨のように降りそそぎ、

わたしの言葉は露のようにしたたるであろう。

若草の上に降る小雨のように、

青草の上にくだる夕立のように。

わたしは主の名をのべよう、

われわれの神に栄光を帰せよ。

主は岩であって、そのみわざは全く、

その道はみな正しい。

主は真実なる神であって、偽りなく、

義であって、正である。」

(申命記三二ノ一一四)

「いにしえの日を覚え、

代々の年を思え。

あなたの父に問え、

彼はあなたに告げるであろう。

長老たちに問え、

彼らはあなたに語るであろう。

いと高き者は人の子らを分け、

諸国民にその嗣業を与えられたとき、

イスラエルの子らの数に照して、

もろもろの民の境を定められた。

主の分はその民であつて、

ヤコブはその定められた嗣業である。

主はこれを荒野の地で見いだし、

獣のほえる荒れ地で会い、

これを巡り囲んでいたわり、

目のひとみのように守られた。」

(同三二ノ七一〇)

しかし、イスラエルは、

「自分を造った神を捨て、

救の岩を侮った。

彼らはほかの神々に仕えて、主のねたみを起し、憎むべきおこないをもって主の怒りをひき起した。彼らは神でもない悪霊に犠牲をささげた。

それは彼らがかつて知らなかった神々、

近ごろ出た新しい神々、

先祖たちの恐れることもしなかった者である。

あなたは自分を生んだ岩を軽んじ、

自分を造った神を忘れた。

主はこれを見、

そのおすこ、娘を怒ってそれを捨てられた。

そして言われた、

『わたしはわたしの顔を彼らに隠そう。

わたしは彼らの終りがどうなるかを見よう。

彼らはそむき、もとのやから、

真実のない子らである。

彼らは神でもない者をもって、

わたしにねたみを起させ、

偶像をもって、わたしを怒らせた。

それゆえ、わたしは民ともいえない者をもって、

彼らにねたみを起させ、

愚かな民をもって、彼らを怒らせるであらう。』」

「わたしは彼らの上に災を積みかさね、

わたしの矢を彼らにむかつて射つくすであらう。

彼らは飢えて、やせ衰え、

熱病と悪い疫病によって滅びるであらう」。

「彼らは思慮の欠けた民、

そのうちには知識がない。

もし、彼らに知恵があれば、これをさとり、

その身の終りをわきまえたであらうに。

彼らの岩が彼らを売らず、

主が彼らをわたされなかったならば、

どうして、ひとりで千人を追ひ、

ふたりで万人を敗ることができたであろう。

彼らの岩はわれらの岩に及ばない。

われらの敵もこれを認めている。」

「これはわたしのもとにたくわえられ、

わたしの倉に封じ込められているではないか。

彼らの足がすべるとき、

わたしはあだを返し、報いをするであろう。

彼らの災の日は近く、

彼らの破滅は、

すみやかに来るであろう。」

(申命記三二ノ一五―二二。二三、二四。二八―三一。三四、三五)

こうした聖句とこれに似た聖句は、神のご自分の民への愛と罪に対する神の憎しみをヨシヤに示した。あくまでも反逆を続ける者に対する急速な刑罰の預言を王が読んだときに、彼は将来を憂えてふるえた。ユダの邪悪さははなはだしかった。長く続いた彼らの背信の結果はどんなものであろうか。



ヨシヤ王のとき、大祭司ヒルキヤは律法の書を発見し、書記官シャパンがそれを王の前で読んだ。

王は、以前はあまねく行き渡った偶像礼拝に対して無関心ではなかった。「彼はまだ若かったが、その治世の第八年に」神の奉仕に自分自身を全くささげたのであった。それから四年後、彼が二十才の時に、「高き所、アシラ像、刻んだ像、鑄た像などを除いて、ユダとエルサレムを清めることを始め」、国民の誘惑になるものを取り去ろうと熱心に努力した。「もろもろのバアルの祭壇を、自分の前で打ちこわさせ、その上に立っていた香の祭壇を切り倒し、アシラ像、刻んだ像、鑄た像を打ち砕いて粉々にし、これらの像に犠牲をささげた者どもの墓の上にそれをまき散らし、祭司らの骨をそのもろもろの祭壇の上で焼き、こうしてユダとエルサレムを清めた」(歴代志下三四ノ三一五)。

若い王は、ユダ国内において徹底的な仕事をするだけで満足せず、今では少数の残りの看たちしかとどまっていない、かつてのイスラエルの十部族が占領していたパレスチナの地域にまで、彼の運動を進展させたのである。記録には次のように書いてある。「またマナセ、エフライム、シメオンおよびナフタリの荒れた町々にもこのようにし」た。彼はこの荒廃した地の全域をゆき巡って、「もろもろの祭壇をこわし、アシラ像およびもろもろの刻んだ像を粉々に打ち砕き、イスラエル全国の香の祭壇をことごとく切り倒して、エルサレムに帰った」(同三四ノ六、七)。

こうしてヨシヤは、若い時から王としての地位を活用して、神の聖なる律法の原則を高めようと努力した。そして今、書記官のシャパンが王に律法の書を読んでいたときに、彼はこの書物の中に知識の宝庫があり、これは彼が国内で行いたいと切に願っていた改革の事業を強力に推進させるものであることを認めた。彼はその勧告に従って歩く決心をした。そしてまた、全力をつくして、その教えを人々に伝え、できることならば彼らを導いて

天の律法に対する尊敬と愛を助長させようと決心した。

果たして、必要な改革を起こすことができたであろうか。イスラエルは神の忍耐の限界近くまで来ていた。間もなく神は、み名を汚した人々を罰するために立ち上げられる。すでに主の怒りは民に対して燃やされていた。ヨシヤは、悲哀と落胆に打ちひしがれて心を悩まし、神の前に身を低くして衣を裂き、心のかたくなな国民の罪のゆるしを祈り求めた。

そのころ、女預言者ホルダがエルサレムの神殿の近くに住んでいた。王は不吉な予感に襲われ、彼女のことを思い出した。そしてこの選ばれた使者によって主にお伺いし、今や滅亡の淵にある道に迷ったユダを救う力が果たして自分にあるかどうかを、できることならば知ろうと決意したのである。

王は事態の重要性和女預言者に対する尊敬の念から、国家の第一級の人物を彼の使者として選んだ。彼は彼らに命じて言った。「あなたがたは行つて、この見つかった書物の言葉について、わたしのため、民のため、またユダ全国のために主に尋ねなさい。われわれの先祖たちがこの書物の言葉に聞き従わず、すべてわれわれについてしるされている事を行わなかったために、主はわれわれにおかつて、大いなる怒りを発しておられるからです」
(列王紀下二二ノ一二)。

主はホルダによって、エルサレムの滅亡は避けることができないことという言葉をもヨシヤに送られた。人々が今神の前にへりくだったとしても、彼らは刑罰を避けることはできないのであった。彼らの感覚は邪悪な行為のためにあまりにも長く麻痺していたので、もし刑罰が彼らに下らないならば、すぐにまたもとと同じ罪深い行いにもどるのであった。女預言者は言った。「あなたがたをわたしにつかわした人に言いなさい。主はこう言われ

まず、見よ、わたしはユダの王が読んだあの書物のすべての言葉にしたがって、災をこの所と、ここに住んでいる民に下そうとしている。彼らがわたしを捨てて他の神々に香をたき、自分たちの手で作ったもろもろの物をもって、わたしを怒らせたからである。それゆえ、わたしはこの所にむかつて怒りの火を発する。これは消えることがないであろう」(列王紀下二二ノ一五―一七)。

しかし王が神の前に心を低くしたために、主は、彼が速やかにゆるしとあわれみを求めたことをお認めになった。彼に次の言葉が与えられた。「あなたは、わたしがこの所と、ここに住んでいる民にむかつて、これは荒地となり、のろいとなるであろうと言うのを聞いた時、心に悔い、主の前にへりくだり、衣を裂いてわたしの前に泣いたゆえ、わたしもまたあなたの言うことを聞いたのであると主は言われる。それゆえ、見よ、わたしはあなたを先祖たちのもとに集める。あなたは安らかに墓に集められ、わたしがこの所に下すもろもろの災を目に見ることはないであろう」(同二二ノ一九、二〇)。

王は将来の出来事を神にゆだねなければならなかった。彼は主の永遠の命令を変えることはできなかった。しかし主は天の神の刑罰を宣言なさったが、悔い改めと改革の機会を取り去られたのではなかった。そしてヨシヤはここに、神があわれみをもって刑罰を和らげようとしておられることを認めて、決定的改革を起こそうと全力をつくす決心をした。彼は直ちに大集会を開く準備をし、それに一般の人々とともにエルサレムとユダの長老たちとつかさたちが招かれた。この人々は祭司やレビ人とともに、神殿の庭で王に会った。

この大群衆に王自身が、「主の宮で見つかった契約の書の言葉をことごとく彼らに読み聞かせた」(同二三ノ二)。それを読んだ王は強く心を打たれて感動し、哀感に満ちた調子で使命を語った。聴衆は深く心を動かされた。

王の顔に現れた感情の強烈さ、使命そのものの厳肅さ、切迫した刑罰の警告などはみな、それぞれの影響を及ぼし、多くの者は王とともにゆるしを求める決意をしたのである。

さてヨシヤは、最高の権威者たちが国民と一つになって神の前で厳肅に誓約をなし、決定的変化をもたらすために、互いに協力して努力するように提言した。王は柱のかたわらに立って、主の前に契約を立て、主に従って歩み、心をつくし精神をつくして、主の戒めと、あかしと、定めとを守り、この書物にしろされているこの契約の言葉を行うことを誓った。それに対する応答は、王が望んだよりもはるかに心からのものであった。「民は皆その契約に加わった」(同二三ノ三)。

引き続き起こった改革において、王は残っていた偶像をあとかたもなく破壊することに注意を向けた。国民は長い間、周囲の国民の風習に従って木や石の偶像を礼拝していたので、これらの害悪をことごとくぬぐい去ることは、人間の力ではとうていできそうもなかった。しかしヨシヤは、たゆまず努力して国内を清めた。彼は厳然と偶像礼拝に立ち向かい、「高き所の祭司たちを皆」殺した。「ヨシヤはまた祭司ヒルキヤが主の宮で見つけた書物にしろされている律法の言葉を確実に行うために、口寄せと占い師と、テラピムと偶像およびユダの地とエルサレムに見られるもろもの憎むべき者を取り除いた」(同二三ノ二〇、二四)。

幾世紀もの昔、王国の分裂時代にナバテの子ヤラバームは、大胆にイスラエルが仕えていた神に反抗し、人々の心をエルサレムの神殿における礼拝から引き離して、新しい礼拝の形式に向けさせようとして、ベテルに神の聖別のない祭壇を造った。これによって、多くの者が長年の間に偶像礼拝に誘惑されたのであるが、この祭壇の献納が行われていたときに、突然そこにユダヤから神の人が現れて、この神を汚す行為を責めたのである。彼は

「祭壇におかい…呼ばわって」言った。

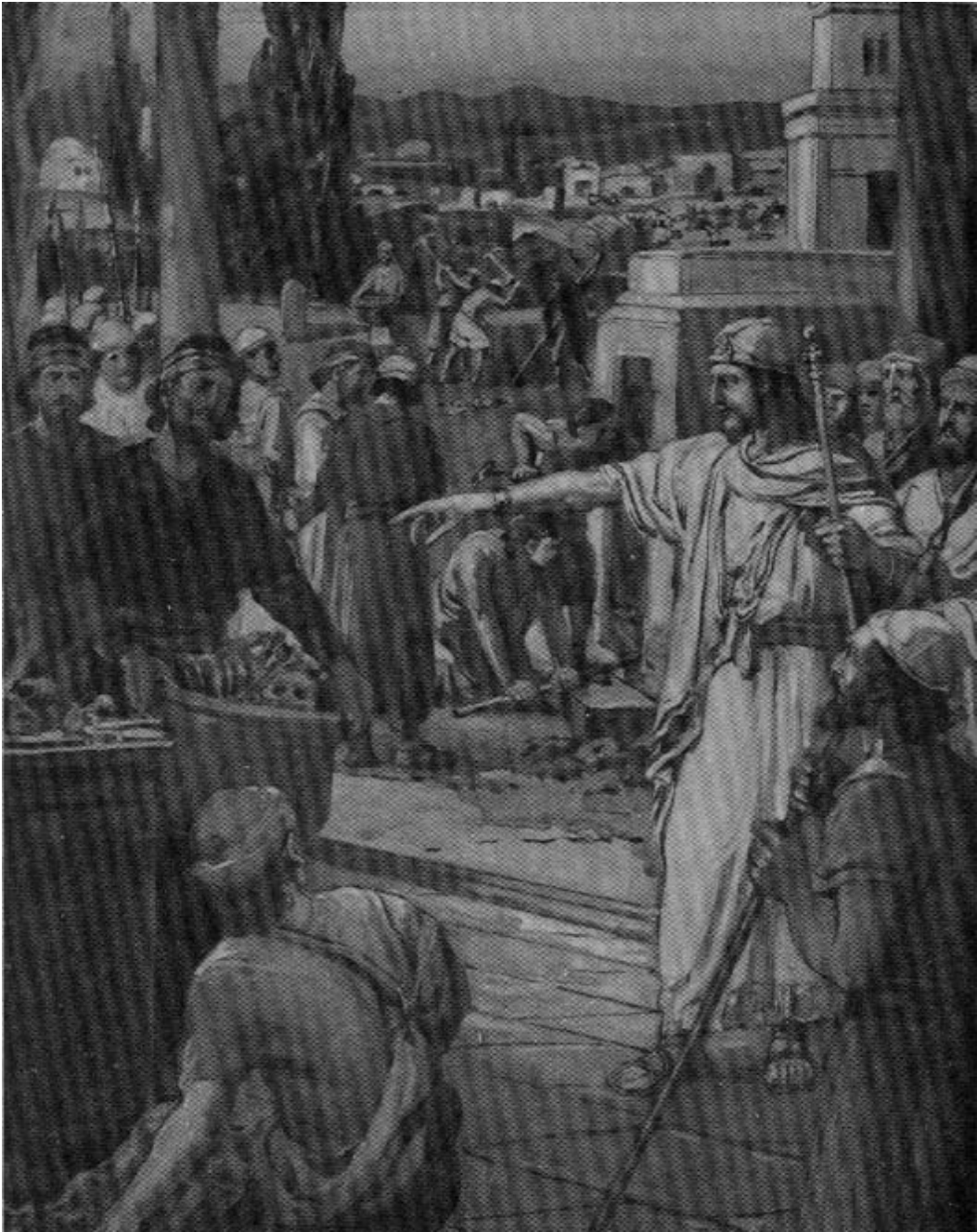
「祭壇よ、祭壇よ、主はこう仰せられる、『見よ、ダビデの家にひとりの子が生れる。その名をヨシヤという。彼はおまえの上で香をたく高き所の祭司らを、おまえの上にささげる。また人の骨がおまえの上で焼かれる』」（列王紀上一三ノ二）。この宣言には、この言葉が主からのものであるというしるしが伴っていた。三世紀が経過した。ヨシヤが改革を行ったときに、王自身がこの古い祭壇が立っているベテルに来た。その昔ヤラバアムの面前で宣言された預言は、ここに文字通り成就されるのであった。

「また、ベテルにある祭壇と、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラバアムが造った高き所、すなわちその祭壇と高き所とを彼はこわし、その石を打ち砕いて粉とし、かつアシラ像を焼いた。

そしてヨシヤは身をめぐらして山に墓のあるのを見、人をつかわしてその墓から骨を取らせ、それをその祭壇の上で焼いて、それを汚した。昔、神の人が主の言葉としてこの事を呼びわり告げたが、そのとおりになった。

その時ヨシヤは『あそこに見える石碑は何か』と尋ねた。町の人々が彼に『あれはあなたがベテルの祭壇に対して行われたこれらの事を、ユダからきて預言した神の人の墓です』と言ったので、彼は言った、『そのままに置いて置きなさい。だれもその骨を移してはならない』。それでその骨と、サマリヤからきた預言者の骨には手をつけなかった」（列王紀下二三ノ一五―一八）。

モリや山上に建てられていた美しい主の神殿とは反対側の、オリブ山の南の坂に、ソロモンが偶像教徒の妻たちを喜ばせるために造った祭壇や偶像があった（列王紀上一一ノ六―八参照）。三世紀間にもわたって、巨大で不格好な偶像が、イスラエルの最も賢明な王の背信の無言の証人として、「罪惡の山」に立っていたのである。



ヨシヤ王はベテルの偶像を打ちこわし、バアル神礼拝に捧げられていた高き所を次々と打ち砕いた。

さらに王は、律法の書の規定に従って大いなる過越の祭りをを行い、先祖たちの神に対するユダの信仰を確立しようとした。聖なる祭りをを行う責任を負った人々によって準備が整えられ、祭りの大いなる日に、供え物が惜しみなくささげられた。「さばきづかさガイスラエルをさばいた日からこのかた、またイスラエルの王たちとユダの王たちの世にも、このような過越の祭を執り行ったことはなかった」(列王紀下二三ノ二二)。しかし、ヨシヤの熱心は神に喜ばれるものではあったが、過去幾世代にわたる罪を償うことはできなかった。また、王に従った人々のあらわした敬神深さも、偶像礼拝を捨てて真の神の礼拝に立ち返ることを頑強に拒んだ多くの人々の心を変えることができなかった。

ヨシヤは過越の祭りを祝ってから、十年以上も国を治めた。彼は三十九歳の時に、エジプト軍との戦いにおいて死んだ。「その先祖の墓にこれを葬った。そしてユダとエルサレムは皆ヨシヤのために悲しんだ。時にエレミヤはヨシヤのために哀歌を作った。歌うたう男、歌うたう女は今日に至るまで、その哀歌のうちにヨシヤのことを述べ、イスラエルのうちにこれを例とした。これは哀歌のうちにしるされている」(歴代志下三五ノ二四、二五)。「ヨシヤのように心をつくし、精神をつくし、力をつくしてモーセのすべての律法にしたがい、主に寄り頼んだ王はヨシヤの先にはなく、またその後にも彼のような者は起らなかった。けれども主はなおユダにおかたて発せられた激しい大いなる怒りをやめられなかった。これはマナセがもろもろの腹だたいい行いをもって主を怒らせたためである」(列王紀下二三ノ二五、二六)。エルサレムが全く破壊されるときが急速に近づいていた。そして国の住民はバビロンに連れて行かれ、そこで彼らは、順境のときに学ぶことを拒否した教訓を学ぶことになったのである。

第三十四章 立ちあがった預言者エレミヤ

ヨシヤの治世に起こった改革の結果、永久的な靈的復興が起ることを望んだ人々の中にエレミヤがいた。彼はまだ若かったにもかかわらず、ヨシヤの治世の十三年に神に召されて預言者となった。エレミヤはレビ族の祭司の一人であつたので、幼少の時から聖職のために訓練を受けていた。そうした幸福な準備の期間に、彼は生まれたときから「万国の預言者」として立てられていたことを夢想だにしなかった。そして神の召しが与えられたときに、彼は自分の無価値さに圧倒された。彼は叫んだ、「ああ、主なる神よ、わたしはただ若者にすぎず、どのように語ってよいかわりません」(エレミヤ書一ノ五、六)。

神は若いエレミヤをgoranになつて、彼が信賴にこたえ、大きな反対に遭つても正義のために立つ者であることを認められた。彼は幼少時代に忠実であつた。そして今、彼は十字架のよき兵士として、困難に耐えなければならぬのであつた。主は彼の選ばれた使者に命じて言われた。「あなたはただ若者にすぎないと言つてはならない。だれにでも、すべてわたしがつかわす人へ行き、あなたに命じることをみな語らなければならぬ。彼ら

を恐れてはならない、わたしがあなたと共にいて、あなたを救うからである」。

「『しかしあなたは腰に帯して立ち、わたしが命じるすべての事を彼らに告げよ。彼らを恐れてはならない。さもないと、わたしは彼らの前であなたをあわてさせる。見よ、わたしはきょう、この全国と、ユダの王と、そのつかさと、その祭司と、その地の民の前に、あなたを堅き城、鉄の柱、青銅の城壁とする。彼らはあなたと戦うが、あなたに勝つことはできない。わたしがあなたと共にいて、あなたを救うからである』と主は言われる」(エレミヤ書一ノ七、八。一七―一九)。

エレミヤは四十年の間、真理と義の証人として国民の前に立たなければならなかった。彼は未曾有の背教の時代にあって、その生活と品性において、唯一の真の神の礼拝を実証しなければならなかった。恐るべきエルサレムの包囲の時に、彼は主の代弁者とならなければならなかった。彼はダビデの家の没落と、ソロモンが建てた美しい神殿の破壊とを預言しなければならなかった。そして彼は、恐れず発言して投獄されたときにも、なお、地位の高い人々の罪に対して、はつきり語らなければならなかった。彼は人々から軽べつされ、憎まれ、拒否されて、ついには、切迫した破滅について彼自身の預言が文字通り成就するのを見、運命の都の破壊に伴った悲哀と不幸とを共に味わわなければならなかった。

しかし、国家が急速に臨みつつあった全面的破滅のさ中にあっても、エレミヤは時折、現在の悲惨な光景のあなたを見ることを許された。それは神の民が敵の地からあがない出されて、ふたたびシオンに植えられる時の光景であった。彼は、主が彼らと契約関係を更新される時を予見した。「その魂は潤う園のようになり、彼らは重ねて憂えることがない」(同三一ノ一二)。

エレミヤが預言者としての任務に召されたことについて、彼自身が次のように書いた。「そして主はみ手を伸べて、わたしの口につけ、主はわたしに言われた、『見よ、わたしの言葉をあなたの口に入れた。見よ、わたしはきよう、あなたを万民の上と、万国の上に立て、あなたは抜き、あるいはこわし、あるいは滅ぼし、あるいは倒し、あるいは建て、あるいは植えさせる』」（同一ノ九、一〇）。

「あるいは建て、あるいは植えさせる」という言葉があることを神に感謝する。エレミヤはこれらの言葉によって、主が回復し、いやそうとしておられるという確証が与えられた。その後の年月において伝えるべき言葉は、実に厳しいものであった。速やかに来るべき刑罰の預言を恐れず伝えなければならなかった。シナルの平原から「災」が起こって、「この地に住むすべての者の上に臨む」。「わたしは、彼らがわたしを捨てて、すべての悪事を行ったゆえに、わたしのさばきを彼らに告げる」と主は宣言された（同一ノ一四、一六）。しかし、預言者はこれらの言葉に、悪事を離れるすべての者にゆるしの確証を添えるべきであった。

エレミヤは賢明な建築師として、生涯の働きのまず最初から、ユダの人々が徹底的な悔い改めをして彼らの霊的生活の基礎を広く深く置くように励ますことを努めた。彼らは長い間、使徒パウロが木、草、わらにたとえ、また、エレミヤ自身がかすにたとえたような材料を用いて建ててきた。彼は悔い改めない国民について「主が彼らを捨てられたので、彼らは捨てられた銀と呼ばれる」と言った（同六ノ三〇）。今彼らは、背信と不信というごみを捨て去り、金、銀、宝石すなわち、信仰と服従と善行を基礎材料に用いて、賢明に永遠のために建てるように勧告を受けたのである。ただ、これだけが、聖なる神の前に受け入れられるのである。

主はエレミヤによって、次のように神の民に言われた。「背信のイスラエルよ、帰れ。わたしは怒りの顔をあ

なたがたに向けない、わたしはいつくしみ深い者である。いつまでも怒ることはしないと、主は言われる。ただあなたは自分の罪を認め、あなたの神、主にそむい」たことを認めよ。「主は言われる、背信の子らよ、帰れ。わたしはあなたがたの夫だからである」。「わたしはまた、あなたがたしを『わが父』と呼び、わたしに従って離れることはないと思っていた」。「背信の子どもたちよ、帰れ。わたしはあなたがたの背信をいやす」(エレミヤ書三ノ一二―一四、一九、二二)。

主はこのように驚くべき訴えにつけ加えて、神の道を踏みはずした民が、なんと言って神に立ち返ったらよいかというその言葉そのものをお与えになった。彼らは、次のように言わなければならなかった。「見よ、われわれはあなたのもとに帰ります。あなたはわれわれの神、主であらせられます。まことに、もろもろの丘は迷いであり、山の上の騒ぎも同じです。まことに、イスラエルの救はわれわれの神、主にあるのです。…われわれは恥の中に伏し、はばかりにおおわれています。それはわれわれと先祖とが、われわれの幼少の時から今日まで、われわれの神、主に罪を犯し、われわれの神、主の声に従わなかったからです」(同三ノ二二―二五)。

ヨシヤのもとで行われた改革は、国土から偶像の祭壇を除き去ったけれども、多くの人々の心は改変されなかった。芽生えて多くの収穫をもたらす希望を与えた真理の種は、いばらにふさがれてしまった。もう一度このような背信が起れば、致命的になるのであった。そして主は、国民を目覚めさせ、その危険を自覚させようとした。彼らが主に忠誠をつくすときに初めて、彼らは神の恵みにあずかり、繁栄を望むことができるのであった。

エレミヤは繰り返し、国民の注意を申命記に与えられている勧告に向けた。彼は他どの預言者よりもモーセの律法の教えを強調し、これらがどのように国家とすべての人の心に最高の霊的祝福をもたらすかを示した。「あ

なたがたは……いにしえの道につき、良い道がどれかを尋ねて、その道に歩み、そしてあなたがたの魂のために、安息を得よ」(同六ノ二八)。

ある時預言者エシマヤは、主の命令によって、都の主要な入口の一つに立って安息日を清く守ることの重要性を力説した。エルサレムの住民は、安息日の神聖さを見失う危険があった。そこで彼らは、安息日に世俗の業務を行うことに対して厳粛な警告を受けた。祝福は服従を条件に約束された。「もしあなたがたがわたしに聞き従い、……安息日を聖別して、なんのわざもしないならば、ダビデの位に座する王たち、つかさたち、ユダの人々、エルサレムに住む者は、車と馬に乗ってこの町の門からはいることができる。そしてこの町には長く人が住むようになる」(同七ノ二四、二五)。

忠誠の報いとしての繁栄の約束には、もしその住民が神と神の律法に忠誠をつくさなければ、都には恐るべき刑罰が下るという預言が伴っていた。もし彼らが先祖の主なる神に従って、安息日を清く守るようという勧告に聞き従わないならば、都とその宮殿とは火で焼きつくされるのであった。

こうして預言者は、律法の書の中にはつきりと述べられた、正しい生活の健全な原則に固く立った。しかし、ユダの国内にゆき渡っていた状態は実に恐ろしく、最も断固とした処置をとるのであれば、改善することはできなかった。それで彼は、悔い改めない人々のために懸命になって働いた。「あなたがたの新田を耕せ、いばらの中に種をまくな」。「エルサレムよ、あなたの心の悪を洗い清めよ、そうするならば救われる」と彼は訴えた。

(同四ノ三。一四)

しかし大多数の人々は、悔い改めと改革の招きに耳を貸さなかった。善い王であったヨシヤの死後国家を治め

た者たちは、信任を裏切り、多くの人々を誤った道に陥れていた。エジプト王の干渉によって退位させられたエホアハズの際には、ヨシヤの長男エホヤキムが立った。エレミヤはエホヤキムの治世の初めから、彼の愛する国を破壊から救い、人々を捕囚から救おうと望むことができなくなった。しかし国家が全滅の危機にひんしている時に、彼は黙っていることは許されなかった。彼は神に忠誠をつくした人々が善事を続けるように励まし、もしできることならば、罪人が悪から離れるように勧めなければならなかった。

このような危機にあつては、公然と広範囲にわたる活動をする必要があつた。エレミヤは神殿の庭に立つて、そこに入りするすべてのユダの人々に語るように、主の命令を受けた。彼は与えられた言葉を一言も減らしてはならなかった。というのは、シオンの罪人ができる限り十分に聞く機会を与えられて、悪の道から離れるためであつた。

預言者はそれに従つた。彼は主の家の門の中に立ち、そこで警告と嘆願の声をあげた。彼は全能の神の靈感を受けて、次のように言つた。

「主を拝むために、この門をはいるユダのすべての人よ、主の言葉を聞け。万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、あなたがたの道とあなたがたの行いを改めるならば、わたしはあなたがたをこの所に住まわせる。あなたがたは、『これは主の神殿だ、主の神殿だ、主の神殿だ』という偽りの言葉を頼みとしてはならない。もしあなたがたが、まことに、その道と行いを改めて、互に公正を行い、寄留の他国人と、みなしごと、やめめをしえたいことなく、罪のない人の血をこの所に流すことなく、また、ほかの神々に従つて自ら害をまねくことをしないならば、わたしはあなたがたを、わたしが昔あなたがたの先祖に与えたこの地に永遠に住まわせる」(エ

シミヤ書七ノ二―七）。

主が懲らしめを与えることを好まれないことが、ここに明らかに示されている。主は刑罰を止めて、心かたくなな人々に訴えようとなさるのである。「地に、いつくしみと公平と正義を」行っているおかたが、彼の道を踏みはずした子供たちを切に慕い求めて、なんとかして彼らに永遠の生命への道を教えようとなさるのである（同九ノ二四）。神はイスラエルの人々が、唯一の真の生きた神に仕えるように、彼らを奴隷の生活から解放されたのであった。彼らは長くさまよい出て偶像礼拝を行い、神の警告を無視したけれども、神は今、彼らに懲罰を与えることを快く延ばして、彼らにもう一度悔い改めの機会を与えようと宣言されるのである。神は、徹底的改革によつてのみ、切迫した破滅から救われることができることを、明らかにされるのである。神殿とその儀式に頼つてもなんの役にも立たない。儀式や礼典は罪をあがなうことはできない。神の選民であるといっても、長く続いた罪の当然の結果から彼らを救うのは、ただ心と実際の生活における改革だけなのである。

こうして「ユダの町々と、エルサレムのちまた」におけるエシミヤの言葉は、「この契約の言葉を聞き、これを行え」であつた。それは聖書に記された主の明白な戒めであつた（同――ノ六）。そしてこれが、エホヤキムの治世の初めに神殿の庭に立つて、彼が宣言した言葉である。

出エジプトの時代からのイスラエルの歴史が、簡潔に回顧された。彼らに対する神の契約は、「わたしの声に聞きしたがいなさい。そうすれば、わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。わたしはあなたがたに命じるすべての道を歩んで幸を得なさい」であつた。しかし彼らはこの契約を、恥をもわきまえず繰り返して破つたのであつた。選民は「自分の悪い心の計りごとと強情にしたがつて歩み、悪くなるばかりで、

よくはならなかった」(エレミヤ書七ノ二三、二四)。

「それにどうしてこの民は、常にそむいて離れていくのか」と主はお尋ねになった(同八ノ五)。彼らは、彼らの神、主の声に聞き従わず、矯正されることを拒んだためだと、預言者は言うのである(同五ノ三参照)。預言者は「真実はうせ、彼らの口から絶えた」と嘆いた。「空のこのとりでもその時を知り、山ばとと、つばめと、つるはその来る時を守る。しかしわが民は主のおきてを知らない」。「主は言われる、これらのことのために、わたしは彼らを罰しないだろうか。わたしがこのような民にあだを返さないだろうか」(同七ノ二八、八ノ七、九ノ九)。

深く心を探るべき時が来た。人々は、ヨシヤが王であつたときはいくら希望の余地があつたのである。しかし、彼は戦場で倒れたので、もはや彼らのために執り成すことはできなかった。国民の罪ははなはだしく、そのための執り成しの時は、まさに過ぎ去るうとしていた。主は言われた。「たといモーセとサムエルとがわたしの前に立つても、わたしの心はこの民を顧みない。彼らをわたしの前から追い出し、ここを去らせよ。もし彼らが、『われわれはどこに行けばよいのか』とあなたに尋ねるならば、彼らに言いなさい、『主はこつ仰せられる、疫病に定められた者は疫病に、つるぎに定められた者はつるぎに、ききんに定められた者はききんに、とりこに定められた者はとりこに行く』」(同二五ノ一、二)。

神が今与えておられる恵みの招待を拒むことは、一世紀以上も前に北のイスラエル王国に下つたのと同じ刑罰を、悔い改めない国民にもたらすことであつた。今、彼らに次のような言葉が与えられた。「もしあなたがたがわたしに聞き従わず、わたしがあなたがたの前に定めおいた律法を行わず、わたしがあなたがたに、しきりにつ

かわすわたしのしもべである預言者の言葉に聞き従わないならば、（あなたがたは聞き従わなかったが、）わたしはこの宮をシロのようにし、またこの町を地の万国にのろわれるものとする」（同二六ノ四一六）。

神殿の庭に立ってエリミヤの話を聞いた人々は、シロとエリが祭司であった時代についてよく理解した。その時ペリシテ人はイスラエルに勝利して、契約の箱を運び去ったのであった。

エリの罪は聖職にある彼の息子たちの罪悪を軽く見過ごし、国中に広まっていた害悪を軽視したことであつた。彼は、イスラエルに恐るべき悲惨をもたらした、これらの罪悪を矯正することを怠つた。彼の息子たちは戦場で倒れ、エリ自身も生命を失い、神の箱もイスラエルの地から運び去られて三万人が殺された。これはみな、罪が譴責も抑制もされずに、はびこるままになっていたからであつた。イスラエルは罪深い行いをしながらも、箱の存在が彼らにペリシテ人に勝利を得させるものと確信していたが、おどであつた。それと同じように、エリミヤの時代においても、ユダの住民たちは、神がお定めになった儀式を神殿で厳格に行っているならば、彼らは悪い行為に対する当然の罰を免れるものと思つていた。

これは、今日、神の教会の責任ある地位にある人々にとって、なんとという教訓であろう。真理の働きの名誉を傷つける罪悪を、忠実に処置すべきであるということは、なんとという厳粛な警告であろう。神の律法の保管者である主張している者は、自分たちが外面的に戒めを尊重しているからといって、神の正義が行われるときに彼らが守られると考へてはならない。また、だれひとりとして、悪に対する譴責を拒んだり、また、神のしもべたち、陣営の中から悪行を清めるのに、あまりにも熱心すぎると非難してはならない。罪を憎まれる神は、神の律法を守ると主張する人々が、すべての悪から離れるように呼びかけておられる。悔い改めと心からの服従を怠

ることは、昔のイスラエルの人々に下ったのと同様の恐るべき結果を、今日の男や女の上にもたらすのである。もうこれ以上主の刑罰を延ばし得ないという限界がある。エレミヤの時代にエルサレムが荒廃したことは、現代のイスラエルに対する厳粛な警告であって、選ばれた器によって与えられた勧告や警告の無視は、必ず罰せられるのである。

祭司や国民に対するエレミヤの言葉は、多くの人々の反対を引き起こした。彼らは激しく非難の声をあげて叫んだ、『なぜあなたは主の名によって預言し、この宮はシロのようになり、この町は荒されて住む人もなくなるであろうと言ったのか』と。民はみな主の宮に集まってエレミヤを取り囲んだ（エレミヤ書二六ノ九）。なめらかなことを語ったり、偽りを預言したりしないエレミヤに、祭司たち、偽預言者たち、そして人々は、激怒して立ち向かった。こうして神の言葉は軽べつされ、神のしもべは生命が脅かされた。

エレミヤの言葉の知らせが、ユダのつかさたちに伝えられた。彼らはそのことの真偽を自分で知ろうとして、急いで王宮から神殿に向かった。「祭司と預言者らは、つかさたちとすべての民に訴えて言った、『この人は死刑に処すべき者です。あなたがたが自分の耳で聞かれたように、この町に逆らう預言をしたのです』（同二六ノ一一）。しかしエレミヤは、大胆につかさたちと人々の前に立って言った。「主はわたしをつかわし、この宮とこの町におかつて、預言をさせられたので、そのすべての言葉をあなたがたは聞いた。それで、あなたがたは今、あなたがたの道と行いを改め、あなたがたの神、主の声に聞き従いなさい。そうするならば主はあなたがたに災を下そうとしたことを思いなおされる。見よ、わたしはあなたがたの手の中にある。あなたがたの目に、良いと見え、正しいと思うことをわたしに行うがよい。ただ明らかにこのことを知っておきなさい。もしあなたがたが



長老たちは一致してエレミヤのために嘆願した。その人々の影響力が働いて預言者の命が救われた。

わたしを殺すならば、罪なき者の血はあなたがたの身と、この町と、その住民とに帰する。まことに主がわたしをつかわして、このすべての言葉をあなたがたの耳に、告げさせられたからである」(エレミヤ書二六ノ一二―一五)。

もしエレミヤが、高い地位にある人々の威嚇に負けたならば、彼の言葉は力がなかったことであろう。そして、彼は生命を失ったことであろう。しかし、彼が厳粛な警告を宣言した勇氣が、人々の尊敬を得て、イスラエルのつかさたちを彼の味方にするこゝろができた。つかさたちは祭司たちや偽預言者たちと話し合つて、彼らが主張している極端な処置が、どんなに愚かなものであるかを示した。そして、彼らの言葉によつて、人々の心の中に反動が起こつた。こうして神は、神のしもべを擁護する者たちを起こされたのである。

また長老たちはこぞつて、エレミヤの運命についての祭司たちの決定に抗議した。彼らは「シオンは畑のように耕され、エルサレムは石塚となり、宮の山は木のおい茂る高い所となる」と言つて、エルサレムに対する刑罰を預言したミカの例を引用した。そして彼らは尋ねた。「ユダの王ヒゼキヤと、すべてのユダの人は彼を殺そうとしたことがあるうか。ヒゼキヤは主を恐れ、主の恵みを求めたので、主は彼らに災を下すとお告げになつたのを思いなおされたではないか。しかし、われわれは、自分の身に大きな災を招こうとしている」(同二六ノ一八、一九)。

多くの祭司たちや偽預言者たちは、彼らを譴責する真理をエレミヤが語つたのに耐えられずに、扇動の罪を負わせて彼を死刑にしようと望んでいたが、これらの有力者たちの嘆願によつて、エレミヤの命は救われた。エレミヤは召された日から、働きの最後に至るまで、ユダの前に「ためす者、試みる者」として立つたが、人

間の怒りはそれに打ち勝つことができなかった。主はエレミヤに予告して言われた。「彼らがあなたを攻めても、あたにに勝つことはできない。わたしがあなた共にいて、あなたを助け、あなたを救うからであると、主は言われる。わたしはあなたを悪人の手から救い、無慈悲な人の手からあがなう」(同六ノ二七。一五ノ二〇、二二)。

エレミヤは生まれつき臆病でしりごみする性質だったので、平和で静かな引きこもった生活を望み、彼の愛する故国がいつまでも悔い改めないのを見る必要のない所を望んだ。彼の心は罪が引き起こした荒廃状態を眺めて、激しく痛んだ。「ああ、わたしの頭が水となり、わたしの目が涙の泉となればよいのに。そうすれば、わたしは民の娘の殺された者のために昼も夜嘆くことができる。ああ、わたしが荒野に、隊商の宿を得ることができればよいのに。そうすれば、わたしは民を離れて去って行くことができる」(同九ノ一、一二)。

彼が耐えるように召れた嘲笑は、実に残酷なものであった。彼の敏感な心は、彼の言葉を軽べつし、彼らの回心に対して彼が負っていた重荷を軽視した人々の投げかける嘲笑によって、徹底的に突き刺された。「わたしはすべての民の物笑いとなり、ひねもす彼らの歌となった」。「わたしは一日中、物笑いとなり、人はみなわたしをあざけります」。「わが親しい友は皆わたしのつまづくのを、うかがっています。また、『彼は欺かれるだろう。そのとき、われわれは彼に勝って、あだを返すことができる』と言います」(哀歌三ノ一四、エレミヤ書二〇ノ七、一〇)。

しかし、忠実な預言者エレミヤは、日ごとに耐える力が与えられた。彼は信仰をもって言った、しかし主は強い勇士のようにわたしと共にあられる。それゆえ、わたしに迫りくる者はつまずき、わたしに打ち勝つことはできない。彼らは、なし遂げることができなくて、大いに恥をかく。その恥は、いつまでも忘れられることはな

い。「主に向かって歌い、主をほめたたえよ。主は貧しい者の命を、悪人の手から救われたからである」(エレミヤ書二〇ノ一、一三)。

エレミヤは青年時代、また働きの後年において経験したことによって、「人の道は自身によるのではなく、歩む人が、その歩みを自分で決めることができないことを」学んだ。彼は「主よ、わたしを懲らしてください。正しい道にしがたって、怒らずに懲らしてください。さもないと、わたしは無に帰してしまおう」と祈ることを学んだ(同二〇ノ二三、二四)。

彼が悩みと悲しみとの杯を飲むように召され、悲惨のうちに「わが栄えはうせ去り、わたしが主に望むところのものもうせ去った」と言う誘惑に遭ったときに、彼は、彼のために伸べられた神の摂理のみ手を思い出して、勝ち誇って叫んだ。「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大い。わが魂は言う、『主はわたしの受くべき分である、それゆえ、わたしは彼を待ち望む』と。主はおのれを待ち望む者と、おのれを尋ね求める者にむかつて恵みふかい。主の救を静かに待ち望むことは、良いことである」(哀歌三ノ一八、二二―二六)。

第三十五章 破滅が近い

エホヤキムの治世の最初の数年は、切迫する滅亡の警告に満ちていた。預言者たちによって語られた主の言葉が、まさに成就しようとしていた。長い間、最高位を誇った北方のアッスリヤ王国は、もはや諸国を支配しなくなった。ユダの王がいたずらに寄り頼んだ南方のエジプトは、やがて決定的打撃を受けるのであった。全く予期しないところから、新しい世界国家、バビロン帝国が東方から起こって、急速に他のすべての諸国を征服するのであった。

わずか数年のうちに、バビロンの王は、悔い改めないユダに対して神の怒りの器として用いられるのであった。エルサレムは幾度となく、ネブカデネザルの軍勢に包囲、攻略、侵入されるのであった。初めのうちは数は少なかったが、後には幾千、幾万の人々が、次々にシナルの国に捕らえられて行って、強制的にそこに移住させられた。エホヤキム、エホヤキン、ゼデキヤなど、これらのユダの王はみな、バビロン王に従属するのであるが、みな次々と反逆するのであった。反乱を起こした国家には、ますます厳しい懲罰が加えられて、ついには全国が荒

廃に帰し、エルサレムは荒れ果てて焼き払われ、ソロモンが建てた神殿も破壊されて、ユダの国は滅び、二度とふたたび、地の諸国の間に以前の地位を占めることはなくなるのである。

イスラエルの国にとって危機に満ちたこうした転換期において、エレミヤが語った天からの多くの言葉が目立っていた。こうして主は、ユダの人々がエジプトとの不利な同盟を逃れて、バビロンの王たちと争わないように、十分の機会をお与えになったのである。いよいよ危険が切迫してきたときに、彼は一連のたとえを実際に行ってみせて、人々を教えた。こうして彼は、人々に神に対する義務を思い起こさせると共に、バビロン政府と友好的関係を維持することを奨励しようと望んだのである。

エレミヤは、神の要求に絶対的に服従することの重要性を説明するために、あるレカブびとたちを神殿の一室に集めて彼らの前に酒を出し、飲むようにすすめた。すると予期したとおり、彼は抗議と絶対的拒否を受けたのである。レカブびとは断固として言った。「われわれは酒を飲みません。それは、レカブの子であるわれわれの先祖ヨナダブがわれわれに命じて、『あなたがたとあなたがたの子孫はいつでも酒を飲んではならない。…』と言ったからです」。

「その時、主の言葉がエレミヤに臨んだ、『万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、行って、ユダの人々とエルサレムに住む者にと告げよ。主は仰せられる、あなたがたはわたしの言葉を聞いて教を受けないのか。レカブの子ヨナダブがその子孫に酒を飲むなと命じた言葉は守られてきた。彼らは今日に至るまで酒を飲まず、その先祖の命に従ってきた』(エレミヤ書三五ノ六、七。一一―一四)。

神はこのようにして、レカブびとの服従と、神の民の不服従と反逆との著しい相違を示そうとなさった。レカ

ブビとは先祖の命令に従って、今、罪の誘惑を拒否した。しかしユダの人々は、主のことばに聞き従わなかった。そしてその結果として、神の厳しい刑罰を受けようとしていた。

主は次のように言われた。「ところがあなたがたはわたしがしきりに語ったけれども、わたしに聞き従わなかった。わたしはまた、わたしのしもべである預言者たちを、しきりにあなたがたにつかわして言わせた、『あなたがたは今あのおのその悪い道を離れ、その行いを改めなさい。ほかの神々に従い仕えてはならない。そうすれば、あなたがたはわたしがあなたがたと、あなたがたの先祖に与えたこの地に住むことができる』と。しかしあなたがたは耳を傾けず、わたしに聞かなかった。レカブの子ヨナダブの子孫は、その先祖が彼らに命じた命令を守っているのである。しかしこの民はわたしに従わなかった。それゆえ万軍の神、主、イスラエルの神はこつ仰せられる、見よ、わたしはユダとエルサレムに住む者にと、わたしが彼らの上に宣告した災を下す。わたしが彼らに語っても聞かず、彼らを呼んでも答えなかったからである」(同三五ノ一四―一七)。

人々の心が聖霊の力によって和らげられ静められるときに、彼らは勧告に心を向ける。しかし彼らが訓戒に背を向けて、ついに心がかたくなになってしまふならば、主は彼らが他の勢力に動かされるままになさる。彼らは真理を拒否して虚偽を受け入れ、それが彼らを滅びに陥れるわなとなるのである。

神は怒りを引き起こすことがないように、ユダの人々に訴えられたが、彼らは聞き従わなかった。そこでついに、彼らに対する宣告が下された。彼らは、バビロンへ捕虜として連れていかれるのであった。カルデヤ人は、不服従な神の民を懲らしめるために神に用いられる器となるのであった。ユダの人々が受ける苦難は、彼らに与えられた光と、彼らが軽べつし拒否した警告とに比例するものであった。神は刑罰を長く延ばして来られたが、

今や、彼らの悪行を止めようとする最後の努力として、彼らに怒りをあらわされる。

レカブびとの家には、常に祝福が与えられることが宣言された。預言者は言った。「あなたがたは先祖ヨナダブの命に従い、そのすべての戒めを守り、彼があなたがたに命じた事を行った。それゆえ、万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、レカブの子ヨナダブには、わたしの前に立つ人がいつまでも欠けることはない」(エレミヤ書三五ノ一八、一九)。こうして神は、レカブびとが、その先祖の命に従って祝福されたように、忠実と服従は祝福となつて返ってくることを、神の民にお教えになった。

これはわれわれに対する教訓である。もし、不節制の害悪から子孫を守るために、最善で最高の手段をとった善良で賢明な祖先の要求に嚴重に従う価値があるとするならば、神は人間よりも聖なるおかたであるから、われわれはさらに敬虔な気持ちで神の権威を尊ばなければならない。無限の力を持ち、恐ろしいさばきを行われる、われわれの創造主であり指揮者であられる神は、なんとかして人々に罪を認めさせ、悔い改めに至らせようとしておられる。神は、彼のしもべたちの口によつて不服従の危険を予告される。神は警告を与えてはつきりと罪を譴責される。神の民は、神が選ばれた器の絶え間ない保護という神の恵みが与えられてこそ、繁栄を保つことができる。神は神の勧告を拒否し神の譴責を軽んじる人々を支え守ることはおできにならない。神は、しばらくの間、刑罰が下るのを止められる。しかし、神はいつまでも御手を止めておくことはおできにならないのである。

ユダの人々は、神が「あなたがたはわたしに対して祭司の国となり、また聖なる民となるであらう」と宣言された者の中に数えられていた(出エジプト記一九ノ六)。エレミヤは働きに携わったときに、人生の様々の関係、特にいと高き神の礼拝において、心の清いことが非常に重大であることを見失わなかった。彼は国家の没落とユダ

の住民が諸国の間に離散するのを明らかに予見した。しかし、彼は、このすべてのできごとのかなたの回復の時を、信仰の目をもって眺めた。「わたしの群れの残った者を、追いやったすべての地から集め、再びこれをそのおりに帰らせよう。…主は仰せられる、見よ、わたしがダビデのために一つの正しい枝を起す日がくる。彼は王となって世を治め、榮えて、公平と正義を世に行う。その日ユダは救を得、イスラエルは安らかにある。その名は「主はわれわれの正義」ととなえられる」(エレミヤ書二三ノ三―六)。

こうして来るべき審判の預言には、最後の輝かしい救済の約束が入り混じっていた。神と和らぎ、広く行き渡った背信のさなかにあつて清い生活を送る人々は、すべての試練に耐える力が与えられ、大いなる力をもって神のためにあかしを立てることができるのであつた。そして後世において彼らのために行われた救済は、エジプト時代にイスラエルの民のために行われた救済よりもはるかに広く知れ渡るのであつた。主は預言者によって、次のような時代が来ると言われた。人々は『イスラエルの民をエジプトの地から導き出された主は生きておられる』とまた言わないで、『イスラエルの家の子孫を北の地と、そのすべて追いやられた地から導き出された神は生きておられる』という日がくる。その時、彼らは自分の地に住んでいる」(同二三ノ七、八)。ユダ王国の歴史の最後の年月においてエレミヤが発した驚くべき預言は、このようなものであつた。その時バビロン人は世界的支配権を握り、すでに包囲軍をシオンの城壁におかつて結集していたのである。

これらの救済の約束は、固く主の礼拝を守ってきた人々の耳には最も快い音楽のように聞こえた。契約を履行なさる神の勧告をなおも尊重していた家庭においては、高いところも低いところも預言者の言葉がくり返して語られた。子供たちでさえ大いに心を動かされた。そして、彼らの若い感受性の強い心に永続的印象が与えられた

のである。

エレミヤが活動していた時代に、ダニエルと彼の仲間が地の諸国の前で真の神を高める機会が与えられたのは、彼らが聖書の命令を良心的に遵守することによってであった。これらのヘブルの子供たちが彼らの親たちの家庭で受けた教育が彼らの信仰を強め、天地の創造主であられる神に忠実に仕えるものにしたのである。ネブカデネザルが、エホヤキムの治世の初期に第一回目のエルサレム包囲と攻略を行い、特別にバビロンの宮廷で仕えるために、ダニエルと彼の仲間たちを連れ去っていったときに、ヘブルの捕虜たちの信仰は極度の試練を受けた。しかし神の約束に信頼することを学んだ者は、これらの約束が、外国に滞在する間に経なければならぬあらゆる経験に対して十分なものであったことを知った。聖書が彼らの手引きであり、支えであった。

エレミヤは、ユダに降り始めた刑罰の意味の解釈者として、最も厳しい懲罰の中にさえ神の正義と神のあわれみ深いみこころがあることを擁護して気高く立った。預言者エレミヤはたゆまず働いた。彼はあらゆる階級の人に接したいと思って、王国の各地を度々訪問して、エルサレムの周囲の地域へと彼の感化力を及ぼした。

エレミヤは彼の教会に対するあかしの中で、常に、ヨシヤの治世下において大いにあがめられ、高められた律法の書の教えを引用した。彼はシナイ山上で十誡の戒めを語られた恵みとあわれみに富んだおかたとの契約関係を維持することの重要性を新たに強調した。エレミヤの警告と嘆願の言葉は王国の至るところに伝えられ、すべての者は国家に対する神のみこころを知る機会が与えられた。

われわれの天の父は、「もろもろの国民に自分がただ、人であることを知らせ」るために、神の刑罰がくだるのをお許しになるということをし、エレミヤは明らかにした(詩篇九ノ二〇)。「もしあなたがたがわたしに逆らっ

て歩み、わたしに聞き従わないならば、…わたしは、あなたがたを国々の間に散らし、つるぎを抜いて、あなたがたの後を追うであろう。あなたがたの地は荒れ果て、あなたがたの町々は荒れ地となるであろう」と主は神の民にあらかじめ警告を發せられた(レビ記二六ノ二一、二八、三三)。

切迫した破滅の言葉がつかさや国民に力説されていたその時に、賢明な靈的指導者として罪を告白し、改革と善事を行うことにおいて先頭に立つておるべきエホヤキムは、利己的快樂の追求に時を過ぎていた。彼は「わたしは自分のために大きな家を建て」ようと考えた。そしてこの家を、「香柏の鏡板であおい、それを朱で塗」ったが、それは欺瞞と圧迫によつて得た資金と労力で建てられた(エレミヤ書二二ノ一四)。

エレミヤは怒った。そして彼は、靈感によつて不忠実な王に次のような刑罰を宣告した。「『不義をもつてその家を建て、不法をもつてその高殿を造り、隣り人を雇つて何をも与えず、その賃銀を払わない者はわざわいである。…あなたは競つて香柏を用いることによつて、王であると思つのか。あなたの父は食い飲みし、公平と正義を行つて、幸を得たのではないか。彼は貧しい人と乏しい人の訴えをただして、さいわいを得た。こうすることがわたしを知る、ことではないかと主は言われる。しかし、あなたは目も心も、不正な利益のためにのみ用い、罪なき者の血を流そうとし、压制と暴虐を行おうとする』」。

それゆえ、主はユダの王ヨシヤの子エホヤキムについてこう言われる、『人々は「悲しいかな、わが兄」、「悲しいかな、わが姉」と言つて、彼のために嘆かない。また「悲しいかな、主君よ」、「悲しいかな、陛下よ」と言つて嘆かない。ろばが埋められるように、彼は葬られる。引かれて行つて、エルサレムの門の外に投げ捨てられる』」

(同二三ノ一三—一九)。

わずか数年のうちに、この恐ろしい刑罰がエホヤキムに臨むのであった。しかし主は、あわれみのうちに、まず悔い改めない国民にご自分の意図されたことをお知らせになった。エホヤキムの治世の第四年に、「預言者エシミヤは……ユダのすべての民とエルサレムに住むすべての人に告げて」、彼が「ヨシヤの十三年から今日にいたるまで」二十年以上にわたって、神が彼らを救おうと望んでおられることをあかししたにもかかわらず、その言葉が拒否されたことを指摘した(エシミヤ書二五ノ一、二)。そして彼らに対して次のような主の言葉が与えられた。「それゆえ万軍の主はこう仰せられる、あなたがたがわたしの言葉に聞き従わないゆえ、見よ、わたしは北の方のすべての種族と、わたしのものであるバビロンの王ネブカデレザルを呼び寄せて、この地とその民と、そのまわりの国々を攻め滅ぼさせ、これを忌みきらわれるものとし、人の笑いものとし、永遠のはずかしめとすると、主は言われる。またわたしは喜びの声、楽しみ声、花婿の声、花嫁の声、ひきうすの音、ともしびの光を彼らの中に絶えさせる。この地はみな滅ぼされて荒地となる。そしてその国々は七十年の間バビロンの王に仕える」(同二五ノ八―一一)。

運命の宣告は明白に宣言されたにもかかわらず、その恐ろしい意味は、それを聞いた群衆にはほとんど理解されなかった。もっと強い印象を与えるために、主は語った言葉の意味を例を挙げて説明しようとなさった。主は国家の運命を、神の怒りの酒が満ちた杯を飲みほすことに例えるようにエシミヤにお命じになった。この痛ましい杯をまず最初に飲む者は「エルサレムとユダのすべての町と、その王たち」であった。他のものもその同じ杯を飲むのであった。すなわち「エジプトの王パロとその家来たち、その君たち、そのすべての民」そしてその他、地の多くの国々であって、こうして、ついに神のご計画はなしとげられるのであった(同二五章参照)。

さらに刑罰が急速にくだるものであることを説明するために、エレミヤは、「民の長老と年長の祭司のうちの数人を伴って…ベンヒンノムの谷へ行き」そこで、ユダの背信をふりかえり、「陶器師のびん」を打ち砕いて、彼が仕える主に代わって、「陶器師の器をひとたび砕くならば、もはやもとのようにすることはできない。このようにわたしはこの民とこの町とを砕く」と宣言するのであった。

エレミヤは命じられたとおりにした。そして彼は町に帰って、神殿の庭に立って、すべての人々が聞いているところで言った。「万軍の主、イスラエルの神はこつ仰せられる、見よ、わたしは、この町とすべての村々に、わたしの言ったもろもの災を下す。彼らが強情で、わたしの言葉に聞き従おうとしないからである」(同一九章参照)。

エレミヤの言葉は告白と悔い改めに導くのではなくて、権力者たちの怒りを招いた。そのために、エレミヤは自由を奪われてしまった。エレミヤは投獄され、かせをはめられたけれども、そばに立っている人々に天からの言葉を語りつづけた。彼の声は迫害によって沈黙させることはできなかったのである。真理の言葉は「わたしの心にあつて、燃える火のわが骨のうちに閉じこめられているようで、それを押えるのに疲れはてて、耐えることができません」と彼は言った(同二〇ノ九)。

彼のあわれみに満ちた心が絶えず救いたいと願っていた人々に伝えようと望んでいた言葉を書くように命じられたのは、ちょうどこのころであった。主はそのしもべにお命じになった。「あなたは巻物を取り、わたしがあなたに語った日、すなわちヨシヤの日から今日に至るまで、イスラエルとユダと万国とに關してあなたに語ったすべての言葉を、それにしるしなさい。ユダの家がわたしの下そうとしているすべての災を聞いて、おのおのそ

の悪い道を離れて帰ることもあろう。そうすれば、わたしはそのとがとその罪をゆるすかも知れない」(エレミヤ書三六ノ二、三)。

エレミヤはこの命令に従って、忠実な友の彼の助手で書記のバルクを呼び、「主が彼にお告げになった言葉のことごとく」口述した(同三六ノ四)。

これらの言葉は注意深く羊皮紙の巻物に書かれた。それは罪に対する厳粛な譴責と、背信を続けるならば必ず刑罰が下るといふ警告と、そしてすべての悪を捨てるようにという熱烈な訴えから成るものであった。

それが書き上げられたときに、まだ囚人であったエレミヤは、ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの五年九月の、国民全体が断食を行う日に神殿に集まってくる群衆にその巻物を読むためにバルクをつかわした。「彼らは主の前に祈願をささげ、おのおのその悪い道を離れて帰ることもあろう。主がこの民に対して宣告された怒りと憤りは大きいからである」とエレミヤは言った(同三六ノ九、七)。

バルクは服従した。そして巻物はユダのすべての人々の前で読まれた。その後、バルクは、つかさたちの前で言葉を讀むように招かれた。彼らは非常な興味をもって聞き、彼らが聞いたすべての事を王に知らせると約束した。しかし彼らは、バルクに身を隠すように勧めた。それは王があかしを拒否し、言葉を書いてそれを人々に伝えた者を求めて殺すだろうと、彼らは恐れたからである。

エホヤキム王は、バルクが讀んだもののかさたちから聞いたときに、その巻物を直ちに彼のところに持って来て、彼の前で讀むように命じた。エホデという家来の一とりが、巻物をもってきて、譴責と警告の言葉を読み始めた。それは冬であつたので、王とその家臣たち、ユダのかさたちは、炉のまわりに集まっていた。



エレミヤの使信がエホヤキム王に送られた。王はその勧告に耳を傾けなくて、巻物を破り、焼いてしまった。

ほんのわずかの所が読まれただけであったのに、王は、自分自身と国民に迫っている危険におののくどころか、激しく怒って巻物をつかみ、「小刀をもつてそれを切り取り、炉の火に投げいれ、ついに巻物全部を炉の火で焼きつくした」(エレミヤ書三六ノ二三)。

王もつかさたちも、恐れず「またその着物を裂くこともしなかった」。しかしつかさのある者たちは、「王にその巻物を焼かないようにと願ったときにも彼は聞きいれなかった」。巻物は焼かれてしまったが、悪王の怒りはエシミヤとバルクに向けられた。そこで王は彼らを捕らえよと人々に命じたが、「主は彼らを隠された」(同三六ノ二四―二六)。

神は神殿の礼拝者たち、またつかさたちや王の注意を、靈感によって書かれた巻物に含まれた勧告に向け、ユダの人々をあわれんで、彼らを幸福にするために警告を与えようとされたのである。「ユダの家がわたしの下そうとしているすべての災を聞いて、おのおのその悪い道を離れて帰ることもあるう。そうすれば、わたしはそのとがとその罪をゆるすかも知れない」(同三六ノ三)。神は邪悪な行為のために心がくらんで苦闘している人々をあわれまれる。神はどんなに地位の高い人さえも、自分たちの無知を感じ、その誤りを嘆くに至るように計画された譴責と警告を送って、暗くなつた理解力に光を照らそうとされる。神は自己満足に陥っている者に自分たちのおなししい業績に不満を感じさせ、天との密接な交わりによって、靈的祝福を求めるに至るように努力しておられる。

神の計画は、罪人を喜ばせたり、へつらったりするために使者をお送りになることではない。神は清められない人々に現世的安心感を抱かせる平和の言葉をお語りにならない。神はそのかわりに、悪を行う者の良心に

重荷を負わせ、認罪の鋭い矢で彼の魂をつきさされるのである。奉仕の天使たちは、彼に恐るべき神の刑罰を示し、必要感を深め、「わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」という苦悶の叫びをあげさせるのである（使徒行伝一六ノ三〇）。しかし、ちに伏させて恥をこうむらせ、罪を譴責し、誇りと野心とをはずかしめる手は、悔い改めて打ちひしがれた者を引き起こす手なのである。懲らしめがくだることを許されるおかたは、深いあわれみをもって、「あなたは、わたしに何をしてもらいたいのか」とおたずねになるのである。

人間が、聖であわれみ深い神に対して罪を犯したときに、心から悔い改めて、涙と悲しみのうちに自分の誤りを告白することほど、人間にとって気高い行為はない。神はこの事を人間にお求めになる。神は悔いぐずおれた心以下のものをお受けにならない。しかし傲慢で自尊心の強いエホヤキム王と彼のつかさたちは、神の招待を拒否した。彼らは警告に耳を傾けず、悔い改めようとしなかった。聖なる巻物を焼いたときに、彼らに与えられた恵み深い機会が、彼らの最後の機会であった。その時神の声に聞き従うことを彼らが拒むならば、恐るべき懲罰が彼らにくだと神は言われたのである。彼らは聞くことを拒んだ。そして神はユダに対する最後の刑罰を宣告し、全能者であられる神に対して誇らかに自己を高めた者に、特別の怒りが下されるのであった。

「それゆえ主はユダの王エホヤキムについてこう言われる、彼の子孫にはダビデの位にすわる者がなくなる。また彼の死体は捨てられて昼は暑さにあい、夜は霜にあう。わたしはまた彼とその子孫とその家来たちをその罪のために罰する。また彼らとエルサレムの民とユダの人々には災を下す」（エレミヤ書三六ノ三〇、三一）。

巻物を焼けばそれで万事が終わるのではなかった。書かれた言葉は、そこに含まれた譴責と警告、また神が背信したイスラエルに対して宣告された神の急速な刑罰よりは、はるかに簡単に破棄することができた。しかし、

巻物さえもう一度書かれたのである。「他の巻物を取り、ユダの王エホヤキムが焼いた、前の巻物のうちにある言葉を皆それに書きしるしなさい」と主はそのしもべにお命じになった。ユダとエルサレムに関する預言の記録は灰に帰してしまった。しかし言葉は、エレミヤの心の中に、まだ「火の炎」のように燃えていた。そしてエレミヤは、人間の怒りが破棄してしまおうとしたものをもう一度作ることを許された。

エレミヤはもう一つの巻物を取ってそれをバルクに与えた。「バルクはユダの王エホヤキムが火にくべて焼いた巻物のすべての言葉を、エレミヤの口述にしたがってそれに書きしるし、また同じような言葉を多くそれに加えた」(エレミヤ書三六ノ二八、三二)。人間の怒りは、神の預言者の活動を阻止しようとした。しかしエホヤキムが、主のしもべの感化を制限しようとした手段そのものが、神の要求をさらに明らかにする機会となったのである。

エレミヤを迫害して投獄するに至った譴責に対する反感の精神は、今日も残っている。多くの者は繰り返して与えられる警告に耳を傾けることを拒み、彼らの虚栄心にへつらい、彼らの悪行を見ても見ぬふりをする偽教師たちの言葉を聞くほうを好むのである。このような人々は、悩みの日に確実な避難所を持たず、天からの助けもないのである。神に選ばれたしもべたちは、屈辱、無関心、誤解などによる試練と苦難に、勇氣と忍耐をもって立ち向かわなければならない。彼らは神がせよとお命じになった仕事を忠実に果たしていかなければならない。そして、昔の預言者たちも、人類の救い主や彼の信徒たちも、み言葉のためにののしりと迫害に耐えたことを、常に覚えていなければならない。

エホヤキムがエレミヤの勧告を聞いて、ネブカデネザルに好感をもって迎えられて、多くの悲痛な出来事を避

けることが、神のみこころであつた。若い王は、バビロンの王に忠誠をつくすことを誓った。もし彼が忠実にその約束を果たしたならば、彼は異教の人々の信頼を勝ち得て、多くの人々を改心に導く尊い機会とすることができたはずであつた。

ユダの王エホヤキムは、彼に与えられた著しい機会を拒絶して、頑強に自分勝手な道を歩んだ。彼はバビロンの王に対する約束を破り反逆した。これは彼と彼の国を非常な窮地に陥れた。「主はカルデヤびとの略奪隊、スリヤびとの略奪隊、モアブびとの略奪隊、アンモンびとの略奪隊をつかわしてエホヤキムを攻められた」(列王紀下二四ノ二)。彼はわずか数年足らずで天の神から拒否され、国民からは愛されず、信頼を裏切つたバビロンの王からは軽べつされて、彼の悲惨な治世は屈辱のうちに終わつた。そしてこうした事はみな、彼が神のお命じになつた使者によつて示された神のみこころから離れた致命的あやまりによるものであつた。

エホヤキムの子エホヤキン(エコニヤ、コニヤとも呼ばれる)は、三か月と十日しか世を治めなかつた。ユダの王はその背信のゆえに、再び破滅にひんした都エルサレムの包囲を招き、カルデヤの軍勢に降伏したのである。この時、ネブカデネザルは、「エホヤキンをバビロンに捕えて行き、また王の母、王の妻たち、および侍従と国のうちのおもな人々をも、エルサレムからバビロンへ捕えて行つた」。こうした数千の人々に加えて、「木工と鍛冶一千人」も連れて行つた。さらに、バビロンの王は、「主の宮のもろもろの宝物および王の家の宝物をことごとく」持ち去つた(同二四ノ一五、一六、一三)。

人物と財産の両面において骨抜きにされて、権力が失墜したユダ王国は、なお一國を形成して存在することが許された。ネブカデネザルは、ヨシヤの末の子マッターヤをその王として立て、彼の名をゼデキヤと改めた。

第三十六章 ユダ王国の最後の王

ゼデキヤは彼の治世の初期にはバビロンの王に信任されていた。そして彼には、信賴するに足る助言者として、預言者エレミヤがいた。彼はバビロン人に対して忠誠をつくし、エレミヤによって与えられる主の言葉に聞き従うことによって、多くの権威者たちの尊敬を勝ち得て、彼らに真の神の知識を伝える機会が与えられるのであった。こうして、すでにバビロンにいる捕囚の民たちは有利な立場が与えられ、多くの自由が与えられるのであった。神のみ名は広範囲にわたってあがめられるのであった。そしてユダの国に残っていた人々も、ついに彼らを襲ったような恐ろしい惨禍から救われることができたはずであった。

エレミヤはゼデキヤとバビロンに捕らえられて行つた人々をも含めてすべての人々に、彼らの征服者の一時的支配に静かに従うように勧告した。特に、捕らえられて行つた人々は、その連れて行かれた国の平和の維持に努めることが大切であった。しかしこれは、人間の生まれながらの性質とは相反するものであった。そしてサタンは、このような状態を利用して、エルサレムとバビロンの両方において、偽の預言者を起こさせた。彼らは、奴

隷のくびきはやがてくだかれて、以前の国家的威信は回復されると言った。

こうした樂觀的預言に心をひかれることは、王や捕らえられた人々に致命的行動を起こさせて、彼らのための神の計画を挫折させることになるのであった。そこで主は、反乱が起こって大きな苦しみに遭うことがないように、直ちに反逆の当然の結果をユダの王に警告するようエレミヤにお命じになった。捕囚の民にも、欺かれて解放の時が近いと考えるように警告が手紙で発せられた。「あなたがたのうちにいる預言者と占い師に惑わされてはならない」と彼は勧めた(エレミヤ書二九ノ八)。これと関連して、主の使者たちによって預言されていた七十年の捕囚の終わりにイスラエルは回復されるという主のまごころが述べられた。

神はなんと深いあわれみをもって、イスラエルに対する神の計画を捕囚の民にお伝えになったことである。もしも彼らが、偽の預言者たちによって急速な救済を期待するように説得されるならば、彼らのバビロンにおける立場は非常に困難なものになることを、神は知っておられた。もし彼らが示威運動や暴動を起こすならば。カルデヤびとの警戒心と苛酷さを起こさせて、さらに彼らの自由を束縛するようになるのであった。苦難と災難がそれに続いて起こる。彼は、彼らが静かに彼らの運命に甘んじ、彼らの捕囚生活をできるだけ楽しいものにするように願った。そして彼は、彼らに勧告して言った。「あなたがたは家を建てて、それに住み、畑を作ってその産物を食べよ。…わたしがあなたがたを捕え移させたところの町の平安を求め、そのために主に祈るがよい。その町が平安であれば、あなたがたも平安を得るからである」(同二九ノ五―七)。

バビロンにおける偽教師たちの中に、その生活は腐敗していたにもかかわらず、自分たちは清いと主張する人がふたりあった。エレミヤはこの人々の悪い行為を責めて、彼らの危険を警告した。彼らは譴責されたことを怒

って、エレミヤの言葉を疑うように人々を扇動し、またバビロンの王に服従することについての神の勧告に反して行動するように人々をそそのかして、真の預言者の働きに反対しようとした。主はエレミヤによって、これらの偽の預言者たちがネブカデネザルの手に渡され、彼の目の前で殺されるとあかしされた。その後しばらくして、この預言は文字通りに成就したのである。

世の終末に至るまで、真の神の代表者であると主張する人々の中に、混乱と反逆を起こそうとする人々が起こる。偽りを預言する者たちは、人々に罪をささいな事のように考えることを奨励する。彼らの悪行の恐ろしい結果があらわれると、彼らは、ユダヤ人が彼らの災害をエレミヤのせいにしたように、できることならば彼らが陥った苦境の責任を、忠実に彼らを警告した者のせいにしうとするのである。しかし昔、主が預言者によって語られた言葉が確実に擁護されたように、神の言葉は今日も間違いなく確立するのである。

エレミヤは、初めから終始一貫して、バビロンに服従するように勧告してきた。この勧告はただユダに与えられたばかりではなくて、周囲の多くの国々にも与えられた。ゼデキヤの治世の初期に、エドムの王、モアブの王、ツロの王、その他の国々の大使がユダの王を訪問し、今は結束して反逆する好機であるのか、まだゼデキヤも彼らに加わって、バビロンの王に対抗して戦うべきかどうかをたずねた。これらの大使たちが返答を待っていたときに、主の言葉がエレミヤに臨んで言った。「綱と、くびきを作って、それをあなたの首につけ、エルサレムにいるユダの王ゼデキヤの所に来た使者たちによって、エドムの王、モアブの王、アンモンびとの王、ツロの王、シドンの王に言いおくりなさい」（エレミヤ書二七ノ二、三）。

エレミヤは、神が彼らすべてのものをバビロンの王ネブカデネザルの手に与え、彼らは「彼の地に時がくるま

で、万国民は彼とその子とその孫に仕える」と彼らの王に告げるように使者たちに指示を与えるように命じられた(同二七ノ七)。

使者たちはさらに、もし彼らの王たちがバビロンの王に仕えることを拒むならば、彼らは「つるぎと、ききんと、疫病をもって」罰せられて、ついに全滅するに至るということを、王たちに告げるように指示されたのである。特に彼らは、別のことを勧める偽りの預言者の教えを捨てなければならなかった。「それで、あなたがたの預言者、占い師、夢みる者、法術師、魔法使が、『あなたがたはバビロンの王に仕えることはない』と言っても、聞いてはならない。彼らはあなたがたに偽りを預言して、あなたがたを自分の国から遠く離れさせ、わたしに、あなたがたを追い出してあなたがたを滅ぼさせるのである。しかしバビロンの王のくびきを首に負って、彼に仕える国民を、わたしはその故国に残らせ、それを耕して、そこに住まわせると主は言われる」(同二七ノ八一)。
あわれみ深い神が、反逆する民に課せられる最も軽い罰は、バビロンの支配に服することであった。そしてもし彼らが、この服役の命令に逆らうならば、彼らは神の厳しい懲罰をあますところなく受けなければならないのであった。

エレミヤが降伏のくびきを彼の首にかけて神のみこころを知らせたときに、諸国から会議に集まった人々の驚きは、たいへんなものであった。

エレミヤは、断固とした反対に遭っても、降伏についての彼の所信をまげなかった。主の勧告に反駁したもののうちの著名な人は、ハナニヤであった。彼はすでに人々に対して警告が発せられていた偽預言者の一人であった。ハナニヤは王と宮廷の寵愛を得ようとして反対の声をあげ、神が彼にユダヤ人に対する激励の言葉をお与え

になったと言ったのである。ハナニヤは次のように言った。「万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、わたしはバビロンの王のくびきを砕いた。二年の内に、バビロンの王ネブカデネザルが、この所から取ってバビロンに携えて行った主の宮の器を、皆この所に帰らせる。わたしはまたユダの王エホヤキムの子エコニヤと、バビロンに行ったユダのすべての捕われ人をこの所に帰らせる。それは、わたしがバビロンの王のくびきを、砕くからであると主は言われる」(エレミヤ書二八ノ二―四)。

エレミヤは祭司たちと人々の前で、主が定められた期間の間、バビロンの王に降伏するように熱心に嘆願した。彼は、彼と同じような譴責と警告の言葉を語ったホセア、ハバクク、ゼパニヤなどの預言をユダの人々に引用した。彼はまた、罪を悔い改めないことに対する刑罰の預言の成就として起こった出来事を引用した。過去において、神の刑罰は神の使者が示したとおり、神の計画の正確な成就として、悔い改めない人々の上に下ったのである。

エレミヤは結論として言った。「平和を預言する預言者は、その預言者の言葉が成就するとき、真実に主がその預言者をつかわされたのであることが知られるのだ」(同二八ノ九)。もしイスラエルがどちらかを選ぶにしても、将来の事態の進展によつて、どちらが真の預言者であるかが、決定的に判明するのである。

降伏を勧告するエレミヤの言葉を聞いて、ハナニヤは、エレミヤの言葉の信頼性について異議を申し立てた。彼はエレミヤの首から象徴的くびきを取ってそれを砕いた。そして「主はこう仰せられる、『わたしは二年のうちに、このように、万国民の首からバビロンの王ネブカデネザルのくびきを離して砕く』」と言った。「預言者エレミヤは去って行った」(同二八ノ一一)。彼は、争闘の場から去ること以外に、ほかにすることが



預言者エリシャとバネザス同様に囚われ、口に入る油に
降服するうちに驚かに動めた。

なかったようである。しかし、エレミヤはもう一つの言葉が与えられた。彼は次のように命じられた。「行ってハナニヤに告げなさい、『主はこう仰せられる、あなたは木のくびきを砕いたが、わたしはそれに替えて鉄のくびきを作ろう。万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、わたしは鉄のくびきをこの万国民の首に置いて、バビロンの王ネブカデネザルに仕えさせる。彼らはこれに仕える。』…」

預言者エレミヤはまた預言者ハナニヤに言った、『ハナニヤよ、聞きなさい。主があなたをつかわされたのではない。あなたはこの民に偽りを信じさせた。それゆえ主は仰せられる、「わたしはあなたを地のおもてから除く。あなたは主に対する反逆を語ったので、今年のうちに死ぬのだ」と』。預言者ハナニヤはその年の七月に死んだ（一エレミヤ書二八ノ一三―一七）。

偽預言者はエレミヤと彼の言葉に対する人々の不信感を強めたのであった。彼は不正にも自分を主の使者であると言い、その結果死んでしまったのである。エレミヤは五月にハナニヤの死を預言したが、それは彼の言葉どおりに七月に成就した。

偽預言者たちの声明が引き起こした不安状態の結果、ゼデキヤは反逆の嫌疑を受けたが、彼は直ちに断固とした処置を取ったために、保護国の王として国を治めることを許された。こうした行動は、使節たちがエルサレムから周囲の国々へ帰還後、しばらくしてからこの機会を利用してとられた。その時ユダの王は、バビロンへのこの重大な任務を果たすに当たって、「宿営の長」セラヤを伴って行った（同五一ノ五九）。ゼデキヤはカルデヤ人の宮殿への訪問において、ネブカデネザルに対する彼の忠誠を更新したのである。

バビロンの王ネブカデネザルは、ダニエルその他のヘブルの捕虜たちによって、真の神の力と至上権とを知ら

されていた。そしてゼデキヤが再び厳粛に忠誠を誓ったときに、ネブカデネザルは、彼がイスラエルの神、主の名によって誓って約束することを要求した。もしゼデキヤがこの契約の更新を尊重したならば、ヘブルの神の名をあがめ、その栄光を重ねると主張する人々の行動を眺めていた多くの人々の心に、深い感化を及ぼしたことであろう。

しかしゼデキヤは、生ける神の名をあがめる大いなる特権を見失った。ゼデキヤについて次のように記されている。「彼はその神、主の前に悪を行い、主の言葉を伝える預言者エレミヤの前に、身をひくくしなかった。彼はまた、彼に神をさして誓わせたネブカデネザル王にもそむいた。彼は強情で、その心をかたくなにして、イスラエルの神、主に立ち返らなかった」(歴代志下三六ノ一二、一三)。

エレミヤがユダの国であかしを立てていたときに、捕囚たちに警告と慰めを与え、またエレミヤが語った主の言葉に確証を与えるために、バビロンの捕虜の中から預言者エゼキエルが起こされた。エゼキエルはゼカリヤの治世の残余の期間中、捕虜たちに、エルサレムへの早期帰還の希望を与えた人々の偽りの預言を信じることの愚かさを明白にした。エゼキエルはまた、様々の象徴と厳粛な言葉によって、エルサレムの包囲と完全な滅亡を預言するように指示された。

ゼデキヤの治世の第六年に、主はエルサレムにおいて、また主の家の門の中や内庭においてさえ行われる憎むべきことを、幻の中でエゼキエルに示された。偶像の置いてある部屋、「もろもろの這うものと、憎むべき獣の形、およびイスラエルの家のもろもろの偶像」の絵が、すべて、驚嘆する預言者の目の前を過ぎていった(エゼキエル書八ノ一〇)。

民の間で靈的指導者でなければならない「イスラエルの家の長老」たちが、七十人も神殿の庭の聖なる場所のかくれた部屋に持ち込まれた偶像の前で香をささげていた。ユダの人々は、異教の礼拝を行いながら、「主はわれわれを見られない」と言つて、心ひそかに満足していた。彼らは「主はこの地を捨てられた」と言つて、神を汚した(エゼキエル書八ノ一、一二)。

預言者は、さらに「大いなる憎むべきこと」を見るのであつた。彼は外庭から内庭へはいる門のところで「女たちが…タンムズのために泣いて」いるのを見せられた。そして「主の家の内庭」の中で、「主の宮の入口に、廊と祭壇との間に二十五人ばかりの人が、主の宮にその背中を向け、顔を東に向け、東に向かって太陽を拜んでいた」のを示された(同八ノ一三―一六)。

ユダの国の高官たちの罪惡の、この驚くべき幻の間、ずっとエゼキエルにつきそっていた栄光に輝くおかたが今、預言者に次のようにたずねた。「人の子よ、あなたはこれを見たか。ユダの家にとって、彼らがここであるこれらの憎むべきわざは軽いことであるか。彼らはこの地を暴虐で満たし、さらにわたしを怒らせる。見よ、彼らはその鼻に木の枝を置く。それゆえ、わたしも憤つて事を行う。わたしの目は彼らを惜しみ見ず、またあわれまない。たとい彼らがわたしの耳に大声で呼ばわつても、わたしは彼らの言うことを聞かない」(同八ノ一七、一八)。

主はエレミヤによつて、せんえつにも主の名によつて人々の前に大胆に立つ悪人たちについて言われる。「預言者と祭司とは共に神を汚す者である。わたしの家においてすら彼らの惡を見た」(エレミヤ書二三ノ一一)。ゼデキヤの治世の歴史家は、その記述の最後においてユダに対する恐るべき糾弾を行っているが、その中で、この

神殿の神聖を汚したことが繰り返されている。「祭司のかしらたちおよび民らもまた、すべて異邦人のもろもろの憎むべき行為にならって、はなはだしく罪を犯し、主がエルサレムに聖別しておかれた主の宮を汚した」と聖書の歴史家は言った(歴代志下三六ノ一四)。

ユダ王国の破滅の日は急速に近づいていた。主はもはや、神の最も厳しい刑罰を避けることができるという希望を彼らに持たせることはできなかった。「どうしてあなたがたが罰を免れることができようか。あなたがたは罰を免れることはできない」と仰せになった(エレミヤ書二五ノ二九)。

こうした言葉でさえ、冷やかな嘲笑をもってあしらわれた。悔い改めない人々は「日は延び、すべての幻はおなしくなった」と言った。主は次のように言われた。『わたしはこのことわざをやめさせ、彼らが再びイスラエルで、これをことわざとしないようにする』と。しかし、あなたは彼らに言え、『日とすべての幻の実現とは近づいた』と。イスラエルの家のうちには、もはやおなしい幻も、偽りの占いもなくなる。しかし主なるわたしは、わが語るべきことを語り、それは必ず成就する。決して延びることはない。ああ、反逆の家よ、あなたの日にわたしはこれを語り、これを成就すると、主なる神は言われる」。

エゼキエルはあかししている。「主の言葉がまたわたしに臨んだ、『人の子よ、見よ、イスラエルの家は言う、『彼の見る幻は、なお多くの日の後の事である。彼が預言することは遠い後の時のことである』と。それゆえ、彼らに言え、主なる神はこう言われる、わたしの言葉はもはや延びない。わたしの語る言葉は成就すると、主なる神は言われる』」(エゼキエル書一二ノ二二―二八)。

国家を急速に破滅に陥れていた人々の真つ先に立ったのが、その王ゼデキヤであった。ゼデキヤは預言者たち

によつて与えられた主の勧告を全く捨て、ネブカデネザルから受けた恩義を忘れ、イスラエルの神、主の名によつて厳粛に誓つた忠誠の誓いにそむき、預言者たちと、彼の恩人と、彼の神とに反逆したのである。彼は自分の知恵を誇つて、イスラエルの子孫の昔ながらの敵であつたエジプトに「使者を…送つて、馬と多くの兵とをそこから獲ようとした」。

こつして、すべての聖なる信任を下劣にも裏切つた者に関して、主は「彼は成功するだろうか」とおたずねになつた。「このようなことをなす者は、のがれることができようか。契約を破つてなおのがれることができようか。主なる神は言われる、わたしは生きている、必ず彼は自分を王となした王の住む所、彼が立てた誓いを軽んじ、その契約を破つた相手の王のいるバビロンで彼は死ぬ。…パロは決して大いなる軍勢と、多くの人ともつて、彼を助けて戦いをしない。彼は誓いを軽んじ、契約を破り、その手を与えて誓いながら、なおこれらの事をしたゆゑ、のがれることはできない」(エゼキエル書一七ノ二五―二八)。

「汚れた悪人であるイスラエルの君」に最後の報復の日がやって来た。「かぶり物を脱ぎ、冠を取り離せ」と主は言われた。キリストご自身が、彼の王国を建設されるまで、ユダは再び王を持つことを許されないのだつた。ダビデの家の王座について、「ああ破滅、破滅、破滅、わたしはこれをこさせる」と神はお命じになつた。「わたしが与える権威をもつ者が来る時まで、その跡形さえも残らない」(同二一ノ二五―二七)。

第三十七章 バビロン捕囚

ゼデキヤの治世の第九年に、「バビロンの王ネブカデネザルはもろもろの軍勢を率い、エルサレムにきて」都を包囲した（列王紀下二五ノ一）。ユダの前途は暗たんとしていた。主ご自身がエゼキエルによって次のように言われた。「見よ、わたしはあなたを攻め」る。「主なるわたしが、そのつるぎをさやから抜き放ったことを知るこのつるぎは再びさやに納められない。…人の心はみな溶け、手はみななえ、霊はみな弱り、ひざはみな水のようになる。」「わたしの怒りをあなたに注ぎ、わたしの憤りの火をあなたに向けて燃やし、滅ぼすことに巧みな残忍な人の手にあなたを渡す」（エゼキエル書二一ノ三、五―七、三一）。

エジプトびとはやって来て、包囲された都を救おうと努力した。カルデヤびとは彼らを来させないために、一時エルサレムの包囲を放棄した。ゼデキヤは心に希望を抱いて、エレミヤに使者を送って、ヘブル民族のために神に祈ってほしいと願った。

預言者の恐るべき答えは、カルデヤびとが戻って来て、都を破壊するということであった。厳命はすでに出さ

れた。もはや、悔い改めない国家は、神の刑罰を避けることはできなかった。主は、主の民に「自分を欺いてはならない」と警告を発せられた。「カルデヤびとは……去ることはない。たといあなたがたが自分を攻めて戦うカルデヤびとの全軍を撃ち破って、その天幕のうちに負傷者のみを残しても、彼らは立ち上がって火でこの町を焼き滅ぼす」（エレミヤ書三七ノ九、一〇）。ユダに残っていた人々は捕らえられていき、彼らが順境の時に学ぶことを拒否した教訓を逆境において学ばなければならなかった。聖なる警護者のこの命令に対する控訴は、もはやできなかった。

神のみこころが明らかに示された義人たちがまだエルサレムに残っていたが、その中のある人々は、十誠の戒めが書かれた石の板を納めた聖なる箱が、乱暴な人々の手に入らないようにしようと決意した。彼らはそれを行した。彼らは嘆き悲しみつつ、箱をほら穴の中に隠したのである。箱はイスラエルとユダの人々の罪のゆえに、彼らから隠されて、再び彼らにもどることはないのであった。その箱は今なお隠されている。それはそこに隠されて以来、人手に触れたことはないのである。

エレミヤは長年の間、神に代わって語る忠実な証人として人々の前に立った。そして今、破滅にひんした都が異邦人の手に渡ろうとしていた時に、彼は自分の仕事はもう終わったものと思って去ろうとしたところが、ひとりの偽りの預言者の息子に妨害された。彼はエレミヤが繰り返してユダの人々に降伏を勧めていたバビロン人の側に加わろうとしていると言いつらした。エレミヤは、この偽りの告発を否定したけれども、「つかさたちは怒って、エレミヤを打ちたたき……獄屋にいれた」（同三七ノ一五）。

ネブカデネザルの軍勢が、エジプトびとと戦うために南に向かったときに、つかさたちと国民の心にわき起こ

った希望は、やがて無残にも碎かれてしまった。主は、「エジプトの王パロよ、見よ、わたしはあなたの敵となる」と語ってあられた。エジプトの力は、折れた葦に過ぎなかった。靈感の言葉は、次のようであった。「そしてエジプトのすべての住民はわたしが主であることを知る。」「わたしがバビロンの王の腕を強くし、パロの腕がたれる時、彼らはわたしが主であることを知る。わたしがわたしのつるぎを、バビロンの王に授け、これをエジプトの国に向かって伸べさせ」る(エゼキエル書二九ノ三、六。三〇ノ二五、二六)。

ユダのつかさたちが愚かにもエジプトからの援助を待望していたときに、ゼデキヤ王は不吉な予感を抱いて、獄に入れられていた神の預言者のことを考えていた。王は多くの日の後、エレミヤを連れてこさせ、「主から何かお言葉があつたか」とひそかにたずねた。エレミヤは、あつたと答えた。『「あなたはバビロンの王の手に引き渡されます』」。

エレミヤはまたゼデキヤ王に言った。『わたしが獄屋にいれたのは、あなたに、またはあなたの家来に、あるいはこの民に、どのような罪を犯したからなのです。あなたがたに預言して、「バビロンの王はあなたがたをも、この地をも攻めにこない」と言っていたあなたに、あなたがたの預言者は今どこにいるのですか。王なるわが君よどうぞ今お聞きください。わたしの願いをお聞きとどけください。わたしを書記ヨナタンの家へ帰らせないでください。そうでないと、わたしはそこで殺されるでしょう』(エレミヤ書三七ノ一七—二〇)。

「そこでゼデキヤ王は命を下し、エレミヤを監視の庭に入れさせ、かつ、パンを造る者の町から毎日パン一個を彼に与えさせた。これは町にパンがなくなるまで続いた。こうしてエレミヤは監視の庭にいた」(同三七ノ二一)。

王はエレミヤに対する信任の気持ちを公然とあらわすことはしなかった。彼は恐怖心にかられて、ひそかにエレミヤの意見を求めたが、預言者によって語られる神のみこころに従って、つかさたちと国民の非難を受けるだけの気骨を持ち合わせていなかったのである。

エレミヤは監視の庭からバビロンの支配に従うように勧告し続けた。反抗することは、間違いなく死を招くことであった。主はユダに対して次のように言われた。「この町にとどまる者は、つるぎや、ききんや、疫病で死ぬ。しかし出てカルデヤびとにくだる者は死を免れる。すなわちその命を自分のぶんどり物として生きることが出来る。」語られた言葉は明白で積極的であった。預言者は、主の名によって大胆に、「この町は必ずバビロンの王の軍勢の手に渡される。彼はこれを取る」と宣言した(エレミヤ書三八ノ二、三)。

ついにつかさたちは、彼らの反抗政策とは反対のエレミヤの度重なる勧告を怒って、王に向かって激しく抗議を申し立て、エレミヤは国家の敵であること、彼の言葉は人々の手を弱めて彼らに不幸をもたらしたことを述べて、彼を死に処すべきであると言った。

臆病な王は、この申し立てが偽りであることを知っていた。しかし国家の有力な高官たちのきげんを取るために、彼らの虚偽を信じるふうを装い、エレミヤを彼らの手に渡し、彼らのなすがままにまかせた。「そこで彼らはエレミヤを捕え、監視の庭にある王子マルキヤの穴に投げ入れた。すなわち、綱をもってエレミヤをつり降ろしたが、その穴には水がなく、泥だけであつたので、エレミヤは泥の中に沈んだ」(同三八ノ六)。しかし神は、彼を助ける友人を起こしてくださった。この友人たちが、彼のために王に願い出て、彼をまた監視の庭に移させたのである。

王はもう一度エレミヤを連れてこさせて、エルサレムに関する神のみこころを忠実に語るように彼に命じた。それに答えてエレミヤは言った。「もしわたしがお話するなら、あなたは必ずわたしを殺されるではありませんか。たといわたしが忠告をしても、あなたはお聞きにならないでしょう。そこで王はエレミヤと秘密の契約を結んだ。『われわれの魂を造られた主は生きておられる。わたしはあなたを殺さない、またあなたの命を求める者の手に、あなたを渡すこともしない』とゼデキヤは約束した(同三八ノ一五、一六)。

王には主の警告に喜んで耳を傾ける気持ちがあることをあらわす機会が、まだ残っていた。そしてこうすることによって、すでに都や国家に降りつつあった刑罰を和らげることができた。王に次のような言葉が与えられた。『もしあなたがバビロンの王のつかさたちに降伏するならば、あなたの命は助かり、またこの町は火で焼かれることなく、あなたも、あなたの家の者も生きながらえることができる。しかし、もしあなたが出てバビロンの王のつかさたちに降伏しないならば、この町はカルデヤびとの手に渡される。彼らは火でこれを焼く。あなたはその手をのがれることができない』。

ゼデキヤ王はエレミヤに言った、「わたしはカルデヤびとに脱走したユダヤ人を恐れている。カルデヤびとはわたしを彼らの手に渡し、彼らはわたしをはずかしめる』。エレミヤは言った、『彼らはあなたを渡さないでしょう。どうか、わたしがあなたに告げた主の声に聞き従ってください。そうすれば幸を得、また命が助かります』(同三八ノ一七—二〇)。

こうして神は、最後の時に至るまで、神の正当な要求に従うことを選ぶ人々に快く恵みを示そうとしておられることを明らかにされた。もし王が服従したならば、人々の生命は救われ、都は火で焼かれなすんだである。

う。しかし彼は、もう取り返しがつかないと考えた。彼はユダヤ人を恐れ、嘲笑を恐れ、自分の命を失うことを恐れた。ゼデキヤは、幾年も神に反逆してきたために、「自分は預言者エレミヤによって語られた主の言葉を受け入れる。そしてわたしは、このように警告が与えられたのであるから、それにそおいて敵に戦いをいどむことはできない」と言うのは、あまりにも大きな屈辱であると考えた。

エレミヤは涙を流して、自分自身と国民とを救うように、ゼデキヤに訴えた。エレミヤは、もしゼデキヤが神の勧告に聞き従わないならば、彼は生きて逃れることはできず、財産はみなバビロン人の手に落ちると、悲痛な気持ちで断言した。しかし王は、すでに誤った道を進んでいて、その道を引き返そうとはしなかったのである。彼は実際には軽べつしていた偽預言者の勧告に従う決意をした。偽預言者たちは、王が柔弱で、やすやすと彼らの思いどおりになったことをあざ笑った。彼は壮年時代の高貴な自由の精神を捨てて、世論にへつらう奴隷となった。彼は悪に走る決意があつたのではなかったが、また正義のために大胆に立つ決心もなかった。彼は、エレミヤが与える勧告の価値を十分に悟りながらも、それに従う道徳的勇氣を持っていなかった。そのために彼は、徐々に悪い方向へ進んでいったのである。

ゼデキヤ王は性格が非常に弱く、彼がエレミヤと会談したことを、家来たちや国民に知られなくなかった。彼の心は全く人に対する恐怖に取りつかれていたのである。もしゼデキヤが勇敢に立ち上がって、すでに半ば成就していた預言者の言葉を信じると宣言したならば、そのような荒廃は避けられたことであろう。彼は、わたしは主に服従すると言って、都を全滅から救わなければならなかった。わたしは人の恐怖やまたは愛顧のゆえに、神の戒めを無視することはできない、わたしは真理を愛し、罪を憎む、そしてわたしは、イスラエルの大いなる神



神の勅告に反して、バビロン王はバビロンに固
な抵抗をくりかえした。その結果、エルサレムは不必
要な破壊を受けた。

の勧告に服従すると言わなければならなかった。

そうすれば人々は彼の勇敢な精神を尊敬して、信仰と不信の間で決断しかねていた人々が、正義のために堅く立ったことであろう。こうした大胆で正しい行為そのものが、国民の賞賛と忠誠心を鼓舞したことであろう。彼には十分な支持が与えられ、ユダはつるぎとききんと火による恐るべき災害を免れたことであろう。

ゼデキヤの弱さは罪であった。そして彼は、そのために恐るべき刑罰を受けた。敵は抵抗することができないのだれのように襲いかかって、都を荒廃させた。ヘブルの軍勢は、混乱を起こして敗退した。国家は征服された。ゼデキヤは捕虜となり、彼の息子たちは彼の目の前で殺された。王は目をえぐり取られて、捕虜としてエルサレムから連れ去られ、バビロンに着いてから悲惨な死にかたをした。四百年以上もシオン山上に位していた美しい神殿は、カルデヤ人の手を免れることはできなかった。「神の宮を焼き、エルサレムの城壁をくずし、そのうちの宮殿をことごとく火で焼き、そのうちの尊い器物をことごとくこわした」(歴代志下三六ノ一九)。

ネブカデネザルが最後にエルサレムを破壊したときに、多くの者は、長い包囲の恐ろしさから逃れたかと思つとつるぎに倒れた。なお残っていた人々の中で、特に祭司の長や国の役人やつかさたちは、バビロンに連れて行かれて、反逆者として処刑された。他の人々は捕虜として連れて行かれ、ネブカデネザルとその子らに仕え「ペルシャの国の興るまで、そうして置いた。これはエレミヤの口によつて伝えられた主の言葉の成就するためであった」(一同三六ノ二〇、二一)。

エレミヤ自身については、次のように記されている。「さてバビロンの王ネブカデザルはエレミヤの事について侍衛の長ネブザラダンに命じて言った、『彼をとり、よく世話をせよ。害を加えることなく、彼があなたに

言うようにしてやりなさい』」（エレミヤ書三九ノ一、一二）。

エレミヤはバビロンの役人によって獄屋から解放され、「ぶどう畑と田地」の世話をするようにカルテヤびとが残していった「民の貧しい無産者」と運命を共にすることにした。バビロンびとは、この人々の上にゲダリヤを総督として置いた。ところがほんの数か月しか経過しないうちに新しい総督は裏切られて殺害された。貧しい人々は多くの試練を経たあとで、指導者たちの勧めによって、エジプトに避難することにした。エレミヤは、こうした移動に対して反対の声をあげた。彼は「エジプトへ行ってはならない」と嘆願した。しかし靈感による勧告は聞きいれられず、「ユダに残っている者…男、女、子供」は、エジプトに逃れた。「彼らは主の声にしたがわなかったのである。そして彼らはついにタパネスに行った」（同四三ノ五―七）。

エジプトに逃れて行って、ネブカデネザルに反逆した残りの者に対してエレミヤが宣言した運命の預言には、その愚かさを認めて立ち返る者へのゆるしの約束がいり混じっていた。主は、主の勧告を捨ててエジプトの偶像礼拝の欺瞞的影響力のもとに走った人々をおゆるしにはならないが、忠誠をつくして真実に仕える人々には、あわれみを示されるのである。「しかし、つるぎをのがれるわずかの者はエジプトの地を出てユダの地に帰る。そしてユダに残っている民でエジプトに来て住んだ者は、わたしの言葉が立つか、彼らの言葉が立つか、いずれであるかを知るようになる」と主は言われた（同四四ノ二八）。

世界の霊的光となるべきであった人々の徹底的な邪悪さに対する預言者の悲しみ、またシオンの運命とバビロンに捕らえられて行った人々に対する彼の悲しみは、主の勧告にそむいて、人間の知恵に従った愚かさの記念として、彼が書き残した哀歌の中に示されている。彼らに及んだ荒廃のさなかにあっても、エレミヤはなお彼らに

「主のいつくしみは絶えることがない」と言うことができた。そして彼は、われわれは、自分の行いを調べ、かつ省みて、主に帰ろう」と絶えず祈っていた（哀歌三ノ二二、四〇）。ユダが諸国間においてまだ王国であったころ、エシメヤは彼の神にたずねた。「あなたはまったくユダを捨てられたのですか。あなたの心はシオンをきらわれるのですか。」そして彼は大胆に、「み名のために、われわれを捨てないでください」と嘆願した（エシメヤ書一四ノ一九、二一）。混乱の中から秩序を生じさせ、地上の諸国と全宇宙の前に、神の正義と愛の性質を実証なさる神の永遠の計画に対するエシメヤの絶対的信仰によって、彼は今、確信をもって、悪を離れて義に立ち返る人々のために嘆願したのであった。

今やシオンは全く破壊されてしまった。神の民は捕らわれて行ってしまった。エシメヤは悲しみに打ちひしがれて叫んだ。「ああ、むかしは、民の満ちみちていたこの都、国々の民のうちで大いなる者であったこの町、今は寂しいさまで座し、やもめのようになった。もろもろの町のうちで女王であった者、今は奴隷となった。これは夜もすがらいたく泣き悲しみ、そのほおには涙が流れている。そのすべての愛する者のうちには、これを慰める者はひとりもなく、そのすべての友はこれにそむいて、その敵となった。

ユダは悩みのゆえに、また激しい苦役のゆえに、のがれて行って、もろもろの国民のうちに住んでいるが、安息を得ず、これを追う者がみな追いついてみると、悩みのうちにあった。シオンの道は祭に上ってくる者のないために悲しみ、その門はことごとく荒れ、その祭司たちは嘆き、そのおとめたちは引かれて行き、シオンはみずからいたく苦しむ。そのあだはかしらとなり、その敵は榮えている。そのとがが多いので、主がこれを悩まされたからである。その幼な子たちは捕われて、あだの前に行った」（哀歌一ノ一―五）。

「ああ、主は怒りを起し、黒雲をもってシオンの娘をおおわれた。主はイスラエルの栄光を天から地に投げ落とし、その怒りの日に、おのれの足台を心にとめられなかった。主はヤコブのすべてのすまいを滅ぼして、あわれまず、その怒りによって、ユダの娘のとりでをこわし、これを地に倒して、その国とそのつかさたちをはずかしめられた。主は激しい怒りをもって、イスラエルのすべての力を断ち、敵の前で、おのれの右の手を引きもどし、周囲を焼きつくす燃える火のように、ヤコブを焼かれた。主は敵のように弓を張り、あだのように右の手を伸べて立ち、シオンの娘の天幕におけるわれわれの目に誇る者を、ことごとく殺し、火のようにその怒りを注がれた。」

「エルサレムの娘よ、わたしは何をあなたに言い、何にあなたを比べることができようか。シオンの娘なるおとめよ、わたしは何をもってあなたになぞらえて、あなたを慰めることができようか。あなたの破れば海のように大きい、だれがあなたをいやすことができようか」(同二ノ一四、一二)。

「主よ、われわれに臨んだ事を覚えてください。われわれのはずかしめを顧みてください。われわれの嗣業は他国の人に移り、家は異邦人のものとなった。われわれはみなしごととなって父はなく、母はやもめにひとしい。…われわれの先祖は罪を犯して、すでに世になく、われわれはその不義の責めを負っている。奴隷であった者がわれわれを治めるが、われわれをその手から救い出す者がない。…このために、われわれの心は衰え、これらの事のために、われわれの目はくらくなった」(同五ノ一七)。

「しかし主よ、あなたはとこしえに続べ治められる。あなたの、み位は世々絶えることがない。なぜ、あなたはわれわれをながく忘れ、われわれを久しく捨ておかれるのですか。主よ、あなたに帰らせてください、われわれは帰ります。われわれの日を新たにして、いにしえの日のようにしてください」(同五ノ一九―二二)。

第三十八章 暗黒を貫く光

ユダ王国の終局を画した破壊と死の暗黒の時代に、もし神の使者たちの預言的言葉の励ましがなかったならば、どんなに勇気のある人をも失望させたことであろう。主は、エルサレムにおけるエレミヤ、バビロンの宮廷におけるダニエル、ケバル川のほとりのエゼキエルなどによって、いつくしみ深くも神の永遠の計画を明らかにし、神は、モーセの書に記された約束を、神の民に喜んで成就してくださるという確証をお与えになった。神は、神に忠実な者のためになすと言われたことは、必ず実行なさるのである。それは、「神の変ることのない生ける御言」である（ペテロ第一・一ノ二三）。

神の民が荒野を放浪中、神の律法の言葉を覚えていえることができるように、主は十分な備えをしてくださった。彼らがカナンに定住してからは、神の戒めが各家庭において毎日繰り返されることになっていた。神の戒めは、柱や門に明らかに書かれ、覚えの書き板の上に記されなければならなかった。また老いも若きも、それを音楽に合わせて歌うのであった。祭司たちは、これらの聖なる戒めを公の集会において教え、国のつかさたちは、これ

らを毎日研究しなければならなかった。主は律法の書についてヨシユアにお命じになった。「この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜もそれを思い、そのうちにしるされていることを、ことごとく守って行わなければならない。そうするならば、あなたの道は栄え、あなたは勝利を得るであろう」(ヨシユア記一ノ八)。

ヨシユアは、モーセの書いたものを全イスラエルに教えた。「モーセが命じたすべての言葉のうち、ヨシユアがイスラエルの全会衆および女と子どもたち、ならびにイスラエルのうちに住む寄留の他国人の前で、読まなかつたものは一つもなかった」(同八ノ三五)。これは七年目ごとに、仮庵の祭りの時に、律法の書の言葉を公の前で読むことという主の明白な命令に従ったものであった。イスラエルの霊的指導者には次のような命令が与えられた。「すなわち男、女、子供およびあなたの町のうちに寄留している他国人など民を集め、彼らにこれを聞かせ、かつ学ばせなければならない。そうすれば彼らはあなたがたの神、主を恐れてこの律法の言葉を、ことごとく守り行うであろう。また彼らの子件たちでこれを知らない者も聞いて、あなたがたの神、主を恐れることを学ぶであろう。あなたがたがヨルダンを渡って行って取る地にながらえる日のあいだ常にそうしなければならない」

(申命記三一ノ一二、一三)。

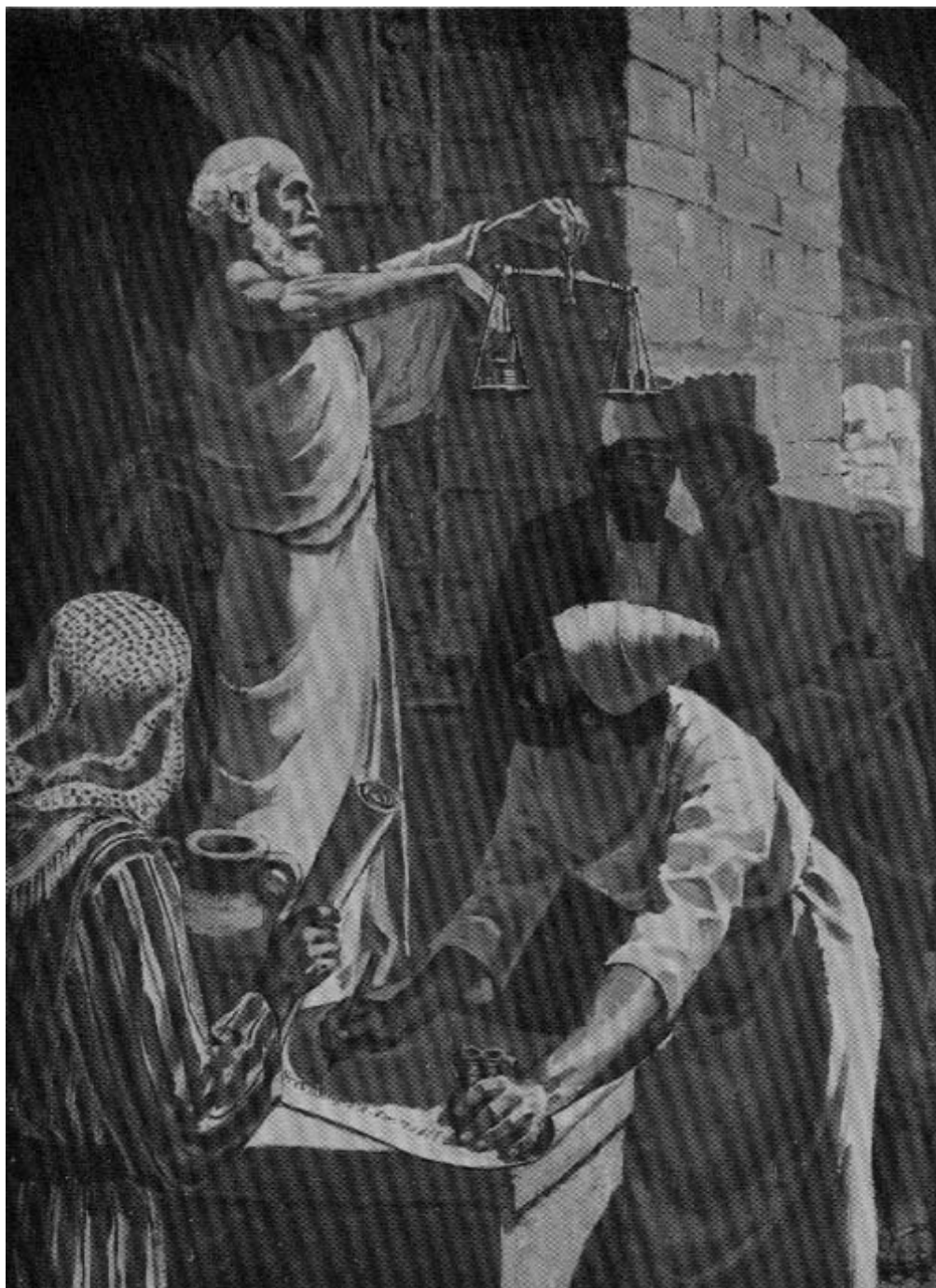
その後の幾世紀にわたってこの勧告が守られたならば、イスラエルの歴史はなんと変わったものになったことであろう。人々の心の中に神の聖なる言葉に対する尊敬があつてこそ、はじめて彼らは神のみこころを達成することを望むことができるのであった。ダビデの治世とソロモンの治世の初期にイスラエルに力を与えたのは、神の律法が尊ばれていたからであった。またエリヤやヨシヤの時代に改革が行われたのも、生ける言葉に対する信仰によってであった。エレミヤが改革を叫んで訴えたのは、イスラエルの最も尊い遺産であるこれらの同じ真理

のみ言葉であつた。彼はどこへ行つて働いても、人々に「この契約の言葉を聞」けと熱心に訴えた。この言葉こそ、救いの真理の知識をすべての国々に伝えるという神のみことろについて、十分な理解を与えるのである（エレミヤ書一―一二）。

ユダの背信の末期において、預言者たちの勧告は、いかにも効果がないように思われた。そしてカルデヤの軍勢が最終的に第三回目のエルサレム包囲を行つたときに、すべての者は希望を失つてしまった。エレミヤは全滅を預言した。そしてついに彼が投獄されたのは、彼が降伏を叫んでやまなかつたからである。しかし神は、なお都にいた忠実な残りの者を、どうすることもできない絶望の中に放置されたのではなかつた。エレミヤが彼の言葉を軽べつした人々によつて厳しく監視されていた時にもなお、天の神は喜んでゆるし救おうとしておられることについての新しい啓示が彼に与えられた。それは、当時から今日に至るまでの神の教会に対して、つきない慰めの泉となつたのである。

エレミヤは神の約束を固く握つて、たとえを行動に移すという方法を用いて、神の民に対する神の計画はついに成就されるという強い信仰を、破滅にひんした都の住民に示した。彼は証人たちの前で、必要なあらゆる法律的手順を忠実に守つて、アナトテの村の近くに位する先祖の畑を、銀十七シケルで購入したのである。

すでにバビロンの支配下にあつた地域の土地を購入することは、あらゆる人間的見地から見て愚かな事のように思われたのである。預言者自身が、エルサレムの破壊とユダの荒廃と国家の全滅を預言していたのである。彼は遠くバビロンに長年の間捕囚になることを預言していたのである。彼は年もとっていたので、土地の購入から個人的に利益を得ることは望むべくもなかつた。しかし彼は、聖書に記された預言の研究によつて、神は捕囚の



ユダ王国再興に関する神の約束を信じて、預言者エレミヤは彼の先祖の土地を十シケルで買った。

民に、約束の国の昔の所有を回復させようとしておられることを固く信じた。エレミヤは、捕囚の民が苦難の年月の終わりに帰還して、父祖の地を再び占領することを信仰の眼で眺めた。彼はアナトテの土地を購入することによって、彼自身の心に大きな慰めを与えた希望を、なんとかして他の人々にも抱かせたいと願ったのであった。

畑を買い取る証書に署名し、証人たちの署名もしてもらって、エレミヤは彼の書記のバルクに命じて言った。

「これらの証書すなわち、この買収証書の封印したものと、封印のない写しとを取り、これらを土の器に入れて、長く保存せよ。万軍の主、イスラエルの神がこう言われるからである、『この地で人々はまた家と畑とぶどう畑を買うようになる』と」(エレミヤ書三二ノ一四、一五)。

この異例な取り引きが行われたとき、ユダの前途は実に暗たんとしていたので、買収の手続きと書類の保存の取りきめが完了した直後、エレミヤの信仰は、別にゆらいだわけではないが、激しく試みられたのである。彼はユダを勇気づけようとして、出すぎた行動をしたのであろうか。彼は神の言葉の約束に確信をいだかせようとして、偽りの希望の根拠を与えたのだろうか。神との契約関係に入った人々は、彼らのために設けられた取りきめを、ずっと以前に拒絶してしまっていた。選民に対する約束は、果たして完全に成就することができ得るであろうか。

エレミヤは罪を悔い改めることを拒否した人々の苦難について心悩み、悲しみに打ちひしがれて、人類に対する神のみこころがさらに明らかにされることを、神に願い求めた。

彼は神に祈った。「ああ主なる神よ、あなたは太いなる力と、伸べた腕をもって天と地をお造りになったのです。あなたのできないことは、ひとつもありません。あなたはいつくしみを千万人に施し、また父の罪をそのの

ちの子孫に報いられるのです。あなたはたいなる全能の神でいらせられ、その名は万軍の主と申されます。あなたの計りごとは大きく、また、事を行うのに力があり、あなたの目は人々の歩むすべての道を見て、おのの道にしたがい、その行いの実によってこれに報いられます。あなたは、しるしと、不思議なわざとをエジプトの地に行い、また今日に至るまでイスラエルと全人類のうちに言い、そして今日のように名をあげられました。あなたは、しるしと、不思議なわざと、強い手と、伸べた腕と、たいなる恐るべき事をもって、あなたの民イスラエルをエジプトの地から導き出し、この地を彼らに賜りました。これはあなたが彼らの先祖たちに与えようと誓われた乳と蜜の流れる地です。こうして彼らは、はいってこれを獲たのですが、あなたの声に聞き従わず、あなたの律法を行わず、すべてあなたがせよと命じられたことをしなかったので、あなたはこの災を彼らの上にお下しになりました」(同三二ノ一七―二三)。

ネブカデネザルの軍勢は、まさにシオンを強襲して占領しようとしていた。幾千という人々が、必死になって都を防御して倒れていた。またそれ以上に幾千という多くの人々が、飢えと病氣のために死んでいた。エルサレムの運命は、すでに決定されていた。敵軍の包囲塔はすでに城壁を見下していた。エレミヤは彼の神への祈りを続けて言った。「見よ、墨が築きあげられたのは、この町を取るためです。つるぎと、ききんと、疫病のために、町はこれを攻めているカルデヤびとの手に渡されます。あなたの言われたようになりますのは、ごらんのとおりであります。主なる神よ、あなたはわたしに言われました、『銀をもって畑を買い、証人を立てよ』と。そうであるのに、町はカルデヤびとの手に渡されています」(同三二ノ二四、二五)。

エレミヤの祈りに、恵み深い答えが与えられた。真理の使命者の信仰が火で試みられるという悩みの時にあっ

て、「主の言葉がエシメヤに臨んだ、『見よ、わたしは主である、すべて命ある者の神である。わたしにできない事があるのか』（エシメヤ書三二ノ二六、二七）。都はやがてカルデヤびとの手に落ちるのであった。その門と宮殿とは、火をつけられて焼かれる。しかし破壊は切迫し、エルサレムの住民は捕虜となって連れていかれるのではあったが、イスラエルに対する主の永遠の計画は、なお成就されるのであった。主のしもべの祈りに対する答えとして、主は引き続いて彼の懲罰が下る人々について宣言された。

「見よ、わたしは、わたしの怒りと憤りと大いなる怒りをもって、彼らを追いやったもろもろの国から彼らを集め、この所へ導きかえつて、安らかに住まわせる。そして彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。わたしは彼らに一つの心と一つの道を与えて常にわたしを恐れさせる。これは彼らが彼ら自身とその後の子孫の幸を得るためである。わたしは彼らと永遠の契約を立てて、彼らを見捨てずに恵みを施すことを誓い、またわたしを恐れる恐れを彼らの心に置いて、わたしを離れることのないようにしよう。わたしは彼らに恵みを施すことを喜びとし、心をつくし、精神をつくし、真実をもって彼らをこの地に植える。

主はこう仰せられる、わたしがこのもろもろの大きな災をこの民に下したように、わたしが彼らに約束するもろもろの幸を彼らの上に下す。人々はこの地に畑を買つようになる。あなたがたが、『それは荒れて人も獣もいなくなり、カルデヤびとの手に渡されてしまう』といっている地である。人々はベニヤミンの地と、エルサレムの周囲と、ユダの町々と、山地の町々と、平地の町々と、ネゲブの町々で、銀をもって畑を買い、証書をつくつて、これに記名し封印し、また証人を立てる。それは、わたしが彼らを再び栄えさせるからであると主は言われる」（同三二ノ三七―四四）。

こうした救いと回復の保証の確証として、「エレミヤがなお監視の庭に閉じ込められている時、主の言葉はふたたび彼に臨んだ、

『地を造られた主、それを形造って堅く立たせられた主、その名を主と名のつておられる者がこう仰せられる、わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す。イスラエルの神、主は聖と、つるぎとを防ぐために破壊されたこの町の家と、ユダの王の家についてこう言われる。…見よ、わたしは健康と、いやしとを、ここにもたらして人々をいやし、豊かな繁栄と安全とを彼らに示す。わたしはユダとイスラエルを再び栄えさせ、彼らを建てて、もとのようにする。わたしは彼らがわたしに向かつて犯した罪のすべてのとがを清め、…すべてのとがをゆるす。この町は地のもろもろの民の前に、わたしのために喜びの名となり、誉となり、栄えとなる。彼らはわたしがわたしの民に施すもろもろの恵みのことを聞く。そして、わたしがこの町に施すもろもろの恵みと、もろもろの繁栄のために恐れて身をふるわす。

主はこう言われる、あなたがたが、「それは荒れて、人もあらず獣もない」というこの所、すなわち、荒れて、人もあらず住む者もなく、獣もないユダの町とエルサレムのちまたに、再び喜びの声、楽しみの声、花婿の声、花嫁の声、および「万軍の主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみは、いつまでも絶えることがない」といって、感謝の供え物を主の宮に携えてくる者の声が聞える。それは、わたしがこの地を再び栄えさせて初めのようにするからであると主は言われる。

万軍の主はこう言われる、荒れて、人もあらず獣もないこの所と、そのすべての町々に再びその群れを伏さ

せる牧者のすまいがあるようになる。山地の町々と、平地の町々と、ネゲブの町々と、ベニヤミンの地、エルサレムの周囲と、ユダの町々で、群れは再びそれを数える者の手の下を通りすぎると主は言われる。

主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家に約束したことをなし遂げる日が来る』(エレミヤ書三三ノ一―四)。

こうして神の教会は、その悪の勢力との長い争闘における最も暗たんとした一時代において、慰めが与えられたのである。サタンは、イスラエルを滅亡させようとして、ほとんど成功を収めたかのように思われた。しかし主は、事態の動向を支配し、その後の年月において、神の民は過去を償う機会が与えられるのであった。教会に對する神の言葉は次のようなものであった。

「わがしもべヤコブよ、恐れることはない、イスラエルよ、驚くことはない。見よ、わたしがあなたを救つて、遠くからかえし、あなたの子孫を救つて、その捕え移された地からかえすからだ。ヤコブは帰ってきて、穏やかに安らかにあり、彼を恐れさせる者はない。主は言われる、わたしはあなたと共にいて、あなたを救つ。主は言われる、わたしはあなたの健康を回復させ、あなたの傷をいやす」(同三〇ノ一〇、一一、一七)。

喜ばしい回復の日に、分裂したイスラエルは、一つの民に結合される。主は、「イスラエルの全部族」の支配者として認められるのであった。主は言われた。「彼らはわたしの民となる」。「ヤコブのために喜んで声高く歌い、万国のかしらのために叫び声をあげよ。告げ示し、ほめたたえて言え、『主はその民イスラエルの残りの者を救われた』と。見よ、わたしは彼らを北の国から連れ帰り、彼らを地の果から集める。彼らのうちには、盲人やあしなえ……も共にいる。……彼らは泣き悲しんで帰ってくる。わたしは慰めながら彼らを導き帰る。彼らが

つまりかないように、まっすぐな道により、水の流れのそばを通らせる。それは、わたしがイスラエルの父であり、エフライムはわたしの長子だからである」(同三二ノ一、七―九)。

かつては、地上の他のあらゆる国民にまさって天の神の祝福を受けた者として認められていた民が、諸国の前で捕囚の屈辱を受けることによって、将来の幸福のために彼らがぜひ必要としていた服従という教訓を学ぶことになるのであった。彼らがこの教訓を学ぶのでなければ、神が彼らのためにしようと望まれたすべての事を行うことがあできにならないのであった。神は彼らの霊的幸福のための懲らしめに対して「わたしは正しい道に従ってあなたを懲らしめる。決して罰しないではおかない」と言われた(同三〇ノ一二)。しかし彼の慈悲深い愛の対象であつた人々は、永遠に捨て去られたのではなかった。神は、地のすべての国々の前で、神の計画は一見敗北と思われるところから勝利をもたらすことであり、滅ぼすのではなくて、救うことであることを示そうとされたのである。預言者エレミヤに次のような言葉が与えられた。

「イスラエルを散らした者がこれを集められる。牧者がその群れを守るようにこれを守られる。すなわち主はヤコブをあがない、彼らよりも強い者の手から彼を救いだされた。彼らは来てシオンの山で声高く歌い、主から賜わった良い物のために、穀物と酒と油および若き羊と牛のために、喜びに輝く。その魂は潤う園のようになり彼らは重ねて憂えることがない。……わたしは彼らの悲しみを喜びにかえ、彼らを慰め、憂いの代りに喜びを与える。わたしは多くのささげ物で、祭司の心を飽かせ、わたしの良き物で、わたしの民を満ち足らせると主は言われるし(同三二ノ一〇―一四)。

「万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、『わたしが彼らを再び栄えさせる時、人々はまたユダの地とそ

の町々でこの言葉を言う、「正義のすみかよ、聖なる山よ、どうか主がおまえを祝福してくださるように」。ユダとそのすべての町の人、および農夫と群れを飼って歩き回る者は共にそこに住む。わたしが疲れた魂を飽き足らせ、すべて悩んでいる魂を慰めるからである』（エレミヤ書三二ノ二三―二五）。

「主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家とに新しい契約を立てる日が来る。この契約はわたしが彼らの先祖をその手をとってエジプトの地から導き出した日に立てたようなものではない。わたしは彼らの夫であつたのだが、彼らはそのわたしの契約を破つたと主は言われる。しかし、それらの日の後にわたしがイスラエルの家に立てる契約はこれである。すなわちわたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にする。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となると主は言われる。人はもはや、おのおのその隣とその兄弟に教えて、『あなたは主を知りなさい』とは言わない。それは、彼らが小より大に至るまで皆、わたしを知るようになるからであると主は言われる。わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」（同三一ノ三一―三四）。

第三十九章 バビロン王宮の四青年

本章はダニエル書一章に基づく

七十年の捕囚期間の初めに、バビロンに捕らえられていったイスラエルの人々の中に、鋼鉄のよつに堅く原則に立つキリスト者の愛国者たちがいた。彼らは利己心によつて腐敗されず、すべてのものを失つても、神に栄光を帰そうとしていた。この人々は、彼らが連れられていった国において、主を知ることによつてもたらされる祝福を異教の国々に与えて、神のみこころを行つのであつた。彼らは神の代表者となるのであつた。彼らは、どんなことがあつても、偶像礼拝者たちと妥協してはならないのであつた。彼らはその信仰と、生ける神の礼拝者と呼ばれることを、大きな名誉として身に帯びなければならなかつた。そして彼らはこれを実行したのであつた。彼らは順境においても、逆境においても、神をあがめたのである。そして神は、彼らに榮譽をお与えになつたのである。

勝利者たちは、主の礼拝者であるこれらの人々がバビロンの捕囚であること、また神の家の器がバビロンの神の神殿にあるということを、彼ちの宗教と習慣がヘブル人の宗教と習慣よりも優れたものであるということの

証拠であると言ったのであった。しかし神は、イスラエルが神から離れたために招いた屈辱そのものによって、神の至上権と神の要求の神聖なこと、服従には確かな結果が伴うということについての証拠をバビロンにお示しになった。そして神は、神に忠実である人々によってのみなされ得る方法でこれを証明なさったのである。

神に対する忠誠を保っていた人々の中に、ダニエルと彼の三人の友人があった。これは、知恵と力の神に結合するときに、人間はどのようになり得るかということの著しい実例である。王家に属するこれらの青年たちは、比較的質素なユダヤの家庭から、最も華麗な都市と世界最大の王の宮廷に連れていかれたのである。ネブカデネザル王は「宦官の長アシパナズに、イスラエルの人々の中から、王の血統の者と、貴族たる者数人とを、連れて来るように命じた。すなわち身に傷がなく、容姿が美しく、すべての知恵にさとく、知識があつて、思慮深く、王の宮に仕えるに足る若者を連れてこさせ……ようとした。……」

彼らのうちに、ユダの部族のダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤがあつた（ダニエル書一ノ三―六）。ネブカデネザルは、これらの青年が著しい能力の可能性を持っているのを認めて、彼らを訓練して、彼の王国の重要な地位を占める者にしようと考えた。王は、彼らがその生涯の働きに対する十分な資格を得るために、彼らがカルデヤの言語を学んで、国内の王子たちに与えられる特別な教育的特権を、三年の間与えられるように取り決めた。

ダニエルと彼の仲間たちの名前は、カルデヤの神々を代表する名に変えられた。ヘブルの親たちが、その子供に与える名前には、重大な意味が伴っていた。しばしばこれらの名前は、親が子供の中に啓発されることを願った品性の特質を表したものであった。捕虜の青年たちの監督を任じられた宦官は、「ダニエルをベルテシヤザル

と名づけ、ハナニヤをシャデラクと名づけ、ミシャエルをメシャクと名づけ、アザリヤをアベデネゴと名づけた」(同一ノ七)。

王はヘブルの青年たちが彼らの信仰を捨てて偶像礼拝を受け入れるように強制はしなかったが、徐々にそうなることを希望していた。王は彼らに、偶像礼拝にとって重要な名を与え、日ごとに偶像礼拝の習慣と密接な交わりに入らせ、異教の礼拝の魅惑的儀式の影響下に彼らをおいて、彼らに自国の宗教を放棄させて、バビロン人の礼拝に結合させようとしたのである。

彼らはその生涯のまず出発点において、彼らの品性をためす決定的試練に出会った。彼らは王の食卓から与えられる食物を食べ、酒を飲むように定められた。王は、こうして、彼らに対する彼の愛顧と、彼らの幸福に対する彼の配慮とを示そうとしたのである。しかし王の食卓から与えられた食物は、その一部が偶像にささげられたものであるから、偶像礼拝に奉獻されたものであった。そしてその食物にあずかる者は、バビロンの神々に敬意を表するとみなされるのであった。ダニエルと彼の仲間たちは、主に忠誠を尽くそうとすれば、こうした敬意を表することはできなかった。単に食物を食べ、または酒を飲むふりをするのでさえも、彼らの信仰を拒否することになるのであった。このようにすることは、異教主義に参加して、神の律法の原則を汚すことになるのであった。

また彼らは、体的、知的、靈的発達を阻害する快樂と浪費にふける危険を冒そうとしなかった。彼らは、ナダブとアビウの物語、すなわちモーセの五書に保存されていた彼らの放縱とその結果の記録をよく知っていた。そして彼らは、自分たちの体的、知的能力が、酒を用いることによって悪影響を受けることを知っていた。

ダニエルとその仲間たちは、厳格な節制の習慣を形成するように、親たちの訓練を受けたのである。彼らは、自分たちの能力に対して神が彼らに責任を問われること、また彼らは、決して自分たちの能力の発達を妨げたり、弱めたりしてはならないことを教えられていた。この教育は、ダニエルとその仲間たちにとって、バビロンの宮廷の退廃的影響のただ中であって、彼らを保護するでたとった。あの宮廷の腐敗と華やかさの中で彼らを取り巻く誘惑は、実に強力であつたが、彼らは汚染されなかつた。どんな権力、またどんな影響力であつても、彼らが幼少のころ、神の言葉とみわざから学んだ原則から、彼らを動揺させることはできなかつた。

もしダニエルが望みさえすれば、厳格な節制の習慣から離れる、もっともらしい理由を、周囲の事情に見つけることができたであろう。彼は王の恩顧を受けていて、彼の権下にあるのであるから、王の食べる食物を食べ、彼の酒を飲むよりほかに彼の進む道はないと論じることでもできた。なぜならば、もし彼が神の教えに固執するならば、王を怒らせて、彼の地位と生命を失うことになるかも知れなかつたからである。もし彼が主の戒めをなざりにするならば、王の恩顧を受け続け、自己の知的に有利な立場と華やかな世俗的栄進の道を確保するのであつた。

しかしダニエルはちゅうちよしなかつた。神の是認は、この地上の最も強力な王の恩顧を受けることよりも彼には尊く、生命そのものよりも尊いことであつた。彼は、結果がどうなろうと、高潔さを保って固く立つ決心をした。彼は、「王の食物と、王の飲む酒とをもつて、自分を汚すまいと、心に思い定めた」(ダニエル書一ノ八)。そして彼のこの決意を三人の仲間たちは支持したのである。

ヘブルの青年たちは、この決心をしたときに、思い上がった気持ちからではなくて、神に固く信頼して行動し

たのである。彼らは好んで奇異なことをしようとしたのではなく、神のみ栄えを汚すよりは、むしろそうしたかったのである。もし彼らがこの場合、環境の圧力に屈して悪と妥協したならば、この原則の離反は、彼らの正義感と悪を憎む心とを弱めたことであろう。悪の最初の第一歩は、さらに二歩、三歩と進んで、ついに彼らは天との関係が断絶して、誘惑にさらわれてしまうのである。

「神はダニエルをして、盲官の長の前に、恵みとあわれみとを得させられたので、彼が自分を汚すまいとする願いに、宦官は敬意を表した(同一ノ九)。しかし彼は許可を与えることをためらってダニエルに説明した。「わが主なる王は、あなたがたの食べ物と、飲み物とを定められたので、わたしはあなたがたの健康の状態で、同年輩の若者たちよりも悪いと、王が見られることを恐れるのです。そうすればあなたがたのために、わたしのこつべが、王の前に危くなるでしょう」(同一ノ一〇)。

そこでダニエルは、ヘブルの青年たちを特別に世話することをゆだねられた家令に訴えて、王の食物を食べることと王の酒を飲むことを免除されるように願い出た。彼はこの事が十日間ためされて、その間、他の若者たちが王の美食を食べているときに、ヘブルの青年たちには、単純な食物が与えられるように頼んだのである。

家令は、この要求に応じることによって、王の不興を招くのではないかと恐れたが、それでも同意してくれた。そしてダニエルは、この件がすでに勝利に終わったことを知っていた。十日間の試験が終わったときに、その結果は、宦官が恐れたことは全く反対であった。「彼らの顔色は王の食物を食べたすべての若者よりも美しく、また肉も肥え太っていた」(同一ノ一五)。ヘブルの青年たちは、その容貌が彼らの仲間たちよりもはるかに優れていることを示した。そのためにダニエルと彼の同僚たちは、訓練の全期間を通じて、彼らの単純な食物を継続

して食べることを許された。

ヘブルの青年たちは三年間、「カルデヤびとの文学と言語とを学」ぶために研究した。彼らは神に対する忠誠を保ち、絶えず神の力に信頼した。彼らはその自製の習慣に加えて、一意専心、勤勉、着実などを合わせ持っていた。彼らが王の宮廷にはいり、神を知らずまた恐れもしない人々との交わりにはいったのは、誇りのためでも野心のためでもなかった。彼らは異国の捕虜であって、無限の知恵に満ちた神によってそこに置かれたのであった。彼らは家庭の感化と聖なる交わりから遠く引き離されていたので、なんとかして立派にふるまって、踏みにじられた自国の栄誉と、彼らが仕える神の栄光をあらわそうとしたのである。

主は、ヘブルの青年たちの堅実さと自制、そして彼らの動機の純粹さとを嘉された。そして神の祝福が彼らに伴った。「神は知識を与え、すべての文学と知恵にさといる者とされた。ダニエルはまたすべての幻と夢とを理解した」。「わたしを尊ぶ者を、わたしは尊ぶという約束が成就した(サムエル記上二ノ三〇)。ダニエルが確固とした信頼をもって神に寄り頼んだ時に、預言的能力の霊が彼に臨んだ。彼は人間から宮廷生活の務めについて教えを受けていたときに、将来の神秘を読み、世の終わりに至るまでのこの世界の歴史の出来事を記録することを神から学んでいたのである。

訓練中の青年たちが試験を受けるときがきたときに、ヘブルの青年たちは、他の候補者たちと共に王国の国務につくための試験を受けた。しかし「彼らすべての中にはダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤにならぶ者がなかった」。彼らの鋭敏な理解、彼らの広い知識、彼らの洗練された正確な言語は、彼らの知能の能力も活気も損なわれていないことを証明した。「王が彼らにさまざまな事を尋ねてみると、彼らは知恵と理解において、

全国の博士、法術士にまさること十倍であつた」。「彼らは王の前にはべることとなつた」(ダニエル書一ノ一九、二〇)。

バビロンの宮廷には全地からの代表者が集まり、最高の才能を持った人々、天賦の才に最も恵まれた人々、世界の与え得る最も広い教養を身につけた人々が集まっていた。しかしその中であつて、ヘブルの青年たちと肩を並べ得るものはなかつた。肉体的力と美、知的活力と文学的学識において、彼らに匹敵する者はなかつた。真つすぐな姿勢、しつかりした弾力のある歩調、美しい容貌、鈍っていない感覚、汚染されていない呼吸などはみなそれぞれよい習慣の証明書であり、自然がその法則に従う者に授ける気高さの記章であつた。

ダニエルと彼の仲間たちは、バビロンの知恵を得るに当たつて、同僚の学生たちよりもはるかによい成績を収めた。しかし彼らの知識は偶然の結果ではなかつた。彼らは聖霊に導かれて、彼らの能力を忠実に用いて知識を得たのであつた。彼らは自分たちを、すべての知恵の源であられる神に結びつけた。そして神を知ることが彼らの教育の基礎としたのである。彼らは信仰をもって知恵が与えられることを祈り求め、彼らの祈りを実践したのである。彼らは、神の祝福にあずかることができる状態にその身を置いていた。彼らは彼らの能力を弱めるものを避けた。そしてあらゆる方面の学問の理解を深める機会はすべて活用した。彼らは知力を与えずにはおかない生命の法則に従つた。彼らはただ一つの目的、すなわち神の栄光をあらわすことのために、知識を得ようとしたのである。彼らは異教主義という偽宗教のただ中であつて、真の宗教の代表者として立つたためには、明晰な頭脳を持ち、キリスト者品性を完成すべきであることを自覚した。そして神ご自身が彼らの教師であつた。彼らは絶えず祈り、忠実に研究し、目に見えないおかたとの接触を保ちつつ、エノクのように神と共に歩んだのである。

どのような方面の仕事においても真の成功を収めることは、偶然または何かのはずみによるものでも、運命によるものでもない。それは神の摂理のなすところであり、信仰と思慮分別、徳と忍耐の報いである。立派な知的特質と崇高な道徳的性質とは偶然の結果ではない。神は機会をお与えになる。成功は、人間が機会をいかに活用するかにかかっている。

神がダニエルとその仲間たちに働きかけて、「その願いを起させ、かつ実現に至らせ」ておられたときに、彼らは自分の救いの達成に努めていた(ピリピ二ノ一三)。ここに協力という神の原則の成果が示されていて、これがないとは真の成功を達成することはできない。人間の努力は、神の力がなければなんの役にも立たない。そして人間が努力をしなければ、神の力も多くの者にとってなんの役にも立たないのである。神の恵みをわれわれのものにするためには、われわれのなすべき分を果たさなければならぬ。神の恵みはわれわれのうちに働いて、願いを起させ、実現に至らせるのであるが、われわれの努力の代わりには与えられることは決してないのである。

主はダニエルとその仲間たちに協力なさったように、主のみこころを行おうと努力するすべての者と協力なさるのである。そして彼は、彼らに聖霊を与えて、すべての真の動機とすべての気高い決意を強化なさるのである。服従の道を歩む者は、多くの困難に出会うのである。強く陰險な勢力が、彼らを世に結びつけることである。しかし主は、彼の選民たちを敗北させようとするあらゆる努力を無に帰すことができる。彼らは主の力に頼ってすべての誘惑に打ち勝ち、すべての困難を征服することができるのである。

神はダニエルとその仲間たちをバビロンの偉人たちと交わらせられた。それは彼らが異教国のただ中であって、神の性質をあらわすためであった。彼らは、どのようにして、このように大きな信頼と栄誉ある地位に適したも

のとなつたのであろうか。彼らの全生涯を貫いていたものは、小事に対する忠実であつた。彼らは、大いなる責任におけると同様に、どんなに小さい義務においても神をあがめたのである。

神がバビロンにおいて、神のためにあかしを立てるようにダニエルを召されたのと同様に、今日世界において神の証人となるように、われわれをお召しになる。神はわれわれが人生の最大の事柄におけると同様に、最小の事柄においても神の国の原則を人々に示すことを望まれる。日ごとに神に対する忠実さをあらわす機会を見失つていながら、何か大きな仕事を持ち込まれるのを待っている人々が多くいる。彼らは人生のささいな義務を一意専心果たすことを怠っている。彼らのいわゆる大きな才能を働かせ得る何かの大きな任務が与えられるのを待ち彼らの野心的な願望を満足させようとしている間に、日々は過ぎ去っていく。

真のキリスト者の生活において、重要でないというものはない。全能の神の目には、すべての義務は重要なのである。主はあらゆる奉仕の可能性を正確に量られるのである。用いられた能力と全く同様に、用いられなかった能力もまたその責任が問われる。われわれは、なすべきであつたが、神の栄光を現すためにわれわれの能力を用いなかったために、達成することができなかったことについてもさばかれるのである。

高貴な品性は、偶然の結果ではない。それは神の摂理の特別な恵み、または賜物によるものでもない。それは自己訓練の結果であり、低級な性質を高級な性質に従わせ、神と人間への奉仕のために自己を降伏させる結果である。

ヘブルの青年たちが節制の原則に従つたことによつて、神は今日の青年たちに語りかけておられる。ダニエルのように、正義のために敢然と行動する人々が必要である。純潔な心、強い手、何ものをも恐れぬ勇氣

が必要である。美德と悪徳との間の戦いには、不断の警戒を要する。サタンは、食欲をほしいままにする点において、多くの魅惑的な誘惑をもって、すべての魂に近づくのである。

肉体は、心と魂とが、品性建設のために発達する最も重要な媒体である。それゆえに魂の敵は肉体の力を弱め、低下させるために、彼の誘惑を向けてくるのである。彼がここにおいて成功することは、しばしば、人間全体が悪に降伏することを意味するのである。肉体的性質の傾向は、高等な能力の支配下におかれなかり、必ず破壊と死をもたらすのである。身体は人間の高等な能力に従わせなければならない。情欲は意志に支配されるべきであつて、意志自身は神の支配の下になければならない。神の恵みによって清められた意志の支配力が、生活を統治すべきである。知能の力、肉体のスタミナ、寿命などは、不変の法則に依存している。これらの法則に従うことによって人間は、自分自身の勝利者、自分自身の性癖の勝利者、「もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対」して勝利者となることができる(エペソ六ノ一二)。

福音を象徴したあの古代の儀式において、傷のあるささげ物を神の祭壇に持つてくることはできなかったのである。キリストを代表する犠牲は、傷のないものでなければならなかった。神の言葉は、これを「清くて傷のない」「生きた供え物」であるべき神の子供たちの例証として指し示している(ローマ二ノ一、エペソ五ノ二七)。ヘブルの勇者たちは、われわれと同じ情の人々であつた。それにもかかわらず、バビロンの宮廷の魅惑的影響下でありながら、無限の力に頼つたために、堅く立つことができた。異教の国家は、彼らが、神のいつくしみと恵み深さ、そしてキリストの愛を実証したのを見たのである。そして彼らの経験は、原則が誘惑に、純潔が墮落に、献身と忠誠が無神主義と偶像礼拝とに勝利したことの実例となつた。

ダニエルに宿った精神を、今日の青年たちも持つことができる。彼らは同じ能力の源から力を得て、同様に不利な環境においてさえ、同様の自制の力を持ち、その生活に同じ美德を現すことができる。放縱な生活を行う誘惑に取り囲まれ、特にあらゆる形の肉の満足が容易であり、また魅力的である大都会においても、彼らは、神の恵みによって、神をあがめるという目的を堅く保ち続けることができる。彼らは強い決意と不断の警戒によって、彼らの魂を襲うあらゆる誘惑に勝つことができる。しかし正義が正義であるがゆえに、正義を行う者だけが、勝利を得るのである。

これらの高貴なヘブル人の一生の働きは、なんとこの大事業だったことであろう。彼らが幼少のころの家庭に別れを告げたときに、彼らにはどんな大きな運命が待っているかを夢想だにすることはできなかった。彼らは忠実に、一意専心、神の導きに従ったので、神は彼らを用いて、みこころを達成することがおできになったのである。

神は、この人々が現したのと同じ大真理を、今日の青年たちや子供たちによって現そうと望んでおられる。ダニエルと彼の仲間たちの生涯は、神に従って神のみこころを、真心から達成しようとする者のために、神は何をなさるかという、よい実例である。

第四十章 ネブカデネザル王の夢

本章はダニエル書二章に基づく

ダニエルとその仲間たちがバビロンの王に仕え始めてしばらく後に、イスラエルの神の力と真実性とを偶像教国にあらわす事件が起こった。ネブカデネザルは驚くべき夢を見て「そのために心に思い悩んで眠ることができなかった」(ダニエル書二ノ一)。王の心は非常に強い印象を受けたにもかかわらず、目覚めた時に、その内容の細かい点を思い出すことができなかった。

ネブカデネザルは思い悩んで、彼の賢者たち、すなわち「博士、法術士、魔術士」たちを召しよせて、彼らの助けを求めた。「わたしは夢を見たが、その夢を知ろうと心に思い悩んでいる」と彼は言った。彼はこのように彼の悩みを訴えて、心の安らぎを与えることを彼に告げるように、彼らに求めたのである(同二ノ二、三)。これに対して賢者たちは答えた。「王よ、とこしえに生きながらえられますように。どうぞしもべらにその夢をお話してください。わたしたちはその解き明かしを申しあげましょう」(同二ノ四)。

王は、彼らが人間の秘密をあらわすことができることもったいぶって主張しているにもかかわらず、快く王に助

けを与えようとしないので、彼らの回避的答えに不満と疑念を抱いて、夢の解き明かしだけでなく、夢そのものをも示すように賢者たちに命じ、それができる者には富と栄誉とを約束し、出来ない者に死の宣告を下すと威嚇したのである。王は言った。「わたしの言うことは必ず行う。あなたがたがもしその夢と、その解き明かしを、わたしに示さないならば、あなたがたの身は切り裂かれ、あなたがたの家は滅ぼされる。しかし、その夢とその解き明かしとを示すならば、贈り物と報酬と大いなる栄誉とを、わたしから受けるだろう」(同二ノ五、六)。

それでもなお賢者たちは答えた、「王よ、しもべらにその夢をお話してください。そうすればわたしたちはその解き明かしを示しましょう」(同二ノ七)。

ここでネブカデネザルは、彼が信賴していた者たちの明白な裏切行為に完全に目覺めて、怒って言った。「あなたがたはわたしが言ったことは、必ず行うことを承知しているので、時を延ばそうとしているのを、わたしは確かに知っている。もしその夢をわたしに示さないならば、あなたがたの受ける刑罰はただ一つあるのみだ。あなたがたは一致して、偽りと、欺きの言葉をわたしの前に述べて、時の変るのを待とうとしているのだ。まずその夢をわたしに示しなさい。そうすれば、わたしはあなたがたがその解き明かしをも、示しうることを知るだろう」(同二ノ八、九)。

博士たちは、彼らが失敗したならば、どんなことになるかという恐れに満たされて、王の要求が不合理で、彼の試験はどんな人間にも求められたことのない無理なものであることを示そうと努めた。彼らは王に抗議して言った。「世の中には王のその要求に応じうる者はひとりもありません。どんな大いなる力ある王でも、このような事を、博士、法術士、カルデヤびとに尋ねた者はありませんでした。王の尋ねられる事はむずかしい事であっ

て、肉なる者と共にあられない神々を除いては、王の前にこれを示しうる者はないでしょう」(ダニエル書二ノ一〇、一一)。

「これによって王は怒り、かつ大いに憤り、バビロンの知者をすべて滅ぼせと命じた」(同二ノ一二)。

王命の指示を実行しようとしていた役人たちが求めた者のなかに、ダニエルとその同僚がいた。王の命令に従って、彼らもまた死ななければならないことを告げられたときに、ダニエルは、「思慮と知恵とをもって」、王の高官アリオクに「どうして王はそんなにきびしい命令を出されたのですか」と尋ねた。アリオクは、王が驚くべき夢を見て、思い悩んだことを彼に語り、これまで王が最大限の信頼を置いていた者たちから、なんの助けも得られなかったことを告げた。これを聞いたダニエルは、命がけで王の前に出て、夢とその解き明かしを示していただくために神に祈り求める時が与えられるように願った(同二ノ一四、一五)。

王はこの願いを聞き入れた。「それからダニエルは家に帰り、同僚のハナニヤ、ミシヤエルおよびアザリヤにこの事を告げ知らせ」た(同二ノ一七)。彼らは一緒に、光と知識の源であられる神の知恵を求めた。彼らは神が彼らをその場所に置かれたこと、そして自分たちは神の働きをなし、義務の命じるところを果たしているという自覚のもとに強い信仰を持っていた。彼らは、悩みや危険に遭遇したときには、常に神の指導と保護を仰いだ。そして神は、彼らのいと近き助けであられたのである。ここで彼らは悔い改めて、地の審判者であられる神に対する服従を新たにし、この特別な難局において彼らを救って下さるように神に嘆願した。そして彼らの訴えはむだではなかった。彼らが敬った神が、今や彼らに栄誉をお与えになったのである。主の霊が彼らの上に宿り、「夜の幻のうちに」王の夢とその解き明かしとがダニエルに示されたのである。

ダニエルがまず第一にしたことは、彼に与えられた啓示に対して神に感謝することであった。彼は叫んで言った。「神のみ名は永遠より永遠に至るまでほむべきかな、知恵と権能とは神のものである。神は時と季節とを變じ、王を廢し、王を立て、知者に知恵を与え、賢者に知識を授けられる。神は深妙、秘密の事をあらわし、暗黒にあるものを知り、光をご自身のうちに宿す。わが先祖たちの神よ、あなたはわたしに知恵と力とを賜い、今われがあなたに請い求めたところのものをわたしに示し、王の求めたことをわれわれに示されたので、わたしはあなたに感謝し、あなたをさんびします」(同二ノ二〇―二三)。

ダニエルは直ちに王が賢者たちを殺すように命じたアリオクのところに行って言った。「バビロンの知者たちを滅ぼしてはなりません。わたしを王の前に連れて行ってください。わたしはその解き明かしを王に示します」。アリオクは急いでダニエルを王の前に連れて行って、「ユダから捕え移した者の中に、その解き明かしを王にお知らせすることのできる、ひとりの人を見つけました」と言った(同二ノ二四、二五)。

世界最強の帝国の王の前に、沈着冷静に立つヘブルの捕虜を見よ。彼は口を開くとまず、自分に榮譽を帰すのではなくて、神をすべての知恵の源として高めたのである。「あなたはわたしが見た夢と、その解き明かしとをわたしに知らせることができるのか」という王の切なる問いに彼は答えた。「王が求められる秘密は、知者、法術士、博士、占い師など、これを王に示すことはできません。しかし秘密をあらわすひとりの神が天におられます。彼は後の日に起るべき事を、ネブカデネザル王に知らされたのです。

あなたの夢と、あなたが床にあつて見た脑中の幻はこれです。王よ、あなたが床におられたとき、この後どんな事があるうかと、思いまわされたが、秘密をあらわされるかたが、将来どんな事が起るかを、あなたに知らさ

れたのです。この秘密をわたしにあらわされたのは、すべての生ける者にまさって、わたしに知恵があるためではなく、ただその解き明かしを、王にお知らせすることによって、あなたが心に思われたことを、お知りになるためです。

王よ、あなたは一つの大きいなる像が、あなたの前に立っているのを見られました。その像は大きく、非常に光り輝いて、恐ろしい外観をもっていました。その像の頭は純金、胸と両腕とは銀、腹と、ももとは青銅、すねは鉄、足の一部は鉄、一部は粘土です。

あなたが見ておられたとき、一つの石が人手によらずに切り出されて、その像の鉄と粘土との足を撃ち、これを砕きました。こうして鉄と、粘土と、青銅と、銀と、金とはみな共に砕けて、夏の打ち場のみがらのようになり、風に吹き払われて、あとかたもなくなりました。ところがその像を撃った石は、大きな山となって全地に満ちました」(ダニエル書二ノ二六―三五)。

ダニエルは、「これがその夢です」と確信をもって宣言した。そしてその細かい点までを注意深く聞いていた王は、これが彼の心を悩ました夢そのものであることを知ったのである。こうして王の心は、気持ちよく解き明かしを受け入れる用意ができたのである。王の王が、バビロンの王に大いなる真理を伝えようとしておられたのである。神は、ご自分が世界の諸国を支配し、王を廃し、王を立てる力をもっておられることを示そうとされた。もしできることならば、彼の天に対する責任感を目覚めさせようとするのであった。終末に至るまでの将来の出来事が、彼の前に展開されるのであった。

ダニエルは続けて言った。「王よ、あなたは諸王の王であって、天の神はあなたに国と力と勢いと栄えとを賜

い、また人の子ら、野の獣、空の鳥はどこにいるものでも、皆これをあなたの手に与えて、ことごとく治めさせられました。あなたはあの金の頭です。

あなたの後にあなたに劣る一つの国が起ります。また第三に青銅の国が起って、全世界を治めるようになります。

第四の国は鉄のように強いでしょう。鉄はよくすべての物をこわし砕くからです。鉄がこれらをとことく打ち砕くように、その国はこわし砕くでしょう。

あなたはその足と足の指を見られましたが、その一部は陶器師の粘土、一部は鉄であつたので、それは分裂した国をさします。しかしあなたが鉄と粘土との混じつたのを見られたように、その国には鉄の強さがあるでしょう。その足の指の一部は鉄、一部は粘土であつたように、その国は一部は強く、一部はもういでしょう。あなたが鉄と粘土との混じつたのを見られたように、それらは婚姻によって、互に混ざるでしょう。しかし鉄と粘土とは相混じらないように、かれとこれと相合することはありません。

それらの王たちの世に、天の神は一つの国を立てられます。これはいつまでも滅びることがなく、その主権は他の民にわたされず、かえってこれらのもろもろの国を打ち破って滅ぼすでしょう。そしてこの国は立って永遠に至るのです。一つの石が人手によらずに山から切り出され、その石が鉄と、青銅と、粘土と、銀と、金とを打ち砕いたのを、あなたが見られたのはこの事です。大いなる神がこの後に起るべきことを、王に知らされたのです。その夢はまことであって、この解き明かしは確かです」(同二ノ三七―四五)。

王は、解き明かしの真実なことを悟って、謙遜と畏敬の念に満たされて、「ひれ伏して、…拝し」、「まこと

に、あなたがたの神は神々の神、王たちの主であって、秘密をあらわされるかただ」と言った(ダニエル書二ノ四六、四七)。

ネブカデネザルは、賢者たちを滅ぼせという命令を取り消した。ダニエルが秘密をあらわされる神とのつながりを持っていたために、彼らの生命が助けられたのである。そして、「王はダニエルに高い位を授け、多くの大いなる贈り物を与えて彼をバビロン全州の総督とし、またバビロンの知者たちを統括する者の長とした。王はまたダニエルの願いによって、シャデラクとメシャクとアベデネゴを任命して、バビロン州の事務をつかさどらせた。ただしダニエルは王の宮にとどまっていた」(同二ノ四八、四九)。

人類の歴史の記録の中では、世界の諸国民の発展や諸帝国の興亡は、人間の意志や勇氣に左右されているかのようにみえる。いろいろな事件の形成は、その大部分が人間の能力や野心やあるいは気まぐれによってきまるかのようにみえる。しかし神のみ言葉である聖書の中には幕が開かれていて、われわれはそこに、人間の利害や権力や欲望の一切の勝ち負けの上に、また背後に、あるいはそれを通して、あわれみに満ちた神の摂理が、黙々と忍耐よくご自身の目的を達成するために働いているのを見るのである。

使徒パウロは無比の美しさと愛情のこもった言葉で、アテネの哲人たちを前にして、創造および人類と諸国の分布における神の目的を語った。パウロは言った。「この世界と、その中にある万物とを造った神は」、「ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった」(使徒行伝一七ノ二四―二七)。

神は、望む者はだれでも「契約のつなぎ」にはいることができることを明らかにさせた（エゼキエル書二〇ノ三七文語訳参照）。地には、自分自身および他の人々の祝福となり、創造主に栄えを帰すような人々が住むことが、神の創造の目的であつた。望む者はすべて、この目的を自分のものとすることができる。彼らについては、「この民は、わが誉を述べさせるためにわたしが自分のために造つたものである」と言われている（イザヤ書四三ノ二一）。

神は国家および個人のあらゆる真の繁栄の基盤である原則を、その律法の中に示された。モーセはイスラエルにこの律法を宣言したのである。これは「あなたがたの知恵、また知識」である。「この言葉はあなたがたととって、おなしい言葉ではない」（申命記四ノ六、三二ノ四七）。こうしてイスラエルに保証された祝福は、広い天の下のすべての国家と個人とに、同じ条件の下において、同じように与えられることが保証された。国々の活動の舞台に上る幾百年も前に、全知の神は、各時代を眺めて世界国家の興亡を預言された。神は、ネブカデネザルに、バビロン王国は倒れて第二の王国が起こつて、それにもまた試験期があることを宣言された。しかし真の神をあがめなかったために、その栄光は衰えて、第三の王国がそれにかわるのであつたこの王国もまた消え去っていく。そして鉄のように強い第四の王国が、世界の国々を征服する。

地上のあらゆる王国の中で最も豊かなバビロンの支配者たちが、常に主を恐れていたならば、彼らは主に彼らを結合させる知恵と力が与えられて、その勢力を維持することができたことであろう。しかし彼らはただ、悩み苦しみに遭つた時だけ、神を彼らの避難所とした。彼らは自分たちの知者たちの助けが得られなかった時に、ダニエルのような人々の助けを求めてきた。彼らは、ダニエルたちが生ける神をあがめており、神が彼らに栄誉を

お与えになったことを知っていたのである。彼らはこのような人々に、摂理の神の神秘を解き明かすことを求めた。高慢なバビロンの支配者たちは、最高の知能の所有者ではあったけれども、罪によって神から遠く離反してしまったために、将来に関して、彼らに与えられた啓示と警告とを理解することができなかったのである。

神の言葉の研究者は、諸国の歴史の中に、神の預言が文字通り成就しているのを見ることができ。バビロンはその繁栄の時に、支配者たちが、神を離れて独自の力で立つと思ひ、彼らの王国の栄光を人間の業績に帰したために、ついに崩壊し去ったのである。メド・ペルシャの時代も、神の律法が足の下に踏みじられたために、天の神の怒りをこうむった。大多数の人々の心に、神を恐れる気持ちがなくなつた。罪惡と神への不敬と腐敗が地にみなぎつた。その後続いて起こつた王国は、なおさらはなほだしい墮落と腐敗に陥つた。彼らの道德的価値は、ますます低下した。

地上のすべての支配者の行使する権力は、天の神から与えられるものである。こうして与えられた権力の行使いかんに、その繁栄が否かがかかっているのである。すべての者に対して、天の警護者は、「あなたがわたしを知らなくても、わたしはあなたを強くする」と言われるのである(イザヤ書四五ノ五)。であるから、昔ネブカデネザルに語られた次の言葉は、すべての者にとつて生きるための訓戒である。「義を行つて罪を離れ、しえだけられる者をあわれんで、不義を離れなさい。そうすれば、あるいはあなたの繁栄が、長く続くかもしれません」

(ダニエル書四ノ二七)。

これらの事を理解し、「正義は国を高くし」、「その位が正義によつて堅く立」ち、また「恵みのおこないによつて堅くなる」ことを理解し、「王を廢し、王を立て」る神の力のあらわれの中にこれらの原則が働いているこ

とを認めることこそが、歴史の原理を理解することである（蔵言一四ノ三四、一六ノ一二、二〇ノ二八、ダニエル書二ノ二一）。

この事は、ただ神の言葉の中だけに、はっきりと示されている。個人の力と同様に、国家の力は好機とか、または物質的設備によって無敵と思われる強さが与えられるのでないことが示された。それは彼らの勝ち誇る偉大さにもよらない。それは彼らが神のみこころをどんなに忠実に成就するかによって量られるのである。

第四十一章 火の燃える炉からの救い

本章はダニエル書三章に基づく

終末に至るまでの出来事をネブカデネザルの前に示した巨大な像の夢は、彼が世界の歴史においてどんな役割を果たし、彼の王国が天の王国とどんな関係を維持すべきかを理解するためであった。彼は夢の解き明かしの中で、神の永遠の王国が建設されることを明らかに教えられたのである。

ダニエルは言った。「それらの王たちの世に、天の神は一つの国を立てられます。これはいつまでも滅びることがなく、その主権は他の民にわたされず、かえってこれらのもろもろの国を打ち破って滅ぼすでしょう。そしてこの国は立って永遠に至るのです。…その夢はまことであって、この解き明かしは確かです」(ダニエル書二ノ四四、四五)。

王は神の力を認めてダニエルに言った、「まことに、あなたがたの神は神々の神、王たちの主であって、秘密をあらわされるかただ」(同二ノ四七)。その後しばらくの間、ネブカデネザルは神に対する畏敬の念を抱いていた。しかし彼の心はまだ、世俗的野心と自己称揚の願望を捨て切っていなかった。その治世の繁栄に、彼の心は

おごり高ぶった。やがて彼は神を崇めることをやめ、ますます熱心さと頑なさをもって、偶像礼拝に逆もどりしてしまった。

「あなたはあの金の頭です」という言葉が、王の心に強い印象を与えた(同二ノ三八)。国内の賢者たちは、これと彼が偶像礼拝にもどったことを利用して、彼が夢の中で見たのと同じような像を造って、彼の王国の代表であると解き明かされた金の頭を、すべての者が見ることのできる場所に建てようと提案した。

彼は詔いの言葉を喜んで、その案を実行することにし、さらにそれ以上のことをすることに決めた。彼は自分が見た像を再現するどころか、それよりもさらに巨大なものにしようと望んだ。彼の像は頭から足へと価値が低下するようなものではなくて、その全体が金であって、バビロンが他のすべての国々を打ち砕いて、いつまでも継続する永遠不滅の強大な王国を象徴するものでなければならなかった。

永遠に続く帝国と王朝とを建設するという考えは、この偉大な王に強く訴えるところがあった。彼の武力の前に、地上の諸国は立ち向かうことができなかったのである。彼は果てしない野心と、利己的誇りからくる熱意をもって、賢者たちとこの計画の実現について謀った。大いなる像の夢に関連した驚くべき神の摂理を忘れ、またイスラエルの神がそのしもべダニエルによって像の意義を明らかにし、そしてこの解き明かしによって全国の知者たちが屈辱的な死に遭わずにすんだことを忘れ、また自己の権力と主権を確立しようとする願望のほかはすべてのことを忘れて、王とその助言者たちは万難を排してバビロンを最上の権力とし、全世界の忠誠を受けるに価値するものにしようとした。

神が王と国民に向かつて、地上の諸国に対するみこころをあらわすためにお用いになった象徴が、今や人間の

力に栄光を帰すために用いられた。ダニエルの解き明かしは拒否され、忘れ去られるのであった。真理は誤って解釈され、誤って適用されるのであった。人間の心に将来の重要な出来事を展開するために天の神が考案された象徴が、世界の人々に信じさせようと神が望まれた知識を広めるのを妨げるために用いられるのであった。こうして野心をもった人々の策略によって、サタンは人類に対する神のご計画を阻止しようとしたのである。人類の敵は、誤りの混じっていない真理には、人を救う大きな力を知っていた。しかしそれが、自己を高め人間の計画を押し進めるために用いられるときに、それは悪を助長する力となる。

ネブカデネザルはその豊富な財宝を用いて、幻の中で見たのと同じような巨大な金の像を造らせたが、ただ一つ、それが構成されている材料の点が異なっていた。カルデヤびとは異教の神々の壮大な像になっていたとはいえ、高さ六〇キュビト、幅六キュビトというこのように光り輝く、巨大で荘厳な像は造ったことがなかった。偶像礼拝が広く行きわたっていた国にあって、バビロンの栄光とその壮大さと権力をあらわした美麗きわまる貴重な像が、礼拝の対象としてドラの平野で捧げられても、少しも不思議ではないのである。そのようなわけで、このことについての取り決めが行われた。そしてその落成式の日には、すべての者が像の前にひれ伏して、バビロンの権力に対する絶対の忠誠を誓わなければならなかった。

定められた日がやってきた。そして「諸民、諸族、諸国語」からの一大群衆が、ドラの平野に集まった。楽器の音を聞いたときに、全群衆は王の命令に従って、「ひれ伏して……金の像を拝んだ」（ダニエル書三ノ七）。この重大な日に、悪の勢力は大いなる勝利を収めたように思われた。そして金の像の礼拝は、国教として承認された既成の偶像礼拝の儀式と永久に結びつけられる可能性が十分にあったのである。サタンはこのようにして、イ

スラエルの捕虜をバビロンに置いて、あらゆる異教の国々に祝福を与えようとする、神のみこころを挫折させようとしたのである。

しかし神は、それとは別のことをお命じになった。すべての者が、人間の権力を象徴する偶像にひれ伏したのではなかった。礼拝している群衆の中に、そのようなことをして天の神の栄えを汚すまいと固く決意した三人の者がいた。彼らの神は、王の王、主の主であった。彼らは他の何ものにもひれ伏さないものであった。

勝ち誇ったネブカデネザルに、彼の命令に敢えて背いた者たちが、国民の中にあることが知らされた。ダニエルの忠実な仲間たちに授けられた栄譽をねたんだ知者のある者が、今、王の命令に対するはなはだしい違反を、王に告げたのである。彼らは声を高くして言った。「王よ、とこしえに生きながらえられますように。…ここにあなたが任命して、バビロン州の事務をつかさどらせられているユダヤ人シヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴがあります。王よ、この人々はあなたを尊ばず、あなたの神々にも仕えず、あなたの立てられた金の像をも拝もうとしません」(同三ノ九—一二)。

王はその人々を前に連れてくるように命じた。「あなたがたがわが神々に仕えず、またわたしの立てた金の像を拝まないとは、ほんとうなのか」と王はたずねた(同三ノ一四)。王は脅迫によって、彼らを群衆に参加させようと努めた。王は火の燃える炉を指さして、もし彼らがあくまでも王の意志に逆らうならば、彼らには刑罰が待っていることを思い起こさせた。しかしヘブルびとたちは、彼らが天の神に忠誠をつくすことと、神には彼らを救う力があると信じていることをあかしした。すべての者は像にひれ伏すことを、礼拝の行為として理解するのであった。彼らはこのような尊敬を、ただ神にしかあらわすことができなかったのである。

三人のヘブルびとが王の前に立ったときに、王は彼らが王国の他の知者たちの持っていない何物かを持っているのを悟った。彼らはすべての任務を忠実に果たしていた。王は彼らにもう一度機会を与えたいと思った。もし彼らが群衆とともに、喜んで像を礼拝する意志があることを表明するならば、それで万事は円満におさまるのであった。王はつけ加えた。「しかし、拝むことをしないならば、ただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる」。そして王は、傲慢な態度で手をあげて、「いったい、どの神が、わたしの手からあなたを救うことができようか」とたずねた(ダニエル書三ノ一五)。

王の脅迫はむだであった。王はこの人々の、宇宙の王なる神に対する忠誠を曲げさせることはできなかった。彼らは先祖の歴史から、神に従わないことは不名誉と不幸と死という結果を招くことを学んでいた。また主を恐れることは知恵のはじめであり、すべての真の繁栄の基礎であることを学んでいた。彼らは炉に直面しても冷静に言った。「ネブカデネザルよ、この事について、お答えする必要があります。もしそんなことになれば、もしこれがあなたの決定であればわたしたちの仕えている神は、その火の燃える炉から、わたしたちを救い出すことができます。また王よ、あなたの手から、わたしたちを救い出されます」(同三ノ一六、一七)。彼らの救いによって神に栄光が帰せられるということを宣言したときに、彼らの信仰は強化された。そして彼らは神に対する絶対的信頼に基づいた大いなる確証をもって、「たといそうでなくても、王よ、ご承知ください。わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた金の像を拝みません」とつけ加えた(同三ノ一八)。

王は伍度に怒った。王は「怒りに満ち」、侮べつすべき捕囚の民族の代表である「シヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴにおかつて、顔色を変え」た(同三ノ一九)。王は炉を平常よりも七倍も熱くすることを命じ、直ちに

処刑する準備として、軍勢の強い人々に、真の神の礼拝者たちを縛るように命じた。

「そこでこの人々は、外套、下着、帽子、その他の衣服のまま縛られて、火の燃える炉の中に投げ込まれた。王の命令はきびしく、かつ炉は、はなはだしく熱していたので、シャデラク、メシャクおよびアベデネゴを引きつれていった人々は、その火炎に焼き殺された」(同三ノ二一、二二)。

しかし主はご自身の者たちをお忘れにならなかった。主の証人たちが炉の中に投げ入れられたときに、救い主は彼らにご自身をあらわされた。そして自ら彼らとともに火の中を歩かれた。熱と冷気を支配される主の前にあっては、炎も焼きつくす力を失った。

王は玉座から、彼に反抗した人々が全く焼きつくされるものと思って眺めていた。しかし王の勝ち誇った気持ちは、突然一変した。側に立っていた大臣たちは、王が玉座から立ち上がってじっと燃える炎を眺めたときに、彼の顔が青ざめるのを見た。王は驚いて大臣たちにたずねた。「われわれはあの三人を縛って、火の中に投げ入れたではないか。…しかし、わたしの見るのに四人の者がなわめなしに、火の中を歩いているが、なんの害をも受けていない。その第四の者の様子は神の子のようだし(同三ノ二四、二五)。

異教の王はどのようにして、神の子の姿を知ることができたであろうか。バビロンにおいて信任の地位についたヘブルの捕虜たちは、その生活と品性において王の前に真理をあらわした。彼らはその信仰の理由を聞かれたときに、ためらわずにそれを伝えた。彼らは簡単明瞭に義の原則を示し、彼らの周りの人々に彼らの礼拝する神のことを教えた。彼らは来たるべき贖い主キリストのことを語った。であるから王は、火の中の第四番目の姿に神のみ子を認めたのであった。

ここにおいてネブカデネザルは、彼自身の偉大さも威厳も忘れて玉座をおり、炉の入り口まで行って、「いと高き神のしもベシヤデラク、メシヤク、アベデネゴよ、出てきなさい」と叫んだ（ダニエル書三ノ二六）。

そこでシヤデラク、メシヤク、アベデネゴは、大群衆の前で、その身に何の害も受けずに現れた。彼らの救い主の臨在が彼らを害から守り、ただ彼らを縛っていたものが焼けただけであった。「総督、長官、知事および王の大臣たちも集まってきて、この人々を見たか、火は彼らの身にはなんの力もなく、その頭の毛は焼けず、その外套はそこなわれず、火のにおいもこれに付かなかった」（同三ノ二七）。

大いなる壮麗さをもって立てられた巨大な金の像のことは、全く忘れられてしまった。人々は生ける神の前で恐れおののいた。「シヤデラク、メシヤク、アベデネゴの神はほむべきかな。神はその使者をつかわして、自分に寄り頼むしもべらを救った。また彼らは自分の神以外の神に仕え、拝むよりも、むしろ王の命令を無視し、自分の身をも捨てようとしたのだ」と、へりくだった王は認めないではいられなかった（同三ノ二八）。

ネブカデネザルはその日にこつということが起こったので、命令を発した。「諸民、諸族、諸国語の者のうちだれでも、シヤデラク、メシヤク、アベデネゴの神をのしる者があるならば、その身は切り裂かれ、その家は滅ぼされなければならない。」王が、このような命令を出した理由は、「このように救を施すことのできる神は、ほかにはないからだ」と力説した（同三ノ二九）。

バビロンの王は、これとまたこれに類した言葉によって、ヘブルびとの神の力と權威とは、最高の崇敬に値することを、地のすべての民族の前で広く行きわたらせようと努めた。そして神は、王が神を崇め、神に対する忠誠の告白をバビロン全国に行きわたらせようとする努力を、お喜びになった。

第 41 章 火の燃える炉からの救い



三青年は火の炉から髪の毛一本も焼けないで出てきた。王は驚き、彼らを救った神に栄光を帰した。

王が公の告白をし、他のすべての神々にまさって天の神を崇めようとしたことは、正しかった。しかし国民に同様の信仰の告白と、同様の敬神深さを示すように強制したことは、ネブカデネザルの地上の王としての権威を越えたことであつた。王は金の像を拝むことを拒否するすべての者を、火で焼く命令を出す権威がないのと同様に、政治的であれ道徳的なことであれ、神を礼拝しない者を殺すと脅かす権威はないのである。神は人間に服従を強制されることはない。神はすべての人々が自由に、何に仕えるかを選ばせておられる。

主は忠実なしもべたちを救済することによって、彼が圧迫を受けている者とともにあつて、天の神の権威に反抗するすべての地上の国家を譴責されることを宣言なさつたのである。三人のヘブルびとは、彼らが礼拝する神に対する信仰を、バビロン全国に宣言した。彼らは神に信頼した。彼らは試練の時に、「あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共にある。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない。あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない」という約束を思い出した(イザヤ書四三ノ二)。そして彼らの生けるみ言葉に対する信仰は、すべての人々の前で、驚くばかりに榮譽を受けたのである。彼らの驚くべき救いの知らせは、ネブカデネザルに招かれて落成式に来ていた多くの国々の代表者によって、広く国々に伝えられた。神はその民の忠実さによって、全地においてそのみ名が崇められたのである。

ドラの平野でのヘブルの青年たちの経験から学ぶべき教訓は、実に重大である。このわれわれの時代においても、神のしもべたちの多くは何の悪い行為もしていないにもかかわらず、サタンにそそのかされてねたみと宗教的頑強さに満たされた人々の手に渡されて、屈辱と迫害を受けるのである。特に第四条の安息日を清くする者に対しては、人々の激しい怒りが燃やされる。そしてついに、世界的法令が發布されて、これらの人々を死に価す

る者として告発するのである。

神の民はこれらの悩みの時を前にして、揺らぐことのない信仰を持たなければならない。神の民は、ただ神だけが礼拝の対象であること、そしていかに重大なことであり、それが生命そのものにかかわるものであっても、彼らを偽りの礼拝に少しでも妥協させることはできないことを明らかにしなければならない。忠実な心の持ち主にとっては、罪深い有限な人間の命令は、永遠の神の言葉と比較するときに、全く無意味なものとなってしまうのである。たとえ投獄と追放の憂き目に遭い、死に処せられても真理には従うのである。

シヤデラク、メシヤク、アベデネゴの時代のように、主は地上歴史の最後の時代において、正義のために固く立つ人々のために、大いなる働きをなさるのである。ヘブルの勇者たちと火の燃える炉の中を歩かれたかたは、どこであっても、主に従う人々とともにおられるのである。彼の臨在が彼らを慰め支える。国が始まってからその時に至るまで、かつてなかったほどの悩みの時の最中に、神に選ばれた人々は揺らぐことなく立つのである。サタンは悪の全軍をもつてしても、神の聖徒たちの最も弱い者をさえ滅ぼすことはできない。強い力をもった天使が彼らを守る。そして主は、主に信頼する者を全く救うことがおできになる「神々の神」として、彼らのためにご自身をあらわされるのである。

第四十二章 真の偉大さとは何か

本章はダニエル書四章に基づく

ネブカデネザルは世界的榮譽の最高峰に立ち、靈感の書にさえ「王の王」として認められたのであったが（エゼキエル書二六ノ七）、時には彼の王国の栄光と治世の輝きが、主の恵みによるものであることを認めたのであった。彼が巨大な像の夢を見たあとなどは、そうであった。彼はこの幻によつて強い印象を受けた。そして世界的であるとは言つても、バビロン帝国はついに倒れ、他の国々が支配権を握るに至り、最後には天の神が建設される王国が、地上のすべての国々にとって代わるのである。またその国は、いつまでも滅びないということに深い感銘をおぼえた。

ネブカデネザルが諸国に関する神のみこころについて抱いたすぐれた考えは、後になって失われていった。しかしドラの平野の群衆の前で彼の高慢な心が低くされたときに、彼はふたたび、神の国は「永遠の国、その主権は世々に及ぶ」ことを認めたのであった。彼は生まれながらの偶像教徒であり、偶像教徒の教育を受け、偶像教国民の王であつたにもかかわらず、生まれつき正義感が強かった。そこで神は、反逆者を懲らしめ、神のみこ

ろを達成する器として彼をお用いになることができた。ネブカデネザルは「もろもろの国民の最も恐れている者」といわれ(同二八ノ七)、幾年にもわたる辛抱強い労苦の末、ツロを征服した。エジプトもまた彼の勝ち誇った軍隊の餌食となった。そして彼が国々を次々にバビロンの領地に加えていったときに、その時代の最大の王としての彼の名声は、ますます高まった。

このように野望と誇りに満ちて栄えている王が、唯一の偉大さへの道である、謙遜の道を離れる誘惑に会ったとしても不思議ではない。彼は征服戦争の合間に、首都の強化と美化に大いに心を用いた。そしてバビロンの都は、ついに彼の王国の最高の栄光、「黄金の都」、「全地の人の、ほめたたえた者」となるに至ったのである。建設者としての彼の情熱、また、バビロンを世界の不思議の一つにした彼の著しい成果などは、彼の心を高ぶらせて、ついに神がみこころを達成するために引き続いてお用いになることができる、賢明な王としての記録を損なう重大な危険に陥ったのである。

神は王をあわれんで、彼にもう一つの夢を与えて彼の危機と、彼を陥れるために設けられたわなについて警告を発せられた。ネブカデネザルは夜の幻の中で、地の中央に一本の大きな木が生えているのを見た。その高さは天に達し、その枝は地の果てまで広がっていた。山や丘の羊、山羊、牛などの群れがその影の下にやどり、空の鳥がその枝に巣をつくった。「その葉は美しく、その実は豊かで、すべての者がその中から食物を獲、…すべての肉なる者はこれによって養われた」(ダニエル書四ノ一二)。

王が大きな木を眺めていると、彼は「ひとりの警護者、ひとりの聖者」が木に近づいて、大声で叫ぶのを見た。

「この木を切り倒し、その枝を切りはらい、その葉をゆり落し、その実を打ち散らし、獣をその下から逃げ去

らせ、鳥をその枝から飛び去らせよ。ただしその根の切り株を地に残し、それに鉄と青銅のなわをかけて、野の若草の中におき、天からくだる露にぬれさせ、また地の草の中で、獣と共にその分にあずからせよ。またその心は変って人間の心のようにでなく、獣の心が与えられて、七つの時を過ぎさせよ。この宣言は警護者たちの命令によるもの、この決定は聖者たちの言葉によるもので、いと高き者が、人間の国を治めて、自分の意のままにこれを人に与え、また人のうちの最も卑しい者を、その上に立てられるという事を、すべての者に知らせるためである」(ダニエル書四ノ一二一―一二七)。

明らかに災いの予告と思われる夢に大いに悩まされた王は、それを「博士、法術士、カルデヤびと、占い師」に語った。しかし、夢は非常に明白であるにもかかわらず、知者たちの中にそれを解き明かしうる者はひとりもいなかった。

ただ神を愛し恐れる者だけが、天国の神秘を理解することができるといふ事実が、この偶像教国においても一度あかしされるのであった。王は困惑して、誠実と節操、また比類ない知恵の持ち主として尊ばれていた彼しもベダニエルを召し出した。

ダニエルが招きに答えて王の前に立ったとき、ネブカデネザルは言った。「博士の長ベルテシヤザルよ、わたしは知っている。聖なる神の霊があなたのうちにやどっているから、どんな秘密もあなたにはおぼかしいことはない。ここにわたしが見た夢がある。その解き明かしをわたしに告げなさい。」ネブカデネザルは夢を語ったあとで言った、「ベルテシヤザルよ、あなたはその解き明かしをわたしに告げなさい。わが国の知者たちは、いずれもその解き明かしを、わたしに示すことができなかったけれども、あなたにはそれができる。あなたのうちには

聖なる神の霊がやどっているからだ」(同四ノ九、一八)。

ダニエルにとって夢の意味は明らかであった。そしてその意義は彼を驚かせた。「ダニエルは、しばらくのあいだ驚き、思い悩んだ」。王はダニエルのためらいと悩みを見て、彼のしもべに同情をあらわした。「ベルテシヤザルよ、あなたはこの夢と、その解き明かしのために、悩むには及ばない」と王は言った(同四ノ一九上句)。

ダニエルは答えて言った。「わが主よ、どうか、この夢は、あなたを憎む者にかかわるように」(同四ノ一九下句)。ネブカデネザルの誇りと傲慢のゆえに、今や刑罰が彼に臨もうとしていることを告げる厳肅な義務が神から自分に負わせられたことをダニエルは自覚した。ダニエルは王の理解できる言葉で夢の解き明かしをしなければならなかった。そしてその恐るべき重大性に、物も言えないほど驚いてためらったのであるが、自分がどんなことになっても真理を語らなければならなかった。

そこでダニエルは、全能の神の命令を伝えた。「あなたが見られた木、すなわちその成長して強くなり、天に達するほどの高さになって、地の果までも見えわたり、その葉は美しく、その実は豊かで、すべての者がその中から食物を獲、また野の獣がその陰にやどり、空の鳥がその枝に住んだ木、王よ、それはすなわちあなたです。あなたは成長して強くなり、天に達するほどに大きくなり、あなたの主権は地の果にまで及びました。ところが、王はひとりの警護者、ひとりの聖者が、天から下って、こう言うのを見られました、『この木を切り倒して、これを滅ぼせ。ただしその根の切り株を地に残し、それに鉄と青銅のなわをかけて、野の若草の中におき、天からくだる露にぬれさせ、また野の獣と共にその分にあずかせて、七つの時を過ぎさせよ』と。王よ、その解き明かしはこうです。すなわちこれはいと高き者の命令であって、わが主なる王に臨まんとするものです。すなわち

あなたは追われて世の人を離れ、野の獣と共にあり、牛のように草を食い、天からくだる露にぬれるでしょう。こうして七つの時が過ぎて、ついにあなたは、いと高き者が人間の国を治めて、自分の意のままに、これを人に与えられることを知るに至るでしょう。また彼らはその木の根の切り株を残しおけと命じたので、あなたが、天はまことの支配者であるということを知った後、あなたの国はあなたに確保されるでしょう」(ダニエル書四ノ二〇―二六)。

ダニエルは忠実に夢の解き明かしをしたあとで、高慢な王に、悔い改めて神に立ち帰り、正義を行って切迫した災いを免れるように訴えた。「それゆえ王よ、あなたはわたしの勧告をいれ、義を行って罪を離れ、しえたげられる者をあわれんで、不義を離れなさい。そうすれば、あるいはあなたの繁栄が、長く続くかもしれません」とダニエルは嘆願した(同四ノ二七)。

しばらくの間、預言者の警告と勧告は、ネブカデネザルの心に強い印象を与えた。しかし神の恵みによって変えられていない心は、やがて聖霊によって与えられた感銘を失うのである。王の心からは、まだ、放縦と野望とが根絶されていなかった。そしてこれらの性質は、後にまた現れた。ネブカデネザルは、神が恵みのうちに彼にお与えになった教えや、過去の経験の警告にもかかわらず、ふたたび彼に続いて起こる王国に対して、嫉妬心を押えることができなくなった。これまで大いに公正で恵み深かった彼の支配が、圧政的になった。彼は心を頑なに、神から与えられた才能を自己に栄光を帰するために用い、生命と力をお与えになった神以上に自分を高めるために用いた。

神の刑罰は幾月も延ばされた。しかしこうした寛容によって悔い改めに導かれる代わりに、王は誇り高ぶって

ついに夢の解き明かしを信じなくなり、以前心に抱いた恐怖を嘲笑するに至った。

警告を受けてから一か年後、ネブカデネザルは宮殿の中を歩きながら、自分の王としての権力と建設者としての成功を誇って、「この大いなるバビロンは、わたしの大いなる力をもって建てた王城であって、わが威光を輝かすものではないか」と叫んだ(同四ノ三〇)。

誇らかな言葉がなお王の口にあるうちに、天からの声がぐだつて、神がお定めになった刑罰の時が来たことを告げたのである。彼の耳に主の命令がぐだつた。「ネブカデネザル王よ、あなたに告げる。国はあなたを離れ去った。あなたは、追われて世の人を離れ、野の獣と共におり、牛のように草を食い、こうして七つの時を経て、ついにあなたは、いと高き者が人間の国を治めて、自分の意のままに、これを人に与えられることを知るに至るだろう」(同四ノ三二、三三)。

一瞬のうちに、神が彼にお与えになった理性が取り去られた。王が完全であると思った判断力、王が誇った知恵は取り去られて、かつての偉大な王は狂人となってしまった。彼はもはや、王位にとどまることはできなかった。彼は警告の言葉を受け入れなかったのである。今やネブカデネザルは、創造主が彼にお与えになった権力を奪われて、人々から追われて、「牛のように草を食い、その身は天からくだる露にぬれ、ついにその毛は、わしの羽のようになり、そのつめは鳥のつめのようにになった」(同四ノ三三)。

ネブカデネザルは七年の間、全国民の驚きの的であった。彼は七年の間、全世界の前で屈辱をこうむった。それから彼の理性が回復されて、彼は心を低くして天の神を見上げ、この懲罰が神の手によるものであることを認めた。彼は公の布告の中で自分の罪を認め、彼を回復させて下さった神の大きなあわれみを認めた。彼は次のよ

うに言った。「こうしてその期間が満ちた後、われネブカデネザルは、目をあげて天を仰ぎ見ると、わたしの理性が自分に帰ったので、わたしはいと高き者をほめ、その永遠に生ける者をさんびし、かつあがめた。

その主権は永遠の主権、

その国は世々かぎりなく、

地に住む民はすべて無き者のように思われ、

天の衆群にも、

地に住む民にも、

彼はその意のままに事を行われる。

だれも彼の手をおさえて

『あなたは何をするのか』と言いうる者はない。

この時わたしの理性は自分に帰り、またわが国の光栄のために、わが尊厳と光輝とが、わたしに帰った。わが大臣、わが貴族らもきて、わたしに求め、わたしは国の上に堅く立って、前にもまさって大いなる者となった」

（ダニエル書四ノ三四―三六）。

かつての高慢な王は、謙遜な神の子となった。暴君的で専制的な王が、賢明で恵み深い王になった。天の神に反抗して神をのしった王が、今はいと高き神の力を認めた。そして熱心に主を恐れて、国民の幸福を追求するようになったのである。ネブカデネザルは、王の王、主の主であられる神の譴責を受けて、ついにすべての王が学ばなければならない教訓を学んだ。それは、真に偉大であるということは、真にいつくしみ深くあるということ

とである。彼は主が生ける神であることを認めて、「そこでわれネブカデネザルは今、天の王をほめたたえ、かつあがめたてまつる。そのみわざはことごとく眞実で、その道は正しく高ぶり歩む者を低くされる」と言った（同四ノ三七）。

世界最大の王国が神をほめたたえるようになるという、神のみこころは達成されたのである。ネブカデネザルが、神のあわれみといつくしみ深さと権力とを認めたこの公の布告は、聖書の歴史に記されている彼の生涯の最後の行為となった。

第四十三章 目に見えない守護者

本章はダニエル書五章に基づく

ダニエルの生涯の晩年になって、彼と彼のヘブルの仲間たちが六十年以上も前に捕らえられてきた国に、大きな変化が起こりつつあった。「もろもろの国民の最も恐れて」いたネブカデネザルはすでに亡く、エゼキエル書二八ノ七、「全地の人の、ほめたたえた」バビロンは（エレミヤ書五一ノ四一）、彼の後継者たちの愚かな配下に移り、徐々にではあるが確実に崩壊していた。

ネブカデネザルの孫のベルシャザルの愚行と柔弱とによって、高慢なバビロンはやがて倒れるのであった。ベルシャザルは青年時代から王権を共有することを許されたので、権力を誇り、天の神に対して高慢な心を抱いた。彼には神のみどころを知り、それに服従する責任があることを理解する機会は数多くあったのである。彼は祖父が神の命令の下に、人間の社会から追放されたことを知っていた。またネブカデネザルの改心と、奇跡的回復のことをよく知っていた。しかしベルシャザルは快楽の愛好と自己称揚によって、彼が忘れてはならない教訓を消し去ってしまった。彼は恵みのうちに与えられた機会をむだにし、もっと深く真理を知るために身近にあった手

段を活用することを怠った。ネブカデネザルが言うに言われぬ苦難と屈辱によってつい得たところのものを、ベルシャザルはなんの関心も示さず見過ごした。

間もなく不運がやってきた。バビロンは、メディア人ダリヨスの甥で、メディアとベルシャの連合軍の司令官であつたクロスの包囲を受けた。しかし酒色にふけたベルシャザルは、ユフラテ川に守られ、巨大な城壁と青銅の門のついた難攻不落と思われた城塞の中で、十分な食糧の貯蔵もあつたために、少しも憂えることなく歡樂と酒宴に日を過ごしていた。

ベルシャザルは誇り高ぶつて、危険を物ともせず、「その大臣一千人のために、盛んな酒宴を設け、その一千人の前で酒を飲んでいた」(ダニエル書五ノ一)。富と権力が手にすることのできるあらゆる呼びものが、宴會に華麗さをそえた。王宮の宴會に出席していた客の中には、魅惑的な美しい女たちがいた。才能のある人や教育のある人がいた。総督たちや政治家たちは、酒を水のように飲んで気も狂わんばかりに騒いだ。

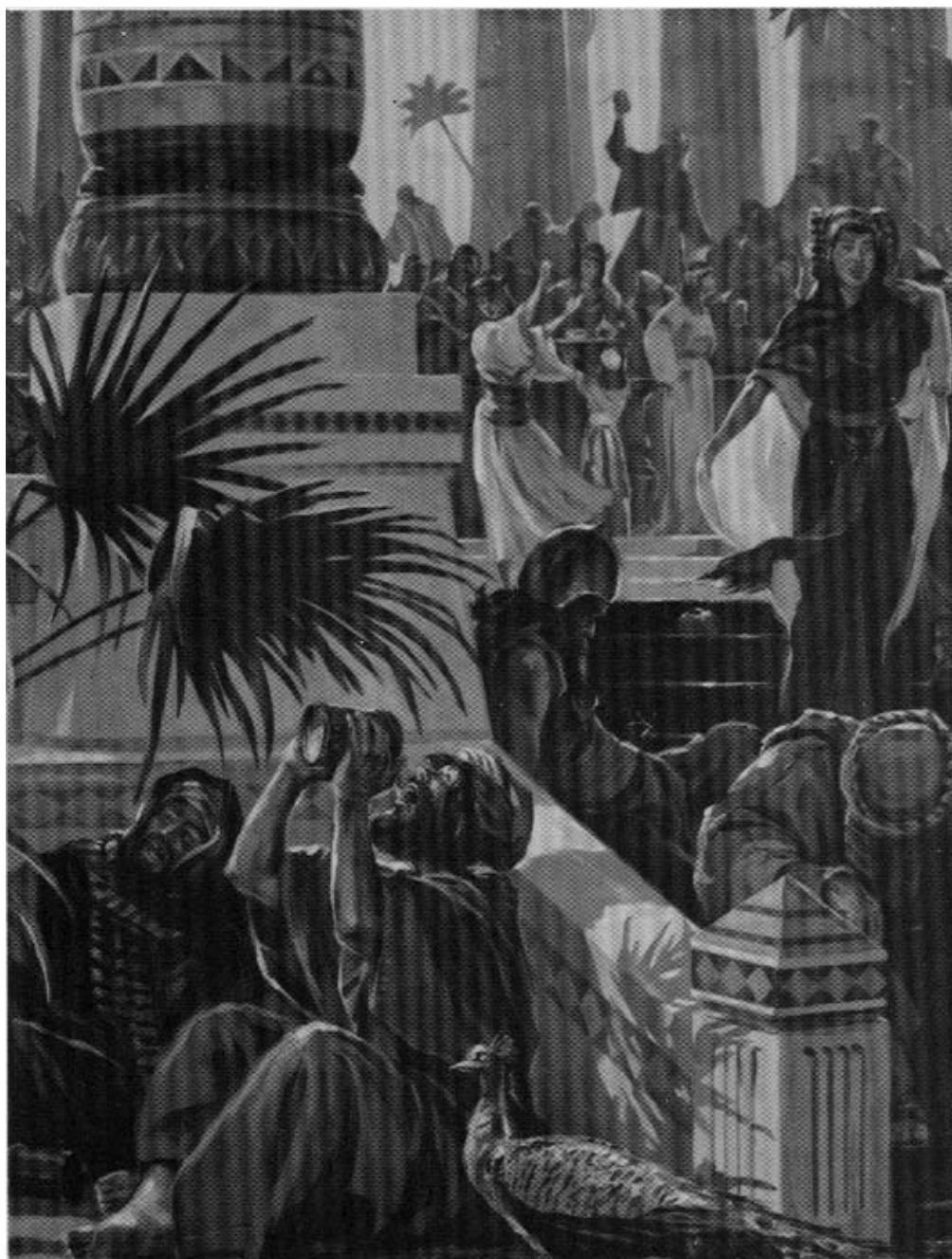
恥をわきまえずに酔いつぶれて理性を失い、低級な衝動と情欲のおもむくままに、王自身が底ぬけ騒ぎの先頭に立つた。酒宴が進むにつれて、王は「ネブカデネザルがエルサレムの神殿から取ってきた金銀の器を持ってこいと命じた。王とその大臣たち、および王の妻とそばめらが、これをもって酒を飲むためであつた」(同五ノ二)。王は、自分の手が触れることができないほどに神聖なものはないことを証明しようとしたのである。「そこで人々はそのエルサレムの神の宮すなわち神殿から取ってきた金銀の器を持ってきたので、王とその大臣たち、および王の妻とそばめらは、これをもって飲んだ。すなわち彼らは酒を飲んで、金、銀、青銅、鉄、木、石などの神々をほめたたえた」(同五ノ三、四)。

ベルシャザルは天の警護者が、彼の偶像をたたえる酒宴を眺めていたことを夢想だにしなかった。目には見えない天の警護者が、神を汚す光景を眺め、神を冒瀆する歓楽を聞き、偶像礼拝を目撃したのを少しも知らなかった。しかし間もなく、招かれなかった天の客はその存在を明らかにした。酒宴がたけなわになったとき、青ざめた手が現れて、宮殿の壁に火のように燃える文字を書いた。それは多くの人々には分からない言葉であったが、今や良心に責めを感じた王や客たちの、破滅の前兆であった。

騒々しい歓楽の声は静まり、男も女も名状しがたい恐怖におののいて、手が不思議な文字をゆっくりつづるのを見守った。彼らの目の前には、彼らの邪悪な生活の行状がパノラマのように現れた。彼らはたった今までその力に挑んでいた、永遠の神の審判廷に召し出されたように感じたのである。つい先程まで騒いで冒瀆的な言葉を

言っていた人々の顔が青ざめて、恐怖の叫びをあげている。

彼らすべての中で最も恐怖におののいたのは、ベルシャザルであった。バビロン国内において、その夜極限に達した神に対する反逆の責任は、他のだれよりもベルシャザルにあったのである。王は神の力に挑戦し、神の名を冒瀆したのであったが、その神の代表者である目に見えない警護者の前で、恐怖のために体が麻痺してしまつた。良心が目覚めた。「その腰のつがいはいゆるみ、ひざは震えて互に打ちあつた」(ダニエル書五ノ六)。ベルシャザルは不敬にも、天の神に逆らつて自ら高ぶつた。そして「あなたは どうして、このようなことをするのか」とだれも言わないと思つて、自分自身の力に頼つたのであるが、彼は今、自分に委ねられたものの責任を問われなければならないことを悟つた。そして、彼の失われた機会と、反抗的態度に対しては、何の申し開きもできないことを知つたのである。



高慢不遜なベルシャザル王は王宮で酒宴をもうけたが、その騒ぎの最中に神の不思議な存在を示すしるしが現れた。

王は燃える文字を読もうとしたが、読むことができなかった。しかしここに、王が計り知ることのできない秘密と、理解することも反論することもできない力があつた。彼は失望して、国内の知者たちの助けを求めた。文字を読むように、法術士、カルデヤびと、占い師らと呼ぶ王の氣違いじみた声が、会場にひびき渡つた。「この文字を読み、その解き明かしをわたしに示す者には紫の衣を着せ、首に金の鎖をかけさせて、国の第三のつかさとしよう」と王は約束した。しかし、王が莫大な報賞を与えることを約束して、信頼した助言者たちに訴えても何の効果もなかった。天の知恵は売り買いすることができないものではない。「王の知者たちは皆……その文字を読むことができず、またその解き明かしを王に示すことができなかった」(ダニエル書五ノ七、八)。彼らは前の時代の知者たちがネブカデネザルの夢の解き明かしをすることができなかったのと同様に、不思議な文字を読むことができなかった。

そこで王妃は、半世紀以上も前にネブカデネザル王に巨像の夢とその解き明かしを示したダニエルを覚えていたのである。王妃は言った、「王よ、どうか、とこしえに生きながらえられますように。あなたは心に思い悩んではなりません。また顔色を変えるには及びません。あなたの国には、聖なる神の霊のやどっているひとりの人があります。あなたの父の代に、彼は、明知、分別および神のような知恵のあることをあらわしました。……ネブカデネザル王は、彼を立てて、博士、法術士、カルデヤびと、占い師らの長とされました。彼は、王がベルテシヤザルという名を与えたダニエルという者ですが、このダニエルには、すぐれた霊、知識、分別があつて、夢を解き、なぞを解き、難問を解くことができます。ゆえにダニエルを召しなさい。彼はその解き明かしを示すでしょう」。

そこでダニエルは王の前に召された。」ベルシャザルは平静を取りもどそうと努力しながらダニエルに言った。「あなたは、わが父の王が、ユダからひきつれてきたユダの捕囚のひとりなのか。聞くところによると、あなたのうちには、聖なる神の霊がやどっていて、明知、分別および非凡な知恵があるそうだ。わたしは、知者、法術士らを、わが前に召しよせて、この文字を読ませ、その解き明かしを示させようとしたが、彼らは、この事の解き明かしを示すことができなかった。しかしまた聞くところによると、あなたは解き明かしをなし、かつ難問を解くことができるそうだ。それで、あなたがもし、この文字を読み、その解き明かしをわたしに示すことができるのなら、あなたに紫の衣を着せ、金の鎖を首にかけさせて、この国の第三のつかさとしよう」(同五ノ一〇―一六)。

ダニエルはあの恐怖に襲われた群衆の前で、王の約束にも心を動かされることなく、至高者のしもべとしての冷静な威厳をもって立ち、へつらいではなくて破滅の言葉を解き明かしたのである。「あなたの賜物は、あなたご自身にとっておき、あなたの贈り物は、他人にお与えください。それでも、わたしは王のためにその文字を読み、その解き明かしをお知らせいたしましょう」(同五ノ一七)。

預言者ダニエルはまず第一に、ベルシャザルがよく知っていることを思い起こさせた。しかし彼は、彼を救うに至ったであろう謙遜の教訓を、それから学んでいなかった。ダニエルはネブカデネザルの罪と墮落、および彼に対する神の処置について語った。すなわち、神は彼に国と栄光をお与えになったが、彼の誇りは神の刑罰を招くに至り、彼はついにイスラエルの神の力とあわれみとを認めるに至った。そしてダニエルは、勇敢に力強い言葉で、ベルシャザルの大いなる罪惡を譴責したのである。ダニエルは王の前に彼の罪を示し、彼が学ぶべくして

学ばなかった教訓を指摘した。ベルシャザルは祖父の経験を正しく理解せず、彼自身にとって非常に重要な諸事件の警告に心を留めなかった。真の神を知って服従する機会がベルシャザルに与えられていたのであるが、彼はそれを心に留めなかった。そして今、彼は反逆の実を刈り取ろうとしていた。

預言者ダニエルは言った。「ベルシャザルよ、あなたは……この事をことごとく知っていながら、なお心を低くせず、かえって天の主におかたて、みずから高ぶり、その宮の器物をあなたの前に持ってこさせ、あなたとあなたの大臣たちと、あなたの妻とそばめたちは、それをもって酒を飲み、そしてあなたは見ることも、聞くことも、物を知ることもしない金、銀、青銅、鉄、木、石の神々をほめたたえたが、あなたの命をその手ににぎり、あなたのすべての道をつかさどられる神をあがめようとはしなかった。

それゆえ、彼の前からこの手が出てきて、この文字が書きしるされたのです」(ダニエル書五ノ二二―二四)。
 預言者ダニエルは壁に書かれた天からの言葉に目を向けて、「メネ、メネ、テケル、ウパルシン」と読んだ。文字を書いた手はもはや見えなかったが、これらの四つの文字は、なお恐ろしいばかりの鮮やかさで光っていた。そして人々は息を殺して、年輩いた預言者の宣言する言葉に耳を傾けたのである。

「その事の解き明かしはこうです。メネは神があなたの治世を数えて、これをその終りに至らせたことをいうのです。テケルは、あなたがはかりで量られて、その量の足りないことがあらわれたことをいうのです。ペレスは、あなたの国が分かれたて、メディアとペルシャの人々に与えられることをいうのです」(同五ノ二六―二八)。

あの狂った酒宴の最後の夜、ベルシャザルと彼の総督たちは、彼らの罪の升目とカルデア王国の罪の升目を満たした。神の抑制の手は、もはや切迫した災いを防ぐことができなかった。神は数限りない摂理によって、神の

律法に対する尊崇を彼らに教えようとなさった。彼はその罰が天に達しようとしている人々について、「われわれはバビロンをいやそうとしたが、これはいえなかった」と言われた（エレミヤ書五一ノ九）。神は人間の心の不可解な邪悪さのゆえに、ついに取り消すことのできない宣告を発しなければならなかったのである。ベルシャザルは死んで、彼の王国は人の手に渡るのであった。

ダニエルが語り終えたときに、王は彼に約束した栄誉を与えるように命令を下した。それに応じて、「ダニエルに紫の衣を着せ、金の鎖をその首にかけさせ、彼について布告を発して、彼は国の第三のつかさであると言われた」（ダニエル書五ノ二九）。

一世紀以上も前に靈感による筆者は、王も大臣たちも互いに競って神を冒瀆した「歡樂の夜」が、突然恐怖と破滅の時と変わることを預言した。そして今や、急速に重大な事件が相次いで起こり、劇の主役たちが生まれる前に聖書に描かれたとおりになっていった。

王はすでに破滅の運命にある人々に取り囲まれて、なお酒宴の席にあるうちに、敵の策略にも安全であると思っていた「町はことごとく取られ、渡し場は奪われ……兵士はおびえている」と聞かされたのである（エレミヤ書五一ノ三一、三二）。王とその大臣たちが主の聖なる器で酒を飲み、銀や金の神々をほめたたえていたときに、メデヤとペルシャ人たちはユフラテ川の流れを変更して、無防備の都の中心に侵入していた。今やクロス軍勢は宮殿の壁の下に立った。都の中には敵の軍勢がいなごのように満ちあふれ（同五一ノ一四参照）、驚いた酒宴の客の絶望的な叫びを越えて、彼らの勝ちどきが聞こえた。

「カルデヤびとの王ベルシャザルは、その夜のうちに殺され」、外国の王が位についたのである（ダニエル書五

ノ三〇)。

ヘブルの預言者たちは、バビロンが滅亡する様子について明白に語っていたのである。神は彼らに、夜の幻の中で、将来の出来事を啓示されたのである。彼らは叫んで言った。「ああ、バビロンはついに取られた、全地の人の、ほめたたえた者は捕えられた。ああ、バビロンはついに国々のうちに驚きとなった」。「ああ、全地を砕いた鎚はついに折れ砕ける。ああ、バビロンはついに国々のうちの恐るべき見ものとなる」。「バビロンが取られたとの声によつて地は震い、その叫びは国々のうちに聞える」(エレミヤ書五ノ四一。五〇ノ二三、四六)。

「バビロンはたちまち倒れて破れた」。「滅ぼす者がこれに臨み、バビロンに來た。その勇士たちは捕えられ、その弓は折られる。主は報いをする神であるから必ず報いられるのだ。わたしはその君たちと知者たち、おさたち、つかさたち、および勇士たちを酔わせる。彼らは、ながい眠りにいり、目をさますことはない。万軍の主と呼ばれる王がこれを言われる」(同五一ノ八。五六、五七)。

「バビロンよ、わたしは、おまえを捕えるためにわなをかけたが、おまえはそれにかかった。そしておまえはそれを知らなかった。おまえは主に敵したので、尋ね出され、捕えられた。主は武器の倉を開いて、その怒りの武器を取り出された。主なる万軍の神が、カルデヤびとの地に事を行われるからである」。

「万軍の主はこう言われる、イスラエルの民とユダの民は共にしえたげられている。彼らをとりこにした者はみな彼らを固く守って釈放することを拒む。彼らをあがなう者は強く、その名は万軍の主といわれる。彼は必ず彼らの訴えをただし、この地に安きを与えるが、バビロンに住む者には不安を与えられる」(同五〇ノ二四、二五。三三、三四)。

こうして「バビロンの広い城壁は地にくずされ、その高い門は火に焼かれる」。こうして万軍の主は、「高ぶる者の誇をとどめ、あらぶる者の高慢を低くする」。こうして、「国々の誉であり、カルデヤびとの誇である麗しいバビロンは、神に滅ぼされたソドム、ゴモラのようにになる。ここにはながく住む者が絶え、世々にいたるまで住みつく者がなく、アラビヤびともそこに天幕を張らず、羊飼もそこに群れを伏させることがない。ただ、野の獣がそこに伏し、ほえる獣がその家に満ち、だちようがそこに住み、鬼神がそこに踊る。ハイエナはその城の中で鳴き、山犬は楽しい宮殿でほえる」。「わたしはこれをはりねずみのすみかとし、水の池とし、滅びのほつきをもつて、これを払い除く、と万軍の主は言う」(同五一ノ五八。イザヤ書二三ノ一、一九―二二。一四ノ二三)。

バビロンの王の象徴としてその最初の王に語られたのと同様に、その最後の王にも、「王よ、あなたに告げる。国はあなたを離れ去った」という神の警護者の宣告が下されたのである(ダニエル書四ノ三二)。

「処女なるバビロンの娘よ、

下って、ちりの中にすわれ。…

王座のない地にすわれ。…

カルデヤびとの娘よ、

黙してすわれ、また暗い所にはいれ。

あなたはもはや、もろもろの国の女王と

となえられることはない。

わたしはわが民を憤り、

わが嗣業を汚して、これをあなたの手に渡した。

あなたはこれに、あわれみを施さず、…

あなたは言った、

『わたしは、とこしえに女王となる』と。

そして、あなたはこれらの事を心にとめず、

またその終りを思わなかった。

楽しみにふけり、安らかにあり、

心のうちに『ただわたしだけで、

わたしのほかにだれもなく、

わたしは寡婦となることはない、

また子を失うことはない』と言う者よ、

今この事を聞け。

これら二つの事は一日のうちに、

またたくまにあなたに臨む。

すなわち子を失い、寡婦となる事は

たといあなたが多くの魔術を行い、

魔法の大いなる力をもってしても

ことごとくあなたに臨む。

あなたは自分の悪に寄り頼んで言う、

『わたしを見る者はない』と。

あなたの知恵と、あなたの知識とは

あなたを惑わした。

あなたは心のうちに言った、

『ただわたしだけで、わたしのほかにだれもない』と

しかし、わざわざいが、あなたに臨む、

あなたは、それをあがなうことができない。

なやみが、あなたを襲う、

あなたは、それをつぐなうことができない。

滅びが、にわかあなたに臨む、

あなたは、それについて何も知らない。

あなたが若い時から勤め行ったあなたの魔法と、

多くの魔術とをもって立ちあわってみよ、

あるいは成功するかもしれない、

あるいは敵を恐れさせるかもしれない。

あなたは多くの計りごとによってうみ疲れた。

かの天を分かつ者、星を見る者、

新月によつて、あなたに臨む事を告げる者を

立ちあがらせて、あなたを救わせてみよ。

見よ、彼らはわらのようになって、…

自分の身を炎の勢いから、救い出すことができない。…

ひとりもあなたを救う者はない」。

(イザヤ書四七ノ一一五)

活動の舞台に上った国はすべて、警護者と聖なるおかたのみこころを達成するかどうかということを決めるために、地上でその地位を占めることが許される。預言はバビロン、メド・ペルシャ、ギリシア、ローマなどの、世界の大帝国の興亡の歴史を記している。これらの国々においても、弱小国家の場合と同様に歴史がくり返されているのである。それぞれの国にテストの期間が与えられた。そして、それぞれの国がその試練に失敗して、その栄光は消え、その力は去っていった。

強国が神の原則を拒否し、その拒否のゆえに国家の滅亡を招いたのであったが、それでもなお、すべてを支配する神のみこころが、各時代を通じて著しく働いていたのである。預言者エゼキエルが捕囚期間にカルデヤの地

において与えられた、驚くべき幻の中で見たものはこれであつた。地上の王たちの出来事を支配する神の力をあらわした象徴が、驚く彼の眼前に描き出された。

エゼキエルはケバル川の岸辺で、「激しい風と大いなる雲が北から来て、その周囲に輝きがあり、たえず火を吹き出していた。その火の中に青銅のように輝くものがあるのを見た。数多くの輪が互いに入り組み、四つの生きものによって動かされていた。そうしたものはるか上方に、「サファイヤのような位の形があつた。またその位の形の上に、人の姿のような形があつた」。「ケルビムはその翼の下に人の手のような形のものを持っているように見えた」(エゼキエル書一ノ四、一二六。一〇ノ八)。輪は複雑に込み入っていて、いかにも一見混乱しているように思われた。しかしそれらは、完全な調和を保って動いていた。ケルビムの翼の下の手によって支えられ、導かれていた天の存在者がこれらの輪を推進していた。彼らの上のサファイヤの玉座の上には、永遠の神が座しておられた。そしてみ座の周りには、神のあわれみを象徴した虹があつた。

入り組んだ輪がケルビムの翼の下の手によって導かれていたように、人間の世界の複雑な出来事も、神の支配のもとにおかれているのである。国々の争闘と騒乱のさ中であつて、ケルビムの上に座しておられる主が、なおこの世界の出来事を導いておられるのである。

諸国の歴史は、今日われわれに語っている。神はすべての国とすべての人間に、神の大いなる計画の中における場所をお定めになられた。今日、人々もまた国々も、誤られることのない神の手の中にあるおもりによって量られているのである。各々は自分自身の選択によって、各自の運命を決定している。そして神はそのすべてを支配して、みこころを達成しておられるのである。

わたしは有るといふ偉大な神が、み言葉の中にお与えになった預言は、永遠の過去から永遠の未来に至るまでの諸事件を一つ一つつなぎ合わせて、われわれが今日、時代の推移の中のどこに位するかを告げ、また将来何が起こるかを示しているのである。預言が、起こると予告したことはすべて、現在まで歴史のページをさかのぼることができるのであるから、これから起こることもすべて、その順序どおりに成就するものと確信してよいのである。

今日、時のしるしは、われわれが重大で厳粛な事件の門口に立っていることを告げている。われわれの世界のすべてのものは動揺している。再臨に先立って起こる出来事に関する救い主の預言が、われわれの眼前で成就している。「また、戦争と戦争のうわさを聞くであろう。…民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう」(マタイ二四ノ六、七)。

現代はすべての人間にとって、圧倒的に興味深い時である。統治者や政治家たち、信頼と権威の座を占める人、各階層の識者たちは、われわれの周りに起こっている出来事に注意を集中している。彼らは国家間の関係を見守っている。彼らは地上の勢力が緊張度を増しているのを観察する。そして彼らは、重大で決定的な何事かが起ころうとしており、今や世界は、驚くべき危機の瀬戸際に立っているのを認めるのである。

こうした事柄については、聖書、そして聖書だけが、その正しい見解を示しているのである。ここにわれわれの世界の歴史の、大いなる最後の光景が示されている。その出来事はすでにその影を投げ、接近する音は地を震わせ、人の心を恐怖におのかせている。

「見よ、主はこの地をむなしくし、

これを荒れすたれさせ、これをくつがえして、
その民を散らされる。…

これは彼らが律法にそむき、定めを犯し、
とこしえの契約を破ったからだ。

それゆえ、のろいは地をのみつくし、
そこに住む者はその罪に苦しむ。

（イザヤ書二四ノ一―六）

「ああ、その日はわざわざいだ。

主の日は近く、

全能者からの滅びのように来るからである。…

種は土の下に朽ち、倉は荒れ、

穀物がつきたので、穀倉はこわされる。

いかに家畜はうめき鳴くか。

牛の群れはさまよう。

彼らには牧草がないからだ。

羊の群れも滅びうせる」。

「ぶどうの木は枯れ、いちじくの木はしおれ、

ざくろ、やし、りんご、野のすべての木はしぼんだ。
それゆえ楽しみは人の子らからかれうせた」。

(ヨエル書一ノ一五―一八、一二)

「わたしは苦しみにもだえる。…

わたしは沈黙を守ることができない、

ラッパの声と、戦いの叫びを聞くからである。

破壊に次ぐに破壊があり、

全地は荒され」た。

(エレミヤ書四ノ一九、二〇)

「悲しいかな、その日は大いなる日であって、

それに比べるべき日はない。

それはやコブの悩みの時である。

しかし彼はそれから救い出される」。

(同三〇ノ七)

「あなたは主を避け所とし、

いと高き者をすまいとしたので、

災はあなたに臨まず、

悩みはあなたの天幕に近づくことはない」。

（詩篇九一ノ九、一〇）

「シオンの娘よ、…

主はその所であなを敵の手からあがなわれる。

いま多くの国民はあなたに逆らい、集まって言う、

『どうかシオンが汚されるように、

われわれの目がシオンを見てあざ笑うように』と。

しかし彼らは主の思いを知らず、

またその計画を悟らない」。

（ミカ書四ノ一〇―一二）

神はご自分の教会を、その最大の危機の時にお捨てになることはない。神は救いを約束された。

「見よ、わたしはヤコブの天幕を再び栄えさせ、そのすまいにあわれみを施す」と主は言われたのである（エシミヤ書三〇ノ一八）。

その時、神のみこころは成しとげられる。神の国の原則は、日の下のすべての者によって崇められるのである。

第四十四章 主義に固く立つ

本章はダニエル書六章に基づく

メデヤびとダリヨスが、かつてはバビロンの王たちが占めていた座についたとき、彼は直ちに政治の再組織を行った。ダリヨスは百二十人の総督を立てることをよしとし、また彼らの上に三人の総監を立てた。ダニエルはそのひとりであった。これは総督たちをして、この三人の前にその職務に関する報告をさせて、王に損失の及ぶことのないようにするためであった。ダニエルは彼のうちにあるすぐれた霊のゆえに、他のすべての総監および総督たちにまさっていたので、王は彼を立てて全国を治めさせようとした。

王国の指導者たちは、ダニエルが栄誉を授けられたために、彼をねたんだ。そして彼らは、彼に対する苦情を言つ折をねらった。ところがなんのとがをも見いだすことができなかった。「それは彼が忠信な人であつて、その身になんのあやまちも、とがも見いだされなかったからである」(ダニエル書六ノ四)。

ダニエルの行動になんの落ち度もないことが、ますます彼の敵たちのねたみを引き起こした。「われわれはダニエルの神の律法に関して、彼を訴える口実を得るのでなければ、ついに彼を訴えることはできまい」と彼らは

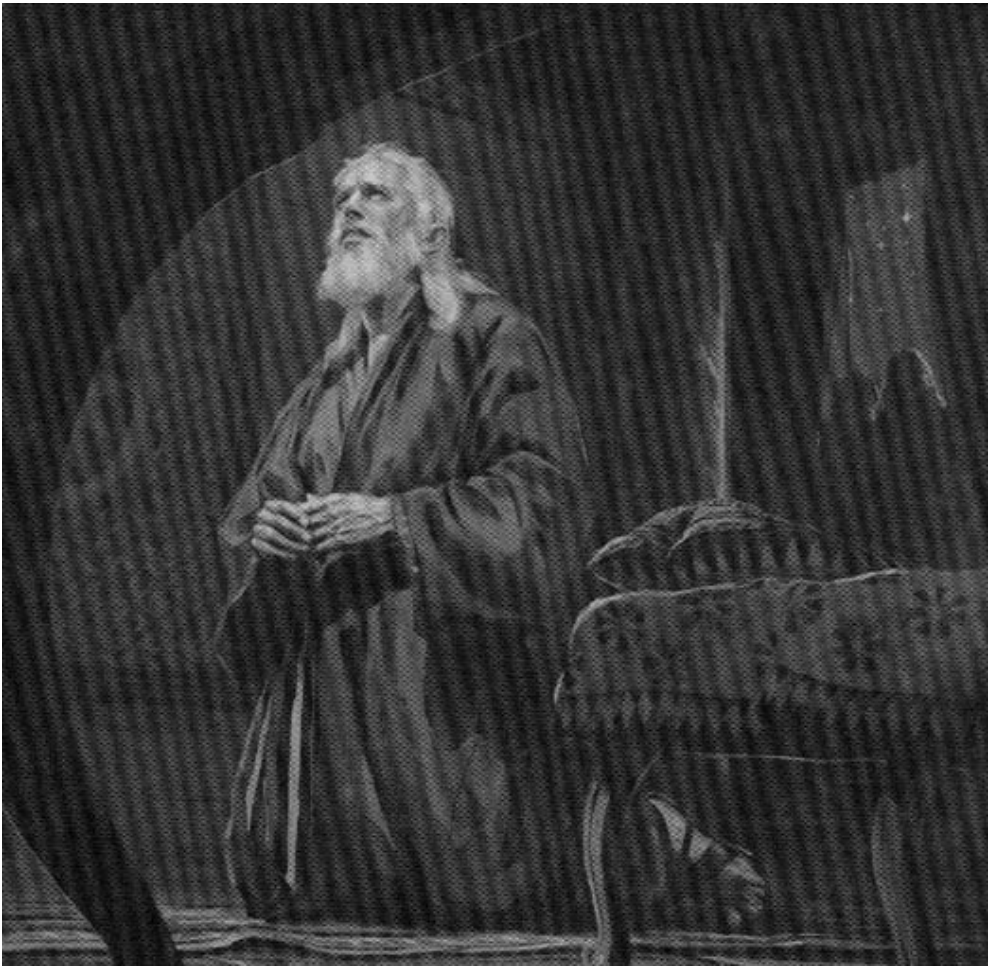
認めないわけにはいかなかった(同六ノ五)。

そこで総監と総督たちは相謀ってたくらみ、ダニエルを陥れようとした。彼らは自分たちが準備した禁令に王の署名を求め、三十日の間ダリヨス王のほかに、神または人に願い事を行ってはならないことにしようとした。もしこの禁令を犯すならば、違反者はししの穴に投げ入れられるのであった。

したがって総督たちはそのような禁令をつくり、それをダリヨスに見せて署名を求めた。彼らは王の虚栄心に訴えて、この布告を実施するならば、大いに彼の榮譽と権威を増進すると説き伏せた。王は総督たちの陰險な策略を知らなかったので、布告にあらわれた彼らの憎しみを見分けることができずに、彼らのへつらいに屈してそれに署名した。

ダニエルの敵たちは、今や主のしもべに対するわながしかりと設けられたことを喜びながら、ダリヨスの前を去った。こうした陰謀をめぐらすに当たって、サタンが重要な役割を果たしたのであった。預言者ダニエルは王国の指導的な高い地位にあった。そして悪天使たちは、王国の支配者たちに対する自分たちの力が、彼の影響によって弱まるのではないかと思った。総督たちにねたみやそねみの心を起こさせたのは、これらのサタンの手下たちであった。ダニエルを殺す計画を思いつかせたのは、悪天使たちであった。そして総督たちは悪の手先となつて、それを実施したのである。

ダニエルの敵たちは計画を成功させるために、彼が原則に忠実に従うことを当てにしていた。そして彼の品性に対する彼らの評価に間違いはなかった。ダニエルはすぐに、彼らが布告を考え出した邪悪な目的を読みとったが、彼はその行動をただ一つの点においても変更しなかった。今こそ最も祈るべき時なのに、どうして祈りをや



王が唯一の神を礼拝することを禁ずる法令に署名したことを知りながら、ダニエルは自分の習慣に従って、部屋の中で唯一の神に祈った。

めることができようか。彼は神の助けを望むことをやめるよりは、生命そのものを放棄したいと思った。彼は冷静に総監としての務めを果たし、祈りの時間には自分の部屋にはいり、いつも行っていたようにエルサレムに向かつて窓を開いて天の神に願いを捧げた。彼は自分の行動を隠そうとしなかった。彼は神に忠誠をつくす結果が何であるかを十分に知っていたが、ためらうところはなかった。彼は自分を陥れようとたくらんでいる人々の前で、彼と天の神との関係が絶たれたかのように見えることすら許さなかったのである。ダニエルは王に命令権のある点においては、あらゆる命令に従うのであった。しかし王であろうが、王の布告であろうが、王の王なる神に対する忠誠を曲げさせることはできなかった。

こうしてダニエルは、地上のどんな権力も魂と神との間に介入する権利がないことを、大胆に、しかも静かに謙遜に宣言したのである。彼は偶像礼拝者たちに囲まれていながら、この真理に対する忠実な証人であった。彼が恐れることなく正義のために固く立ったことは、あの異教の宮廷の道德的暗黒の中にあつて輝かしい光であった。ダニエルはキリスト者の勇氣と誠実の尊い模範として、今日世界の前に立っている。

総督たちは一日中ダニエルを監視した。彼らはダニエルが、三回自分の部屋にはいるのを見、三回彼が熱心に神に執り成しの祈りを捧げる声を聞いた。彼らは次の日の朝、王の前に苦情を訴えた。最も榮譽を授けられて忠実な政治家であるダニエルが、王の布告に公然と反抗したのである。彼らは王に念を押して言った。「王よ、あなたは禁令に署名して、今から三十日の間は、ただあなたにのみ願ひ事をさせ、もしあなたをにおいて、神または人に、これをなす者があれば、すべてその者を、ししの穴に投げ入れると、定められたではありませんか」(ダニエル書六ノ一二)。

王は答えて言った、「その事は確かであつて、メデアとペルシャの法律のごとく、変えることのできないものだ」(ダニエル書六ノ一二下句)。

そこで彼らは大喜びで、最も信頼されている助言者の行動をダリヨス王に告げた。「王よ、ユダから引いてきた捕囚のひとりである、かのダニエルは、あなたをも、あなたの署名された禁令をも顧みず、一日に三度ずつ、祈をささげています」と彼らは大声で叫んだ(同六ノ一三)。

王はこのような言葉を聞いたときに、直ちにそれが、彼の忠実なしもべに対するわなであつたことを悟った。王は彼らが王の布告を提案したのは、王の栄光と誉れを熱望するためではなくて、ダニエルをねたんだためであることを知った。王はたくらまれた悪に自分も加わつたことを「大いに憂え」、ダニエルを救おうとして、「日の入るまで、彼を救い出すことに努めた」(同六ノ一四)。総督たちは、王がこのように努力することを予想して、王のところに来て言った。「王よ、メデアとペルシャの法律によれば、王の立てた禁令、または、おきては変えることのできないものであることを、ご承知ください」(同六ノ一五)。たとい性急に出された布告であっても変えることはできず、実施されなければならなかつた。

「そこで王は命令を下したので、ダニエルは引き出されて、ししの穴に投げ入れられた。王はダニエルに言った、『どうか、あなたの常に仕える神が、あなたを救われるように』。一つの石が穴の口に置かれて、王自身が、「自分の印と、大臣らの印をもって、これに封印した。これはダニエルの処置を変えることのないようにするためであつた。こうして王はその宮殿に帰つたが、その夜は食をとらず、また、そばめたちを召し寄せず、全く眠ることもしなかつた」(同六ノ一六―一八)。

神はダニエルの敵が、彼をししの穴に投げ入れることを阻止されなかった。神は悪天使と悪人たちが、ここで彼らの目的を達するのをお許しになった。しかしそれは、神のしもべの救出をさらに著しいものにし、真理と義の敵の敗北を、さらに完璧なものにするためであった。「まことに人の怒りはあなたをほめたたえる」と詩篇記者はあかしした(詩篇七六ノ一〇)。御都合主義ではなくて、正義を行うことを選んだこのひとりの人の勇氣によって、サタンは敗北し、神のみ名は高められ、崇められるのであった。

翌朝早く、ダリヨスはししの穴へ急いで行って、「悲しげな声をあげて呼ばわり」、「生ける神のしもべダニエルよ、あなたが常に仕えている神はあなたを救って、ししの害を免れさせることができたか」と言った(ダニエル書六ノ二〇)。

預言者ダニエルの声は答えた。「王よ、どうか、とこしえに生きながらえられますように。わたしの神はその使をおくって、ししの口を閉ざされたので、ししはわたしを害しませんでした。これはわたしに罪のないことが、神の前に認められたからです。王よ、わたしはあなたの前にも、何も悪い事をしなかったのです」(同六ノ二一、二二)。

「そこで王は大いに喜び、ダニエルを穴の中から出せと命じたので、ダニエルは穴の中から出されたが、その身になんの害をも受けていなかった。これは彼が自分の神を頼みとしていたからである。王はまた命令を下して、ダニエルをあしざまに訴えた人々を引いてこさせ、彼らをその妻子と共に、ししの穴に投げ入れさせた。彼らが穴の底に達しないうちに、ししは彼らにとびかかって、その骨までもかみ砕いた」(同六ノ二三、二四)。

もう一度、ダニエルの神を真の神としてたたえる布告が、異教の王によって発布された。「そこでダリヨス王

は全世界に住む諸民、諸族、諸言語の者に詔を書きおくって言った、『どうか、あなたがたに平安が増すように。わたしは命令を出す。わが国のすべての州の人は、皆ダニエルの神を、あのき恐れなければならない。

彼は生ける神であって、

とこしえに変わることなく、

その国は滅びず、

その主権は終りまで続く。

彼は救を施し、助けをなし、

天においても、地においても、

しるしと奇跡とおこなひ、

ダニエルを救って、

ししの力をのがれさせたかたである」。

(ダニエル書六ノ二五―二七)

神のしもべに対する邪惡な反対は、もう根絶した。「こうして、このダニエルはダリヨスの世と、ペルシヤ人クロスの世において栄えた」(同六ノ二八)。そしてこれらの異教の王たちは、彼と交わることによって、神が「生ける神であって、とこしえに変わることなく、その国は滅び」ることがないことを認めないわけにはいかなかった(同六ノ二六)。

ダニエルの救出の物語から、神の民は試練と暗黒の時にあっても、前途が希望に輝き、周囲の事情が望みどお

りのものである時と、全く同じでなければならぬことを、われわれは学ぶのである。ししの穴に入れられたダニエルは、国家の大臣たちの長として、また至高者の預言者として、王の前に立ったダニエルと同じであった。神を信頼している人は、最大の試練の時においても、神と人間からの光と恵みが降り注ぐ繁栄の時と同様なのである。信仰は目に見えないものに手を伸ばし、永遠の実在を把握するのである。

天国は、義のために苦しむ者のそば近くにある。キリストはその忠実な民と利害を一つにされる。キリストは彼の聖徒が苦しむときに苦しまれる。そして彼の選民に触れる者は、だれでもキリストに触れるのである。肉体的危害や苦難から救うためにそば近くにある力は、またさらに大いなる悪から救うためにそば近くにあつて、神のしもべに、どんな状況のもとにあつてもその誠実さを堅持する力を与えて、神の恵みによって勝利することを可能にするのである。

バビロンとメド・ペルシヤ両帝国の政治家としてのダニエルの経験は、実業家は必ずしも陰險な策を用いる政治家でなく、一步一步神の指示に従う人であり得るという真理を示している。地上の最大の王国の総理大臣であったダニエルは、それと同時に神の預言者であり、天から靈感の光を受けたのである。彼はわれわれと同じ情の人であるが、靈感の筆は彼に誤りはなかったと記している。彼の事業の取り扱い、敵がどんなに厳密に調査しても、何ひとつ落ち度が見つからなかったのである。ダニエルは、実業家が悔い改めて献身し、その動機が神の前に正しくあるときに、どのような者になり得るかという模範である。

天の神の要求に厳密に従うことは、靈的祝福と同様に物質的祝福をもたらすのである。ダニエルは揺らぐことのない忠誠を神につくし、断固として自己を制し、その気高い威厳と不動の誠実とによって、まだ若かったのに

彼を監督する任務を帯びた異教の役人の、「恵みとあわれみ」とを受けたのである(ダニエル書一ノ九)。この同じ特質が、彼のその後の生涯においても著しくあらわれていた。彼は速やかに、バビロン王国の総理大臣の地位に上った。次々と王たちの治世が続き、国家が崩壊して別の世界帝国が建設される時代にあつて、彼は知恵と政治的手腕を持ち、その機転、その丁寧さ、その純粋な親切心、原則に対する忠実さなどは実に完璧であつたので、彼の敵でさえも「訴えるべきなんの口実も、なんのとがをも見いだすことができなかった」と告白しないわけにはいかなかった(同六ノ四)。

ダニエルは国事の責任と、世界を支配する王国の機密を託されて人間の栄誉を受けたが、神からは神の使者として栄誉を賜わり、来たるべき時代の秘密について多くの啓示を受けたのである。ダニエル書七章から十二章に彼が記した驚くべき預言は、預言者ダニエル自身でさえ十分に理解することができなかった。しかし彼は、その生涯の働きを終わる前に祝福された確証が与えられた。「定められた日の終りに立つて」、すなわちこの世界歴史の終局において、彼はふたたび立つてその分を受けるのであつた(同一二ノ一三)。彼は啓示された神のみこころを、すべて理解することは許されなかった。彼は、彼の書いた預言について「終りの時まで」封じておかなければならなかった。天使はふたたび、忠実な主の使者に指示を与えて言った。「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。この言葉は終りの時まで秘し、かつ封じておかれます。…しかし、終りまであなたの道を行きなさい。あなたは休みに入り、定められた日の終りに立つて、あなたの分を受けるでしょう」(同一二ノ九、一三)。

この世界の歴史の終末が近づくにつれて、ダニエルが記した預言はわれわれが住んでいる時代そのものに関する

るものであるから、特別に注意を払わなければならない。それとともに、新約聖書の最後の書の教えを結びつけなければならない。サタンは、ダニエル書とヨハネが書いた黙示録の預言的部分は、理解することができないと多くの人々に思い込ませている。しかし、これらの預言を研究する者には特別の祝福が与えられると、明らかに約束されているのである。終わりの時に封が開かれるダニエルの預言に関して、「賢い者は悟るでしょう」と語られたのである（同一二ノ一〇）。そして各時代にわたる神の民の指針として、キリストがそのしもべヨハネにお与えになった啓示については、「この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである」との約束が与えられているのである（ヨハネの黙示録一ノ三）。

われわれは、ダニエル書と黙示録に明らかにされている国々の興亡から、単なる外見的、世俗の栄光がどんなに無価値なものであるかを学ばなければならない。今日においても世界にその比を見ないバビロンの権力と壮麗さのすべては、当時の人々にとっては実に堅固で永続的に見えたのであるが、なんと完全に過ぎ去ってしまったことである。それは、「草花のように過ぎ去った（ヤコブ一ノ一〇）。同様にメド・ペルシヤ王国も、ギリシヤ王国もローマ王国も滅びた。そして神をその基としないものはみな滅びるのである。ただ神のみことと結合し、神の品性をあらわすものだけが永続することができるのである。神の原則だけが、この世界における唯一の堅固なものである。

諸国の歴史と来たるべき出来事についての啓示において、神のみことろがどのように達成されるかを研究することは、見えるものと見えないものの真の価値を評価し、人生の真の目的が何であるかを学ぶ助けとなる。こうして、現世の出来事を永遠の光に照らしてみると、われわれはダニエルと彼の仲間たちのように、真実で気

高く、永続するもののために生きることであろう。そしてわれわれは、われわれの主、救い主の永遠に続く祝福された王国の原則を現世において学び、彼がおいでになる時には、彼とともにその国に入って、それを自分のものとする準備が整うのである。

第四十五章 バビロン捕囚から帰る

クロス軍勢がバビロンの城壁の前に出現したことは、ユダヤ人にとっては捕囚から解放されることの近いしるしであった。靈感はクロスが生まれる一世紀以上も前に彼の名を挙げて、彼が不意にバビロンを占領して捕囚の民を解放する道を開き、実際にどんなことをするかを記録させたのである。イザヤは次のように語った。

「わたしはわが受膏者クロスの

右の手をとって、

もろもろの国をその前に従わせ、…

とびらをその前に開かせて、

門を閉じさせない、と言われる主は

その受膏者クロスにこう言われる、

『わたしはあなたの前に行って、

もろもろの山を平らにし、

青銅のとびらをこわし、鉄の貴の木を断ち切り、

あなたに、暗い所にある財宝と、

ひそかな所に隠した宝物とを与えて、

わたしは主、あなたの名を呼んだ

イスラエルの神であることをあなたに知らせよう。」

(イザヤ書四五ノ一―三)

ペルシヤの征服者たちの軍勢が、水をよそに流して川を通ってバビロンの首都の中心に不意に侵入し、不用意にも無防備のまま開かれていた内壁の扉を通ってきたことは、ユダヤ人にとっては彼らの圧迫者の突然の崩壊に関する、イザヤの預言が文字どおりに成就した明白な証拠であつた。そしてこれは、神が彼らのために諸国の動向を導いておられることの、動かすことのできないしるしでなければならなかつた。バビロンの占領と陥落を描写した預言と、次の言葉は不可分につながっている。

「またクロスについては、『彼はわが牧者、

わが目的をことごとくなし遂げる』といい、

エルサレムについては、

『ふたたび建てられる』といい、

神殿については、

『あなたの基がすえられる』と言う」。

「『わたしは義をもってクロスを起した。

わたしは彼のすべての道をまっすべにしよう。

彼はわが町を建て、

わが捕囚を価のためでなく、

また報いのためでもなく解き放つ』と

万軍の主は言われる」。

(同四四ノ二八。四五ノ一二)。

捕囚の民が速やかに解放される望みを抱くに至ったのは、ただこれらの預言だけに基づいたのではなかった。

彼らの手もとはエレミヤの書物があつた。そして、イスラエルがバビロンから回復される前に経過すべき期間が、そこに明示されていたのである。主はその使命者によって、預言されたのであつた。「主は言われる、七十年の終つた後に、わたしはバビロンの王と、その民と、カルデヤびとの地を、その罪のために罰し、永遠の荒地とする」(エレミヤ書二五ノ一二)。ユダの残りの者たちに対しては、熱心な祈りに答えて恵みが与えられるのであつた。「わたしはあなたがたに会つと主は言われる。わたしはあなたがたの繁栄を回復し、あなたがたを万国から、すべてわたしがあなたがたを追いやつた所から集め、かつ、わたしがあなたがたを捕われ離れさせたそのものと所に、あなたがたを導き帰ろうと主は言われる」(同二九ノ一四)。

ダニエルと彼の仲間たちは、神の民に対するみこころを描写した、これらの預言、また類似した預言をよく調

べた。そして今や、急速な事件の展開が、諸国間に神の大いなるみ手が働いていることを示したときに、ダニエルはイスラエルに与えられた約束に、特別な注意を払ったのである。彼は預言の言葉を信じていたので、聖書の筆者たちが預言した経験へと導かれていった。「主はこう言われる、バビロンで七十年が満ちるならば、わたしはあなたがたを顧み、わたしの約束を果し、あなたがたを…導き帰る。主は言われる、わたしがあなたがたに對していただいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである。その時、あなたがたはわたしに呼ばわり、来て、わたしに祈る。わたしはあなたがたの祈を聞く。あなたがたはわたしを尋ね求めて、わたしに会う。もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば」(エレミヤ書二九ノ一〇ー一二)。

バビロンが滅亡する少し前に、ダニエルがこれらの預言を瞑想し、時に関する理解を神に祈り求めていた時に、国家の興亡に関する一連の幻が彼に与えられた。ダニエル書七章に記されている第一の幻とともに、解き明かしが与えられた。しかしすべての事が預言者に明らかにされたのではなかった。彼はこの時の経験について、「これを思いまわして、非常に悩み、顔色も変った」と書いた(ダニエル書七ノ二八)。

もう一つの幻によって、将来の出来事についてさらに光が与えられた。そしてこの幻の最後のところで、ダニエルはびとりの聖者の語っているのを聞いた。またひとりの聖者があって、その語っている聖者にむかって…『幻にあらわれたことは、いつまでだろうか』と言うのを聞いた(同八ノ一三)。「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」という解答の言葉が、彼の心を大いに悩ました(同八ノ一四)。彼は熱心に幻の意義を知ろうとした。彼はエレミヤが預言した七十年の捕囚の期間と、神の聖所が清められる前

に経過すると、幻の中で天の聖者が宣言するのを聞いた二千三百年との間の関係を、理解することができなかった。天使ガブリエルはダニエルに部分的解き明かしを与えたが、彼は「これは多くの日の後にかかわる事だから」という言葉を聞いたときに、気を失ってしまった。「われダニエルは疲れはてて、数日の間病みわずらったが、後起きて、王の事務を執った。しかし、わたしはこの幻の事を思つて驚いた。またこれを悟ることができなかった」と、ダニエルは自分の経験を記している(同八ノ二六、二七)。

ダニエルはイスラエルのためになお心を悩まし、改めてエレミヤの預言を研究した。それは非常にはつきりしたものであった。彼は書物に記されたこれらの明白な記録によつて、「主が預言者エレミヤに臨んで告げられたその言葉により、エルサレムの荒廢の終るまでに経ねばならぬ年の数は七十年であることを」悟つた(同九ノ一二)。ダニエルは確かな預言の言葉に基づいた信仰をもつて、これらの約束が速やかに成就されるように主に嘆願した。ダニエルは神の誉れが保たれるように嘆願した。彼はその訴えのなかで、神のみこころに従わなかつた人々と自分とを全く同じ状態におき、彼らの罪を自分自身の罪として告白した。

ダニエルは言つた、「それでわたしは、わが顔を主なる神に向け、断食をなし、荒布を着、灰をかぶつて祈り、かつ願い求めた。すなわちわたしは、わが神、主に祈り、ざんげして言つた」(同九ノ三、四)。ダニエルは長い間神に仕え天使によつて「大いに愛せられている者」と呼ばれたにもかかわらず、彼は今、神の前に罪人として立ち、彼の愛する民の大いなる必要を訴えたのである。彼の祈りは簡単でありながら雄弁で、しかも熱烈極まるものであった。彼は嘆願して言つた。

「ああ、大いなる恐るべき神、主、おのれを愛し、おのれの戒めを守る者のために契約を保ち、いつくしみを

施される者よ、われわれは罪を犯し、悪をおこない、よこしまなふるまいをなし、そむいて、あなたの戒めと、おきてを離れました。われわれはまた、あなたのしもべなる預言者たちが、あなたの名をもって、われわれの王たち、君たち、先祖たち、および国のすべての民に告げた言葉に聞き従いませんでした。主よ、正義はあなたのものです。恥はわれわれに加えられて、今日のような有様です。すなわちユダの人々、エルサレムの住民および全イスラエルの者は、近き者も、遠き者もみな、あなたが追いやられたすべての国々で恥をこうおりました。これは彼らがあなたにそむいて犯した罪によるのです。…あわれみと、ゆるしはわれわれの神、主のものです。これはわれわれが彼にそむいたからです。「主よ、どうぞあなたが、これまで正しいみわざをなされたように、あなたの町エルサレム、あなたの聖なる山から、あなたの怒りと憤りを取り去ってください。これはわれわれの罪と、われわれの先祖の不義のために、エルサレムと、あなたの民が、われわれの周囲の者の物笑いとなったからです。それゆえ、われわれの神よ、しもべの祈と願いを聞いてください。主よ、あなたが自身のために、あの荒れたあなたの聖所に、あなたのみ顔を輝かせてください。わが神よ、耳を傾けて聞いてください。目を開いて、われわれの荒れたさまを見、み名をもつてとなえられる町をぞらしてください。われわれがあなたの前に祈をささげるのは、われわれの義によるのではなく、ただあなたの大きいなるあわれみによるのです。主よ、聞いてください。主よ、ゆるしてください。主よ、み心に留めて、おこなってください。わが神よ、あなたが自身のために、これを延ばさないでください。あなたの町と、あなたの民は、み名をもつてとなえられているからです」(ダニエル書九ノ四一九、一六―一九)。

天の神はダニエルの熱心な祈りに、耳を傾けておられた。赦しと回復を求める彼の嘆願が終わらないうちに、

大いなる天使ガブリエルが彼に現れ、バビロンの滅亡とベルシャザルの死に先立って彼が見た幻に、彼の注意を向けた。そしてガブリエルは、「エルサレムを建て直せ」という命令が出」る時から始まる七十週の期間について、くわしくダニエルに説明した(同九ノ二五)。

ダニエルの祈りは「ダリヨス……の治世の第一年に」捧げられた(同九ノ一、二)。ダリヨスはメデアの王で、その將軍クロスはバビロンから世界的支配権を奪ったのである。ダリヨスの治世は、神から榮譽を受けた。「彼を強め、彼を力づけ」るために、天使ガブリエルがダリヨスのところにつかわされた(同一一ノ一)。バビロンが滅びて約二年足らずで彼は死に、クロスが王位についた。そして彼の治世が始まるとともに、ネブカデネザルがヘブル人の最初の一団をユダヤの故郷から、バビロンに連れていった時から七十年が経過したのである。

神はダニエルがししの穴から救い出されたことを、クロス大王の心に好感を抱かせるためにお用いになった。先見の明を備えた政治家として、神の人ダニエルはすぐれた特質を持っていたので、ペルシャの王は彼に非常な敬意を表して、彼の判断を尊んだ。そして今、エルサレムにある神殿を再建させると神が言われたちようどその時に、神はご自分の代理者としたクロスに働きかけて、ダニエルがよく知っていたクロス自身に関する預言を彼に認めさせて、ユダヤ民族に自由を与えさせようとなさった。

王が自分の生まれる百年以上も前に預言された、バビロン占領の模様についての言葉を見たときに、また「あなたにわたしを知らなくても、わたしはあなたを強くする。これは日の出る方から、また西の方から、人々がわたしのほかに神のないことを知るようになるためである」と、宇宙の王が彼に言われた言葉を読んだときに、また、「わがしもべヤコブのために、わたしの選んだイスラエルのために、わたしはあなたの名を呼んだ。あなた

がわたしを知らなくても、わたしはあなたに名を与えた」という永遠の神の宣言を、彼が目の前に見たときに、また「わたしは義をもってクロスを起した。わたしは彼のすべての道をまっすぐにしよう。彼はわが町を建て、わが捕囚を価のためでなく、また報いのためでもなく解き放つ」という靈感の記録をたどったときに、彼は深く感動した（イザヤ書四五ノ五、六、四、一三）。そして自分に命じられた任務を遂行しようと決心したのである。彼はユダヤの捕囚たちに、自由を与えようとした。そして主の神殿の再建を援助しようとしたのである。

クロスは「全国に布告を發し」、ヘブルびとたちの帰還と、神殿再建の援助をすることを發布した。王はこの布告の中で、神に感謝して言った。「天の神、主は地上の国々をことごとくわたしに下さって、主の宮をユダにあるエルサレムに建てることをわたしに命じられた。あなたがたのうち、その民である者は皆その神の助けを得て、…エルサレムに上って行き、イスラエルの神、主の宮を復興せよ。彼はエルサレムにいます神である。すべて生き残って、どこに宿っている者でも、その所の人々は金、銀、貨財、家畜をもって助け、そのほかにまたエルサレムにある神の宮のために真心よりの供え物をささげよ」（エズラ記一ノ一四）。

王はさらに、神殿の建物について指示を与えた。「エルサレムにある神の宮については、犠牲をささげ、燔祭を供える所の宮を建て、その宮の高さを六十キュビトにし、その幅を六十キュビトにせよ。大いなる石の層を三段にし、木の層を一段にせよ。その費用は王の家から与えられる。またネブカデネザルが、エルサレムの宮からバビロンに移した神の宮の金銀の器物は、これをかえして、エルサレムにある宮もとの所に持って行き、これを神の宮に納めよ」（同六ノ三一五）。

この布告は王の領地の最も遠方の地にまで伝えられて、各地の離散した民の間に大きな喜びがわき起こった。

多くの人々はダニエルのように預言を研究し、神がシオンのために約束しておられた介入を祈り求めていた。そして今や、彼らの祈りは聞かれようとしていた。彼らは心から喜んで歌に加わることができたのである。

「主がシオンの繁栄を回復されたとき、

われらは夢みる者のようであった。

その時われらの口は笑いで満たされ、

われらの舌は喜びの声で満たされた。

その時『主は彼らのために大いなる事をなされた』と

言った者が、もろもろの国民の中にあつた。

主はわれらのために大いなる事をなされたので、

われらは喜んだ。」

(詩篇一二六ノ一一三)

「ユダとベニヤミンの氏族の長、祭司およびレビびとなど、すべて神にその心を感動された者」は、すぐれた残りの民であつて、捕囚の地のユダヤ人のうちの約五万人の勇者たちであつた。彼らは与えられた驚くべき機会を活用して、「エルサレムにある主の宮を復興するために上つて行こうと」決心したのである。彼らの友人たちは、何も持たずに彼らを行かせなかった。「その周囲の人々は皆、銀の器、金、貨財、家畜および宝物を与えて彼らを力づけ」た。これらとそのほか多くの任意の捧げ物のほかに、「ネブカデネザルが、さきにエルサレムか

ら携え出し……た主の宮の器を取り出した。すなわちペルシャ王クロスは倉づかさミテレダテの手によってこれを取り出して、……合わせて五千四百六十九」個を、再建される神殿の用に当てた（エズラ記一ノ五——）。

クロスはダビデ王の子孫ゼルバベル（セシバザルとも呼ばれた）に、ユダヤに帰還する一団の人々の総督となる責任を負わせた。そして大祭司ヨシユアが彼を支持していた。荒涼とした砂漠を通った長い旅は、無事に終わった。神の多くのあわれみを感じた幸福な一団の人々は、直ちに破壊されていたものの再建の仕事に取りかかった。「氏族の長数人」は、神殿再建の費用をまかなうために進んで彼らの財産を捧げた。民は彼らの模範に倣って、わずかなものの中から心からの捧げ物をした（同二ノ六四——七〇参照）。

昔の神殿の庭の祭壇があったところに、祭壇ができるだけ速やかに建設された。人々はこの祭壇の献納の式に「ひとりのように……集まった」。そしてそこで、彼らは一つとなって、ネブカデネザルがエルサレムを破壊したときに中断された、聖なる儀式を復興したのである。彼らは再建中の家に住むために別れるに先立って、「仮庵の祭を行」った（同三ノ一——六参照）。

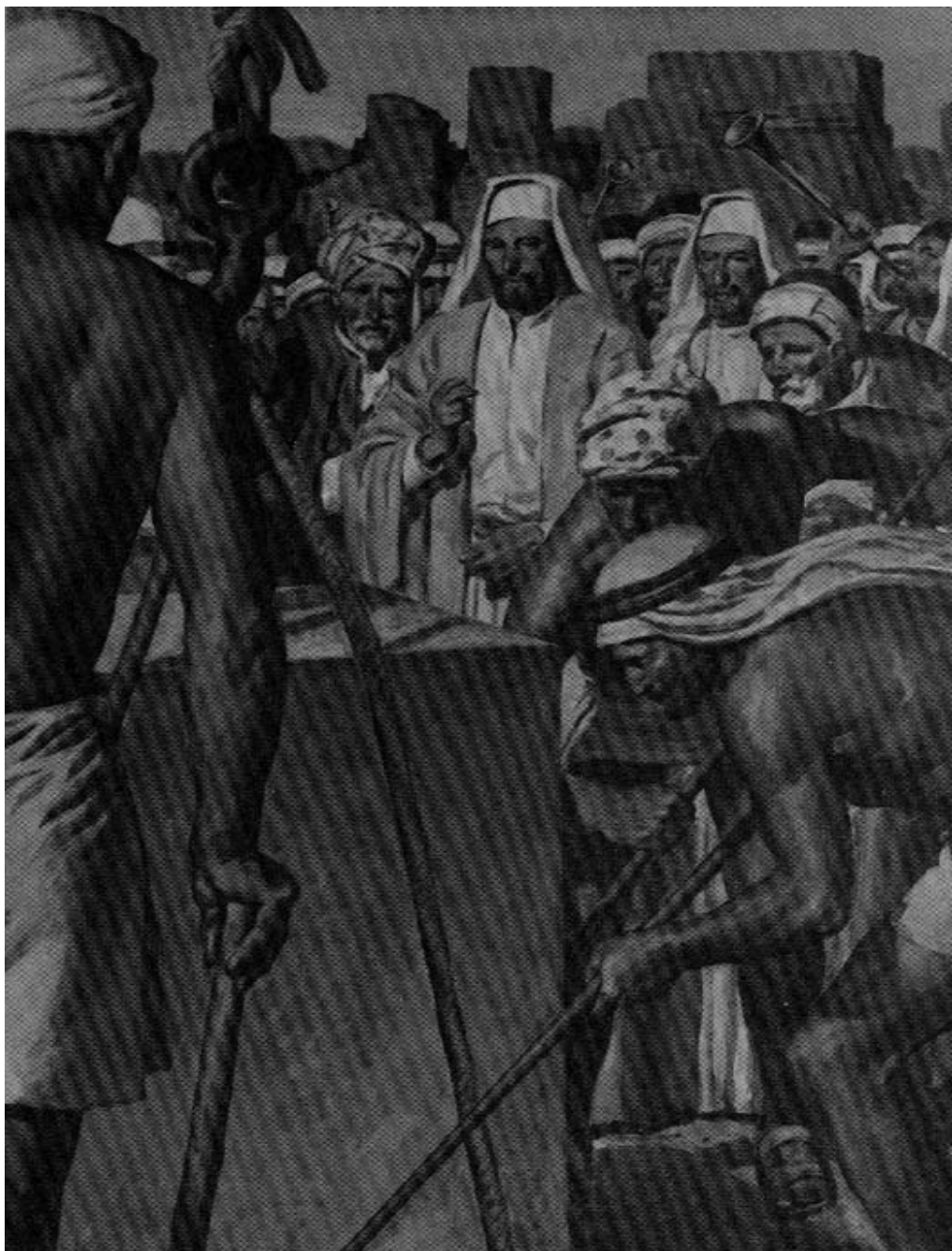
日毎の燔祭を捧げる祭壇を築いたことは、忠実な残りの民を大いに喜ばせた。彼らは心から、神殿の再建に必要な準備を行い、毎月準備が進行するのを見て勇気づけられた。彼らは長い間、目に見える神の臨在のしるしを持つことができなかった。今彼らは、先祖たちの背信を思い起こさせる悲しいしるしに取り囲まれているとは言え、何か神の赦しと恵みの永続的しるしを持ちたいと待望したのである。彼らは個人的所有や昔の特権を回復するに先立って、まず神の是認をいただくことを尊んだのである。神は彼らのために驚くべきことをなされた。そして彼らは、神が彼らとともにおられることを確信したのである。それでも彼らは、さらに大きな祝福を望んだ

のである。彼らは喜ばしい期待に胸をふくらませて、神殿が再建されて、神の栄光がそのなかから輝き出るのを見る時を待望したのである。

建築材料の準備に当たっていた職人たちは、廃虚のなかから、ソロモンの時代に神殿の敷地に運ばれた巨大な石をいくつか発見した。これらの石はすぐ使えるようになっていた。そのほか多くの新しい資材が準備された。やがて工事は進んで、基礎の石をすえる段階にきた。これは、工事の進行を見るために集まってきた、幾十の人の前で行われた。そして彼らは工事に参加した喜びを表した。隅石が置かれたとき、人々は祭司たちのラツパとアサフの子らのシンバルの伴奏に合わせて、「互に歌いあつて主をほめ、かつ感謝し、『主はめぐみ深く、そのいつくしみはとこしえにイスラエルに絶えることがない』と言った」(同三ノ一一)。

今再建されようとしていた神殿は、神がシオンに示そうと望まれた恵みについての、多くの預言の主題であった。そして礎石がすえられるときに、そこに居合わせた者はみな心からその場の精神にとけ込むべきであった。ところがその喜ばしい日に、音楽と賛美の叫びに混じって聞こえたのは、それとは一致しない音であった。「しかし祭司、レビびと、氏族の長である多くの人々のうちに、もとの宮を見た老人たちがあつたが、今この宮の基礎のすえられるのを見た時、大声をあげて泣いた」(同三ノ一一上句)。

これらの年老いた人々が、長く続いた頑なな生活の結果を考えたときに、彼らの心が悲しみに満たされたのは当然のことであった。もしも彼らとその同時代の人々とが神に従い、イスラエルに対する神のみこころを実行していたならば、ソロモンの神殿は破壊されることもなく、また捕囚も必要ではなかったことであろう。しかし彼らは、忘恩と不忠実のために、異邦人の間に散らされたのである。



ゼルバベルには総督の責任が負わせられた。彼は主立った家長たちと共に祭壇を築き、神殿の基礎をおいた。

今や状況は変わったのである。主は豊かなあわれみをもってふたたびその民を訪れ、彼らが故国に帰ることをお許しになった。過去の過ちに対する悲しみは、大いなる喜びの感情に代わるべきであった。神は神殿の再建を援助するように、クロスの心に感動をお与えになった。そして人々は、この事に対して深い感謝を表さなければならなかった。それなのある人々は、神の摂理の働きを認めることができなかった。彼らは喜び代わりに、失望と不満の念を抱いた、彼らはソロモンの神殿を見ていたのである。彼らは今建てられようとする建物の規模が劣っていることを嘆いたのである。

つぶやきと不満、好ましくない比較などは、多くの人々の心に暗い影を投げ、建設者たちの手を弱めた。職人たちは、最初からあからさまに批判され、非常な嘆きの原因となった建物の建設を、進めるべきものかどうかを疑問に思うようになった。

しかし会衆の中には、大きな信仰と広い幻をもった人々が多くいて、この劣った栄光に対してそれほど不満を感じなかった。「また喜びのために声をあげて叫ぶ者も多かった。それで、人々は民の喜び叫ぶ声と、民の泣く声とを聞きわけることができなかった。民が大声に叫んだので、その声が遠くまで聞えたからである」(エズラ記三ノ一二下句、一三)。

もしも基礎の石が置かれたときに喜ばなかった人々が、その日の彼らの不信仰の結果を予見することができたならば、恐れおののいたことであろう。彼らは自分たちの非難と失望の言葉の重要性を悟らなかった。また、彼らの不満の表明が、どれだけ主の家の完成を遅らせるに至るかを知らなかった。

最初の神殿の壮麗さと、その宗教的礼拝の厳粛な儀式は、捕囚前のイスラエルにとって何よりの誇りであった。

しかし彼らの礼拝には、神が最も重要と思われる特質に欠けていることがしばしばあった。最初の神殿の栄光、その礼拝の華麗さは、彼らを神に受け入れられるものとすることができなかった。彼らは神のみに、唯一の価値のあるものを捧げなかったのである。彼らは謙遜な、くだけた心の犠牲を神に捧げなかったのである。

神の国の極めて重要な原則が見失われるとき、儀式は繁雑になり過度に陥る。品性建設がある所になり、魂の麗しさが欠けて単純な信心深さが軽べつされるときに、誇りと虚飾を愛好する心は壮麗な教会の建物、りっぱな装飾、印象的儀式などを要求するのである。しかし、こうしたすべての事において、神に栄光が帰せられていないのである。神はその外見的優位ではなくて、教会を世俗から区別する誠実な敬神の念によって、教会を評価されるのである。神は教会員がキリストの知識に成長し、霊的経験に進むことによって教会を評価されるのである。神は愛と恵みの原則をお求めになる。どんなに芸術的に美しいものであっても、キリストの代表者のうちにあらわされる、性質と品性の美しさに比較することはできないのである。

会衆はその地における、最も貧しい人々であるかもしれない。外見上なんの魅力もないかもしれない。しかしもし会員たちが、キリストの品性の原則を持っているならば、天使たちがその礼拝に加わるのである。感謝にあふれた心から賛美と感謝が、香ばしい供え物のように神に昇っていくのである。

「『主に感謝せよ、主は恵みふかく、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない』と、

主にあがなわれた者は言え。

主は彼らを悩みからあがない、

「主にむかつて歌え、主をほめうた、え、

そのすべてのくすしきみわざを語れ。

その聖なるみ名を誇れ。

主を尋ね求める者の心を喜ばせよ」。

「主はかわいた魂を満ち足らせ、

飢えた魂を良き物で満たされるからである。

(詩篇一〇七ノ一、二。一〇五ノ二、三。一〇七ノ九)

第四十六章 敵対者に直面して

神殿の再建事業に取りかかったイスラエル人の近くに、サマリヤ人が住んでいた。彼らはサマリヤとガリラヤに残っていた十部族の人々と、アッシリヤの諸州から来た異教の移住者たちとの、雑婚によって生じた混血民族であった。後年、サマリヤ人は真の神を礼拝すると主張はしていたが、彼らはその考え方においても風習においても、偶像礼拝者であった。偶像とは、宇宙の支配者であられる生ける神を思い起こさせるものに過ぎないと、彼らは確かに言っていた。しかし人々は、偶像を崇拜する傾向を持っていた。

こうしたサマリヤ人は、捕囚からの回復期において、「ユダとベニヤミンの敵」として知られるようになった。「捕囚から帰ってきた人々が、イスラエルの神、主のために神殿を建てている事を聞き、ゼルバベルと氏族の長たちのもとに来て」その建設に彼らも参加したいと申し出た。「われわれも、あなたがたと一緒にこれを建てさせてください。われわれはあなたがたと同じく、あなたがたの神を礼拝します。アッシリヤの王エサル・ハドンがわれわれをここにつれて来た日からこのかた、われわれは彼に犠牲をささげてきました」と彼らは言った。し

かし、彼らが願い出た特権は与えられなかった。イスラエルの指導者たちは言った。「あなたがたは、われわれの神に宮を建てることにあずかつてはなりません。ペルシャの王クロス王がわれわれに命じたように、われわれだけで、イスラエルの神、主のために建てるのです」(エズラ記四ノ一一三)。

バビロンから帰ることを選んだのは、ほんのわずかの残りの者であつた。そして今、彼らが自分たちの力ではとうてい成し遂げられそうもない事業に着手するに当たって、一番近くににいる隣人が援助を申し出たのである。

サマリヤ人は自分たちも眞の神を礼拝していると言い、神殿の務めに関連した特権と祝福にあずかりたいという希望を表明した。彼らは、「われわれはあなたがたと同じく、あなたがたの神を礼拝します」と言った。「われわれも、あなたがたと一緒にこれを建てさせてください。」しかしもし、ユダの指導者たちがこの援助の申し出を受け入れたならば、彼らは偶像礼拝が侵入する扉を広く開くことになるのであつた。彼らはサマリヤ人に、誠意がないことを見抜いたのである。彼らは、これらの人々と同盟して得られる援助は、主の明白な命令に従って受けることができる祝福と比較するならば、全く無に等しいことを自覚したのである。

イスラエルが周囲の民との維持すべき関係について、主はモーセによつて次のように言われた。「彼らとなんの契約をもしてはならない。彼らに何のあわれみをも示してはならない。…それは彼らがあなたのむすこを惑わしてわたしに従わせず、ほかの神々に仕えさせ、そのため主はあなたがたにおかつて怒りを発し、すみやかにあなたがたを滅ぼされることとなるからである。」「あなたはあなたの神、主の聖なる民だからである。主は地のおもてのすべての民のうちからあなたを選んで、自分の宝の民とされた」(申命記七ノ一二四。一四ノ二)。

周囲の国々と契約関係を結んだ結果は、明白に予告されていた。モーセは宣言した。「主は地のこのはてから、

かのはてまでのもろもろの民のうちにあなたがたを散らされるであろう。その所で、あなたもあなたの先祖たちも知らなかった木や石で造ったほかの神々にあなたは仕えるであろう。その国々の民のうちであなたは安きを得ず、また足の裏を休める所も得られないであろう。主はその所で、あなたの心をおののかせ、目を衰えさせ、精神を打ちしおれさせられるであろう。あなたの命は細い糸にかかっているようになり、夜昼恐れおののいて、その命もおぼつかなく思うであろう。あなたが心にいだく恐れと、目に見るものによって、朝には『ああ夕であればよいのに』と言ひ、夕には『ああ朝であればよいのに』と言うであろう』（申命記二八ノ六四―六七）。「しかし、その所からあなたの神、主を求め、もし心をつくし、精神をつくして、主を求めるならば、あなたは主に会うであろう」という約束が与えられていた（同四ノ一九）。

ゼルバベルと彼の仲間たちは、これらの聖句とほかのこれに似た聖句をよく知っていた。そして今回の捕囚において、その成就の証拠を次々とみたのである。そして今、彼らはモーセが明らかに予告した刑罰を、彼らと彼らの先祖たちに下した罪惡を悔い改め、心から神に立ち返って神との契約關係を新たにしたために、破壊されたものを回復するためにユダヤに帰ることを許されたのであった。彼らはその事業のまず最初において、偶像礼拝者たちと契約を結ぶべきであつただろうか。

神は、「彼らとなんの契約をもしてはならない」と仰せになった。そして、このたび神の神殿の廢虚の前に築かれた祭壇において、主に再献身を誓った人々は、神の民と世俗との間には、常にはつきりした區別がなければならぬことを自覚したのである。彼らは、神の律法の要求するところを知っていると云いながら、それに従わない者たちと、同盟を結ぶことを拒否したのである。

イスラエルの教訓として申命記に示された原則は、神の民が終末に至るまで従わなければならないものである。眞の繁栄は、われわれが神との契約関係を持續することにあるのである。われわれは神を恐れない人々と同盟を結んで、原則を曲げることはできない。

キリスト者であると公言する者が世俗の人々に影響を及ぼすためには、ある点まで世俗と妥協しなければならないと考える危険が常にある。しかしそのような行動は、大きな利益をもたらすように思われるが、それは常に靈的損失に終わるのである。真理の敵はへつらいによってわれわれを誘い、取り込もうとしてあらゆる陰險な手段を用いてくるから、神の民は嚴重に警戒していなければならない。彼らはこの世界においては、危険に満ちた道を旅する旅人であり、寄留者である。彼らは、忠誠の道からそらそうとして向けられる、巧妙な口実や魅惑的な誘惑に心を引かれてはならない。

最も恐るべきものは、神の働きに公然と反対する敵ではない。ユダとベニヤミンの敵のように、なめらかな言葉と美しい表現を用いて、いかにも神の民と友好的同盟を求めるかのように近づいてくる者たちが、もっと大きな欺瞞力を持っている。このような人々に対して、ひとりびとりは十分警戒して、注意深く隠された巧みなわなに、気づかずに捕らえられることのないようにしなければならない。特に今日、地上の歴史が終わろうとしているときに、主はご自分の民が、気をゆるめることなく警戒することを要求しておられる。しかし、戦いはどんなに絶え間なく続いても、だれひとりとして孤軍奮闘するままに放置されていない。天使たちは、へりくだって神の前を歩く者を助け保護する。主はご自分に信頼する者を裏切られることはない。主の民が、悪から保護されることを求めて主に近づくときに、主は彼らを愛しあわれんで、敵の前で彼らの上に旗を掲げられる。彼らに触れ

てはならない。彼らはわたしのものである。わたしは彼らをわたしのたなごころに彫り刻んだと、主は言われる。

サマリヤ人たちはたゆまず反対して、「ユダの民の手を弱らせて、その建築を妨げ、その企てを破るために役人を買収して彼らに敵せしめ、ペルシヤ王クロスの代からペルシヤ王ダリヨスの治世にまで及んだ」(エズラ記四ノ四、五)。彼らは虚偽を伝えて、疑念を持ちやすい人々の心に疑惑を抱かせた。しかし、長年にわたって悪の勢力は抑制され、ユダの人々は自由に彼らの工事を続けたのである。

サタンがメド・ペルシヤ王国の最高の権威者に働きかけて、神の民に敵意を示させようと努力する一方において、天使たちは捕囚の民のために働いていた。この争闘は、全天が関心を持ったものであった。われわれは預言者ダニエルによって、善と悪との軍勢間の、大きな戦いの片鱗を知ることができる。ガブリエルは三週間にわたって、クロスの心に働いていた影響力に対抗しようとした、暗黒の勢力と戦った。そしてその戦闘の終了に先立って、キリストご自身がガブリエルを助けに来られた。ガブリエルは言っている。「ペルシヤの国の君が、二十一日の間わたしの前に立ちふさがったが、天使の長のひとりであるミカエルがきて、わたしを助けたので、わたしは、彼をペルシヤの国の君と共に、そこに残しておいた」(ダニエル書一〇ノ一二)。天が神の民のためになし得ることは、すべてなされた。勝利はついに得られた。そして敵の勢力は、クロスの全時代と七年半にわたった彼の子カンビセスの時代全体にわたって、制圧されたのであった。

これはユダヤ人にとって、驚くべき機会であった。天の最高の権威者たちが、王たちの心に働きかけていた。であるから神の民は、クロスの命令を実行するために、最も活発に活動すべき時であった。彼らは、神殿とその務めの復興のために努力を惜しむことなく、ユダヤの故郷にふたたび定着しなければならなかった。しかし、神

が力をあらわされる日に、快く従わない者が多くいたのである。彼らの敵の反対は、強力で頑強であった。そして建設者たちは、徐々に勇気を失っていった。ある人々は基礎の石が置かれたときに、多くの者が工事に対する不信をあらわしたことを、忘れることができなかった。そして、サマリヤ人がますます大胆になるにつれて、多くのユダの人々は、果たして再建の時が来たのかどうかと疑問を抱いた。多くの働き人たちは失望落胆して家に帰り、普通の職業についた。

カンビセスの治世中、神殿の工事は遅々として進まなかった。そして、にせスメルデス(アルタシヤスタとも呼ばれる―エズラ記四ノ七参照)の治世中、サマリヤ人たちはこの無節操な王位略奪者に迫って、ユダの人々が神殿と都を再建するのを禁止する命令を出させたのである。

一年以上にわたって神殿はなおざりにされ、ほとんど見捨てられてしまった。人々は自分たちの家に住んで、物質的に繁栄しようと努めたが、その状態は哀れなものであった。彼らはどんなに働いても、繁栄しなかったのである。自然の力そのものが、彼らに逆らっているかのように思われた。彼らが神殿を荒廃させていたために、主は彼らの財産に破滅的な干ばつをお送りになった。神の恵みのしるしとして、彼らに野や畑の産物、穀物、油、酒などをお与えになった。しかし、彼らがこれらの豊かな賜物を利己的に用いたために、祝福は取り去られたのである。

ダリヨス・ヒスタスパスの治世の初期は、このような状態であった。イスラエル民族は物質面と同様に、霊的にも哀れむべき状態にあった。彼らは長期にわたって、つぶやき疑った。彼らは長い間、主の神殿が荒廃しているのを冷淡に眺めながらも、自分たちの個人的利益を第一にしてきたので、多くの者は彼らをユダに回復なさ

た神のみこころを見失ってしまった。そしてこの人々は、「主の家を再び建てる時は、まだこない」と言っている（ハガイ書一ノ二）。

しかしこの暗黒の時にあってさえ、神に信頼する者にとって、希望がなかったわけではなかった。預言者ハガイとゼカリヤは、この危機に当面するために立てられた。これらの任命を受けた使命者たちは、人心を揺り動かす証言によって、人々に彼らの苦難の原因を明らかにした。物質的繁栄がなかったことは、まず神を彼らの第一の関心事にすることを怠った結果であると、預言者たちは宣言した。もしイスラエルの人々が、神の家を建てることを彼らの第一の仕事として、神を崇め、神に対する敬意と礼儀を示したならば、彼らは神の臨在と祝福を受けたことであろう。

ハガイは失望に陥った人々に、次のように痛烈な質問をした。「主の家はこのように荒れはてているのに、あなたがたは、みずから板で張った家に住んでいる時であろうか。それで今、万軍の主はこう言われる、あなたがたは自分のなすべきことをよく考えるがよい。あなたがたは多くまいても、取入れは少なく、食べても、飽きることはない。飲んで、満たされない。着ても、暖まらない。賃銀を得ても、これを破れた袋に入れているようなものである」（同一ノ四一六）。

それから主は、彼らが誤って解釈することがないような言葉で、彼らに欠乏をもたらした原因をお示しになった。「あなたがたは多くを望んだが、見よ、それは少なかった。あなたがたが家に持ってきたとき、わたしはそれを吹き払った。これは何ゆえであるかと、万軍の主は言われる。これはわたしの家が荒れはてているのに、あなたがたは、おのおの自分の家の事だけに、忙しくしている。それゆえ、あなたがたの上の天は露をさし止め、

地はその産物をさし止めた。また、わたしは地にも、山にも、穀物にも、新しい酒にも、油にも、地に生じるものにも、人間にも、家畜にも、手で作るすべての作物にも、ひでりを呼び寄せた」(同一ノ九一一)。

「あなたがたは、自分のなすべきことを考えるがよい。山に登り、木を持ってきて主の家を建てよ。そうすればわたしはこれを喜び、かつ栄光のうちに現れる」と主は訴えられた(同一ノ七、八)。

イスラエルの民の指導者たちは、ハガイによって与えられた勧告と譴責の言葉を心に留めた。彼らは、神が真剣に訴えておられることを感じた。彼らは自分たちの物質的および霊的の繁栄が、ともに神の命令に忠実に服従することにかかっているという、くり返して与えられた教えを無視することはできなかった。預言者の警告によって目を覚まされて、ゼルバベルとヨシユア、および「残りのすべての民は、その神、主の声と、その神、主のつかわされた預言者ハガイの言葉とに聞きしたが」った(同一ノ一二)。

イスラエルが服従する決意をするや否や、譴責の言葉につづいて励ましの言葉が与えられた。「ハガイは……民に告げて言った、『わたしはあなたがたと共にいると主は言われる』。そして主は、……ゼルバベルの心と、……ヨシユアの心、および残りのすべての民の心を、振り動かされたので、彼らは来て、その神、万軍の主の家の作業にとりかかった」(同一ノ一三、一四)。

神殿の作業が再開されてから一か月もたたないうちに、建設者たちにはもう一つの慰めの言葉が与えられた。「ゼルバベルよ、勇気を出せ。……ヨシユアよ、勇気を出せ。主は言われる。この地のすべての民よ、勇気を出せ。働け。わたしはあなたがたと共にいると、万軍の主は言われる」(同一ノ四)。

主はシナイ山の前に陣営を張った、イスラエルの人々に言われた。「わたしはイスラエルの人々のうちに住ん

で、彼らの神となるであろう。わたしが彼らのうち住むために、彼らをエジプトの国から導き出した彼らの神、主であることを彼らは知るであろう。わたしは彼らの神、主である」(出エジプト記二九ノ四五、四六)。そして今、彼らは何度となく「そむいてその聖なる霊を憂えさせた」にもかかわらず(イザヤ書六三ノ一〇)、神は預言者の言葉によって、もう一度救いの手を伸べておられたのである。神は彼らが、神のみこころと協力したことの承認として、神の霊が彼らのうちに宿するという契約を、更新しておられたのである。そして神は、彼らに「恐れるな」とお命じになった。

主は今日の彼の民に、「勇気を出せ。働け。わたしはあなたがたと共にいる」と言われる。キリスト者は常に主という強力な助け手を持っている。主がどのような方法で助けて下さるか、われわれには分からない。しかし主は、ご自分に信頼する者を決して失望に陥れられないことを知っている。もしキリスト者が、彼らに対する敵の策略をくじくために、主が何回彼らの道に指図をお与えになったかを自覚することができたならば、不平を言いながらよるめき、つまりくことはないのである。彼らは固く神を信じて、どんな試練にも揺り動かされることはない。彼らは神を自分の知恵とし、力とする。そして神は彼らによって、成し遂げようと望まれることを実現されるのである。

ハガイが叫んだ熱烈な嘆願と激励の言葉を、ゼカリヤが強調してさらに追加した。神は起きて建てよという命令を実行するよう、イスラエルを促すためにゼカリヤを起こして、ハガイのかたわらに立たされた。ゼカリヤの第一の言葉は、神の言葉は絶対に間違いがないという確証と、確実な預言の言葉に耳を傾ける者に対する、祝福の約束であった。

イスラエルの民は、畑が荒れ果て、乏しい食糧の貯えが急速に減少し、非友好的な民族に取り囲まれていたにもかかわらず、神の使命者たちの召しに答えて信仰をもって前進した。そして彼らは、荒廃した神殿の再建のために精出して働いた。それは、しっかりと神に信頼しなければならぬ仕事であった。民が彼らの分をしようと努力して、心と生活に神の恵みが新たに与えられることを願い求めたときに、ハガイとゼカリヤを通じて言葉が次々と与えられた。そしてそれとともに、彼らの信仰は豊かに報われ、彼らが再建している神殿の将来の栄光に関する神の言葉は、必ず成就するという確証も与えられた。時が満ちたときに、この建物そのものの中に、万物の願うところのものであられるかたが人類の教師、救い主として出現なさるのであった。

こうして建設者たちは、自分たちだけで苦闘するように放置されていなかった。「神の預言者たちも、彼らと共にいて彼らを助けた。」万軍の主ご自身が、「勇気を出せ。働け。わたしはあなたがたと共にいる」と言われた（エズラ記五ノ二。ハガイ書二ノ四）。

彼らが心から悔い改めて、自発的に信仰をもって前進しようとしたときに、物質的繁栄の約束が与えられた。「わたしはこの日から、あなたがたに恵みを与える」と主は言われた（ハガイ書二ノ一九）。

バビロンから帰還以来、ずっと激しく試練を受けてきた彼らの指導者ゼルバベルに、最も尊い言葉が与えられた。神の選民のすべての敵が滅ぼされる時が来ると、主は言われた。「わがしもべゼルバベルよ、…その日、わたしはあなたを立て、あなたを印章のようにする。わたしはあなたを選んだからであると、万軍の主は言われる」（同二ノ二三）。ここでイスラエルの総督ゼルバベルは、彼が経てきた失望と悩みの中にあって、彼を導いた摂理の意味を悟ることができた。

ゼルバベルに与えられたこの個人的な言葉は、各時代の神の民に対する励ましのために、記録に残されたのである。神が民に試練をお送りになるのは、目的があるのである。神は、もし彼らが初めから終わりを見ることできて、彼らが達成しているみこころの輝かしさを悟ることができたならば、彼らが導いてほしいと考える以外の道に導かれることは、絶対にならないのである。神が彼らに試みや試練としてお与えになるものはみな、彼らが神のために強くなり、苦しみに耐えるためである。

ハガイとゼカリヤの言葉を聞いて人々は目を覚まし、神殿再建のためにできる限りの努力をするようになった。ところが彼らが工事に従事したところ、妨害を企てたサマリヤ人やその他の民族から、痛烈な攻撃を受けた。あの時はメド・ペルシャの領地の、その地域の知事たちがエルサレムにやってきて、だれが神殿を再建することを命じたかをたずねた。もしこの時ユダの人々が、主の指導を信頼していなかったならば、この質問は彼らにとって悲しい結果に終わったことであろう。「しかしユダヤ人の長老たちの上には、神の目が注がれていたので、彼らはこれをやめさせることができず、その事をダリヨスに奏して、その返答の来るのを待った」（エズラ記五ノ五）。知事たちに対する返答は非常に賢明に行われたので、彼らは当時のメド・ペルシャの王ダリヨス・ヒスタスパスに手紙を書いて、クロスが発布した最初の布告に彼の注意を促すことに決定したのである。その布告はエルサレムにある神の神殿の再建を命じ、そのための費用は王の倉から支払われるべきことを命じたものであった。

ダリヨスはこの布告を探してそれを発見した。そこで王は、問い合わせてきた人々に、神殿再建の推進を許すことを命じた。ダリヨスは次のように命じた。「神のこの宮の工事を彼らに任せ、ユダヤ人の知事とユダヤ人の長老たちに、神のこの宮をもとの所に建てさせよ。**わたしはまた命を下し**、神のこの宮を建てることについて、

あなたがたがこれらのユダヤ人の長老たちになすべき事を示す。王の財産、すなわち川向この州から納めるみつぎの中から、その費用をじゅうぶんそれらの人々に与えて、その工事を滞らないようにせよ。またその必要とするもの、すなわち天の神にささげる燔祭の子牛、雄羊および小羊ならびに麦、塩、酒、油などエルサレムにいる祭司たちの求めにしたがって、日々怠りなく彼らに与え、彼らにこうばしい犠牲を天の神にささげさせ、王と王子たちの長寿を祈らせよ」(同六ノ七一〇)。

王はさらに、命令を少しでも変える者があるならば、厳しい罰を下すと命じた。そして王は、次のような驚くべき言葉をもって終わった。「これを改めよとする者、あるいはエルサレムにある神のこの宮を滅ぼそうとして手を出す王あるいは民は、かしこにその名をとどめられる神よ、願わくはこれを倒されるように。われダリヨスは命を下す。心してこれを行え」(同六ノ一一二)。こうして主は、神殿完成のための準備をして下さったのである。

この命令が出される前の数か月間、イスラエルの人々は信仰によって働きつづけた。そして神の預言者たちは、なお時機にかなった言葉によって援助を与え、そうした言葉によって、イスラエルに対する神のみこころを、働く人々の前に示したのである。ハガイの最後の記録された言葉が語られてから二か月後に、地上における神の働きについての一連の幻が、ゼカリヤに与えられた。比喻と象徴の形式によるこれらの言葉は、大いなる不安と悩みの時に与えられた。そしてそれは、イスラエルの神の名のもとに前進している人々にとって、特別の意味をもったものであった。指導者たちには、ユダヤ人に与えられた再建の許可が、今にも撤回されるのではないかと思われた。将来の見通しは暗たんとしていた。神は無限のあわれみと愛によって、ご自分の民を支え励まさなければならぬ。

ばならないことを見られた。

ゼカリヤは幻の中で、主の天使が次のように叫ぶのを聞いた。『万軍の主よ、あなたは、いつまでエルサレムとユダの町々とを、あわれんで下さらないのですか。あなたはお怒りになって、すでに七十年になりました』。主はわたしと語る天の使に、ねんごろな慰めの言葉をもって答えられた。そこで、わたしと語る天の使は言った、『あなたは呼ばわって言いなさい。万軍の主はこう仰せられます。わたしはエルサレムのため、シオンのために、大いなるねたみを起し、安らかにいる国々の民に対して、大いに怒る。なぜなら、わたしが少しばかり怒ったのに、彼らは、大いにこれを悩ましたからであると。それゆえ、主はこう仰せられます。わたしはあわれみをもってエルサレムに帰る。わたしの家はその中に建てられ、測りなわはエルサレムに張られる』(ゼカリヤ書一ノ一二―一六)。

今や預言者ゼカリヤは、「万軍の主はこう仰せられます、わが町々は再び良い物で満ちあふれ、主は再びシオンを慰め、再びエルサレムを選ぶ」と預言するように命じられた(同一ノ一七)。

ゼカリヤは、「ユダ、イスラエルおよびエルサレムを散らした」国々が、四つの角によって象徴されたのを見た。彼はその後、直ちに四人の鍛冶を示されたが、彼らは主の民と主の礼拝の家を回復するために、主がお用いになる勢力を表していた(同一ノ一八―二二参照)。

ゼカリヤは次のように言った。「またわたしが目をあけて見ていると、見よ、ひとりの人が、測りなわを手にとっているので、『あなたはどこへ行くのですか』と尋ねると、その人はわたしに言った、『エルサレムを測って、その広さと、長さを見ようとするのです』。すると見よ、わたしと語る天の使が出て行くと、またひとりの天

の使が出てきて、これに出会って言った、「走って行って、あの若い人に言いなさい、「エルサレムはその中に、人と家畜が多くなるので、城壁のない村里のように、人の住む所となるでしょう。主は仰せられます。わたしはその周囲で火の城壁となり、その中で栄光となる」と」。(同二ノ一―五)。

神はエルサレムの再建をお命じになったのであった。都を測る幻は、神が苦しんでいる人々に慰めと力を与え、彼らに永遠の契約という約束を成就するという確証であった。彼の保護は、「その周囲で火の城壁となる」と言われた。そして彼らによって、神の栄光がすべての人の子らにあらわされるのであった。神が民のために成し遂げておられたことは、全地に告げ知らされるのであった。「シオンに住む者よ、声をあげて、喜びうたえ。イスラエルの聖者はあなだがたのうちで大いなる者だから」(イザヤ書一一ノ六)。

第四十七章 大祭司ヨシユアと天使

神殿の建設者たちが着々と工事を進めたことは、悪の軍勢を大いに当惑させ、驚かせた。サタンは神の民の前に、彼らの品性の不完全なことを示して、彼らを弱め、失望させようとさらに努力することにした。もし、罪を犯したために長い間苦しんだ人々に、もう一度神の戒めを無視するよう説き伏せることができるならば、彼らはふたたび罪の奴隷となるのであった。

イスラエルはこの地上において、神の知識を保存するために選ばれていたので、特別にサタンの憎しみの的になった。サタンは彼らを滅ぼし去ろうとした。サタンは彼らが従順である間は、害を加えることはできなかった。そこで彼は、彼らを罪に誘うことに全力を注いだ。イスラエルはサタンの誘惑にまどわされて、神の律法を犯し、敵の餌食になるままに放置されたのである。

彼らは捕虜としてバビロンに連れていかれたけれども、神は彼らをお棄てにならなかった。神は預言者たちを送って譴責と警告を与え、彼らにその罪を認めさせようとなさった。彼らが神の前にへりくだり、真に罪を悔い

て神に立ち返るときに、神は彼らに励ましの言葉を送り、彼らを捕囚から救い出して、ふたたび神の恵みに浴させ、彼らを故国にもう一度確立させられるのであった。そして、今やこの回復の事業が開始され、イスラエルの残りの民がすでにユダヤに帰っているので、サタンは救いの計画を挫折させようと決意した。そしてこの目的に向かって、サタンは異教諸国に働きかけて、彼らを全滅させようとした。

しかしこの危機において、主は「ねんごろな慰めの言葉をもって」、神の民を強められた（ゼカリヤ書一ノ二三）。主なる神は、サタンの働きとキリストの働きに関する印象的な実例を挙げて、神の民を責める者を撃破する仲保者キリストの力をお示しになった。

預言者ゼカリヤは幻の中で、「大祭司ヨシユア」が「汚れた衣を着て」主のみ使いの前に立ち、苦しんでいる民のために、神のあわれみを乞い求めているのを見た（同三ノ一、二）。彼が神の約束の成就を嘆願しているときに、サタンは大胆に立ち上がって彼に抵抗する。サタンは、イスラエルが神の恵みに回復されるべきでない理由として、彼らの罪を指摘するのである。サタンは彼らを自分の餌食であると主張し、彼の手に引き渡すことを要求する。

大祭司はサタンの告発に対して、自分も自分の民も弁護することができない。大祭司は、イスラエルに罪がないとは主張しないのである。彼は民の罪を象徴している汚れた衣を着て、民の罪を彼が負っていることをあらわし、み使いの前に立って彼らの民を告白し、その悔い改めと謙遜を指し示して罪を赦される贖い主のあわれみによりすぎているのである。彼は信仰をもって、神の約束の成就を願い求める。

すると、罪人の救い主キリストご自身であるみ使いは、神の民の告発者を沈黙させて言われる。「サタンよ、

主はあなたを責めるのだ。すなわちエルサレムを選んだ主はあなたを責めるのだ。これは火の中から取り出した燃えさしではないか」(ゼカリヤ書三ノ二)。イスラエルは長い間、苦難の炉の中にいた。彼らはその罪のゆえに、サタンとその手下たちが彼らを滅ぼそうとして燃やした火の中で、ほとんど燃えつきそうになっていた。しかし今や、神が手を下して彼らを救い出されるのである。

ヨシユアのとりなしが聞かれたときに、「彼の汚れた衣を脱がせなさい」という命令が発せられる。そして、み使いはヨシユアに向かって、「見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう」と言った。「そこで清い帽子を頭にかぶらせ、衣を彼に着せた」(同三ノ四、五)。彼自身の罪と彼の民の罪は赦された。イスラエルは「祭服」、彼らのものと認められたキリストの義を着せられた。ヨシユアの頭にかぶせられた帽子は祭司たちがかぶるもので、「主に聖なる者」という印がついていた(出エジプト記二八ノ三六)。それは、彼には前にどんな罪があったとしても、今は神の聖所の中で、神に奉仕する資格があることを示していた。

今、み使いはヨシユアに言った。「万軍の主は、こう仰せられる、あなたがもし、わたしの道に歩み、わたしの務を守るならば、わたしの家をつかさどり、わたしの庭を守ることができる。わたしはまた、ここに立つている者どもの中に行き来することを得させる」(ゼカリヤ書三ノ七)。彼がもし従順であるならば、彼は神殿とすべての務めの管理者、または支配者として尊敬されるのであった。彼はこの地上においてさえ、保護天使の間を歩くのであった。そして彼は、ついには神のみ座の回りの、栄化された群衆に加わるのであった。「大祭司ヨシユアよ、あなたも、あなたの前にすわっている同僚たちも聞きなさい。彼らはよいしるしとなるべき人々だからである。見よ、わたしはわたしのしもべなる枝を生じさせよう」(同三ノ八)。来たるべき救い主なる枝に、イ

スラエルの希望がかかっていた。ヨシユアとその民とが罪の赦しを受けたのは、来たるべき救い主に対する信仰によってであった。彼らはキリストを信じる信仰によって、神の恵みに回復されたのであった。もし彼らがキリストの功績によって神の道を歩み、神の務めを守るならば、彼らは「よいしるしとなるべき人々」となり、地の国々の中で天の神の選民として尊敬されるのであった。

サタンがヨシユアとその民を責めたように、彼は各時代において、神のあわれみと恵みを求める人々を責めるのである。彼は「われらの兄弟らを訴える者、夜昼われらの神のみまえで彼らを訴える者」である（黙示録一二ノ一〇）。悪の勢力から救い出され、その名が小羊の命の書に記録されるすべての魂のために、大争闘がくり返される。敵の徹底的抵抗を引き起こすことなしに、神の家族に加わる者はひとりとしていない。しかし、当時イスラエルの希望であり、彼らの高きやぐら、彼らの義と贖いであられたおかたは、今日の教会の希望であられるのである。

主を求める者に対するサタンの告発は、彼らが罪を犯したことに對する腹立たしさからではない。なぜならばサタンは、彼らが神の律法を犯すことによってのみ、彼らを打ち負かすことができることを知っているからである。彼の告発はただ、キリストに對する敵意に基づいている。イエスは救いの計画によって、人類に對するサタンの支配力をくじき、彼の権力下から人々を救い出しておられる。大反逆者がキリストの最高位の証拠を見ると、彼のすべての憎しみと悪意とがき立てられる。そして、残忍な力と策略を用いて、救いを受け入れた人々をイエスから奪い取ろうとする。サタンは人々に懷疑心を起こさせ、神に對する信頼を失わせて、彼らを神から引き離そうとする。サタンは律法を犯すように人々を誘惑しておいて、彼らを自分の捕虜であると主張し、彼

らを自分から取り去る権利がキリストにあるのかと抗議する。

サタンは人々が神に赦しと恵みを求めるならば、それが与えられることを知っている。であるから、サタンは彼らの前にその罪を示して、失望させようとする。彼は神に従おうとする者に対して、常に苦情を言う機会をねらっている。彼は、彼らの最善で最も満足すべき奉仕でさえも、腐敗したもののように見せようとする。彼は、最も狡猾で最も残酷な様々の策略によって、彼らを罪に定めようと努めるのである。

人間は自分だけの力では、敵の告発に対処することができない。彼は罪に汚れた衣をまとして、罪を告白しながら、神の前に立っているのである。しかし、彼らの助け主であられるイエスが、悔い改めと信仰によってその魂を彼にゆだねたすべての者のために、力ある嘆願をして下さる。イエスは彼らの訴えを述べ、カルバリーの大いなるいさおしによって、告発者を打ち破られるのである。神の律法に対するイエスの完全な服従が、天においても地においても、いっさいの権威を彼に与えた。そして彼は、罪深い人間のためにあわれみと和解を、天の父にお求めになる。彼は神の民を責める者に向かって言われる。「サタンよ、主はあなたを責めるのだ。この人は、わたしの血によって買い取った、火の中から取り出した燃えさしである」。そして信仰をもってイエスに信頼する者に、彼は「見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう」という確証をお与えになるのである(ゼカリヤ書三ノ四)。

キリストの義の衣を着たものは、みな彼の前に選ばれ、忠実で真実なものとして立つのである。サタンは彼らを、救い主の手から奪い去る力がない。キリストは、忍耐と信仰をもって保護を仰ぎ求める者が、ひとりでも敵の権力下に陥ることをお許しにならない。彼は次のように約束しておられる。「わたしの保護にたよって、わた

しと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」(イザヤ書二七ノ五)。「あなたがもし、…わたしの務を守るならば、…ここに立っている者どもの中に行き来することを得させる」というヨシユアに与えられた約束は、すべての者に与えられている(ゼカリヤ書三ノ七)。神の天使は、この世界においてさえ、彼らの両側を歩く。そして彼らは、ついには、神のみ座を取りまく天使たちの中に立つのである。

ヨシユアとみ使いに関するゼカリヤの幻は、贖罪の大いなる日の、最後の場面における神の民の経験に、特別に当てはまる。その時、残りの教会は大きな試練と苦悩に陥る。神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持っている者に対して、龍とその軍勢は激しい怒りを発する。サタンは世界を自分の家来だと思っている。彼は多くの自称キリスト者たちさえ支配してしまった。しかしここに、小さい群れが彼の主権に抵抗しているのである。もしサタンが、彼らを地上から一掃することができれば、彼の勝利は完璧となる。サタンは異教諸国を動かしてイスラエルを滅ぼそうとしたように、近い将来、地上の邪悪な国々を扇動して、神の民を滅ぼそうとするのである。人々は神の律法に背いて、人間の布告に服従するように要求されるのである。

神に忠実に服従する人々は、脅かされ、攻撃され、追放される。彼らは、「両親、兄弟、親族、友人にさえ裏切られ」、殺されるであろう(ルカ二一ノ一六)。神のあわれみだけが、彼らの唯一の希望である。祈りが彼らの唯一の防御である。ヨシユアがみ使いの前で嘆願したように、残りの教会は、心へりくだり揺るがぬ信仰をいだいて、彼らの助け主イエスによって、赦しと救出を嘆願するのである。彼らは自分たちの生活の罪深さを、十分認めている。彼らは自分たちの弱さと無価値さを知っている。そして、今にも絶望するばかりである。

誘惑者サタンは、ヨシユアのそばに立ったように、彼らのそばに立って告発する。彼は、彼らの汚れた衣、彼

らの品性の欠陥を指摘する。彼は、彼らの弱さと愚かさ、忘恩と罪、彼らがキリストと似ておらず、贖い主の栄えを汚したことを示す。彼は、彼らの状態は絶望的で、彼らの罪のしみは洗い去ることができないと思わせて、恐怖に陥れようとする。彼は彼らの信仰を失わせて、彼の誘惑に屈服させ、神への忠誠から引き離そうと望むのである。

サタンは自分が神の民に犯させた罪を、正確に知っている。そしてサタンは、彼らが罪を犯したから神の保護を受けられなくなったと言って告発し、自分には彼らを滅ぼす権利があると主張するのである。彼は彼自身と同様に、彼らも神の恵みから除外されるべきであると言うのである。「この人々が、天におけるわたしの場所を占め、わたしといっしょになった天使たちの場所を占める人々であろうか。彼らは、神の律法に従うと言っている。しかし、彼らはその戒めを守ったであろうか。彼らは神を愛するよりは、自己を愛したのではなからうか。彼らは神に仕えるよりは、自分の利益を重んじたのではなからうか。彼らは、この世の物を愛したのではなからうか。彼らの生涯を汚した罪を見よ。彼らの利己心、互いに対する彼らの悪意、憎しみを見よ。神は、わたしとわたしの天使たちをみ前から追放しながらも、なお、同じ罪を犯したこれらの人々に、報いをお与えになるのであるか。ああ主よ、あなたはそのようなことを行つては、公平ではない。正義は彼らに対しても、宣告が発せられることを要求する」、とサタンは言うのである。

しかしキリストに従った人々は、罪を犯しはしたけれども、全的に降伏してサタンの手下たちに支配されてはいなかったのである。彼らはその罪を悔い改めて、謙遜と悔恨の念をもって主を求めた。そして助け主であられるイエスは、彼らのために嘆願されるのである。彼らの忘恩によって最もひどい取り扱いを受けられたかた、ま

た彼らの罪を知るとともに、その悔い改めをも知っておられるかたが言われる。「サタンよ、主はあなたを責めるのだ。わたしはこの人々のために、わたしの生命を与えた。彼らは、わたしのたなごころに彫り刻まれている。彼らの品性に不完全なところがあるう。彼らは、努力して失敗したこともあるう。しかし彼らは悔い改めた。そしてわたしは、彼らを赦し受け入れたのである」。

サタンの攻撃は強烈で、その欺瞞は陰険である。しかし主の目は、神の民を見ている。彼らの苦難ははなはだしく、炉の火は今にも彼らを焼きつくすかのようと思われる。しかしイエスは、彼らを火で練られた金のように取り出される。彼らは、世俗的なところが取り去られて、キリストのかたちを完全に表すようになるのである。時には主はご自分の教会の危機と、敵が教会に与えた被害を忘れたかのように思われることがある。しかし、神はお忘れになったのではない。この世において、教会ほど神にとって大切なものはない。世俗的政策によって教会の記録が腐敗することは、神のみこころではない。神はご自分の民が、サタンの誘惑に打ち負かされるままに放置されない。神は、神を誤り伝える人々を罰せられるが、心から悔い改めるすべての者に対して恵み深いのである。力とキリスト者的品性が啓発されることを、神に叫び求める者に、神はあらゆる必要な助けをお与えになるのである。

終末の時にあって、神の民は地に行われる憎むべきことを、嘆き叫ぶのである。彼らは涙を流して、神の律法をふみにじる危険について悪人たちに警告を発し、言語に絶した悲しみをもって、主の前にへりくだり罪を悔いる。悪人たちは彼らの悲しみをあざけり、彼らの厳粛な訴えを嘲笑する。しかし、神の民の苦悩と屈辱とは、罪の結果失われた品性の力と高貴さを、彼らが回復しつつある間違いのない証拠である。彼らが罪のはなはだしい

邪悪さははっきり認めるのは、彼らがキリストに近づき、彼らの目がその完全な純潔さを凝視するからである。柔和と謙遜が、成功と勝利の条件である。栄光の冠は、十字架のもとにひざまずく者を待っている。

神に忠実に仕え祈っている者は、いわば神の中に閉じ込められたようなものである。彼ら自身は、自分たちがどんなにしっかりと保護されているかを知らない。この世界の統治者たちは、サタンにそそのかされて、彼らを滅ぼそうとする。しかしもし神の民の目が、ダタンにおけるエリシャのしもべのように開かれるならば、神の天使たちが彼らの回りに陣をしいて、暗黒の軍勢を阻止しているのを見るであろう。

神の民が神の前で心を悩まし、心が純潔になることを嘆願するとき、「彼の汚れた衣を脱がせなさい」という命令が出される。そして、「見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう」という励ましの言葉が語られる(ゼカリヤ書三ノ四)。キリストの義というしみのない衣が、試練と誘惑に耐えた忠実な神の民に着せられる。さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に二度と汚されることはないのである。彼らの名は小羊の命の書に書き留められて、各時代の忠実な者の中に加えられるのである。彼らは、欺瞞者の策略に抵抗した。彼らは龍がほえても、忠誠を失わなかった。今や彼らは、誘惑者の計略から、永遠に安全なものとなった。彼らの罪は、罪の創始者の上に移された。「清い帽子」が彼らの頭にかぶせられた。

サタンが告発をしていたときに、目には見えないが、聖天使たちがあちこち行きめぐって、忠実な人々に生ける神の印を押していた。この人々は、その額に父なる神の名を記されて、小羊とともにシオンの山に立つのである。彼らはみ座の前で新しい歌を歌うが、それは地上から贖われた十四万四千人のほかは、だれも学ぶことができない。「彼らは、…小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂と

して、人間の中からあがなわれた者である。彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者であった」(黙示録一四ノ四、五)。

ここでみ使いの言葉が完全に成就する。「大祭司ヨシユアよ、あなたも、あなたの前にすわっている同僚たちも聞きなさい。彼らはよいしるしとなるべき人々だからである。見よ、わたしはわたしのしもべなる枝を生じさせよう」(ゼカリヤ書三ノ八)。キリストは彼の民の贖い主、救い主としてあらわされる。残りの民の旅路の涙と屈辱が、神と小羊の前で喜びと誉れに変わるときに、人々は彼らを見て、まことに驚き怪しむのである。「その日、主の枝は麗しく栄え、地の産物はイスラエルの生き残った者の誇、また光栄となる。…シオンに残る者、エルサレムにとどまる者、すべてエルサレムにあつて、生命の書にしるされた者は聖なる者となえられる」(イザヤ書四ノ二―四)。

第四十八章 権力をこえる力

ゼカリヤはヨシユアとみ使いの幻を受けた直後に、ゼルバベルの働きに関する言葉が与えられた。ゼカリヤは次のように言っている。「わたしと語った天の使がまた来て、わたしを呼びました。わたしは眠りから呼びさまされた人のもようであった。彼がわたしに向かつて『何を見るか』と言ったので、わたしは言った、『わたしが見ていると、すべて金で造られた燭台が一つあって、その上に油を入れる器があり、また燭台の上に七つのともしび皿があり、そのともしび皿は燭台の上にあつて、これにおのおの七本ずつの管があります。また燭台のかたわらに、オリブの木が二本あつて、一本は油をいれる器の右にあり、一本はその左にあります』。わたしはまたわたしと語る天の使に言った、『わが主よ、これらはなんですか』。…すると彼はわたしに言った、『ゼルバベルに、主がお告げになる言葉はこれです。万軍の主は仰せられる、これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである』」（ゼカリヤ書四ノ一―六）。

「わたしはまた彼に尋ねて、『燭台の左右にある、この二本のオリブの木はなんですか』と言い、重ねてまた

『この二本の金の管によって、油をそれから注ぎ出すオリブの二枝はなんですか』と言った。「すると彼は言った、『これらはふたりの油そそがれた者で、全地の主のかたわらに立つ者です』」(同四ノ一一―一四)。

この幻の中では、二本のオリブの木が神の前に立っていて、金の管によって、燭台の器に油を注ぎ出していることがあらわされていた。これから聖所の燭台に油が注がれて、あかりをあかあかともしつづけるのであった。そのように、神の前に立つ油注がれた者から、あふれるばかりの神の光と愛と力が、神の民に分け与えられる。そしてこれは、彼らが他の人々に光と喜びと慰めを分け与えるためである。こうして豊かに恵まれた者は、神の愛の宝を豊かに他の人々に、与えなければならないのである。

ゼルバベルは主の家の再建に当たって、様々の困難をもものともせず働いたのであった。敵は最初から、「ユダの民の手を弱らせて、その建築を妨げ」、「腕力と権力とをもって彼らをやめさせた」(エズラ記四ノ四、二三)。しかし主は建設者たちのために手を下し、今や彼の預言者によってゼルバベルに語り、「大いなる山よ、おまえは何者か。おまえはゼルバベルの前に平地となる。彼は『恵みあれ、これに恵みあれ』と呼ばわりながら、かしら石を引き出すであろう」と言われた(ゼカリヤ書四ノ七)。

神の民の歴史を通じて、一見越えることができないと思われた大きな困難の山が、天の神のみこころを実行しようとした者の前に、立ちはだかったのである。このような障害物は、信仰の試練として主がお許しになったのである。われわれが四方から取り囲まれるときこそ、他のどんな時にもまさって、神と聖霊の力に信頼すべき時である。生きた信仰を働かせるということは、霊的力が増し、揺るがぬ信頼が発達することを意味する。このようにして、人は勝ち進む強力な者となる。信仰をもって祈り求めるときに、サタンがキリスト者の道に置いた障

害物は消え去ってしまう。なぜなら、天の力が彼を助けるために送られるからである。「あなたがたにできない事は、何もないであろう」(マタイ一七ノ二〇)。

世の中では、虚飾と誇示をもつて事を始めるのがならわしである。しかし神は、小さい事の日を真理と義の輝かしい勝利の出発点となさるのである。神は時々彼らに、失望と一見失敗と思われるものを与えて、神の働き人を訓練なさるのである。彼らが困難を征服することを学ぶのが、神のみこころである。

しばしば人々は、難局や障害物に直面したときに、よろめくように誘惑を受ける。しかし、もし彼らが最初に持った確信を、しっかりと終わりまで持ち続けるならば、神は彼らの道を開いてくださるのである。成功は困難と戦う人々に与えられる。ゼルバベルの勇敢な精神と揺るがぬ信仰の前に、大きな困難の山は平地となるのである。そして、基礎をすえた、「彼の手はこれを完成する」。「彼は、『恵みあれ、これに恵みあれ』と呼ばわりながら、かしら石を引き出すであろう」(ゼカリヤ書四ノ九、七)。

人間の能力や人間の権力が神の教会を建てたものではなかった。また、それらが教会を破壊することもないのである。人間の力という岩の上ではなくて、永遠の岩であられるキリスト・イエスの上に教会は建てられた。そして「黄泉の力もそれに打ち勝つことはない」(マタイ一六ノ一八)。神の臨在が神の働きを安定させるのである。「もろもろの君に信頼してはならない。人の子に信頼してはならない」という言葉が、われわれに与えられている(詩篇一四六ノ三)。「穂やかにして信頼しているならば力を得る」(イザヤ書三〇ノ一五)。正義という永遠の原則に基づいた、神の輝かしい働きは無に帰することはない。それは力から力に進む。「万軍の主は仰せられる、これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」(ゼカリヤ書四ノ六)。

「ゼルバベルの手はこの宮の礎をすえた。彼の手はこれを完成する」という約束は、文字通りに成就した(同四ノ九)。「そしてユダヤ人の長老たちは、預言者ハガイおよびイドの子ゼカリヤの預言によって建て、これをなし遂げた。彼らはイスラエルの神の命令により、またクロス、ダリヨスおよびベルシャ王アルタシャスタの命によって、これを建て終った。この宮はダリヨス王の治世の六年アダルの月(十二月)の三日に完成した」(エズラ記六ノ一四、一五)。

その後しばらくして、再建された神殿が奉献された。「そこでイスラエルの人々、祭司たち、レビびとおよびその他の捕囚から帰った人々は、喜んで神のこの宮の奉献式を行った。」そして、彼らは「正月の十四日に過越の祭を行った」(同六ノ一六、一九)。

第二の神殿は、その壮麗さにおいて最初の神殿よりは劣っていた。また第一の神殿に与えられていた、目に見える神の臨在のしるしによって、清められてはいなかった。その奉献を記念する超自然的な力のあらわれはなかった。新たに建てられた聖所にあふれる栄光の雲は見えなかった。天から火が下って、祭壇の上の犠牲を焼きつくさなかった。至聖所のケルビムの間には、もはやシエキーナーは宿らなかった。契約の箱、贖罪所、あかしの板などはもうなかった。主のみこころを伺う祭司に天からのしるしがあらわれて、それを知らせることもなかったのである。

しかしこれは、主が預言者ハガイによって次のように宣言された建物であった。「主の家の後の栄光は、前の栄光よりも大きい」。「わたしはまた万国民を震う。万国民の財宝は、はいつて来て、わたしは栄光をこの家に満たすと、万軍の主は言われる」(ハガイ書二ノ九、七)。(万国の願うところのもの「イエス」来らん)文語訳

参照)。学者たちは幾世紀にわたって、ハガイに与えられた神の約束が、どのように成就されたかを示そうと努力してきたのである。しかし、万国民の願うところのものであられるナザレのイエスが来られて、自らの臨在によって神殿をお清めになったことに、断固として特別の意義を認めないものが多くあった。彼らは誇りと不信によって、心が暗くされ、預言者の言葉の真の意味を悟らなかったのである。

第二の神殿は、主の栄光の雲によってではなくて、「満ちみちているいっさいの神の徳が」宿っているかた、すなわち、「肉において現れ」た神ご自身の臨在によって光栄に浴したのである(コロサイ二ノ九。テモテ第一・三ノ一六)。キリストの地上の伝道生涯において、彼ご自身が来られて光栄に浴したということだけが、第二の神殿の、第一の神殿よりすぐれたところであった。「万国の願うところのもの」であられるイエスが、まことに彼の神殿に來られたのである。ナザレの人イエスが、その聖域で教え、いやされたのである。

第四十九章 王妃エステルの決心

クロス王の恵み深い処置の下で、約五万人の捕囚の民が帰還命令を利用した。しかしこの人々は、メド・ペルシャの領内に広く離散した幾千幾万の人々と比較するならば、ほんのわずかの残りの民であった。イスラエルの大多数の民は、帰国の旅と彼らの荒廃した町々や故郷を再建する困難を経験するよりは、むしろ捕囚の地にとどまることを選んだのであった。

幾十年かが経過し、当時支配権を握っていた王ダリヨス・ヒスタスパスが、第一の布告と全く同様に恵み深い第二の布告を出したのである。こうして神は豊かな恵みのうちに、メド・ペルシャの領内のユダヤ人に、もう一度故郷の地に帰る機会をお与えになった。主はクセルクセスすなわち、エステル記のアハシユエロスの治世に、困難な時代が来ることが予見された。そして権威をもった人々の心を変えられたばかりでなく、ゼカリヤに靈感を与えて捕囚の民に帰還することを訴えられたのである。

かつての故郷から遠く、多くの国に離散したイスラエルの部族に、次のような言葉が与えられた。「主は仰せ

られる、さあ、北の地から逃げて来なさい。わたしはあなたがたを、天の四方の風のように散らしたからである。さあ、バビロンの娘と共にいる者よ、シオンにのがれなさい。あなたがたにさわる者は、彼の目の玉にさわるのであるから、あなたがたを捕えていった国々の民に、その栄光にしたがって、わたしをつかわされた万軍の主は、こう仰せられる、『見よ、わたしは彼らの上に手を振る。彼らは自分に仕えた者のとりことなる。その時あなたがたは万軍の主が、わたしをつかわされたことを知る』(ゼカリヤ書二ノ六―九)。

神の民が地で誉れを受け、神のみ名の栄えとなることをはじめから神のみこころであつたように、それは今でも神のみこころであつた。神は長い捕囚の年月の間に、彼らがふたたび神に忠誠をつくす機会を、幾度もお与えになつたのである。耳を傾けて学ぼうとする人々があつた。また、苦難のただ中であつて、救いを見いだした人もあつた。これらの人々の多くは、帰還する残りの民の中に加えられるのであつた。靈感は彼らを、「香柏の高いこずえ」にたとえた。主は「これを高いすべれた山に植える。…イスラエルの高い山にこれを植える」のであつた(エゼキエル書一七ノ二二、二三)。

クロスの布告のもとに帰還した人々は、「神にその心を感動された者」であつた(エズラ記一ノ五)。しかし神は、進んで捕囚の地にとどまることにした人々に訴えることをやめられなかつた。神はいろいろの方法を用いて、彼らもまた帰還できるようにして下さつた。ところが、クロスの布告に答えなかつた大多数の人々は、その後の訴えには関心を示さなかつた。そしてゼカリヤが、もうこれ以上遅延することなくバビロンを逃れるように警告しても、彼らはその招きに注意しなかつた。

その間に、メド・ペルシャの国内状況が急激に変化していた。ユダヤ人が著しく好遇されたダリヨス・ヒスタ

スパスに続いて、クセルクセス大王が即位した。逃れるようにという言葉に心を向けなかったユダヤ人が、恐ろしい危機に直面したのは、彼の治世においてであった。彼らは神がお備えになった逃亡の機会を利用することを拒否したので、今や彼らは死に直面させられた。

サタンはこの時、メド・ペルシャの非道な高官、アガグびとハマンを用いて、神のみこころに対抗しようとした。ハマンはユダヤ人のモルデカイに、激しい怒りをいだいた。モルデカイはハマンに、何の危害も加えたのではなかった。彼はただ、ハマンに礼拝的敬意を表さなかったただけであった。ハマンは、「ただモルデカイだけを殺すことを潔しと」せずに、「アハシユエロスの国のうちにいるすべてのユダヤ人、すなわちモルデカイの属する民をことごとく滅ぼそうと図った」(エステル記三ノ六)。

クセルクセスはハマンの虚偽の言葉に惑わされて、メド・ペルシャ王国の「各州にいる諸民のうちに、散らされて、別れ別れになっている」ユダヤ人を、全部滅ぼすように詔を書かされた(同三ノ八)。ユダヤ人が殺されて、その財産を奪い取る日が決定された。王はこの詔が実行されたならば、どんな重大な結果が起こるかを、少しも知らなかった。サタン自身がこの策略の背後で暗躍して、真の神の知識を保っている人々を地上から滅ぼし去ろうとしていたのである。

「すべて王の命令と詔をうけ取った各州ではユダヤ人のうちに大いなる悲しみがあり、断食、嘆き、叫びが起り、また荒布をまとい、灰の上に座する者が多かった」(同四ノ三)。メド・ペルシャの法令は、取り消すことができなかった。一見、絶望のように思われた。イスラエル人は皆殺しにされるのであった。

しかし敵の策略は、人間の子らを支配しておられる神の力によって打ち破られた。神の摂理のうちに至高者を

恐れるユダヤの女性エステルが、メド・ペルシャ王国の王妃になっていたのである。モルデカイは彼女の親せきであった。彼らは窮地に追いこまれて、ユダヤ民族のためにクセルクセスに訴えることにした。エステルはとりなす者として、王の面前に危険を冒して出るのであった。モルデカイは、「あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが知りましょう」と言った（エステル記四ノ一四）。

エステルが直面した危機は、真剣な努力を急速にする必要があった。しかしエステルもモルデカイとともに、神が彼らのために大いなる働きをして下さるのでなければ、彼ら自身の努力は無益なことを知っていた。そこでエステルは、力の源であられる神と交わる時間をとったのである。エステルはモルデカイに、次のように答えさせた。「あなたは行ってスサにいるすべてのユダヤ人を集め、わたしのために断食してください。三日のあいだ夜も昼も食い飲みしてはなりません。わたしとわたしの侍女たちも同様に断食しましょう。そしてわたしは法律にそむくことですが王のもとへ行きます。わたしがもし死なねばならないのなら、死にます」（同四ノ一六）。

急速に次々と起こった出来事、すなわちエステルが王のもとへ行ったこと、王が彼女に著しい恵みを示したことで、ハマンを唯一の客とする王と王妃の宴会、王が夜眠れなかったこと、モルデカイに公衆の前で栄誉が与えられたこと、邪悪な策略が発見されてハマンが屈辱をこうむって失脚したことなどはみな、われわれのよく知っている物語である。神は悔い改めた民のために、驚くべきことをなさった。そして王は、前とは反対の布告を出して、ユダヤ人が彼らの生命を保護することを許し、早馬に乗った急使が王国の各州に急速に伝えた。彼らは「王の命によって急がされ、せきたてられて出て行った」。「いずれの州でも、いずれの町でも、すべて王の命令と詔の伝達された所では、ユダヤ人は喜び楽しみ、酒宴を開いてこの日を祝日とした。そしてこの国の民のうち多く

第 49 章 王妃エステルを決意



モルデカイの忠節とエステルのとりなしによって、アハシュエロス王はペルシャ全地に法令を出し、ユダヤ人を死から救った。

の者がユダヤ人となった。これはユダヤ人を恐れる心が彼らのうちに起ったからである」(エステル記八ノ一四、一七)。

ユダヤ人を殺すことになっていた日に、「ユダヤ人はアハシユエロス王の各州にある自分たちの町々に集まり、自分たちに害を加えようとする者を殺そうとしたが、だれもユダヤ人に逆らうことのできるものはなかった。すべての民がユダヤ人を恐れたからである」。力のすぐれた天使たちが、「自分たちの生命を保護し」ようとした神の民を守るように、神の命令を受けていたのであった(同九ノ二、一六)。

モルデカイは、以前ハマンが占めていた栄誉ある地位を与えられた。彼は「アハシユエロス王に次ぐ者となり、ユダヤ人の中にあつて大いなる者となり、その多くの兄弟に喜ばれた」(同一〇ノ三)。彼はイスラエルの幸福を増進させた。こうして神はもう一度、メド・ペルシャの宮廷において神の選民に恵みを得させ、彼らを故国に回復させようとする神のみこころを実行することを、可能にして下さったのである。しかしそれから数年経過して、クセルクセス大王の次に即位した、アルタクセルクセス一世の第七年になつてはじめて、エズラの指導のもとに、相当数の者がエルサレムに帰還したのである。

エステルの時代に神の民を訪れた苦しい経験は、ただその時代だけのものではなかった。ヨハネは、時の終末に至るまでの各時代を眺めて言った。「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持つている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行つた」(黙示録一二ノ一七)。今日地上に住んでいる者の中に、こうした言葉が成就するのを見るのである。各時代において、人々に真の教会を迫害させた同じ精神が、将来も、神に忠誠をつくす者に対して同様の行動を取らせるに至るのである。現在で

さえ、この最後の大会闘に対する準備が行われているのである。

最後に神の残りの民に対して出される布告は、ユダヤ人に対してアハシユエロス（クセルクス）が発したものと非常によく似ている。今日、真の教会の敵は、安息日の戒めを守る小さな群れを、門に座しているモルデカイのように思っている。神の民が神の律法を敬うことは、主を恐れることを放棄して神の安息日をふみにじっている者に対して、間断なき譴責である。

サタンは一般の習慣や伝統を受け入れない、少数の者に対して怒りを発する。地位の高い人々や有名人は、不法者や悪人に加担して、神の民に対して策略を練る。富を持った人、特殊の才能の持ち主、教育のある人などが一つになって彼らを軽べつする。迫害を加える支配者たち、牧師や教会員たちが彼らを滅ぼそうと陰謀を企てる。この人々は声と筆、誇張と脅迫と嘲笑などによって、彼らの信仰をくつがえそうとする。人々は偽りの申し立てと、怒りを含んだ訴えによって民衆の怒りをかき立てようとする。聖書の安息日の擁護者に対して、「聖書はこう言っている」ということができないので、彼らは圧制的法令に訴えて、自分たちに欠けているものを補う。立法者たちは民衆の人気と支持を得るために、日曜休業令に屈服する。しかし神を恐れる者は、十誡の戒めに反する法令に従うことはできない。真理と誤りの間の最後の大会闘は、この論点において戦われるのである。そしてわれわれは、その結果について何の疑惑もたないのである。エステルとモルデカイの時代におけると同様に、今日においても主は、神の真理と神の民とを擁護されるのである。

第五十章 学者エズラに導かれた改革

ゼルバベルとヨシユアの指導の下に、最初の捕囚の一団が帰還してから約七十年経過したときに、アルタクセルクセス・ロンギマノスガメド・ペルシヤの王位についた。この王の名は一連の著しい摂理によって、聖書の歴史とかわりがあるのである。エズラやネヘミヤが生存し活動したのは、彼の治世においてであつた。紀元前四五七年に、エルサレム再建の第三回目で最後の布告を出したのはこの王である。その治世にエズラを指導者とするユダヤ人の一団が帰還し、ネヘミヤとその仲間たちによってエルサレムの城壁が完成し、神殿の務めが再組織され、エズラとネヘミヤによって大宗教改革が行われたのである。その長い治世にわたって、彼はしばしば神の民に好意を示し、彼が信頼し愛していたエズラとネヘミヤというユダヤ人の友人は、神が特別な仕事のために起こして任命された人々であることを認めたのである。

バビロンに残っていたユダヤ人の中でのエズラの経験は非常に著しいものであつたので、アルタクセルクセス王の好意的注目を浴びた。そしてエズラは、天の神の力と、ユダヤ人をエルサレムに回復することについての神

の計画に関して、自由に王に話したのである。

エズラはアロンの家系の者であったので、祭司としての訓練を与えられていた。それに加えて、彼は魔術士や占星術士やメド・ペルシヤ国内の賢者たちの書物に精通していた。しかし彼は、自分の霊的状态に満足していなかった。彼は神と完全に一致することを熱望したのである。彼は神のみこころを実行に移す知恵を熱望したのである。エズラは「心をこめて主の律法を調べ、これを行」おうとした(エズラ記七ノ一〇)。そのために彼は、預言者と王の書物の中に記された、神の民の歴史を熱心に研究するようになった。彼は聖書の歴史的部分と詩的部分とを調べ、なぜ神は、エルサレムが破壊され、神の民が異教の地に連れ去られるのを許されたのかを知ろうとした。

エズラはアブラハムに約束が与えられた時以来の、イスラエルの経験を特別に考えた。彼はシナイ山において与えられた教えと、長い荒野の放浪期間を通じて与えられた教えとを研究した。神が民を扱われる方法についてますます研究を深め、シナイにおいて与えられた律法の神聖さを理解するにつれて、エズラの心は感動した。彼は新たに徹底的改心を経験して、聖なる歴史に精通しようと決心した。それは彼がこの知識を用いて、彼の民に祝福と光をもたらすためであった。

エズラは彼の前にあると信じた働きのために、心の準備をしようと努力した。彼は熱心に神を求め、イスラエルの賢明な教師になろうとした。彼が神の支配に心と意志を従わせることを学んだときに、彼の生活に真の聖化の原則が生じた。そしてこれは、後年彼の教えを請うた青年たちだけでなく、彼に接したすべての人々に品性建設上の感化を及ぼしたのである。

神はイスラエルに幸福をもたらす器としてエズラを選び、捕囚期間を通じてその栄光が大いに影をひそめた祭司職に、栄誉を与えようとなさった。エズラは非常な知識を持った人となり、「モーセの律法に精通した学者」となった(エズラ記七ノ六)。彼はこうした資格を持っていたので、メド・ペルシャ王国において著名になった。

エズラは神の代弁者となって、周りの人々に天を支配している原則を教えた。彼の残りの生涯は、メド・ペルシャの王宮の近くにあってもエルサレムにおいても、その主な働きは教師としての仕事であった。彼は自分が学んだ真理を他の人々に伝えたときに、その働きの能力が増大した。彼は敬神深い熱の人となった。彼は聖書の真理には、人々の日常生活を高貴にする力があることを世にあかしする証人となった。

聖書研究熱を復興しようとするエズラの努力は、聖書を保存し増加させようとする骨の折れる、彼の生涯の事業として永続的なものとなった。彼は集め得るすべての律法の書を集め、それらを写して配布したのである。こうして増加されて多くの人々の手に渡された純粋な言葉は、計り知れない価値のある知識を与えたのである。

エズラは神が、ご自分の民のために大いなる働きをして下さることを信じていたので、エルサレムに帰って神の言葉の研究熱を復興し、聖なる都の再建をしている兄弟たちを助けたいという願いを、アルタクセルクスに告げたのである。エズラがイスラエルの神に完全に信頼して、神はその民を保護し養うことが十分おできになることを宣言したときに、王は深く心を動かされた。王はイスラエルの人々が、主に仕えるために帰還していることをよく理解した。さらに王は、エズラの誠実さを非常に信頼していたので、彼に著しい好意を示し、彼の願いを許して神殿の務めのために、高価な贈り物を彼に与えたのである。王は彼をメド・ペルシャ王国の特使として、彼に広範囲にわたる権威を授けて、彼の心中の計画を達成させようとした。

七十年の捕囚期間の終了後、第三回目のアルタクセルクセス・ロンギマノスのエルサレム復興と建設の布告は、天の神に関する表現があり、またエズラの業績を認め、神の残りの民に多額の補助金を与えている点において、大いに注目すべきものである。アルタクセルクセスはエズラを、「主の戒めの言葉、およびイスラエルに賜わった定めに通じた学者で、祭司」、「天の神の律法の学者」と言っている。王はその議官たちといっしょになって、「エルサレムにいますイスラエルの神」に真心からの捧げ物をした。そしてそれに加えて、多額の諸経費を支払うために、「それを王の倉から出して用いよ」と定めたのである(同七ノ一、一一、一五、二〇)。

アルタクセルクセスはエズラに言った。あなたは、自分の手にあるあなたの神の律法に照して、ユダとエルサレムの事情を調べるために、王および七人の議官によつてつかわされるのである」。王はさらに命を下した。「天の神の宮のために、天の神の命じるところは、すべて正しくこれを行え。そうしないと神の怒りが、王と王の子らの国に臨むであろう」(同七ノ一四、二三)。

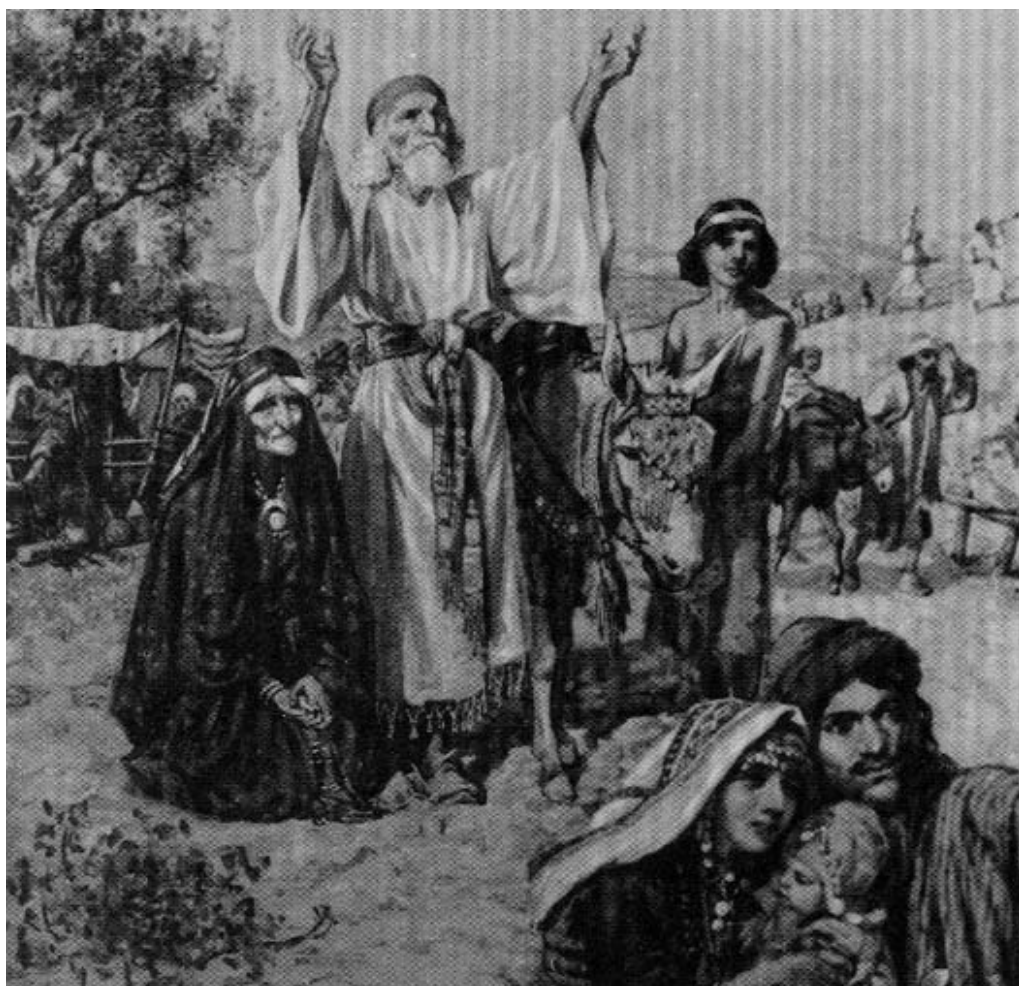
アルタクセルクセスはイスラエルの人々の帰還を許したときに、祭司たちが昔ながらの慣習と特権を回復することを取りきめた。王は命を下した。「われわれは、またあなたがたに告げる、『祭司、レビびと、歌うたう者、門衛、宮に仕えるしもべ、および神のこの宮の仕えびとたちには、みつぎ、租税、税金を課してはならぬ』」(同七ノ二四)。王はまた、ユダヤの律法に従って人々を正しく治めるために、町の役人たちの任命についての取りきめを行った。「エズラよ、あなたはあなたの手にある神の知恵によつて、つかさおよび裁判人を立て、川向こうの州のすべての民、すなわちあなたの神の律法を知っている者たちを、ことごとくさばかせよ。あなたがたはまたこれを知らない者を教えよ。あなたの神の律法および王の律法を守らない者を、きびしくその罪に定めて、あ

るいは死刑に、あるいは追放に、あるいは財産没収に、あるいは投獄に処せよ」(エズラ記七ノ二四―二六)。こうして、「その神の恵みの手が彼の上にあつたから」、エズラはメド・ペルシャ王国のうちにいるイスラエルの民、およびその祭司、レビびとのうち、「すべてエルサレムへ行こうと望む者」のために、十分の準備をするように王を説得したのであつた(同七ノ九、一三)。こうして離散していた民は、ふたたび故郷の地に帰る機会が与えられた。そして、イスラエルの家に対する約束は、その地を所有することに関連していた。

この布告は、エズラといっしょに神の民に対するみこころを研究していた人々に、大きな喜びをもたらした。エズラは叫んだ。「われわれの先祖の神、主はほむべきかな。主はこのように、王の心に、エルサレムにある主の宮を飾る心を起させ、また王の前と、その議官の前と王の大臣の前で、わたしに恵みを得させられた」(同七ノ二七、二八)。

アルタクセルクセスのこの布告が發布されたことは、明らかに神の摂理であつた。ある者はこれを認めて、喜んでこの絶好の機会を利用して帰還することにした。集合の場所が指定され定められた時に、エルサレムへ行くことを希望した人々が、長い旅に備えて集合した。「わたしは彼らをアハフに流れる川のほとりに集めて、そこに三日のあいだ露營した」とエズラは言っている(同八ノ一五)。

エズラは大多数の者がエルサレムに帰還することを期待していたが、応答した者の数は意外に少なかった。家や土地を手に入れていた多くの者は、それを犠牲にすることを望まなかった。彼らは安楽と慰安を愛し、残留することに十分満足していた。こうした行動は、さもなくば信仰をもって前進した人々と運命を共にすることを選んだであろう、他の人々に対する妨害となつたのである。



大多数の民は王の法令に神の導きを見た。彼らは大きい集団となり、エルサレムめざして旅立った。

エズラは集まった一行の人々を見渡したときに、レビの子孫がひとりもいなかったのを見て驚いた。神の聖なる務めのために聖別された部族の人々は、いったいどこにいたのであろうか。主につく者はだれかという召しに對して、レビびとは真つ先に応答するはずであつた。彼らは捕囚の期間中、またその後も、多くの特権が与えられていた。彼らは捕囚の境涯にある兄弟たちの靈的必要に奉仕するために、完全な自由が与えられていた。会堂が建てられて、祭司はそこで神の礼拝と民の教育を行っていた。安息日の遵守と、ユダヤ人の信仰特有の聖なる儀式を、自由に行うことが許されていた。

しかし捕囚の終了後、年月が経過するにつれて状態は変わり、多くの新しい責任がイスラエルの指導者に負わせられた。エルサレムの神殿は再建され、献納された。そしてその務めを維持していくために、もっと多くの祭司が必要であつた。神の人たちが人々の教師として働くことが、差し迫つた必要であつた。そのうえバビロンに残るユダヤ人は、彼らの宗教的自由が束縛される危険にあつた。預言者ゼカリヤにより、またエステルとモルデカイの苦難の時代に、彼らが最近経験したことによつて、メド・ペルシャ王国内のユダヤ人は彼らの国へ帰るよつに、明らかに警告が与えられたのである。彼らが異教の勢力のただ中に、これ以上住むことは危険であるといふ時が来たのである。こうした状況の変化を考慮して、バビロンにいる祭司たちは布告の発令の中に、エルサレム帰還への特別の召しを、速やかに認めるべきであつた。

王と諸侯たちは、帰還の道を開くのに彼らのなすべき分以上のことをしたのである。彼らはいくほどの財産を準備したのであるが、人々はいったいどこにいたのであろうか。レビの子孫は兄弟たちといっしょに行く決心をして、他の人々にも彼らの模範に従うように促すべき時に当たつて、何もしなかつた。この不思議な無関心

は、民のための神のみこころに対して、バビロンのイスラエルびとがどんな態度をとったかを、悲しくもあらわしているのである。

エズラはもう一度レビびとに訴え、彼の一行に加わるように緊急招待を發したのである。急速な行動の大切なことを強調するために、彼は書類による訴えとともに、「首領たる人々」と「見識のある人々」を幾人かつかわした（エズラ記七ノ一八。八ノ一六）。

エズラとともに旅行者たちが滞在しているうちに、これらの信任を受けた使者たちは、「われわれの神の宮のために、仕え人をわれわれに連れて来い」という訴えを携えて馳せ去った。この訴えは功を奏した。ためらっていた者たちが、ついに帰還の決心をしたのである。全部で約四十人の祭司と、二百二十人の宮に仕えるしもべが陣營に連れて来られたのである。エズラは賢明な牧者、善き教師、援助者としてこれらの人々を頼りにすることができたのである。

今やすべての者は出発の準備が整った。彼らは目前に、数か月にわたる旅行をひかえていた。彼らは妻子とその財産のほかに、神殿とその務めのために多額の財宝を携えていた。エズラは敵が途中で待ち伏せ、彼とその一行を襲って滅ぼそうとしていることをよく知っていた。しかし彼は、王に、兵卒たちの保護を求めなかった。「これは、われわれがさきに王に告げて、『われわれの神の手は、神を求めるすべての者の上にやさしく下り、その威力と怒りとはすべて神を捨てる者の上に下る』と言ったので、わたしは道中の敵に対して、われわれを守るべき歩兵と聴兵とを、王に頼むことを恥じたからである」と、彼は説明したのである（同八ノ二二）。

エズラとその一行は、ここにおいて異邦人の前で、神の名を賛美する機会を認めたのである。もしイスラエル

びと自身がここで、彼らの指導者であられる神に絶対的信仰をあらわすならば、生ける神の力に対する信仰が強められるのであった。そこで彼らは、神に全面的信頼をおくことにしたのである。彼らは兵卒たちの保護を求めなかった。彼らはただ神にのみ属する栄光を、人間の力に帰する理由を異邦人に与えないのであった。彼らは自分たちが神の民として、真心から神により頼んでいることに關して、異邦の友人たちの心に一点の疑惑も起こしてはならないのであった。力は、富によらず、偶像礼拝者の権力や勢力によらず、神の恵みによって得られるのである。彼らは、彼らの前にある神の律法を守り、それに従おうと努力することによってのみ、保護されるのであった。こうして彼らは、神の保護の手を受ける条件をよく知っていたので、エズラと忠実な一行が出発直前に行った献身の集会は、特別に厳肅なものであった。「そこでわたしは、かしのアハフ川のほとりで断食を布告し、われわれの神の前で身をひくくし、われわれと、われわれの幼き者と、われわれのすべての貨財のために、正しい道を示されるように神に求めた」。「そこでわれわれは断食して、このことをわれわれの神に求めたところ、神はその願いを聞きいれた」と、エズラはこの経験について言った（エズラ記八ノ二一、二三）。

しかし神の祝福があるからといって、思慮分別と用心を必要としないわけではない。エズラは財宝を守るために特別の注意を払い、すでにその忠実さと忠誠さが証明された、「おもだった祭司十二人……」を選び、金銀および器物、すなわち王と、その議官と、その諸侯およびすべて在留のイスラエルびとが、われわれの神の宮のためにささげた奉納物を量って彼らに渡した」（同八ノ二四、二五）。この人々は、委託された財宝を忠実な家令として注意深く守るように、厳肅な命を受けた。エズラは次のように言った。「あなたがたは主に聖別された者である。この器物も聖である。またこの金銀は、あなたがたの先祖の神、主にささげた真心よりの供え物である。

あなたがたはエルサレムで、主の宮のへやの中で、祭司長、レビびとおよびイスラエルの氏族のかしらたちの前で、これを量るまで、見張り、かつ守りなさい」（同八ノ二八、二九）。

主の宝の運搬と安全のためにエズラが注意深く準備したことは、思慮深く研究するに価する教訓を教えている。その信頼性が証明されたものだけが選ばれた。そして彼らは、負わせられた責任について明白な指示を与えられた。エズラは、主の財産の保管者としての任に当たる忠実な役人を任命したときに、神の働きにおける秩序と組織の必要とその価値を認めた。

イスラエルの人々が川のほとりにとどまっていた数日の間に、長い旅行のためのすべての準備が整った。「われわれは正月の十二日に、アハワ川を出立してエルサレムに向かったが、われわれの神の手は、われわれの上にあって、敵の手および道に待ち伏せする者の手から、われわれを救われた」とエズラは書いている（同八ノ三二）。旅行は約四か月かった。エズラに従った群衆は、女や子供を含めて全部で数千名に及んだので、どうしても早く進まなかった。しかし、すべての者が安全に守られた。彼らの敵は抑制されていたので、害を加えることができなかった。彼らの旅行は順調に進み、アルタクセルクセスの第七年の五月一日にエルサレムに到着した。

第五十一章 精神の大覚醒

エズラのエルサレム到着は、時機を得たものであつた。彼が来て影響を及ぼすことが、大いに必要であつた。彼が来たことは、長い間困難に耐えて働いた多くの人々の心に、勇氣と希望をもたらした。七十年以上も前に、ゼルバベルとヨシユアの指導のもとに最初の捕囚の一行が帰還してから、多くの事が成し遂げられた。神殿は完成し、町の城壁は部分的に修復された。しかしまだ、なすべきことがたくさんあつた。

先年エルサレムに帰った人々の中には、生きている間神に忠誠をつくした人々が多くあつた。しかし彼らの子孫の多くは、神の律法の神聖さを見失つた。責任を負わせられた人々の中には、公然と罪の生活をしている者さえいた。彼らの行動は、神の事業を推進させようとしていた他の人々の努力を、大いに妨げていた。はなはだし律法の違反を譴責もせずに放任しておく限り、神の祝福は人々の上に下ることはできなかった。

エズラとともに帰還した人々が、特別に主を求める時を設けたことは神の摂理であつた。彼らが人間の力の保護を受けずに、バビロンからの旅を今なし終えたという経験は、彼らに貴重な靈的教訓を与えた。多くの者の信

仰が強化された。そして彼らがエルサレムで、失望に陥り冷淡になった人々と交わったときに、力強い影響を及ぼして、その後しばらくして改革が起こったのである。

金銀および神殿の器物などの宝物は、到着後四日目に証人の前で、非常な厳密さをもって神殿の役人に手渡された。「そのすべての数と重さを調べ」た（エズラ記八ノ三四）。

エズラとともに帰還した捕囚の民は、「イスラエルの神に燔祭をささげ」、それを罪祭として、また道中、聖天使の保護が与えられたことに対する感謝のしるしとした。彼らはまた王の命令書を、王の総督たち、および川向この州の知事たちに渡したので、彼らは民と神の宮とを援助した」（同八ノ三五、三六）。

その後時を移さず、イスラエルのつかさたち数人がエズラのところに来て、重大問題について苦情を訴えた。「イスラエルの民、祭司およびレビびと」の中のある人々は、主の聖なる戒めに反して周囲の国民と雑婚していた。エズラは次のように聞かされた。「すなわち、彼らの娘たちをみずからめとり、またそのおすこたちにめとったので、聖なる種が諸国の民とまじりました。そしてつかさたる者、長たる者が先だって、このとがを犯しました」（同九ノ一、二）。

エズラはバビロン捕囚の原因を研究したときに、イスラエルの背信は主として、彼らが周囲の国々と入り混じったことにあることを学んだのである。彼は、もし彼らが周囲の諸国から離れているようにという神の命令に従っていたならば、多くの悲しい屈辱的な経験に遭わずにすんだことを悟った。ところが過去の教訓があるにもかかわらず、すぐれた人々が、背信を防ぐために与えられた律法を敢えて犯したことを知って、エズラの心は穏やかではなかった。彼は、ふたたび神の民に、彼らの故国に足がかりをお与えになった神の恵みを思うとともに、

彼らの忘恩に対する宗教的憤りと悲しみに圧倒された。彼は言っている。「わたしはこの事を聞いた時、着物と上着とを裂き、髪の毛とひげを抜き、驚きあきれてすわった。イスラエルの神の言葉におののく者は皆、捕囚から帰って来た人々のとがのゆえに、わたしのもとに集まったが、わたしは夕の供え物の時まで、驚きあきれてすわった」(エズラ記九ノ三、四)。

エズラは夕の供え物の時になって立ち上がり、もう一度着物と上着を裂いて、ひざをかがめて、天の神に心の願いを訴えたのである。彼は主にむかって手をさし伸べて叫んだ。「わが神よ、わたしはあなたにむかって顔を上げるのを恥じて、赤面します。われわれの不義は積って頭よりも高くなり、われわれのとがは重なって天に達したからです」(同九ノ六)。

エズラは続けて言った。「われわれの先祖の日から今日まで、われわれは大いなるとがを負い、われわれの不義によって、われわれとわれわれの王たち、および祭司たちは国々の王たちの手にわたされ、つるぎにかけられ、捕え行かれ、かすめられ、恥をこうむりました。今日のとおりで。ところがいま、われわれの神、主は、しばし恵みを施して、のがれ残るべき者をわれわれのうちに置き、その聖所のうちに確かなよりどころを与え、こうしてわれわれの神はわれわれの目を明らかにし、われわれをその奴隷のうちにあって、少しく生き返らせられました。われわれは奴隷の身でありますが、その奴隷たる時にも神はわれわれを見捨てられず、かえってペルシヤ王たちの目の前でいつくしみを施して、われわれを生き返らせ、われわれの神の宮を建てさせ、その破壊をつくるわせ、ユダとエルサレムでわれわれに保護を与えられました。

われわれの神よ、この後、何を言うことができましょう。われわれは、あなたの戒めを捨てたからです。あな

たはかつて、あなたのしもべである預言者たちによって命じて仰せられました。…われわれの悪い行いにより、大いなることがよって、これらすべてのことが、すでにわれわれに臨みましたが、われわれの神なるあなたは、われわれの不義よりも軽い罰をくだして、このように残りの者を与えてくださったのを見ながら、われわれは再びあなたの命令を破って、これらの憎むべきわざを行う民と縁を結んでよいでしょうか。あなたはわれわれを怒って、ついに滅ぼし尽し、残る者も、のがれる者もないようにされるのではないのでしょうか。ああ、イスラエルの神、主よ、あなたは正しくいらされます。われわれはのがれて残ること今日のとおりです。われわれは、とがをもってあなたの前にあります。それゆえだれもあなたの前に立つことはできません」(同九ノ七一―五)。

主の働きの中心部に、知らぬ間に忍び込んだ罪惡に対するエズラと彼の同僚の悲しみは、悔い改めをもたらし、罪を犯した人々の多くは、深く心を動かされた。「民はいたく泣き悲しんだ」(同一〇ノ一)。彼らは部分的ではあったが、彼らの罪の極悪さと、神がそれをどのように憎まれるかを悟り始めた。彼らはシナイ山で語られた律法の神聖さを自覚した。そして多くの者は、彼らの罪を思つてふるえおののいた。

そこにいたひとりで、シカニヤという人は、エズラが語った言葉は皆ほんとうであると認めた。彼は告白して言った。「われわれは神にむかつて罪を犯し、この地の民から異邦の女をめとりました。しかし、このことについてはイスラエルに、今なお望みがあります。」シカニヤは罪を犯した者が皆、罪を捨てる契約を神と結び、「律法に従つて」裁きを受けようと提案した。彼はエズラに言った。『立ちあがってください、この事はあなたの仕事です。われわれはあなたを助けます。心を強くしてこれを行いなさい』。エズラは立って、おもだった祭司、レビびとおよびすべてのイスラエルびとに、この言葉のように行うことを誓わせた」(同二〇ノ二―五)。

驚くべき改革は、こうして始まったのである。エズラと彼の同僚たちは、限りな…忍耐と機転をもって、関係者各自の権利と幸福を十分に考慮して、悔い改めたイスラエルの人々を、正しい道に導こうと努めた。エズラは何物にもまして律法の教師であつた。そして彼が、個々の場合を調査して個人的注意を払ったときに、この律法の神聖さと服従によって与えられる祝福を、人々の心に印象づけようとした。

エズラが働いたところは、どこでも聖書研究のリバイバルが起こつた。人々に教える教師が任命された。主の律法が高められ、光栄あるものとされた。預言者の書が研究された。そしてメシヤの来臨を予告した聖句は、悲しみ疲れた多くの人の心に希望と慰めを与えた。

エズラが「心をこめて主の律法を調べ、これを行」ってから、二千年以上が過ぎ去つた(エズラ記七ノ一〇)。しかし時の経過は、彼の敬虔な模範の影響を少しも弱らせていない。彼の献身した生涯の記録は、幾世紀を通じて多くの人々に、「主の律法を調べ、これを行」う決意を促したのである。

エズラの動機は気高く、神聖なものであつた。彼のなしたことはすべて、魂に対する深い愛に動かされたものであつた。故意であろうが、無知によるものであろうが、罪を犯した者に対する彼の同情と情け深さは、改革を起こそうとするすべての者にとって、実物教訓でなければならぬ。神のしもべは、正しい原則に関しては岩のように堅固でなければならない。それとともに、彼らは同情と忍耐をあらわさなければならない。彼らはエズラのように、すべての正しい行為の基礎である原則を説き聞かせて、罪人に生命の道を教えなければならない。

サタンがいろいろの方法で、神の律法の要求に対して、人々の目をくらませているこの時代において、「われわれの神の命令に」、多くの人々をふるえおのかすことのできる人々が必要である(同一〇ノ三)。大いなる律法の

与え主を罪人に指し示し、彼らに「主のおきては完全であつて、魂を生きかえらせ」ることを教える、真の改革者が必要である（詩篇一九ノ七）。聖書にくわしい人々、すべての言行において主の戒めを高める人々、信仰を強めようと努力する人々が必要である。人々の心に、聖書に対する崇敬の念と愛を起こさせる教師が、なんと多く必要なことであらう。

今日、罪惡が広く行き渡っているのは、主として聖書を研究して、それに従わなかつたためであると言つことができる。神の言葉を破棄するときに、生まれながらの心の邪惡な欲情を抑制する、その力を否定する。人々は肉にまいて、肉から滅びを刈り取るのである。

聖書を破棄することから、神の律法に対する離反が生じた。人間は神の律法への服従から解放されたという教えは、道德的義務感を薄弱にし、世界に罪惡の水門を開いた。不法、放蕩、腐敗が、圧倒的に洪水のように押し寄せている。ねたみ、猜疑心、偽善、離反、競争、争鬭、神聖な信賴に対する裏切り、肉欲にふけることなどが至る所に見られる。社会生活の基盤であり骨組みであるべき、宗教的原則と教理の全体系が揺れ動いて、今にも崩壊するばかりになっている。

この地上歴史の最後の時代にあつても、シナイで語つた声は今なお、「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」と宣言している（出エジプト記二〇ノ三）。人間は神のみこころに逆らつて自分の意志に従つが、命令の言葉を沈黙させることはできない。人間の心は、より高い権力に対する義務を逃れることはできない。いろいろの説や推論があふれていることであらう。人間は啓示に対抗して科学を支持し、神の律法を廃せうとするであらう。しかし、「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」という命令が、なお一層力強く

発せられるのである(マタイ四ノ一〇)。

主の律法を弱めるとか、あるいは強めるといったことはないのである。律法はこれまでどおり、今も同じである。律法は常にそれ自体が聖であって、正しくかつ善なるものであったし、今後も常にそうなのである。律法は廃止したり、変更したりできない。律法を「光栄あるものとする」、または「軽んじる」というのは、ただ人間の言葉に過ぎない。

人間の律法と主の戒めの間に、真理と誤りの間の大争闘の、最後の戦いが行われる。今われわれはこの戦い、すなわち至上権を争う教会間の争いではなくて、聖書の宗教と作り話や伝統的宗教との間の戦いに入っている。真理に逆らって結束した勢力が、今や活発に働いている。苦難と流血という高価な価によってわれわれに伝えられた、神の聖なる言葉は尊ばれていない。それを人生の規準として、真に信じる者はほとんどいない。不信仰は世俗ばかりでなくて、教会の中にも驚くばかりに広く行き渡っている。キリスト教の柱石そのものである教理を拒否する者が多くいる。靈感を受けた筆者が記した創造、人類の墮落、贖罪、律法の永遠性などの偉大な事実はみな、自称キリスト教界の大半の人々が、否定したも同然の有様である。知識を誇る幾千という人々は、聖書を絶対的に信じることは弱さの証拠であると考える。そして聖書に異議を申し立て、その最も重要な真理を精神的意味にとって解釈することが、博学のしるしであると考える。

キリスト者は、やがて世界に、圧倒的驚きとして起ころうとしている事件の、準備をしなければならない。そして彼らは、神の言葉を忠実に研究して、その教えに生活を調和させようと努力することによって、この準備をしなければならない。永遠に関する恐るべき問題は、空想的でただ言葉と形式だけの宗教以上のものを要求して

いる。この宗教においては、真理が除外されているのである。神はリバイバルと改革を求めておられる。講壇からは、聖書、そして聖書のみの言葉が語られなければならない。しかし聖書の力は奪い去られているので、その結果は靈的生活の低下となってあらわれている。今日の多くの説教は、良心を覚醒させて魂に生命を与える、神の力に欠けている。聴衆は「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」と言うことができない(ルカ二四ノ三二)。生ける神を叫び求め、神の臨在を熱望している者がたくさんある。彼らの心に神の言葉を語ろう。これまでただ伝説と人間の説と、格言だけを聞いていた人々に、魂を新たにして、永遠の生命に至らせることができるおかたの声を聞かせよう。

家長や預言者たちから大きな光が輝き出た。神の都シオンについて、栄光に満ちた言葉が語られた。こうして主は、今日の彼の弟子たちによって光が輝き出るように計画された。もし旧約時代の聖徒たちが、あのように輝かしい忠誠のあかしを立てたとするならば、幾世紀にわたって蓄積された光が輝いている者は、真理の力について、もっと著しいあかしを立てるべきではなかるうか。預言の輝かしい光がわれわれの道を照らしている。神の子の死によって、型は原型と合致した。キリストは死からよみがえり、裂かれた墓の上で、「わたしはよみがえりであり、命である」と宣言された(ヨハネ一ノ二五)。イエスはご自分の霊を世に送って、すべての事をわれわれに思い起こさせて下さるのである。彼は力ある奇跡によって、各時代を通じて書かれたその言葉を保存された。

抗議をしたためにプロテスタントと呼ばれた改革者たちは、福音の光を世界に照らすために、神が彼らを召されたことを感じた。そしてそれをなすためには、彼らの財産、自由、生命そのものさえ犠牲にする心構えであっ

た。迫害と死にもめげず、福音は至る所で宣言された。神の言葉は人々に伝えられた。そして地位の高低を問わずすべての階級の人々、金持ちも貧しい人々も、学者も無学な者も、熱心に自分で聖書を研究した。大争闘の最後の戦いに参加しているわれわれは、初期の改革者たちのように、われわれに託された任務に忠実であろうか。

「シオンでラッパを吹きならせ。

断食を聖別し、聖会を召集し、

民を集め、会衆を聖別し、

老人たちを集め、幼な子…を集め、…

主に仕える祭司たちは、

廊と祭壇との間で泣いて言え、

『主よ、あなたの民をゆるし、

あなたの嗣業をもろもろの国民のうちに、

そしりと笑い草にさせないでください』。

「『今からでも、あなたがたは心をつくし、

断食と嘆きと、悲しみとをもってわたしに帰れ。

あなたがたは衣服ではなく、心を裂け』。

あなたがたの神、主に帰れ。

主は恵みあり、あわれみあり、

怒ることがおそく、いつくしみが豊かで、

災を思いかえされるからである。

神があるいは立ち返り、

思いかえして祝福をその後に残し、

素祭と灌祭とを

あなたがたの神、主にさざげさせられる事はないと

だれが知るだろうか」。

(ヨエル書二ノ一五―一七。一二―一四)

第五十二章 総督ネヘミヤの活躍

ヘブル人の捕囚のひとりであつたネヘミヤは、ペルシヤの宮廷で栄誉ある有力な地位を占めていた。彼は王の給仕役として、自由に王の前に出ることを許されていた。彼はその地位、また才能と忠誠のゆえに、王の友また助言者となつていたのである。しかし、王の恵みにあずかつたネヘミヤは、華やかさの中にありながらも、彼の神と彼の民とを忘れなかつた。彼はエルサレムに深い関心を寄せた。彼の望みも喜びも、エルサレムの繁栄と結びついていた。神はネヘミヤを用いて、祖先の地にいる神の民に祝福をもたらそうとご計画された。彼はペルシヤの宮廷で、召された働きに対する準備を与えられたのである。

愛国者ネヘミヤは、選ばれた都エルサレムに試練の時が来たことを、ユダからの使者から聞いた。帰還した民は、苦難と屈辱に遭つていた。神殿と都の一部は再建されたが、復興事業は妨害され、神殿の務めは邪魔された。そして人々は、都の城壁がまだ大半は荒廃したままなので、常に警戒していなければならなかつた。

ネヘミヤはあまりの悲しさのために、食べることも飲むこともできなくなつた。彼は「泣き、数日のあいだ嘆

き悲しみ、断食し」た。彼は悲しみの中にあつて天の神の助けを仰いだ。「わたしは…天の神の前に祈つ」たと彼は言った(ネヘミヤ記一ノ四)。彼は自分の罪と、民の罪とをありのままに告白した。彼は神がイスラエルの事業を支え、彼らの勇気と力を回復し、ユダの荒れ果てたところを建設する援助を賜われるように嘆願した。

ネヘミヤは祈っているうちに、信仰と勇気が強められた。彼の口には聖なる抗議が満たされた。彼は今、神の民が神に帰ったにもかかわらず、弱いままで圧迫されているならばどんな不名誉が神に投げかけられるかを指摘して、神が約束を成就なさることを求めた。「しかし、あなたがたがわたしに立ち返り、わたしの戒めを守って、これを行うならば、たといあなたがたのうちの散らされた者が、天の果てにいても、わたしはそこから彼らを集め、わたしの名を住まわせるために選んだ所に連れて来る」(申命記四ノ二九―三一参照)。この約束は、イスラエルがカナンに入る前に、モーセによつて彼らに与えられたものであつて、その後幾世紀間にわたつてなんの変りもなかった。今神の民は、悔い改めと信仰をもつて神に立ち返つたのであるから、神の約束は間違いなく果たされるのであつた。

ネヘミヤは彼の民のために、しばしば心を注ぎ出したのであつた。しかし今、彼が祈つたときに、彼の心には聖なる決意が起こつた。もし王の許可が与えられ、器具と材料を手に入れるのに必要な援助が与えられるならば、ネヘミヤ自身がエルサレムの城壁の再建事業に着手し、イスラエルの国家的勢力を回復しようと決心した。そして彼は、王の前で彼に恵みが与えられて、この計画が実施されるように主に願い求めた。「どうぞ、きょう、しもべを恵み、この人の目の前であわれみを得させてください」と彼は嘆願した(ネヘミヤ記一ノ二)。

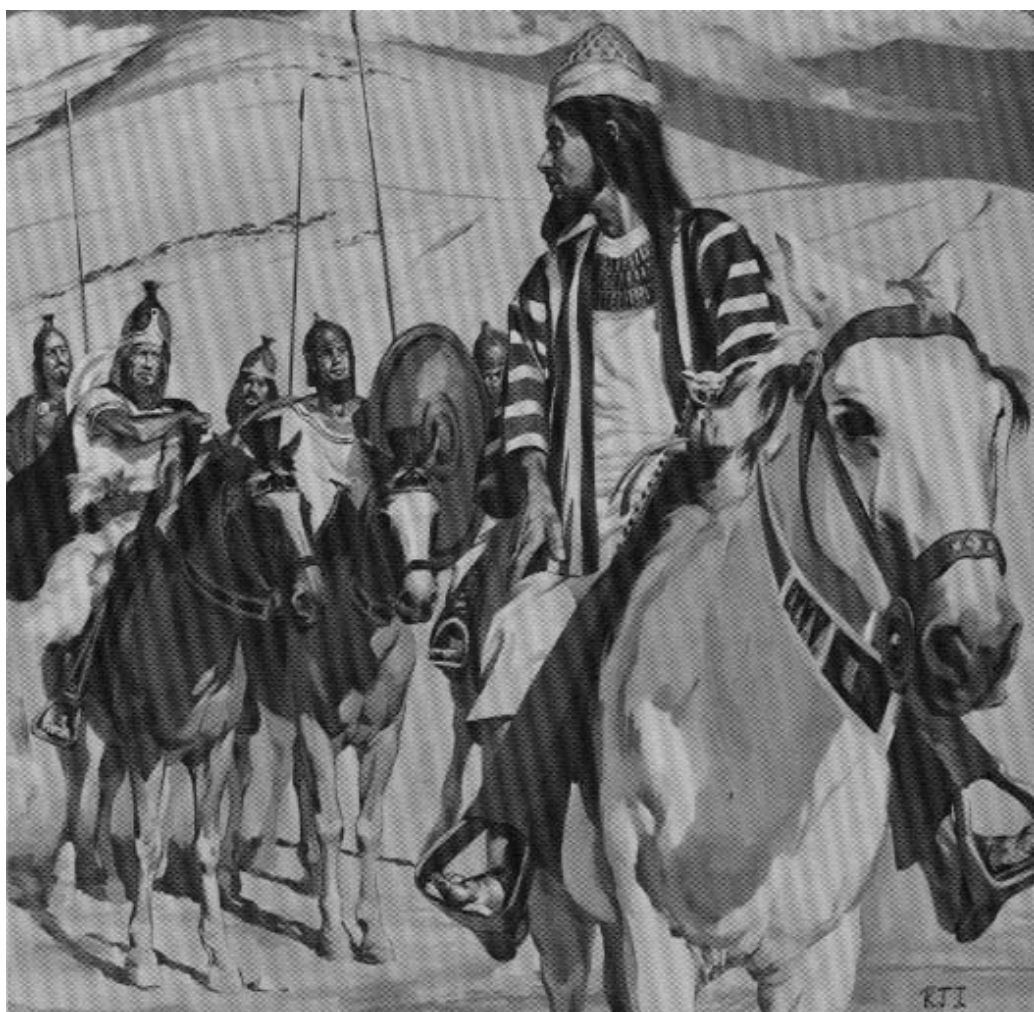
ネヘミヤは四か月間、王に願いを申し出る絶好の機会を待った。その間、彼の心は重く悲痛であつたが、王の

前では努めて快活にふるまっていた。豪華けんらんなる宮廷では、すべての者が快活に幸福そうにしていなければならなかった。王に仕える者の顔には、心配の色が影を落としてはならなかった。しかし、ネヘミヤが王の前から退いていた時には、人の目にこそ見えなかったが、多くの祈りと告白と涙が神と天使たちに聞かれ、目撃されていた。

愛国者ネヘミヤの心の悲しみと重荷は、ついに隠しておくことができなくなった。眠れぬ夜と、苦勞の多い日の疲労が彼の顔にあらわれた。王は自分の身の安全を用心深く守っていたので、顔色を読み変装を見破ることに慣れていた。そして王は、彼の給仕役が心ひそかに悩んでいることを察した。「あなたは病氣でもないのにどうして悲しげな顔をしているのか。何か心に悲しみをもっているにちがいない」と王はたずねた(ネヘミヤ記二ノ二)。

ネヘミヤはこの質問に、大いに恐れを感じた。王は、ネヘミヤが表面は王に仕えているながら、その心ははるか遠方で苦難の中にある彼の民のことを考えていたことを聞いて、怒るのではなからうか。ネヘミヤは命を絶たれるのではなからうか。エルサレムの勢力を回復しようとする彼の宿願は、覆されそうになったのであるうか。彼は、「そこでわたしは大いに恐れ」と書いている。彼は震える唇と涙にうるんだ目をもって、悲しみの原因を王に申し上げた。「わたしの先祖の墳墓の地であるあの町は荒廃し、その門が火で焼かれたままであるのに、どうしてわたしは悲しげな顔をしないでいられましょうか」(同二ノ二下句、三)。

エルサレムの状態を語ったことは、偏見をいだかせずに王の同情を呼び起こした。「それでは、あなたは何を願うのか」という次の質問は、ネヘミヤが長い間待っていた機会であった。しかし神の人ネヘミヤは、アルタク



ネヘミヤは彼の任務に威厳と権威を与える王の軍隊に守られ、王の手紙を持ってエルサレムに向かい出発した。

セルクセス王よりも大いなる神の指示を仰ぐまでは、あえて返事をしなかったのである。彼は王からの援助を必要とする、聖なる任務を成し遂げなければならなかった。そして彼は、王の承諾を得てその援助を受けることは、彼がこの事をいかに王に申し上げるかに、大いにかかわりがあることを自覚した。「わたしは天の神に祈った」と彼は言った(ネヘミヤ記二ノ四)。ネヘミヤはその短い祈りによって王の王のみ前に出て、川の水を変えるように人の心を変えることのできる力を、自分の味方にしたのである。

緊急の時にネヘミヤが祈ったように祈ることは、他の形式の祈りを行うことが不可能な場合に、キリスト者が用いることができる方法である。人込みの中で労苦しながら仕事をしている人々は、神の導きを祈り求めることができる。海陸の旅をする人々も、大きな危険にさらされるときに、このようにして天の神の保護に身をゆだねることができる。突然困難や危機が訪れた場合には、彼を信じる忠実な者の呼ぶ声に答えて、いつでも来て助けるとみずから約束なされたかたの助けを呼び求めればよいのである。人はどんな環境、どんな状態のもとにあっても、悲しみと労苦に圧倒され、あるいは誘惑に激しく襲われるときに、契約を守られる神の尽きない愛と力に、確証と支持と援助を見いだすことができるのである。

ネヘミヤは王の王へのあの短い祈りの中で、宮廷での務めから一時解放されることを、アルタクセルセスに申し出る勇気が与えられた。そして彼は、エルサレムの荒廃したところを築き上げ、エルサレムをふたたび強力な防備をもった都にする権限が与えられるように求めた。この願いは、ユダヤ民族の運命を左右する重大なものであった。「わたしの神がよくわたしを助けられたので、王はわたしの願いを許された」とネヘミヤは言う(同二ノ八)。

ネヘミヤは彼の求めた援助が確保されたので、慎重に用心深く、その企てを成功させるために必要な準備を進めた。彼はそれを達成させるために役立つと思われる手段は、何一つ怠らなかつた。彼は自国民にさえ目的を明かさなかつた。彼は、自分が成功することを喜ぶ者が大勢いることを知ってはいたが、だれかが軽率な行動によって敵のねたみを引き起こし、企てを挫折させることがあつてはならないと考えたのである。

ネヘミヤの懇願は、非常な好感をもって王に迎えられ、そのうえさらに援助を申し出るように促された。彼は旅行の安全を期するとともに、彼の任務に威厳と権威を持たせるために、軍隊の護衛を要請してそれを確保した。彼はユダヤへ行く途中通過しなければならない地域である、ユフラテ川の向こうの州の知事にあてた王の手紙を手に入れた。また彼は、レバノン山の王の森林管理者に、必要な材木を提供することを命じた王の手紙も手に入れた。ネヘミヤは彼の任務の範囲を越えたという苦情が起こらないように、注意深く自分の権威と特権とを明確にした。

この賢明な洞察力と、決然とした行動の模範は、すべてのキリスト者が学ぶべき教訓である。神の民は信仰をもってただ祈るだけでなく、勤勉と先見の明をもって働かなければならない。彼らは多くの困難に遭遇する。そして彼らは、慎重であることと、骨を折って努力することが、信仰となんの関係もないと考えるために、彼らのための摂理の働きをしばしば妨げるのである。ネヘミヤは涙を流し、主の前に祈っただけで義務を果たしたとは考えなかつた。彼は嘆願するとともに清い努力を重ね、自分が携わっている企てが成功するために、熱心に祈りつつ励んだのである。エルサレムの城壁を建設したときと同様に、今日においても聖なる事業を推進するためには、周到的な考慮とよく練られた計画が必要である。

ネヘミヤは確實でないことには頼らなかつた。彼は不足している資金は、与え得る人々の助けを仰いだ。そして主は今もお、真理の働きのために、主の財産を所有している人々の心を、快く動かして下さるのである。主のために働く者は、主が人々を動かしてお与えになる援助を活用しなければならない。これらの贈り物は、暗黒に閉ざされた多くの国に真理の光を伝える道を開くことであろう。贈り主はキリストを信ぜず、また彼の言葉を知らないかもしれないが、それだからといって、彼らの贈り物を拒んではならないのである。

第五十三章 市街の建てなおし

本章はネヘミヤ記二、三、四章に基づく

ネヘミヤのエルサレムへの旅は無事終了した。途中の州の知事にあてた王の手紙のおかげで、彼は礼を尽くして歓迎され、直ちに援助が与えられた。ペルシヤ王の権力によって護衛され、州の支配者たちから特別丁寧な扱いを受けているネヘミヤを、妨害しようとする敵はなかった。しかし彼が、軍隊の護衛を受けてエルサレムに到着し、何か重大な任務を帯びて来たことを示したことは、町の近くに住んでいた異邦の種族のねたみを引き起こした。彼らはこれまで度々、ユダヤ人に対する敵意をいだき、危害と侮辱を加えたのである。この邪悪な行為の最前線にいたのが、ホロニびとサンバラテ、アンモンびと奴隷トビヤおよび、アラビヤびとガシムであった。これらの主謀者たちは、最初からネヘミヤの運動を批判的な目で眺め、彼らのなし得る限りのことをして彼の計画を阻害し、彼の事業を妨害しようとした。

ネヘミヤはこれまでの彼の行動の特徴であった、同じ用心深さと慎重さを働かせつづけた。彼は恨み重なる強敵が、彼に対抗して立ち上がったのを知っていたので、事情を研究して計画を立てるまで、彼の任命がどんなも

のであるかを彼らに隠して知らせなかった。こうして彼は人々の協力を得て、敵の反対が起こる前に彼らを働かせるにつかせたいと希望したのである。

ネヘミヤは信頼に足ることを認めた数名の人々を選んで、彼らに自分がエルサレムに来るに至った事情と、自分が成し遂げようとする目的と、実施しようとする計画を話した。彼らは彼の企てに直ちに關心を示し、援助することを約束した。

ネヘミヤは到着後、三日目の夜中に起きて、信頼した仲間を数人連れて、みづからエルサレムの荒廃した有様を見るために出かけた。ネヘミヤはらばに乗って町の中をあちろちろ回り、父祖の町のくずれた城壁や門を調査した。愛国者ネヘミヤが悲嘆にくれて、愛するエルサレムの荒廃した防壁を眺めたときに、彼の心は痛々しい思いに満たされた。イスラエルの屈辱の様とは著しく対照的に、過去の偉大さがはつきりと思い出されるのであった。

ネヘミヤはひそかに黙々と城壁を見て回った。「つかさたちは、わたしがどこへ行ったか、何をしたかを知らなかった。わたしはまたユダヤ人にも、祭司たちにも、尊い人たちにも、つかさたちにも、その他工事をする人にもまだ知らせなかった」と彼は言っている（ネヘミヤ記二ノ一六）。彼は夜の残りの時間を祈りに費やした。というのは、朝になれば、落胆して分裂している同胞を奮い立たせて一致させるために、熱心に努力しなければならないことを、彼は知っていたからである。

ネヘミヤは、住民が町の城壁建設に協力するように要求する、王の任命を持っていたが、彼は権力の行使に依存しなかった。彼はその前にある大事業のためには、手の一致とともに、心の一致が必要であることを認めてい

たので、人々の信頼と共鳴を得ようとした。朝になって彼が人々を召集したときに、彼らの眠っている力を目覚めさせ、離散した仲間たちを一致させるように考えぬいた課題について語った。

ネヘミヤの聴衆は、その前夜に彼が真夜中の巡回をしたことを知らなかったし、彼も彼らに告げなかった。しかし、彼がこの視察をしたことは、彼の成功に大いに寄与したのである。彼は聴衆が驚くほどの正確さと詳細さをもって、町の状態について語ることができた。エルサレムの弱々しさと退廃を見たときの印象が、彼の言葉に熱誠さと力とを与えた。

ネヘミヤは、異教徒の間で彼らが辱めを受けたこと、すなわち彼らの宗教が侮辱され、彼らの神が汚されたことを人々に語った。彼は遠国において彼らの悩みを聞き、彼らのために天の神の恵みを願い求めたこと、また、彼が祈ったときに、王の許可を求めて彼らを援助するために来る決心をしたことを、彼らに話した。彼は王が、この許可を与えるだけでなく彼に権威をも授け、その事業のための援助をも彼に与えるように、神に願ったのであった。そして彼の祈りは聞かれ、彼の計画が主から出たものであることを示したのである。

ネヘミヤはこうしたことをすべて語って、彼がイスラエルの神の権威と、ペルシヤの王の権威の両方によって支持されていることを示し、この機会を活用して立ち上がり、城壁を建設するかどうかを直接人々にたずねたのである。

この訴えは直接彼らの心に触れた。彼らは、天の神の恵みがいかに彼らのためにあらわされたかを考えて、今までの恐れを恥じて新たに勇気を出し、「さあ、立ち上がって築こう」と心を一つにして言った。彼らは「奮い立って、この良きわざに着手しようとした」（同二ノ一八）。

ネヘミヤは着手した事業に、全身を打ち込んでいた。彼の希望と精力と熱心と決意とは伝染性をもっていて、同じような気高い勇氣と大望を他の人々にも吹き込んだ。各自が次々とネヘミヤのような人物となって、隣人の心と手を強めたのである。

ユダヤ人が何を達成しようとしているかを、イスラエルの敵が聞いたときに、彼らは嘲笑して言った。「あなたがたは何をするのか、王に反逆しようとするのか」。しかしネヘミヤは答えた、「天の神がわれわれを恵まれるので、そのしもべであるわれわれは奮い立って築くのである。しかしあなたがたはエルサレムに何の分もなく、権利もなく、記念もない」(ネヘミヤ記二ノ一九、二〇)。

まず最初に、ネヘミヤの熱誠さと真剣さに心を動かされたのは、祭司たちであつた。彼らは有力な地位にあつたので、事業を推進するにしても妨げるにしても、大いに力があつた。そして、彼らがまずその出発に当たって直ちに協力したことは、事業の成功に少なからず貢献したのである。イスラエルの尊い人たちがやつかさたちの大部分は、立派に彼らの義務を果たした。そしてこれらの忠実な人々は、神の書の中に榮譽ある記録を残している。テコアびとの尊い人たちなど少数の人々は、「その主の工事に服さなかつた」(同三ノ五)。これらの怠惰なしもべたちは汚名を着せられ、将来のすべての世代の人々に対する警告として、語り伝えられているのである。

どんな宗教運動においても、その事業が神のものであることを否定できないにもかかわらず、なお関心を示さず、援助の手を伸べることを拒む者がある。そのような人々は、天に記録があり、何の省略も何の間違いもない記録の書があつて、それに従つて審判が行われることを思い出すとよい。そこに、神に対して奉仕をする機会があるそかにされたことがみな記されている。そこにはまた、信仰と愛の行為がことごとく、永遠に覚えられてい

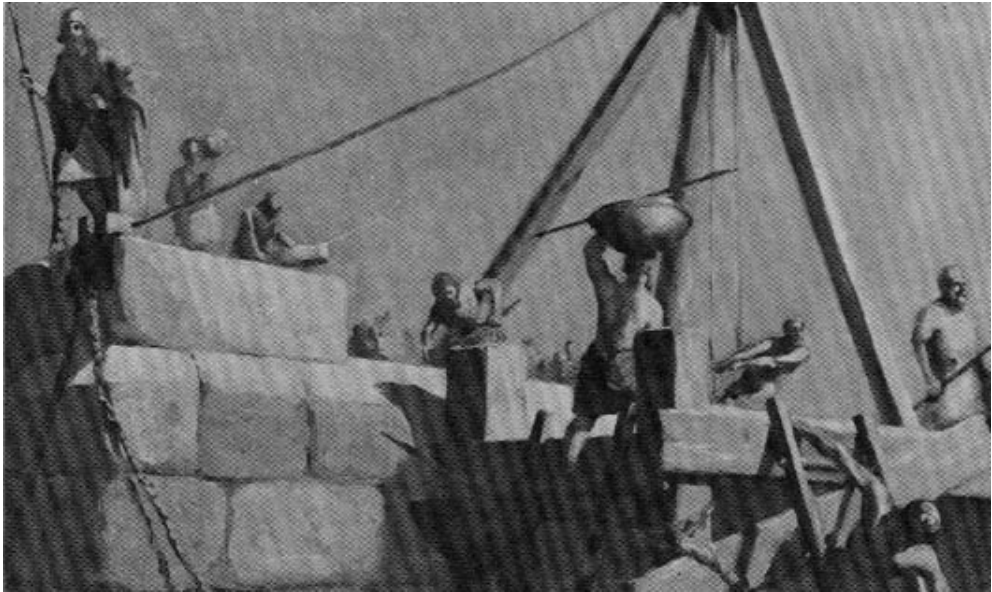
るのである。

ネヘミヤが帰還して霊的影響力を与えたことに比べれば、テコアびとの貴人たちの例は、大した影響を及ぼさなかった。大抵の人々は愛国心と熱誠に燃えていた。才能と影響力をもった人々は、種々の階級の市民を組に分けて、各組の指導者はみずから、城壁の特定の部分について建設の責任を負った。そしてある人々については、「自分のへやと向かい合っている所を修理した」と記されている(同二ノ二〇)。

工事が実際に開始されたからには、ネヘミヤの精力は弱まることはなかった。彼はたゆまず警戒しながら建設を監督し、働き人を指揮し、妨害に心を留め、緊急事態のために備えた。あの三マイルに及ぶ城壁の全地域に、彼の指導は常に行き渡っていた。彼は適切な言葉によって、恐れをいだいた者を励まし、怠惰な者を奮起させ、勤勉な者を称賛した。そして彼は常に、敵の行動を監視した。彼らは時折、あたかも陰謀をめぐらしているかのように遠方に集まって話し合い、その後で働き人のところに近づき、彼らの注意をそらすとしたのである。

ネヘミヤは彼が従事した種々の活動において、彼の力の源を忘れなかった。彼はすべてのものの偉大な監督であられる神を、常に見上げていた。「天の神がわれわれを恵まれる」と彼は叫んだ(同二ノ二〇)。そして彼の言葉はこだまして響きわたり、城壁で働いているすべての者の心を鼓舞したのである。

しかしエルサレムの防衛の回復を推進するのに、妨害がなかったわけではなかった。サタンは反対を引き起こし、失望させようと働いていた。この運動において彼の主だった手先であったサンバラテ、トビヤ、ガシムたちは、ここで再建工事を妨害しようとした。彼らは働き人の間に分裂を起こそうとした。彼らは建設者たちの努力を嘲笑し、工事は不可能なことで、必ず失敗に終わると予言した。



町の城壁を再建する働きは、指導者たちによって注意深く監督された。ネヘミヤは働く者たちを激励して歩いた。



再建の働きは「この弱々しいユダヤ人は何をしているのか」とあざける敵によって妨害された。しかし民は一心に働いた。

「この弱々しいユダヤ人は何をしているのか。自分で再興しようとするのか。…塵塚の中の石はすでに焼けているのに、これを取り出して生かそうとするのか」と、サンバラテは嘲って叫んだ。トビヤはさらに軽べつの色を浮かべて、「そうだ、彼らの築いている城壁は、きつね一匹が上ってもくずれるであろう」と言った(ネヘミヤ記四ノ二、三)。

建設者たちはやがて、もっと行動を伴った反対に悩まされた。彼らは敵の計略に対して、絶えず防衛していなければならなかった。敵は交友関係を求めると言いながら、いろいろの方法で混乱と紛糾を引き起こし、人々に不信感をいだかせようとした。彼らはユダヤ人の勇気をくじこうとした。彼らは陰謀を企て、ネヘミヤを彼らのわなに捕らえようとした。そして不誠実なユダヤ人たちは、すぐに裏切りの企てに援助を与えたのである。ネヘミヤはペルシヤ王に反抗を企て、自分をイスラエルの王に高めようとしていて、彼を援助する者はみな反逆者であるというわさが広がった。

しかしネヘミヤは、引きつづき神に指導と支持を仰ぎ求めた。そして民は、「心をこめて働いた」(同四ノ六)。工事は進んで、あいていた所がふさがれ、城壁全体はその高さの半ばにまで達したのである。

イスラエルの敵は、自分たちの努力がむだなことに気づいて、大いに怒った。彼らはこれまでは、暴力に訴えることはしなかった。というのは、ネヘミヤと彼の仲間たちは、王の任命のもとに行動しているのであって、彼に激しく反対すれば、王の怒りを招くかもしれないと、彼らは恐れたからであった。しかし今や、彼らは怒りに燃えて、彼ら自身がネヘミヤを責めていた罪を犯すことになった。彼らは集合して、「皆共に相はかり、エルサレムを攻め」ようとした(同四ノ八)。

それと同時にサマリヤびとは、ネヘミヤと彼の働きに対して陰謀を企て、ユダヤ人の指導者のある者は不満をいだいて、工事に伴う困難を誇張して彼を失望させようとした。「荷を負う者の力は衰え、そのうえ、灰土がおびただしいので、われわれは城壁を築くことができない」と彼らは言った(ネヘミヤ記四ノ一〇)。

失望はさらに別の方面からやって来た。「近くに住んでいるユダヤ人たち」、すなわち、工事に参加していない人々は、敵の言葉や情報を集めて、これらのものを用いて勇気をくじき、離反させようとした(同四ノ一二)。

しかし、ののしりと嘲り、反対と脅しなどはただ、ますますネヘミヤの決意を固め、警戒を強化させるに過ぎないのであった。ネヘミヤはこの敵との戦いにおいて、当面しなければならぬ危険を自覚はしたが、彼の勇気はくじけなかった。「われわれは神に祈り、また日夜見張りを置いて彼らに備えた」と彼は言っている(同四ノ九)。「そこでわたしは民につるぎ、やりおよび弓を持たせ、城壁の後の低い所、すなわち空地にその家族にしたがって立たせた。わたしは見めぐり、立って尊い人々、つかさたち、およびその他の民らに言った、『あなたがたは彼らを恐れてはならない。大いなる恐るべき主を覚え、あなたがたの兄弟、おすこ、娘、妻および家のために戦いなさい』」。

われわれの敵は自分たちの事が、われわれに悟られたことを聞き、また神が彼らの計りごとを破られたことを聞いたので、われわれはみな城壁に帰り、おのおのその工事を続けた。その日から後は、わたしのしもべの半数は工事に働き、半数はやり、盾、弓、よろいをもって武装した。…荷を負い運ぶ者はおのおの片手で工事をなし、片手に武器を執った。築き建てる者はおのおのその腰につるぎを帯びて築き建てた(同四ノ一三―一八)。

ネヘミヤはそばに、ラッパを吹く者をあいた。そして城壁のあちらこちらに、聖なるラッパを持った祭司たち

を配置した。人々は散らばって工事に携わっていたが、危険が迫るといつでも合図とともに、その場所へ急いで行くことになっていた。「このようにして、われわれは工事を進めたが、半数の者は夜明けから星の出る時まで、やりを執っていた」とネヘミヤは言っている(同四ノ二一)。

エルサレムの外の町々や村々に住んでいた人々は、今や城壁の中に宿って工事を護衛し、朝には、すぐに仕事にかかれるように要求された。これは不必要な遅延をなくし、家から行き来する働き人を攻撃する機会を、敵に与えないためであった。ネヘミヤと彼の仲間たちは、困難や苦役にもひるまなかった。彼らは昼も夜も、わずかに与えられた睡眠の時間においてさえ、着物をぬいだし武器を手離したりしなかった。

ネヘミヤの時代の建設者たちが、公の敵や、友人を装った者たちから受けた反対と失望は、今日、神のために働く者が経験することの象徴である。キリスト者は、敵の怒り、嘲笑、残酷さなどに苦しめられるばかりでなく、友人であり、援助者であることを誓った人々の無関心、矛盾、生ぬるさ、裏切りなどにも悩まされる。彼らには嘲りと非難が浴びせられる。侮辱させる同じ敵が、機に乗じてさらに残酷で乱暴な手段をとらせるのである。

サタンは清められていない者をみな、彼の目的の達成のために活用する。神の事業の支持者であると称している人々の中には、神の敵と結託して、神の事業を最も恨み重なる敵の攻撃にさらす者がいる。神の働きが栄えることを望んでいる者でさえ、神の敵の中傷、自慢、威嚇などを聞いてそれを語り、半ば信じることによって、神のしもべたちの手を弱めるのである。サタンは手下を用いて、驚くべき成功を収めている。そして彼の影響に屈する者は、賢い人の知恵とさとい人の知識を破壊する、魅惑的な力に服するのである。しかし神の民は、ネヘミヤのように、敵を恐れることもまた軽視することもない。彼らは神に信頼して着実に前進し、無我の精神をもつ

て神の働きをし、彼らが支持する事業を神の摂理にゆだねるのである。

ネヘミヤは太いなる失望のただ中であつて、神に信賴し、神を彼の避け所とした。そして当時、神のしもべの支持者であられたおかたは、各時代の神の民のよりどころであられたのである。神の民はすべての危機において、「もし、神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようかと、確信をもって言うことがでるのである(□ーマ八ノ三一)。しかし、サタンとその手下たちが、どんなに狡猾に陰謀をめぐらしても、神はそれらを看破して、彼らの計画をみな挫折させられる。今日信仰はネヘミヤが答えたように、「われわれの神はわれわれのために戦われます」と答えるのである(ネヘミヤ記四ノ二〇)。神が工事をしておられるのであるから、どんな人も、その最後の勝利を妨害することはできない。

第五十四章 搾取に対する譴責

本章はネヘミヤ記五章に基づく

民の貧しい人々の不幸な状態にネヘミヤが注意したのは、まだエルサレムの城壁が完成していない時であつた。国内の状況が安定していなかつたので、相当の耕地がある所になつていた。そのうえユダヤに帰還した者の中には、利己的な行動をとつた人々がいたので、彼らの地に主の祝福が与えられず、穀類が不足していた。

貧しい人々は家族に食べさせるために、法外な値段で掛け買いをしなければならなかつた。彼らはまた、ペルシヤ王に課せられた重い税金を払うために、借金をして金を作らなければならなかつた。ユダヤ人の中の金持ち、貧者の必要を利用して私腹を肥やしていたので、貧者はますます困窮に陥るのであつた。

主はモーセを通じて、三年ごとに貧者のための什一を調達することを、イスラエルにお命じになつた。また七年ごとに農業を休んで土地に休みを与え、自然に生えたものは、困窮者のために保留するという規定が設けられていた。これらの捧げ物が貧者の救済のため、またその他の慈善の目的のために用いられていたならば、神が万物の所有者であるという真理と、祝福を他に伝える通路としての彼らの機会とを、常に人々の前に鮮やかに示し

たことであろう。イスラエルの人々が訓練を受けて、利己心を捨て去り、広く気高い品性を啓発することが、主のみこころであつた。

神はまたモーセによつて、次のようにお教えになつた。「あなたが、共にあるわたしの民の貧しい者に金を貸す時は、これに対して金貸しのようになつてはならない。」「兄弟に利息を取つて貸してはならない。金銭の利息、食物の利息などすべて貸して利息のつく物の利息を取つてはならない」(出エジプト記二二ノ二五。申命記二三ノ一九)。神はまた言われた。「あなたの神、主が賜わる地で、もしあなたの兄弟で貧しい者がひとりでも、町の内にあるならば、その貧しい兄弟にむかつて、心をかたくなにしてはならない。また手を閉じてはならない。必ず彼に手を開いて、その必要とする物を貸し与え、乏しいのを補わなければならない。」「貧しい者はいつまでも国のうちに絶えることがないから、わたしは命じて言う、『あなたは必ず国のうちにいるあなたの兄弟の乏しい者と、貧しい者にと、手を開かなければならない』」(申命記一五ノ七、八。一一)。

バビロンから捕囚が帰還して後、たびたびユダヤ人の金持ちたちは、これらの命令と正反対のことを行つた。貧者が王に税金を払うために、借金をしなければならなかつたとき、金持ち金は金を貸しはしたが高い利子をとつたのであつた。彼らは貧者の土地を抵当に取つたので、あわれな債務者たちを次第に貧困の極に陥れた。おすこ娘を奴隷に売らなければならない者も多かつた。そしてこの状態を改善する希望もなく、将来の見通しもなく、困窮は増し加わり、いつまでも欠乏と奴隷の状態が続くかに見えたのである。それにもかかわらず、彼らは恵まれた兄弟たちと同じ国民であり、同じ契約の民であつた。

ついに人々は、自分たちの状態をネヘミヤに訴えた。「見よ、われわれはおすこ娘を人の奴隷とするようにし

いられています。われわれの娘のうちには、すでに人の奴隷になった者もありますが、われわれの田畑も、ぶどう畑も他人のものになっているので、われわれにはどうする力もありません」と彼らは言った（ネヘミヤ記五ノ五）。

ネヘミヤはこの残酷な圧迫のことを聞いたときに、彼の心は憤りに満たされた。「わたしは彼らの叫びと、これらの言葉を聞いて大いに怒った」と彼は言っている（同五ノ六）。ネヘミヤは圧迫的搾取の習慣を打破しようとするならば、正義のために決定的立場を取らなければならないことを認めた。彼はその独特の精力と決意をもって、兄弟たちの救出に乗り出した。

圧迫者たちが金持ちであつて、都の修復事業のために彼らの支持が大いに必要であるという事實は、一瞬でもネヘミヤに動揺を与えなかった。彼は尊い人々およびつかさたちを厳しく責めた。そして民の大会衆を集めて、この事に関する神の要求を彼らの前に示したのである。

彼はアハズ王の時代に起こった出来事に、彼らの注意をひいた。彼はその時、彼らの残酷と圧迫を譴責するために、神がイスラエルにお送りになった言葉をくり返した。ユダの民は偶像礼拝のために、彼らよりもさらに深く偶像礼拝に陥っていた、イスラエルの民の手に渡された。イスラエルの民は戦いでユダの民を幾千となく殺害し、彼らの憎しみを露骨にあらわした。そして女や子供たちを全部捕らえて、彼らを奴隷にするかまたは、異邦人に奴隷として売ろうとしていた。

主はユダの罪のゆえに、戦いが起こるのを防ぐために介入することをなさらなかった。しかし主は預言者オデデによって、勝利した軍勢の残酷な意図を譴責なさったのである。「あなたがたは今、ユダとエルサレムの人々

を従わせて、自分の男女の奴隷にしようと思っている。しかしあなたがた自身もまた、あなたがたの神、主に罪を犯しているではないか」(歴代志下二八ノ一〇)。主はイスラエルに対して怒りを発し、彼らの不正と圧迫に対して刑罰を下されることを、オデデはイスラエルの民に警告した。軍人たちはこの言葉を聞いて、捕虜とぶんどり物を、つかさたちと全会衆の前に残していった。そこでエフライムびとの主な人々が、「捕虜を受け取り、ぶんどり物のうちから衣服をとって、裸の者に着せ、また、くつをはかせ、食い飲みさせ、油を注ぎなどし、その弱い者を皆ろばに乗せ、こうして彼らをしゅろの町エリコに連れて行って、その兄弟たちに渡し」た(同二八ノ五)。

ネヘミヤおよび他の人々は、異邦人に売られたあるユダヤ人たちを買いもどした。そして彼は今、こうした行動と、世俗的利益のために、兄弟たちを奴隷にしている人々の行動とを対照してみたのである。「あなたがたのする事はよくない。あなたがたは、われわれの敵である異邦人のそしりをやめさせるために、われわれの神を恐れつつ事をなすべきではないか」と彼は言った(ネヘミヤ記五ノ九)。

ネヘミヤは彼自身が、ペルシヤ王から権威を授かったのであるから、自分の個人的利益のために、巨額の寄贈を求めることができたことを示した。しかし彼はそうする代わりに、彼が当然受けるべきであつたものすら受け取らずに、困窮状態にあつた貧者の救済のために、惜しみなく与えたのであつた。彼は搾取の罪を犯していたユダヤのつかさたちに、こうした邪悪な行為をやめるように促した。貧者に土地を返し、また彼らが貧者から搾取した利益をも返し、彼らに抵当も高利も取らずに貸すように勧めたのである。

以上の言葉は全会衆の前で語られた。もしもつかさたちが、自分たちを弁護しようと思えば、そうする機会は

あった。しかし彼らは、何の申し訳も言わなかった。「われわれはそれを返します。彼らから何をも要求しません。あなたの言うようにします」と彼らは言った。そこでネヘミヤは、祭司たちの面前で「彼らにこの言葉のとおりに行くという誓いを立てさせた」。「会衆はみな『アアメン』と言って、主をさんびした。そして民はこの約束のとおりに行った」(同五ノ一二、一三)。

この記録は重大な教訓を教えている。「金錢を愛することは、すべての惡の根である」(テモテ第一・六ノ一〇)。この世代においては、利益に対する欲望が人々の心を夢中にしている。富を得るために、しばしば不正が行われる。わずかの賃銀のために苦役を強いられ、貧しさと戦いながらも、生活の最低の必需品すら得られずにいる者が多くいるのである。彼らは生活がよくなる見通しもなく、苦勞しては奪い去られて重荷にあえぐのである。彼らは圧迫に悩み疲れて、どこに援助を求めてよいかわからない。そしてこれはみな、金持ちがぜいたくな生活を支えるためであり、あるいは貯蔵欲をほしいままにするためである。

金を愛し、虚飾を愛することが、この世界を盗人と強盗の巢にしてしまった。聖書はキリスト再臨直前の貪欲と圧迫を描いている。ヤコブは次のように書いている。「富んでいる人たちよ。よく聞きなさい。…あなたがたは、終りの時にいるのに、なお宝をたくわえている。見よ、あなたがたが労働者たちに畑の刈入れをさせながら、支払わずにいる賃銀が、叫んでいる。そして、刈入れをした人たちの叫び声が、すでに万軍の主の耳に達している。あなたがたは、地上でおごり暮し、快樂にふけり、『ほふらるる日』のために、おのが心を肥やしている。そして、義人を罪に定め、これを殺した。しかも彼は、あなたがたに抵抗しない(ヤコブ五ノ一六)。

主を恐れて生活していると公言している者の中にさえ、イスラエルの尊い人々の歩んだ道を進んでいる者があ

る。彼らは力があるので、正当なもの以上を搾取し、圧迫者となる。そして貪欲と裏切りが、キリストの名を称える人々の生活に見られ、教会は不正によつて財産を得た人々の名を名簿にとどめているために、キリストの宗教が侮られるのである。ぜいたく、詐欺、搾取は多くの人々の信仰を墮落させ、彼らの靈性を失わせている。教会は教会員の罪に対して、大いに責任があるのである。教会は罪に対して声を上げないならば、罪惡を黙認しているのである。

世俗の風習は、キリスト者にとって標準とはならない。キリスト者はその抜け目のないやりかた、詐欺、搾取をまねてはならない。同胞に対する不正行為はすべて、黄金律の違反である。神の民に対して行う惡は、すべてキリストの聖徒に行つたのであるから、キリストご自身に行つたことになるのである。他の人々の無知、弱味、不幸につけ込むことはみな、天の帳簿に詐欺として記録される。真に神を恐れる人は、やもめやみなしごを圧迫して利益を得たり、異国人の受けるべき分を拒否したりするよりはむしろ、日夜勞して働き、貧しい食事をするのである。

清廉さから少しでも離反することは、防壁を打ち破つてさらに大きな不正へと心を向けさせる。他を陥れて自己の利益を求める者は、その程度に依じて、彼の魂が神の聖靈の影響に無感覺になるのである。そのような値を払つて得た利益は、恐るべき損失である。

われわれはみな、神の正義に負うところがあるのであるが、われわれには払うべきものが何もない。その時、神のみ子がわれわれをあわれんで、贖いの値を払つて下さつたのである。彼は自分の貧しさによつて、われわれが富める者となるために貧しくなられた。われわれは貧しい者に惜しみなく与える行為によつて、われわれに表

されたあわれみに対する感謝の、真実さを証明することができる。使徒パウロは、「だれに対しても、とくに信仰の仲間に対して、善を行おうではないか」と命じている（ガラテヤ六ノ一〇）。彼の言葉は、救い主の次の言葉と調和している。「貧しい人たちはいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときにはいつでも、よい事をしやれる。」「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりになせよ。これが律法であり預言者である」（マルコ一四ノ七。マタイ七ノ一二）。

第五十五章 隣国の陰謀

本章はネヘミヤ記六章に基づく

サンバラテと彼の共謀者たちは、公然とユダヤ人に戦争を仕向けては来なかった。しかし彼らは、ますます敵意をもって、ユダヤ人を失望と混乱に陥れ、損害を与えようとひそかに働きつづけたのである。エルサレムの周囲の城壁は、急速に完成に近づいていた。それが完成して門がつけられたならば、イスラエルの敵は町の中に侵入することができなくなるのであった。そこで彼らは、速やかに工事を中止させようと意気込んでいた。ついに彼らは、ネヘミヤを働きから引き離そうとして、一つの策略を考え出した。そして彼を、彼らの手の中に入れて、間に殺すか、あるいは投獄するかしようと思った。

彼らは敵対していた関係者たちの妥協を望む風を装って、ネヘミヤとの会談を求め、オノの平野にある一つの村で彼らに会うようにと、彼を招待した。しかしネヘミヤは、彼らの真意を聖霊によって明らかに示されて断った。「それでわたしは彼らに使者をつかわして言わせた、『わたしは大いなる工事をしているから下って行くことはできない。どうしてこの工事をさしおいて、あなたがたの所へ下って行き、その間、工事をやめることがで

きようか』と彼は書いている(ネヘミヤ記六ノ三)。しかし誘惑者たちはしつこかった。彼らは四度までも、同様の意味の使者をつかわしたが、ネヘミヤは同じように彼らに答えた。

彼らはこの策略がうまくいかなかったので、もっと大胆な戦術をとることにした。サンバラテはネヘミヤに、開封の手紙を携えた使者をつかわした。それには次のように書いてあった。「諸国民の間に言い伝えられ、またガシムも言っているが、あなたはユダヤ人と共に反乱を企て、これがために城壁を築いている。…あなたは彼らの王になろうとしているまたあなたは預言者を立てて、あなたのことをエルサレムにのべ伝えさせ、『ユダに王がある』と言わせているが、そのことはこの言葉のとおり王に聞こえるでしょう。それゆえ、今おいでなさい。われわれは共に相談しましょう」(同六ノ六、七)。

もしこのうわさが本当に知れ渡っていたならば、それは憂慮すべきことであつた。うわさは間もなく王に聞こえて、ごく些細な疑惑でもあれば、厳しい罰を受けることになるのであつた。しかしネヘミヤは、この手紙が、彼を恐れさせてわなにかけるために書かれたもので、全くの偽りであることを確信した。またこの手紙が開封されていて、明らかに人々がこれを読んで驚き恐れるためのものであることから、この結論に対する確信が強められた。

彼はすぐに返事をした。「あなたの言うようなことはしていません。あなたはそれを自分の心から造り出したのです」(同六ノ八)。ネヘミヤはサタンの策略について無知ではなかった。彼はこうした企てが、建設者たちの手を弱め、工事を挫折させようとするためのものであることを知っていた。

サタンは何度も敗北した。そして今や、彼はさらに憎しみと悪らつさを増して、神のしもべに対して、もっと



シマヤは敵に買収され、ネヘミヤの安全を心配するそぶりを見せて、ネヘミヤを神殿に入るようにさそったが、彼は拒絶した。

狡猾で危険なわなを設けた。サンバラテと彼の共謀者たちは、ネヘミヤの友人であると称している人々を雇い、彼に主の言葉であるとして、邪悪な勧告を与えようとした。このよこしまな企てに従事した主な人は、シマヤであった。彼は以前、ネヘミヤの信任を得ていた人であった。彼はあたかも生命が危険にさらされているかのよう、神殿の近くの部屋の中に閉じこもった。当時神殿は城壁や門に守られていたが、都の門はまだつけられていなかった。シマヤは大いにネヘミヤの安否を気遣い、神殿の中に隠れるように彼に勧めた。「われわれは神の宮すなわち神殿の中で会合し、神殿の戸を閉じておきましょう。彼らはあなたを殺そうとして来るからです。きつと夜のうちにあなたを殺そうとして来るでしょう」と彼は言った(ネヘミヤ記六ノ一〇)。

もしネヘミヤがこの不実な勧告に従ったならば、彼は神に対する信仰を放棄し、人々の目には、臆病で卑劣な人間と思われたことであろう。それは彼が着手した重大な工事と、彼が神の力に対して持っていると言っていた確信とを考えると、あたかも恐れられたかのように隠れることは、全く矛盾したことになるのであった。そうするなら人々の間に警報が広がり、各自が安全を求めて隠れ、町は無防備となって敵の餌食となってしまったことであろう。その一つのネヘミヤの愚かな行動が、これまで彼がかち得たものをすべて、事実上放棄することになるのであった。

ネヘミヤは勧告者の本性とその目的を見抜くのに、長くかからなかった。彼は言っている。「わたしは悟った。神が彼をつかわされたのではない。彼がわたしにむかってこの預言を伝えたのは、トビヤとサンバラテが彼を買収したためである。彼が買収されたのはこの事のためである。すなわちわたしを恐れさせ、わたしにこのようにさせて、罪を犯させ、わたしに悪名をきせて侮辱するためであった」(同六ノ一二、一三)。

シマヤの破廉恥な勧告を、ネヘミヤの友であると言いながらひそかに敵と通じていた著名な人々が、一人ならず支持していた。しかし、彼らがわなを設けてもむだであった。ネヘミヤは恐れることなく次のように答えた。「わたしのような者がどうして逃げられよう。わたしのような者でだれが神殿にはいつて命を全うすることができよう。わたしはいらない」(ネヘミヤ記六ノ一一)。

公然またはひそかな敵の策動にもかかわらず、建設工事は着実に前進して、ネヘミヤがエルサレムに到着して二か月足らずのうちに、町は城壁に囲まれ、建設者たちは城壁の上を歩いて、敗北して驚く敵を見下ろすことができた。「われわれの敵が皆これを聞いた時、われわれの周囲の異邦人はみな恐れ、大いに面目を失った。彼らはこの工事が、われわれの神の助けによって成就したことを悟ったからである」と、ネヘミヤは書いている(同六ノ一六)。

しかし、主の支配の手のこうした証拠でさえも、イスラエルの人々の不満と反逆と裏切りを制するのに十分でなかった。「ユダの尊い人々は多くの手紙をトビヤに送った。トビヤの手紙もまた彼らにきた。トビヤは…シカニヤの婿であったので、ユダのうちの多くの者が彼と誓いを立てていたからである」(同六ノ一七、一八)。ここに偶像教徒との雑婚の害毒が見られるのである。ユダのある家族が神の敵と結ばれていて、その関係がわなとなったのである。他の多くの者が同じことを行った。イスラエルがエジプトから出て来た時の入り交じった群衆のように、この人々が絶えず問題を引き起こしたのである。彼らは一心に主に仕えなかった。そして、神の働きが犠牲を要求したときに、彼らはすぐに協力和支持の厳粛な契約を破棄するのであった。

ユダヤ人に対して、最も激しく妨害を企てた人々のある者たちが、彼らと友好関係を結びたいと言った。偶像

教徒と雑婚し、トビヤと売国的文通をし、またトビヤに仕えることを誓っていたユダヤの尊い人々は、今度は、彼は才能と洞察力の持ち主であるから、彼との同盟は大いにユダヤ人を益するものであると言った。それと同時に、彼らはネヘミヤの計画や行動を密告していた。こうして神の民の働きは敵の攻撃にさらされ、ネヘミヤの言動は誤解され、彼の働きを妨害する機会を与えた。

貧者や圧迫を受けた人々が、その損害の補償をネヘミヤに求めたときに、彼は勇敢に立ち上がって彼らを擁護し、訴えられた悪事をやめさせた。しかし、圧迫を受けた同胞のために用いた権威を、彼は今、自分自身のためには用いなかった。彼の努力に対して忘恩と裏切りをもつてする者もあつたが、彼は反逆者たちを罰するためには権力を用いなかった。彼は沈着に無我の精神をもつて人々のための奉仕を進め、その努力をゆるめたり、または関心を低下させたりすることはなかった。

サタンの攻撃は、神の働きと運動を推進させようとする者に対して、常に向けられてきた。サタンは度々失敗しても、これまで用いなかった方法を用いて、新たな勢いで攻撃を再開してくるのである。しかし最も恐るべきものは、彼が、神の働きの支持者であると誓った人々を用いて、ひそかに働くことである。公然とした反対は激烈で残酷であろう。しかしそれは、神に仕えると言言しながらその心はサタンのしもべである人々の、ひそかな敵意に比べるならば、神の働きに対する危険ははるかに少ないのである。この人々は、神の働きを妨げ、神のしもべたちを傷つけるためにその知識を用いる者たちに、あらゆる便益を提供することができるのである。

神のしもべたちを誘って、サタンの手下たちと同盟を結ばせるために、暗黒の君が考え出すあらゆる策略が用いられる。くり返して勧誘が行われ、彼らを義務から引き離そうとする。しかし彼らは、ネヘミヤのように断固

として、「わたしは大いなる工事をしているから下って行くことはできない」と答えなければならない。神の働き人たちは安心してその働きを続け、彼らを傷つけようとして行われる悪意の中傷を、その働きによって反論すればよいのである。彼らはエルサレムの城壁の建設者たちのように、威嚇や嘲笑や虚偽などによって、働きから引き離されることを拒否しなければならない。彼らは一瞬でも、警戒や見張りをゆるがせにしてはならない。敵は常に彼らの後をつけているからである。彼らは常に神に祈りを捧げ、「日夜見張りを置いて彼らに備え」なければならぬのである(ネヘミヤ記四ノ九)。

終末が近づくにつれて、サタンの誘惑はますます強力に神の働き人を襲うことであろう。サタンは「城壁を築く」者を嘲りののしるために、人間の手下を用いるであろう。しかし、もし建設者たちが、敵の攻撃に立ち向かうために下りて来たならば、それはただ工事を遅らせるに過ぎない。彼らは敵のしようとしていることを挫折させなければならない。しかし彼らを仕事から引き離すことは、何一つ許してはならなかった。真理は誤りよりも強い。そして正義は悪に勝利するのである。

彼らは敵に友情を示したり、共感を示したりして、義務の場所を離れるような誘惑に会ってはならなかった。何かの不注意な行動によって神の働きを辱め、または同僚の手を弱める者は、彼自身の品性にたやすくめぐい去ることのできない汚点をつけ、その将来の有用性に重大な障害を置くのである。

「律法を捨てる者は悪しき者をほめる」(箴言二八ノ四)。大いなる純潔を主張しながらも世俗と一致している人々が、常に真理の運動に反対していた人々と合同するように訴えるときに、われわれは彼らを恐れ、ネヘミヤのように断固として回避しなければならない。このような勧告は、あらゆる善いものの敵の煽動によるものであ

る。それは日和見主義者の言葉であるから、当時と同様今日においても、はっきり拒否しなければならない。神の指導力についての民の信仰を覆す影響力は、何であつても厳として抵抗しなければならない。

ネヘミヤの敵が、彼を自分たちの手の中に入れることができなかったのは、神の働きに対するネヘミヤの固い献身と、それと同様に固い神への信頼によるものであつた。怠惰な人はやすやすと誘惑に陥る。しかし高尚な目標と熱烈な決心をもつた人に、悪は足場を見つけることができない。常に前進している人の信仰は弱らない。彼は、上にも下にも前方にも、神のみこころに従つてすべてのものを備えて下さる、無限の愛の神を認めるのである。神の真のしもべたちは、恵みの座に常により頼んでいるから、くじけることのない決意をもつて働くのである。

神は、われわれ人間の力ではどうにもならない、あらゆる緊急事態に対する助けを準備しておられる。神はあらゆる苦境の助けに聖霊を与えて、われわれの希望と確信を強化し、われわれの知性に光を与え、心を純潔にして下さるのである。彼は機会を与えて、働く道を開かれる。もし神の民が、神の摂理の指示するところを見守り、神と協力する準備をしているならば、彼らは大いなる結果を見ることであろう。

第五十六章 律法の公布

本章はネヘミヤ書八、九および一〇章に基づく

それはラッパの祭りの時であつた。多くの人々がエルサレムに集まっていた。その光景は悲しむべきものであつた。エルサレムの城壁は再建され、門も建てられていたが、町の大部分はまだ廃墟であつた。

すでに年老いたエズラは、どちらを向いても消え去つたユダの栄光を回顧させるものに取り囲まれた、大通りの一角に立てられた木の台の上に立っていた。彼の右にも左にも、レビびとたちが立っていた。彼らの目は台の上から、多くの人々を見渡した。辺り一面の地域から、契約の民が集まつてきた。「エズラは大いなる神、主をほめ」た。「民は皆……『アアメン、アアメン』と……答え、こつべをたれ、地にひれ伏して主を拝した」(ネヘミヤ記八ノ六)。

とは言つても、イスラエルの罪の形跡はまだあつた。人々が他国人たちと雑婚したために、ヘブル語がなまつてしまつた。それで、話す者は律法がすべての者によく理解されるために、それを人々の言葉で説明する必要があつた。そこで祭司たちやレビびとたちのある者が、エズラといっしょになつて律法の原則を説明した。「彼ら

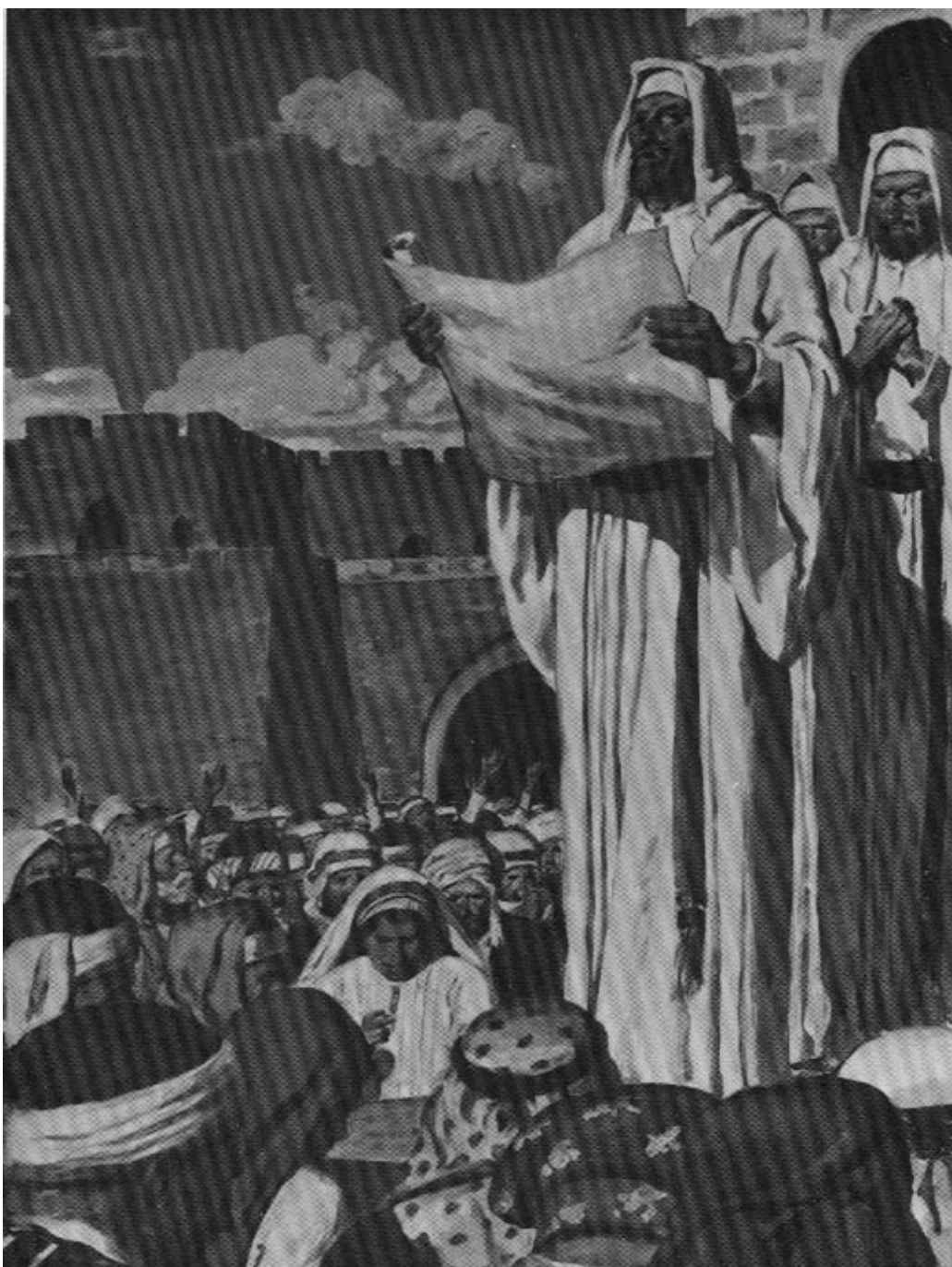
はその書、すなわち神の律法をめいりように読み、その意味を解き明かしてその読むところを悟らせた」（同八ノ八）。

「民はみな律法の書に耳を傾けた」（同八ノ三）。彼らは一心に敬虔な思いで、至高者の言葉に耳を傾けた。彼らは律法が説明されたときに自分たちの罪を悟り、それを悲しんだ。しかしこの日は祭りで喜びの日であり、聖会の日であって、主が人々に喜びと楽しみをもって守ることをお命じになった日であった。そのために彼らは悲しむことを禁じられて、彼らに対する神の大いなるあわれみのゆえに、喜ぶように命じられたのである。ネヘミヤは言った。「この日はあなたがたの神、主の聖なる日です。嘆いたり、泣いたりしてはならない。…あなたがたは去って、肥えたものを食べ、甘いものを飲みなさい。その備えのないものには分けてやりなさい。この日はわれわれの主の聖なる日です。憂えてはならない。主を喜ぶことはあなたがたの力です」（同八ノ九、一〇）。

その日の初めの部分は宗教的行事のために捧げられ、その後の時間は、神の祝福を数えて感謝し、神がお与えになった恵み深さの数々を喜んで過ごした。一部分は、何の備えもなかった貧しい人々にも送られた。律法の言葉が読まれて、それを理解できたことに對して、大いなる喜びがあったのである。

次の日も、律法を読んで説明することは続いた。そして定められた日、すなわち七月十日に、神の命令に従って、贖罪の日の厳粛な儀式が行われたのである。

同月の十五日から二十五日まで、人々とつかさたちはもう一度、仮庵の祭りを行った。次のような布告が出された。「またすべての町々およびエルサレムにのべ伝えて、『あなたがたは山に出て行って、オリブと野生のオリブ、ミルトス、なつめやし、および茂った木の枝を取ってきて、しるされてあるとあり、仮庵を造れ』…」。



エズラは壇に上り民の前に立った。年老いた預言者が主の名を呼び、すべての民は神を礼拝した。それからエズラと祭司たちが神の律法を読んだ。

それで民は出て行って、それを持って帰り、おのおのその家の屋根の上、その庭、神の宮の庭……などに仮庵を造った。……それでその喜びは非常に大きかった。エズラは初めの日から終りの日まで、毎日神の律法の書を読んだ」(ネヘミヤ記八ノ一五―一八)。

人々が毎日律法の言葉に耳を傾けたときに、彼らは自分たちの罪を悟り、彼らの前の時代の国家の罪を悟った。神の保護のみ手が取り除かれ、アブラハムの子孫が外国の地に離散したのは、彼らが神から離反したためであることを知って、彼らは神のあわれみを求め、神の戒めに従って歩むことを誓う決意をした。仮庵の祭りが終わってから二日目に行われた、この厳粛な式を行うに当たって、彼らは自分たちの中にいる異邦人を離れた。

人々が罪を告白し、神の赦しを求めて主の前にひれ伏したときに、指導者たちは、神がその約束通りに彼らの祈りを聞かれたことを信じるように、民を励ました。彼らは、ただ単に嘆き悲しみ、悔い改めるばかりではなくて、神が彼らを赦されたことを信じなければならなかった。彼らは神のあわれみを数え、神の恵み深さを賛美することに よつて、その信仰を示さなければならなかった。こうした教師たちは、「立ちあがって永遠から永遠にいますあなたがたの神、主をほめなさい」と言った(同九ノ五)。

すると集まった群衆は天に向かって手を上げて立ち、次のように歌った。

「あなたの尊いみ名はほむべきかな。

これはすべての祝福とさんびを越えるものです。……

あなたは、ただあなたのみ、主でいらされます。

あなたは天と諸天の天と、その万象、

地とその上のすべてのものの、

海とその中のすべてのものを造り、

これをことごとく保たれます。

天の万軍はあなたを拝します」。

(ネヘミヤ記九ノ五、六)

賛美の歌は終わった。会衆の指導者はイスラエルの歴史を語り、彼らに対する神の恵みがいかに大きかったか、そして彼らの忘恩がいかになはだしかったかを示した。そして全会衆は、神のすべての戒めを守る契約を結んだ。彼らはその罪の罰を受けた。そして今、彼らは自分たちに対する神の処置の正しさを認めて、神の律法に従うことを誓った。そしてこれが、「堅い契約」となり、彼らが義務を負った記念として、永久に保存されるために記録し、祭司たち、レビびとたち、つかさたちがこれに印を押した(同九ノ三八)。それは義務を思い起こさせるものであると共に、誘惑に対する防壁となるのであった。人々は「神のしもべモーセによって授けられた神の律法に歩み、われわれの主、主のすべての戒めと、おきてと、定めとを守り行う」ことを厳粛に誓った(同一ノ二九)。この時の誓約の中には、その地の民と雑婚しない約束も含まれていた。

断食の日の終わりに先立って、人々は安息日を汚すことをやめる誓約をして、彼らの主に帰る決意をさらに表明したのである。ネヘミヤはこの時は、後の時代のように、自分の権威によって異邦の商人たちがエルサレムに来ることを、とめてはいなかった。しかし彼は、人々が誘惑に陥ることがないように、これらの商人から買って、

安息日の律法を犯さないという厳粛な誓約を彼らと結んだ。こうして彼は、商人たちが来ないようにし、彼らの商売をやめさせようとしたのである。

また、神の公の礼拝を支えるための備えも行われた。会衆は十分の一のほかに、聖所の務めを維持するために、一定の額を毎年捧げること約束した。ネヘミヤは次のように書いている。「われわれ…はくじを引いて…われわれの土地の初なり、および各種の木の実の初なりを、年々主の宮に携えてくることを誓い、また律法にしているように、われわれの子どもおよび家畜のういご、およびわれわれの牛や羊のういごを、われわれの神の宮に携えて」くることにした(同一〇ノ三四、三五)。

イスラエルは背信を深く悲しんで、神に立ち返った。彼らは嘆きと悲しみのうちに罪を告白した。彼らは自分たちに対する神の処置の正当さを認めて、神の律法に従うことを誓った。今彼らは、神の約束に対する信仰を表さなければならなかった。神は彼らの悔い改めを受け入れられた。今彼らは、罪の赦しの確証が与えられ、神の恵みに回復されたことを喜ばなければならなかった。

真の神の礼拝を回復しようとしたネヘミヤの努力は成功した。人々が彼らの誓いに忠実で、神の言葉に服従しているかぎり、主は彼らに豊かな祝福を与えて、約束を果たされるのであった。

罪を悟って自分たちの無価値なことを知り、打ちひしがれている者にとって、この記録は信仰と激励の教訓を教えている。聖書はイスラエルの背信の結果をありのままに記している。しかし聖書はまた、彼らが主に帰ったときの心からのへりくだりと悔い改めと、熱烈な献身と惜しみなき犠牲をも記しているのである。

真に主に立ち返るごとに、生活には永続的喜びが与えられる。罪人が聖霊の感化力に服従するときに、彼は、

心を読まれる偉大な主の神聖さと比較して、自分自身の罪と汚れを見るのである。彼は自分が罪に定められていたのを見る。しかし彼は、そうだからといって絶望はしない。なぜならば、彼の赦しはすでに確保されたのである。彼は罪が赦されたことを感じ、罪を赦して下さる天の父の愛を喜ぶことができる。悔い改めた罪深い人間を、愛の腕にいだいてその傷を包み、罪から彼らを清め、救いの衣を彼らに着せることは、神の栄光なのである。

第五十七章 改革が始まる

ユダの民は神の律法に従うことを、公式に厳粛に誓った。しかし、エズラとネヘミヤの感化がしばらく取り去られると、主から離れたものが多かった。ネヘミヤはペルシヤに帰った。彼がエルサレムにいなかった間に罪悪が忍び込んできて、国家を腐敗させようとしたのである。偶像礼拝者たちは町の中で足場を固めたばかりでなく、彼らが入り込んできて神殿の境内そのものを汚すに至った。大祭司エリアシブと、イスラエルの恨み重なる敵であるアンモンびとトビヤとの間には、縁組によって友好関係が結ばれていた。この汚れた同盟の結果、エリアシブは神殿に付随していた部屋を、トビヤが使用することを許した。そこはもと、人々の什一や捧げ物を保管する倉庫であった。

神はアンモンびととモアブびとが、イスラエルに対して行った残虐と裏切りのゆえに、彼らは永久に神の民の会衆から閉め出されなければならないと、モーセによって言われた(申命記二三ノ三―六参照)。この言葉に反して、大祭司は、神の家のへやに貯えられてあった捧げ物を外に出して、この禁じられた種族の代表者の入る場所

をつくった。神と神の真理の敵に対して、このような好意を示すことほど、神に対する大きな侮辱はなかった。ネヘミヤはペルシヤから帰ってきて、神に対するこの大胆な冒瀆を知り、直ちに侵入者を追放する手段を取った。彼は次のように言っている。「わたしは非常に怒り、トビヤの家の器物をことごとくそのへやから投げだし、命じて、すべてのへやを清めさせ、そして神の宮の器物および素祭、乳香などを再びそこに携え入れた」（ネヘミヤ記一三ノ八、九）。

神殿が汚されたばかりでなく、捧げ物も誤って用いられた。そのために人々は、惜しみなく捧げることになった。彼らは熱心さと熱情を失い、十分の一を出ししぶった。主の家の倉には、わずかしき物がなかった。歌うたう者たちや、宮の務めをするために雇われていた多くの人々は、十分の物が与えられずに、神の働きをやめて他のところで働くために去って行った。

ネヘミヤはこうした害悪を正すために働き始めた。彼は主の務めを去った人々を集めて、「その持ち場に復帰させた。」こうして人々の信頼をかち得た。「そこでユダの人々は皆、穀物、ぶどう酒、油の十分の一を倉に携えてきた。」「忠実な者と思われた」人々が、「倉（の）つかさ」とされた。「彼らの任務は兄弟たちに分配する事であった」（同一三ノ一一―一二）。

偶像礼拝者と交わったもう一つの結果は、イスラエルを真の神の礼拝者として、他のすべての国々と区別したしるしである、安息日を無視したことであった。ネヘミヤは異邦の商人や行商人がエルサレムにやって来て、多くのイスラエルの人々に、安息日に商売に従事させていたことを知った。原則を犠牲にすることができない者もあつたが、他の者は、良心的に従おうとする人々の道德觀念を抑えつけて、律法を犯し異教徒と同調した。ネヘ

ミヤは次のように書いている。「そのころわたしはユダのうちで安息日に酒ぶねを踏む者、麦束を持ってきて、ろばに負わす者、またぶどう酒、ぶどう、いちじくおよびさまざまな荷を安息日にエルサレムに運び入れる者を見た……。そこに住んでいたツロの人々もまた魚およびさまざまな品物を持ってきて、安息日にユダの人々に売り、エルサレムで商売した」(同一三ノ一五、一六)。

このような事は、つかさたちが権威を行使したならば、防ぐことができたのであつた。しかし彼らは、自分たちの利益を増進するために、神を敬わない人々に味方したのである。ネヘミヤは彼らが義務を怠ったことを、恐れることなく譴責した。彼は厳しく責めた。「あなたがたはなぜこの悪事を行つて、安息日を汚すのか。あなたがたの先祖も、このように行つたので、われわれの神はこのすべての災を、われわれとこの町に下されたではないか。ところがあなたがたは安息日を汚して、さらに大いなる怒りをイスラエルの上に招くのである」(同一三ノ一七、一八)。

「そこで安息日の前に、エルサレムのもろもろの門が暗くなり始めた時」、ネヘミヤはそのとびらを閉じさせ、安息日が終わるまでこれを開いてはならないと命じた。そして彼は、エルサレムのつかさたちが任命する者よりも、自分のしもべたちを信用していたので、彼らを門においてこの命令を実施させた(同一三ノ一九)。

「商人およびさまざまな品物売る者どもは」、なかなかその考えを変えようとせず、市民または田舎の人々と商売をする機会を得ようとして、「一、二回エルサレムの外に宿った」(同一三ノ二〇)。ネヘミヤは、もしそのようなことが続くなれば、罰を加えると彼らに警告を発した。「あなたがたはなぜ城壁の前に宿るのか。もしあなたがたが重ねてそのようなことをするならば、わたしはあなたがたを処罰する」と、彼は厳しく言った。「そのと



異教の商人たちが来て、安息日に売買をはじめた。ネヘミヤはそれをやめさせた。

き以来、彼らは安息日にはこなかった」(ネヘミヤ記一三ノ二二)。彼はまたレビびとが、一般の民よりは人々の尊敬を受けているのを知っていたので、彼らに命じて門を守らせた。彼らは神の務めに密接な関係があったので、神の律法への服従を実施するのに、大いに熱心であることを期待されるのは当然であった。

さてネヘミヤは、イスラエルが偶像礼拝者たちと雑婚して交わることによって、ふたたび陥ろうとしていた危険に目を向けた。彼は次のように書いている。「そのころまた、わたしはアシドド、アンモン、モアブの女をめとったユダヤ人を見た。彼らの子供の半分はアシドドの言葉を語って、ユダヤの言葉を語ることができず、おのおのその…民の言葉を語った」(同一三ノ二三、二四)。

このような律法に背いた結合は、イスラエルに大きな混乱を引き起こした。こうした縁組を結んだ者の中には、人々が勧告を求め、安全な模範として見上げるべき高い地位の人、つかさたちがいいた。ネヘミヤはもしこの害悪が続いたならば、どのような破滅が国家を襲うかを予知して、熱心に悪者たちに訴えた。彼はソロモンの例を指摘して、諸国の中にこの人ほどの王は起こらなかったことを、彼らに思い起こさせた。神は彼に大いなる知恵をお与えになったのである。それにもかかわらず、偶像を礼拝する女たちが、彼の心を神から引き離れた。そして彼の模範が、イスラエルを腐敗させたのである。ネヘミヤは厳しく言った。「それゆえあなたがたが…このすべての大いなる悪を行(う)…のを、われわれは聞き流しにしておけようか。」「あなたがたは彼らのおすこに自分の娘を与えてはならない。またあなたがたのおすこ、またはあなたがた自身のために彼らの娘をめとってはならない」(同一三ノ二七、二五)。

彼が人々の前に神の命令と警告とを示し、この罪そのもののゆえに過去においてイスラエルに下った、恐るべ

き刑罰を示したときに、彼らの良心は目覚めて改革の働きが起こり、警告を発せられていた神の怒りは取り去られ、神の嘉納と祝福が与えられたのである。

聖職についていた者の中には、異邦の妻と別れることができないと言って、彼らのために嘆願する者もあった。しかし特別の措置は与えられなかった。階級や地位に対する考慮は払われなかった。祭司やつかさたちのうちで偶像礼拝者との離別を拒んだ者は、直ちに主の奉仕から引き離されたのである。悪名高いサンバラテの娘と結婚した大祭司の孫は、職を解かれただけでなく、直ちにイスラエルから追い出された。「わが神よ、彼らのことを覚えてください。彼らは祭司の職を汚し、また祭司およびレビびとの契約を汚しました」と、ネヘミヤは祈った（ネヘミヤ記一三ノ二九）。

神のために忠実に働いたネヘミヤにとって、このやむを得ぬ厳格さがどれだけ彼の心を痛めたかは、審判の時のみ明らかにされることであろう。反対の勢力との争いが絶えず起こり、断食と屈辱と祈りによってのみ、前進することができたのである。

偶像礼拝者と結婚した者の多くは、彼らとともに追われることを選び、会衆から追放された者はサマリヤびとに加わった。神の働きにおいて高い地位を占めていた人々もここへ行き、しばらく後には、全く彼らと運命を共にするに至った。サマリヤびとたちはこの同盟を強化するために、さらにユダヤの信仰と習慣を取り入れることを約束した。そして背信者たちは、彼らの以前の兄弟たち以上のことをしようとして決意して、グリジム山に神殿を築き、エルサレムにある神の家に対抗させようとした。彼らの宗教は、ユダヤ教と異教主義の入り交じったものとして継続し、彼らが神の民であると主張したことは、世々にわたって二国間の分裂、競争、敵意のもとになった。

今日推進されるべき改革の働きにおいて、エズラやネヘミヤのように、罪の軽減も、言い訳もせず、恐れずに神の栄誉を擁護する人々が必要である。この働きの重責を担う人々は、悪が行われる時に沈黙したり、偽りの慈善という衣で、罪悪を覆ったりはしないのである。彼らは神が公平なかたであることを思い出し、数名を厳格に処罰することは、多くの人々を救うことを思い出す。そしてまた彼らは、悪を譴責する者は、常にキリストの精神をあらわすべきであることを忘れないのである。

エズラとネヘミヤはその仕事を行ったときに、神の前にへりくだって自分たちの罪と民の罪を告白し、自分たちが罪を犯した者であるかのように赦しを求めた。彼らは忍耐強く働き、祈り、苦難に耐えた。彼らの働きを最も困難にしたのは、異教徒のあからさまな敵意ではなくて、友人を装った者のひそかな反対であった。彼らは悪に加担し、神のしもべたちの重荷を十倍も重くしたのである。こつした反逆者たちから、主に敵対する者たちは、神の民と戦う時に利用する材料を供給されたのである。彼らの邪悪な心と反逆的意志とは、常に神の明白な要求に戦いを挑んだのであった。

ネヘミヤの努力が成功したことは、祈りと信仰と、賢明で活発な行動が何を成し遂げることができ力を示している。ネヘミヤは祭司ではなかった。彼は預言者でもなかった。彼は大きな称号を求めなかった。彼は大切な時に立てられた改革者であった。人々を神との正しい関係に引きもどすことが、彼の目的であった。彼は大きな目的に心を動かされて、彼の存在の総力をその達成のために費やしたのである。彼の努力は、あくまでも清廉潔白なものであった。彼は罪悪と正義に対する反対に当面したとき断固たる態度をとったので、人々は奮い立って、新しい熱心と勇気をもって働いたのである。彼らはネヘミヤの忠誠、その愛国心、神に対する深い愛を認めない

わけにはいかなかった。そしてこれを悟ったうえで、彼らは喜んで彼の指導に従った。

神がお定めになった義務を勤勉に果たすことは、真の宗教の重要な一部分である。人間は時の状況を、神の心を達成する手段として捕らえなければならぬ。適当な時に直ちに決定的行動をとれば、輝かしい勝利を得ることができるが、遅延と怠慢は失敗に終わり、神のみ栄えを汚すことになる。もしも真理の運動の指導者が、熱を示さず、無関心で目標が定まっていなければ、教会は冷淡で怠惰で享樂的になる。しかしもし彼らが、神のみに仕えるという聖なる決意に満ちているならば、民は一致して、希望にあふれ、熱心になるのである。

神の言葉は、明確で著しい対照に満ちている。罪と聖とが並記されているから、それを見てわれわれは、一方を避けて他方を受け入れればよいのである。サンバラテとトビヤの憎しみと虚偽と裏切りを描写したページは、また、エズラとネヘミヤの気高さと献身と自己犠牲をも描写しているのである。われわれは自由に、どちらでもまねてよいのである。神の命令に背いた恐るべき結果が、服従に従う祝福と対照されている。われわれは一方の罰を受けるか、他方の祝福にあずかるかを、自分で決定しなければならないのである。

ゼルバベル、エズラ、ネヘミヤの指導のもとに、帰還した捕囚たちが行った回復と改革の働きは、この地上歴史の最後の時代に行われるべき、霊的回復の働きの情景を示している。イスラエルの残りの民は、敵の襲撃にさらされた弱い民であった。しかし神は、彼らによって、神ご自身とその律法についての知識を地上に示そうとなさった。彼らは真の礼拝の擁護者であり、聖なる言葉の保管者であった。彼らは神殿を再建し、エルサレムの城壁を建設したときに、様々の経験をしたのである。彼らは強力な反対に当面しなければならなかった。この仕事の指導者たちの負った荷は、実に重かった。しかしこの人々は、神が真理に勝利をお与えになることを信じつつ、

揺るがぬ確信と謙遜な精神と、神に対する固い信頼をもって前進した。ネヘミヤはヒゼキヤ王のように、「固く主に従って離れることなく、主が……命じられた命令を守った。主が彼と共にあられた」（列王紀下一八ノ六、七）。

ネヘミヤの時代に推進された働きが象徴していた、霊的回復が、次のイザヤの言葉の中に示されている。「彼らはいにしえの荒れた所を建てなおし、さきに荒れた所を興し、荒れた町々を新たに」する。「あなたの子らは久しく荒れた所を興し、あなたは代々やぶれた基を立て、人はあなたを『破れを繕う者』と呼び、『市街を繕って住むべき所となす者』と呼ぶようになる」（イザヤ書六一ノ四。五八ノ一二）。

広く一般が真理と正義から離反しているときに、神の国の基礎である原則を回復しようとする人々のことを、預言者はここで描写しているのである。彼らは神の律法の破れを回復する人々である。すなわち神の律法は、神が選民を保護するために、彼らの周りに置かれた城壁であつて、その正義、真理、純潔である戒めに従うことが、彼らを永久に保護するのである。

預言者は間違えようのない明白な言葉で、城壁を建設するこの残りの民の、特別な働きを指示している。『もし安息日にあなたの足をとどめ、わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日となえ、これを尊んで、おのが道を行わず、おのが楽しみを求めず、おなししい言葉を語らないならば、その時あなたは主によって喜びを得、わたしは、あなたに地の高い所を乗り通らせ、あなたの先祖やコブの嗣業をもって、あなたを養う』。これは主の口から語られたものである」（同五八ノ一二、一四）。

終末時代に、神のすべての戒めが回復される。人間が安息日を変更したときにできた、律法の破れが回復され

る。神の残りの民は改革者として世の前に立ち、神の律法がすべての永続的改革の基礎であって、第四条の安息日は創造の記念であり、常に神の力を思い起こさせるものであることを、示さなければならぬ彼らは明白な言葉で、十誡のすべての戒めに服従する必要がある。彼らはキリストの愛に動かされて、キリストと共に力を合わせて、荒れすたれた所を復興しなければならない。彼らは、破れを繕う者、市街を繕って住むべき所となす者、とならなければならないのである（イザヤ書五八ノ一二参照）。

第五十八章 救い主を待望する人々

われわれの祖先が、エデンの故郷を失った日から、神のみ子が罪人の救い主として現れる時まで、「悩みと暗きと」「苦しみのやみ」（イザヤ書八ノ二二）の長い幾世紀間を通じて、罪と墓のきずなから人々を解放する救い主の来臨が、墮落した人類の希望の中心であった。

この希望について、アダムとエバに最初に与えられた暗示は、エデンにおいてへびに向かって言われた宣告であった。主は、彼らの聞いているところでサタンに宣言されたのである。「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」（創世記三ノ一五）。

罪に陥った二人が、この言葉を聞いて希望を抱いた。サタンの力が砕かれるという預言のなかに、彼らは罪の結果もたらされた破滅からの救いの約束を認めたのである。彼らは敵の惑わしに陥って、主の明白な命令にそむいたために、敵の力のもとにあつて苦しまなければならなかったが、絶望するには及ばなかった。神のみ子が、

彼らの罪のためにご自身の血潮によってあがなうことを申し出られたのである。彼らには、猶予の期間が与えられ、その期間中に彼らは、キリストの救いの力を信じる信仰によって、もう一度神の子となることができるのであった。

サタンは首尾よく人間を服従の道から離反させたために、「この世の神」となった(コリント第二・四ノ四)。かつてアダムのものであった統治権が、横領者の手に移った。しかし神のみ子は、この世界に来て罪の価を払い、こうして人類を贖うだけでなく、失われた統治権をも回復しようとなさったのである。ミカが次のように預言したのは、この回復のことである。「羊の群れのやぐら、シオンの娘の山よ、以前の主権はあなたに帰ってくる」(ミカ書四ノ八)。使徒パウロはそれを「神につける者が全くあがなわれ」と言っている(エペソ一ノ一四)。また詩篇記者が、「正しい者は国を継ぎ、とこしえにその中に住むことができる」と言ったのは、人間本来の嗣業がついに回復される同じ時のことを指していたのである(詩篇三七ノ二九)。

神のみ子が、救い主としてまた王として来臨されて、贖いを行われるというこの希望は、人々の心の中から消えたことはなかった。暗いこの世のかなたに、来たるべき現実の世界を信仰によって待望した人々が最初からあった。アダム、セツ、エノク、メトセラ、ノア、セム、アブラハム、イサク、ヤコブなどにより、またその他の勇者たちによって、主は神のみこころの尊い啓示を保存されたのである。こうして、選民イスラエルの人々によって、約束のメシヤが世界に与えられるのであった。彼らによって神は、神の律法の要求と神の愛するみ子の贖罪の犠牲によって救いが成し遂げられることを、人々に告げられたのである。

イスラエルの希望は、アブラハムが召された時に与えられ、後に彼の子孫に繰り返して与えられた「地のすべ

てのやからは、あなたによって祝福される」という約束に含まれていた(創世記二二ノ三)。人類を贖うという神のみこころがアブラハムに示されたときに、義の太陽が彼の心に輝いた。そして彼の心の暗黒は追い散らされた。そしてついに、救い主ご自身が人間の間を歩き語られたときに、彼は、贖い主の来臨による救いという、輝かしい希望を、家長たちが抱いていたことを、ユダヤ人にあかしされた。「あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようとして楽しんでいた。そしてそれを見て喜んだ」とキリストは言われた(ヨハネ八ノ五六)。

死の床にあつた家長ヤコブが、息子のユダに与えた祝福の言葉の中に、この同じ祝福された希望が預言されている。

「ユダよ、兄弟たちはあなたをほめる。

あなたの手は敵のくびを押え、

父の子らはあなたの前に身をかがめるであらう。

つえはユダを離れず、

立法者のつえはその足の間を離れることなく、

シロの来る時までには及ぶであらう。

もろもろの民は彼に従う」。

(創世記四九ノハ一一〇)

また約束の国の国境において、世界のあがない主の来臨が、バラムの預言の中に予告されていた。

「わたしは彼を見る、しかし今ではない。

わたしは彼を望み見る、しかし近くではない。

ヤコブから一つの星が出、

イスラエルから一本のつえが起り、

モアブのこめかみと、

セツのすべての子らの脳天を撃つであろう」。

(民数記二四ノ一七)

墮落した人類のために神がみ子をお送りになるという神のみこころは、モーセによってイスラエルに示されていた。ある時モーセは、彼の死の少し前に次のように言った。「あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞のうちから、わたしのようなひとりの預言者をあなたのために起されるであろう。あなたがたは彼に聞き従わなければならない」。モーセは、来るべきメシヤの働きについて、イスラエルに教えるように明白な指示を受けた。「わたしは彼らの同胞のうちから、おまえのようなひとりの預言者を彼らのために起して、わたしの言葉をその口に授けよう。彼はわたしが命じることを、ことごとく彼らに告げるであろう」と、主はモーセに言われた(申命記一八ノ一五、一八)。

家長時代においては、礼拝の時にささげられていた犠牲が、常に救い主の来臨を人々に思い起こさせていた。そしてイスラエルの歴史を通じて、聖所の務め全体がそうだったのである。幕屋の務めにおいて、そしてそれに

代わった聖所の務めにおいて、人々は毎日、型と影によって、キリストが贖い主、祭司、王として来られることについての真真理を教えられた。そして一年に一度、彼らの心は、キリストとサタンとの間の大争闘が終わりを告げ、宇宙の最後の清めが行われて、罪と罪人が除かれる時のことを思わせられたのである。モーセの律法の犠牲と供え物とは、常にはるかにすぐれた務め、すなわち天の務めを指さしていた。地上の聖所は、「今の時代に對する比喩である」。そこで供え物やいけにえが共にささげられた。その二つの部屋は、「天にあるもののひな型」であつた。われわれの大祭司であられるキリストは、今日「人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる」(ヘブル九ノ九。一三。八ノ二)。

主がエデンの園でへびに、「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に」(創世記三ノ一五)と言われた日から、サタンはこの地上の住民に対して絶對的支配權をふるうことができなことを知った。アダムとその子らが、神のお定めになつた儀式の犠牲を、來たるべきあがない主の型としてささげ始めたときに、サタンは、これらの中に天と地の間の交わりの象徴を見たのである。その後幾世紀間の長きにわたつて彼は、絶えずこの交わりを妨げようと努力してきたのである。彼はうまずたゆまず神を誤表し、救い主を予表した儀式を誤つて解釈することに努めて、人類の大多数を陥れるのに成功した。

神は、ご自分が人々を愛しておられるゆえに、彼らをご自分に和解させるための賜物としてイエスをお与えになることを、人々に教えようと望まれたが、人類の大敵は、神が彼らの滅びるのを喜ぶかたであるかのように思わせようと努めた。こうして神の愛をあらわすために天の神がお定めになつた犠牲や儀式は曲解されて、罪人がささげ物や善行によって、神の怒りをいたずらに和らげようとする方法と化してしまつたのである。それと共に、

サタンは人間に邪惡な欲望を起こさせ、それを刺激して、多くの者が罪に罪を重ねて神から遠く離れ、罪のかせに縛られて、逃れられないようにするのであった。

へブル人の預言者によって文字に書かれた神の言葉が与えられたときに、サタンはメシヤに関する言葉を熱心に研究した。彼は、キリストが人々の間で、苦悩する犠牲として、また勝利する王としてなされる働きについて、紛れもない明瞭さをもって記されている言葉を注意深く調査した。彼は、旧約聖書の巻物の中で、来たるべきかたは「ほふり場にひかれて行く小羊のように」であり、「彼の顔だちは、そこなわれて人と異なり、その姿は人の子と異なっていた」とあるのを讀んだ（イザヤ書五三ノ七。五二ノ一四）。約束された人類の救い主は、「侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。…彼は…神にたたかれ、苦しめられた」。それにもかかわらず、彼はまた「民の貧しい者の訴えを弁護」するために、彼のたいなる力を行使されるのであった。彼は「乏しい者に救を与え、しえたげる者を打ち砕」かれるのであった（イザヤ書五三ノ三、四。詩篇七一ノ四）。こつした預言は、サタンをふるえおのかせた。しかし彼は、主が失われた人類を贖うために取られる恵み深い処置を、できることならば妨害しようとする彼の計画を捨てなかつた。彼はメシヤに関する預言の真の意義について、できる限り人々の目をくらまそうと決意した。そして、キリストが来られたときに、彼を拒否させようとしたのである。

洪水直前の数世紀間において、広く全世界を神に反逆させようとしたサタンの努力は成功を収めた。そして、洪水のこの教訓さえ、人々は長く覚えていなかった。サタンは巧みなほのめかしによって、人々を再び大胆な反逆へと、一步一步陥れていった。サタンはもう一度勝利したかのように思われたが、墮落した人類に対する神の

みこころは、このようなことで挫折するものではなかった。セムの家系の忠実なアブラハムの子孫によって、主の恵み深い計画についての知識が、将来の世代の人々のために保存されるのであった。時折、神の任命を受けた真理の使者が立ち上がって、犠牲をささげる儀式の意味、特にすべての犠牲制度の儀式が指し示していたおかたの来臨についての主の約束に、人々の注意を引くのであった。こうして、世界全体が背信に陥ってしまわずにすむのであった。

神のみこころを遂行するためには、最も断固とした反対に遭うことを覚悟しなければならなかった。真理と義の敵は、あらゆる方法を用いてアブラハムの子孫に彼らの神聖で大きい召しを忘れさせて、偽りの神々を礼拝させようとした。そして彼の努力は、まさに成功しようとしたのである。キリストの初臨の前の数世紀間は、暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおおったのである。サタンは、彼の憎むべき影を人間の道に投げかけて、彼らが神と来世のことを知るのを妨害しようとしたのである。大勢の人々が死の陰にすわっていた。彼らの唯一の希望は、この暗黒が取り去られて、神があらわされることであつた。

神に油を注がれたダビデは、預言的幻のなかで、キリストの来臨は、「朝の光のように、雲のない朝に、輝きでる太陽のよう」であることを予見したのである(サムエル記下二三ノ四)。またホセアは「主はあしたの光のよくに必ず現れいで」とあかしした(ホセア書六ノ三)。朝の光は音もなく静かに地上に輝き、暗黒の影を追い散らし、地を生命に目覚めさせる。そのように義の太陽は昇り、「その翼には、いやす力を備えている」(マラキ書四ノ二)。「暗黒の地に住んで」いる多くの人々は、大いなる光を「見るのであつた(イザヤ書九ノ二)。

預言者イザヤは、この輝かしい救いを見て喜びに打ちふるえ、次のように叫んだ。

「ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。

まつりごとはその肩にあり、

その名は、『靈妙なる議士、大能の神、

とこしえの父、平和の君』となえられる。

そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、

ダビデの位に座して、その国を治め、

今より後、とこしえに公平と正義とをもって

これを立て、これを保たれる。

万軍の主の熱心がこれをなされるのである。

（イザヤ書九ノ六、七）

キリストの初臨までのイスラエル歴史の最後の数世紀において、次の預言の中にメシヤの来臨が言及されているということが、広く一般に理解されていたのである。「主は言われる、『あなたがわがしもべとなって、ヤコブのもろもろの部族をおこし、イスラエルのうちの残った者を帰らせることは、いとも軽い事である。わたしはあなたを、もろもろの国びとの光となして、わが救を地の果にまでいたらせよう』。」「こうして主の栄光があらわれ、人は皆ともにこれを見る」と預言者イザヤは預言したのである（同四九ノ六。四〇ノ五）。後にバプテスマの

ヨハネが、大胆に「わたしは、預言者イザヤが言ったように、『主の道をまっすぐにせよと荒野で呼ばわる者の声』である」と宣言してあかしを立てたのは、この光のことであつた(ヨハネ一ノ二三)。

またキリストについて次のような預言的約束の言葉が与えられた。「イロフエルのあがない主、イスラエルの聖者なる主は、人に侮られる者、民に忌みきらわれる者、…主はこう言われる、…『わたしはあなたを守り、あなたを与えて民の契約とし、国を興し、荒れすたれた地を嗣業として継がせる。わたしは捕えられた人に「出よ」と言い、暗きにある者に「あらわれよ」と言う。…彼らは飢えることがなく、かわくこともない。また熱い風も、太陽も彼らを撃つことはない。彼らをあわれむ者が彼らを導き、泉のほとりに彼らを導かれるからだ』」(イザヤ書四九ノ七一〇)。

ユダヤ国民の中で信仰の固い人々、すなわち、神の知識を保存してきた聖なる家系の子孫は、これらの聖句やこれに似た聖句を心に留めて、彼らの信仰を強化した。彼らは大いなる喜びをもって、主がこのかたに油を注ぎ、「貧しい者に福音を宣べ伝えることをゆだね…心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ、…主の恵みの年」を告げさせられることを読んだ(同六一ノ一、一二)。しかし彼が神のみこころを遂行するために耐えなければならぬ苦難のことを考えて、彼らの心は悲しみに満たされるのであつた。彼らは、深くへりくだった思いをもって、預言の巻物の言葉をたどつたのである。

「だれがわれわれの聞いたことを信じ得たか。

主の腕は、だれにあらわれたか。

彼は主の前に若木のように、

かわいた土から出る根のように育った。

彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、われわれの慕うべき美しさもない。

彼は侮られて人に捨てられ、

悲しみの人で、病を知っていた。

また顔をおおって忌みきらわれる者のように、

彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。

まことに彼はわれわれの病を負い、

われわれの悲しみをになった。

しかるに、われわれは思った、

彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。

しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、

われわれの不義のために砕かれたのだ。

彼はみずから懲らしめをうけて、

われわれに平安を与え、

その打たれた傷によって、

われわれはいやされたのだ。

われわれはみな羊のように迷って、

おのおの自分の道に向かって行った。

主はわれわれすべての者の不義を、

彼の上におかれた。

彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、

口を開かなかった。

ほふり場にひかれて行く小羊のように、

また毛を切る者の前に黙っている羊のように、

口を開かなかった。

彼は暴虐なさばきによって取り去られた。

その代の人のうち、だれが思ったであろうか、

彼はわが民のとがのために打たれて、

生けるものの地から断たれたのだと。

彼は暴虐を行わず、

その口には偽りがなかったけれども、

その墓は悪しき者と共に設けられ、

その塚は悪をなす者と共にあった。」

(イザヤ書五三ノ一―九)

苦難に会われる救い主について、主なる神ご自身が、ゼカリヤによつて「つるぎよ、立ち上がつてわが牧者を攻めよ。わたしの次に立つ人を攻めよ」と言われた(ゼカリヤ書一三ノ七)。キリストは罪深い人間の身代わりと保証人として、神の刑罰を受けなければならなかった。彼は正義が何であるかを知らなければならなかった。彼は、罪人が仲保者なしに神の前に立つことが、どんなことであるかを知らなければならなかった。贖い主は、詩篇記者を通じて、ご自身のことについて預言された。

「そしりがわたしの心を砕いたので、

わたしは望みを失いました。

わたしは同情する者を求めたけれども、ひとりもなく、

慰める者を求めたけれども、ひとりも見ませんでした。

彼らはわたしの食物に毒を入れ、

わたしのかわいた時に酢を飲ませました。」

(詩篇六九ノ二〇、二二)

彼が受ける取り扱いについて、次のように預言された。「まことに、犬はわたしをめぐり、悪を行う者の群れがわたしを囲んで、わたしの手と足を刺し貫いた。わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは目をとめて、わたしを見る。彼らは互にわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引にする」(同二二ノ一六―一八)。

約束されたおかたの痛々しい苦難と残酷な死のこうした描写は、悲痛なものではあったが、約束に満ちていた。「とがの供え物」とするために、「彼を砕くことは主のみ旨であり」、主は彼を悩まされたが、主は彼について言われた。

彼は「その子孫を見ることができ、

その命をながくすることができる。

かつ主のみ旨が彼の手によって栄える。

彼は自分の魂の苦しみにより光を見て満足する。

義なるわがしもべはその知識によって、

多くの人を義とし、また彼らの不義を負う。

それゆえ、わたしは彼に大いなる者と共に

物を分かち取らせる。

彼は強い者と共に獲物を分かち取る。

これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、

とがある者と共に数えられたからである。

しかも彼は多くの人の罪を負い、

とがある者のためにとりなしをした。」

(イザヤ書五三ノ一〇ー一二)

キリストが贖罪の価を払ってくださったのは、罪人を愛してくださったからである。「主は人のないのを見られ、仲に立つ者のないのをあやしまれた。それゆえ、ご自分のかいなをもつて、勝利を得、その義をもつて、おのれをさえられた」(イザヤ書五九ノ一六)。

「わたしの支持するわがしもべ、

わたしの喜ぶわが選ぶ人を見よ。

わたしはわが霊を彼に与えた。

彼はもろもろの国びとに道をしめす。」

(同四二ノ二)

彼の生涯には自己主張が混ざってはならなかった。世俗の人々が、地位、富、才能などにささげる敬意は、神のみ子にとって、無縁のものでなければならなかった。メシヤは人々の忠誠をかし得たり、または尊敬の念を起こさせることは、何一つ行つてはならなかった。彼が全く自己を放棄されたことは、次のような言葉で予告されていたのである。

「彼は叫ぶことなく、声をあげることなく、

その声をちまたに聞こえさせず、

また傷ついた葦を折ることなく、

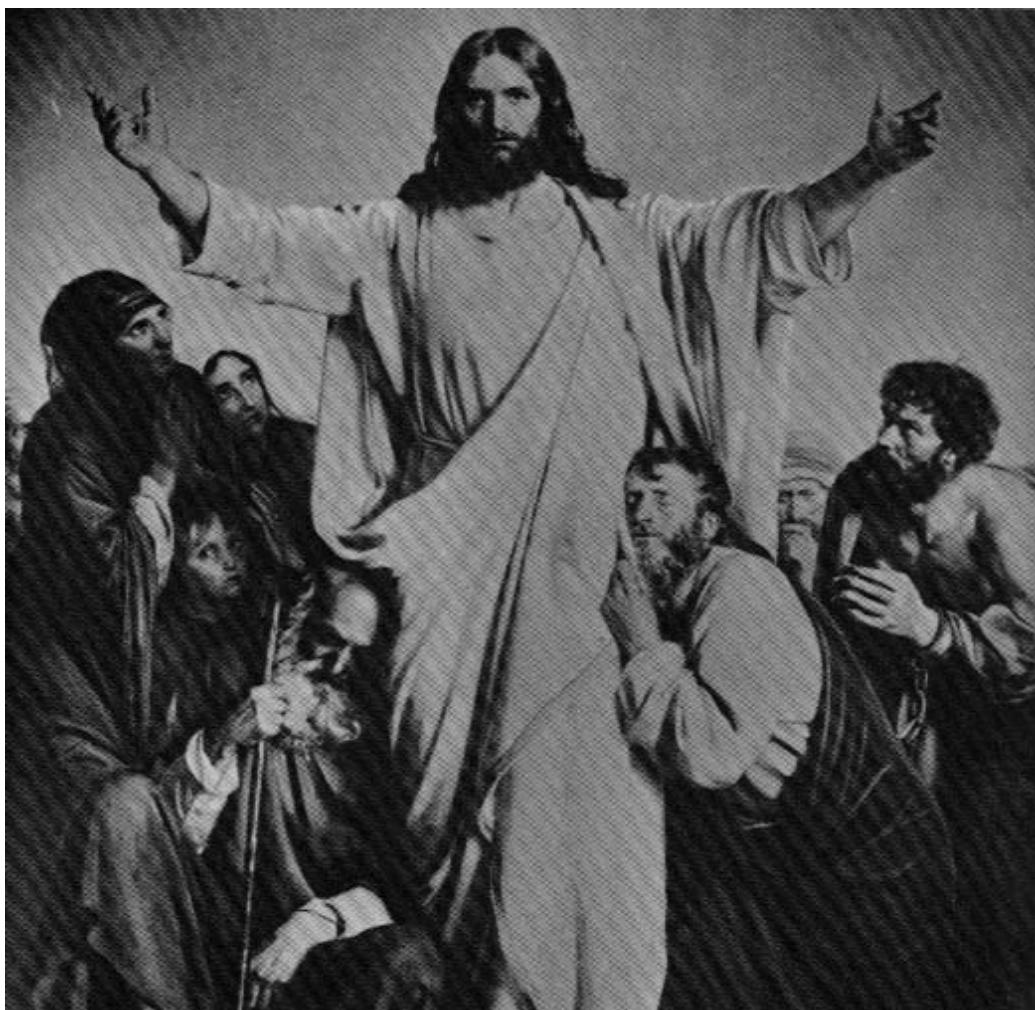
ほのぺらい灯心を消すことなく。」

(同四二ノ二、三)

救い主は、彼の時代の教師たちとは全く対照的に、人々の間で行動すべきであつた。彼の生涯には、騒がしい議論や仰々しい礼拝、人の賞賛を得ようとする行為は、何一つ見られてはならなかつた。メシヤは神のうちに隠れ、み子の品性のなかに神があらわされなければならなかつた。人類は、神を知らなければ、永遠に失われるのであつた。男も女も、神の助けがなければ、ますます深みに沈んでいくのであつた。世界を創造されたおかたによつて、生命と力とが与えられなければならなかつた。人間の必要は、他のどんな方法によつても満たされることはできないのであつた。

メシヤについては、さらに次のように預言されていた。「彼は衰えず、落胆せず、ついに道を地に確立する。海沿いの国々はその教を待ち望む。」神のみ子は「その教を大いなるものとし、かつ光榮あるものと」されるのであつた(同四二ノ四、一二)。彼は律法の重要性和守るべき条項を低下させてはならなかつた。彼はむしろ、それを高めなければならなかつたのである。それと共に、彼は、人間が神の戒めに付加していた重苦しい苛酷な要求から、神の戒めを解放しなければならなかつた。多くの人々は、そのような苛酷な要求のために、神に喜ばれる奉仕はできないものと失望したのである。

救い主の任務について、主なる神の言葉はこうであつた。「主なるわたしは正義をもつてあなたを召した。わたしはあなたの手を取り、あなたを守つた。わたしはあなたを民の契約とし、もろもろの国びとの光として与え、盲人の目を開き、囚人を地下の獄屋から出し、暗きに座する者を獄屋から出させる。わたしは主である、これがわたしの名である。わたしはわが栄光をほかの者に与えない。また、わが譽を刻んだ像に与えない。見よ、さきに預言した事は起つた。わたしは新しい事を告げよう。その事がまだ起らない前に、わたしはまず、あなたがた



約束された救い主は、悲しむ者に慰めを、病める者に癒しを与え、目の見えない者、耳の聞こえない者を完全にしてくださる。

に知らせよう」(イザヤ書四二ノ六―九)。

イスラエルの神は、約束のすえによって、シオンに救いをもたらされるのであった。「エッサイの株から一つの芽が出、その根から一つの若枝が生えて実を結」ぶ。「見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる。その子が悪を捨て、善を選ぶことを知るころになって、凝乳と、蜂蜜とを食べる」(同二一ノ一。七ノ一四、一五)。

「その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。彼は主を恐れることを楽しみとし、その目の見るところによって、さばきをなさず、その耳の聞くところによって、定めをなさず、正義をもって貧しい者をさばき、公平をもって国のうちの柔和な者のために定めをなし、その口のおちをもって国を撃ち、そのくちびるの息をもって悪しき者を殺す。正義はその腰の帯となり、忠信はその身の帯となる。」「その日、エッサイの根が立って、もろもろの民の旗となり、もろもろの国びとはこれに尋ね求め、その置かれる所に栄光がある」(同二一ノ二―五、一〇)。

「見よ、その名を枝という人がある。…彼は主の宮を建て、王としての光栄を帯び、その位に座して治める。その位のかたわらに、ひとりの祭司がい」る(ゼカリヤ書六ノ一二、一三)。

「罪と汚れとを清める」一つの泉が開かれるのであった(同二三ノ一)。人々は恵み深い招待を聞くのであった。

「さあ、かわいている者はみな水にきたれ。

金のない者もきたれ。

来て買い求めて食べよ。

あなたがたは来て、金を出さずに、
ただでぶどう酒と乳とを買い求めよ。

なぜ、あなたがたは、

かてにもならぬもののために金を費し、

飽きることもできぬもののために労するのか。

わたしによく聞き従え。

そうすれば、良い物を食べることができ、

最も豊かな食物で、自分を楽しませることができ。

耳を傾け、わたしにきて聞け。

そうすれば、あなたがたは生きることができ。

わたしは、あなたがたと、とこしえの契約を立てて、

ダビデに約束した変らない確かな恵みを与える。」

(イザヤ書五五ノ一―三)。

イスラエルに約束が与えられた。「見よ、わたしは彼を立てて、もろもろの民への証人とし、また、もろもろの民の君とし、命令する者とした。見よ、あなたは知らない国民を招く、あなたを知らない国民はあなたのもとに走ってくる。これはあなたの神、主、イスラエルの聖者のゆえであり、主があなたに光榮を与えられたからである」(同五五ノ四、五)。

「わたしはわが救を近づかせるゆえ、その来ることは遠くない。わが救はおそくない。わたしは救をシオンに与え、わが栄光をイスラエルに与える」(同四六ノ一二)。

メシヤは彼の地上の伝道生涯の言葉と行為において、父なる神の栄光を、人類にあらわさなければならなかった。彼の生涯のすべての行為、語るすべての言葉、行うすべての奇跡において、彼は墮落した人類に神の無限の愛を示さなければならなかった。

「よきおとずれをシオンに伝える者よ、

高き山にのぼれ。

よきおとずれをエルサレムに伝える者よ、

強く声をあげよ、

声をあげて恐れるな。

ユダのもろもろの町に言え、

『あなたがたの神を見よ』と。

見よ、主なる神は全能をもってこられ、

その腕は世を治める。

見よ、その報いは主と共にあり、

そのはたらきの報いは、そのみ前にある。

主は牧者のようにその群れを養い、

そのかいなに小羊をいだき、

そのふところに入れて携えゆき、

乳を飲ませているものをやさしく導かれる。」

（イザヤ書四〇ノ九—一一）

「その日、耳しいは書物の言葉を聞き、

目しいの目はその暗やみから、見ることができる。

柔和な者は主によって新たなる喜びを得、

人のなかの貧しい者は

イスラエルの聖者によって楽しみを得る。

心のあやまれる者も、悟りを得、

つぶやく者も教えをうける。」

（同二九ノ一八、一九、二四）

こうして神は、型や象徴によると共に、家長や預言者たちによって、罪からの救い主の来臨について、世界に語られたのである。靈感によって与えられた預言は、長い間「万国の願うところのもの」の来臨を指示していたのである（ハガイ書二ノ七・文語訳）。彼の誕生の場所そのもの、彼の出現の時さえも、詳細に指摘されていた。ダビデの子は、ダビデの町でお生まれにならなければならなかった。預言者はベツレヘムから「イスラエルを

治める者が…出る。その出るのは昔から、いにしえの日からである」と言った(ミカ書五ノ二)。

「ユダの地、ベツレヘムよ、

おまえはユダの君たちの中で、

決して最も小さいものではない。

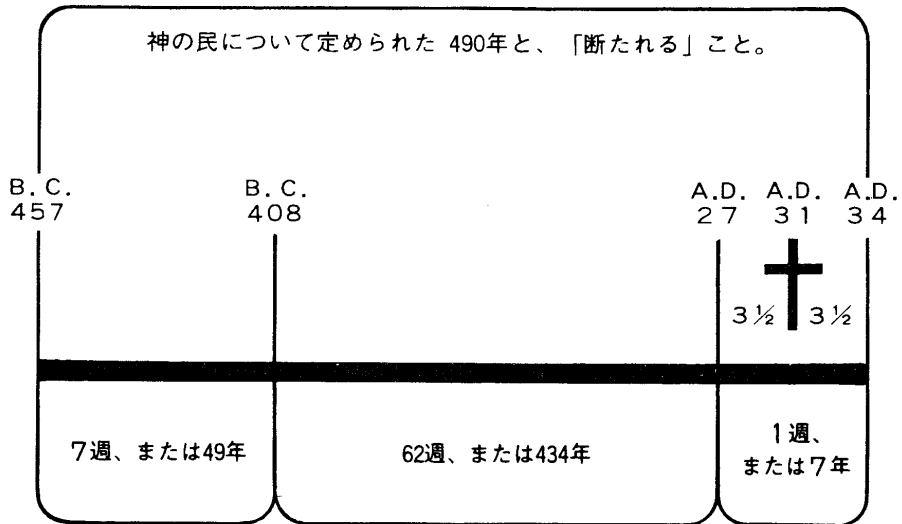
おまえの中からひとりの君が出て、

わが民イスラエルの牧者となるであらう。」

(マタイ二ノ六)

救い主の初臨と彼の生涯の働きにまつわる重要な諸事件が、天使ガブリエルによってダニエルに知らされた。

「あなたの民と、あなたの聖なる町については、七十週が定められています。これはとがを終らせ、罪に終りを告げ、不義をあがない、永遠の義をもたらし、幻と預言者を封じ、いと聖なる者に油を注ぐためです」と天使は言った(ダニエル書九ノ二四)。預言では、一日は一年をあらわしている(民数記一四ノ三四、エゼキエル書四ノ六参照)。七十週、すなわち四百九十日というのは、四百九十年のことである。この期間の始まる時が示されている。「エルサレムを建て直せ」という命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで、七週と六十二週あることを知り、かつ悟りなさい」(ダニエル書九ノ二五)。それは六十九週すなわち四百八十三年になるのである。エルサレムを再建せよという命令が、アルタクセルクセス・ロンギマネスの勅令によって完了して実施されたのは、紀元前四五七年の秋であった(エズラ記六ノ一四、七ノ一、九参照)。この時から四百八十三年経過すると、紀元



キリストの初臨によって、その確かさが明らかにされた
「70週」の預言。

二十七年の秋に至るのである。預言によれば、この時に、油注がれた者、メシヤが現れるのであった。紀元二十七年に、イエスはバプテスマを受けて、聖霊の油を注がれた。そしてその後間もなくして、伝道をお始めになったのである。その時、「時は構ちた」という宣言がなされたのである(マルコーノ一五)。

さらに天使は、「彼は一週の間(七年間)多くの者と堅く契約を結ぶでしょう」と言った。救い主が伝道をお始めになってから七年間は、特にユダヤ人に福音が伝えられることになっていた。三年半はキリストご自身の宣教であつた。そしてその後は、使徒たちによるものであつた。「そして彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしょう」(ダニエル書九ノ二七)。真の犠牲であられるキリストは、紀元三十一年の春、カルバリーでさげられたのである。その時、神殿の幕が二つに裂けて、犠牲制度の神聖さとその意義が失われてしまったことを示したのである。地上の犠牲と供え物とが廃される時が

来たのであった。

一週間すなわち七年間は、紀元三十四年に終わった。その時ユダヤ人はステパノを石で打って、ついに福音を拒否したことを決定的なものにした。迫害のために広く四散した弟子たちは、「御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた」(使徒行伝八ノ四)。その後しばらくして、迫害者サウロが改心して、異邦人への使徒パウロとなった。

救い主の来臨に関して多くの預言があるので、ヘブル人たちは常に主を待望しながら生活していた。約束のものを受けることなく、信仰をもって死んでいった者も多かった。しかし彼らは、はるかにそれを望み見て、自分たちはこの地上では旅人であり寄留者であると信じてそう告白した。エノクの時代以来、家長や預言者たちによって繰り返されてきた約束が、主の来臨の希望を人々の心に燃やし続けてきたのである。

神は最初から初臨の正確な時をお知らせになつたのではなかった。そしてダニエルの預言がこの点を明らかにした時にも、すべての者がその言葉を正しく解釈したわけではなかった。

幾世紀もの時が過ぎ去った。そしてついに預言者の声もやんだ。イスラエルは、圧迫者の手に強くおさえられていた。イスラエルは神から離反するにつれて信仰はうすらぎ、希望はほとんど将来を明るく照らさなかった。多くの者は、預言者の言葉を理解しなかった。そして、信仰を堅く持ち続けるべき人々が、「日は延び、すべての幻はおなしくなつた」というに至つた(エゼキエル書一一ノ二二)。しかし天の会議においては、キリストが来られる時は定められていた。そして、「時の満ちるに及んで、神は御子を…おつかわしになった。それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであつた」(ガラテヤ四ノ四、五)。

教えは人間の言葉によつて人類に与えられなければならなかった。契約の使者が、お語りにならなければなら

なかった。彼の声がご自身の神殿で聞かれる必要があった。真理の創始者であられるおかたが、真理の力を失わせている人間の言葉というもみからから、真理を分離なさなければならなかったのである。神の統治の原則と贖罪の計画とが、明白に示されなければならなかった。旧約聖書の教えが、人々の前に十分に示されなければならなかった。

救い主がついに「人間の姿」をとって現れ（ピリピ二ノ七）、恵みのわざをお始めになったときに、サタンはただ、かかとを砕くことができるだけであつたが、他方キリストは、その屈辱、または苦難の一つ一つの行為によつて、彼の敵のかしらを砕かれたのである。罪が引き起こした苦悩が、罪なきおかたの胸へと注がれた。しかしキリストは、ご自身に対する罪人の反対に耐えておられたときに、彼は罪人のための価を払い、人間が束縛されていた奴隷のきずなを打ち破つておられたのである。心の苦悩と受けられた侮辱の一つ一つは、人類に救いをもたらしていたのである。

もしサタンが、ただ一つの誘惑においてもキリストを打ち負かすことができたならば、またサタンが、一つの行為または思想においても、彼の完全な純潔を汚すように導くことができたならば、暗黒の君は人間の保証人となられたおかたに勝利し、全人類を自分の側に引き入れたことであろう。ところがサタンは苦しめることはできても、汚染することはできなかった。彼は、悩ますことはできても、その神聖さを汚すことはできなかった。彼はキリストの生涯を長い争闘と試練の生涯にしたけれども、攻撃を加えるごとに、人類に対する彼の影響力を失っていた。

われわれの救い主は、荒野の誘惑において、ゲッセマネの園において、そして十字架上において暗黒の君と闘

われたのである。彼の傷は人類のための彼の勝利を記念するものとなった。キリストが十字架にかかって苦悩されたときに、そして悪の霊たちが喜び、悪人たちがののしっていたその時、キリストのかかとはサタンに砕かれたのである。しかしその行為自体は、へびのかしらを砕いていたのである。彼は死によって「死の力を持つ者、すなわち悪魔を」滅ぼされた（ヘブル二ノ一四）。この行為が、反対の首領の運命を決定し、救いの計画を永遠に確保したのである。彼は死によってその力に勝利されたのである。そしてよみがえることによって、彼は、彼のすべての弟子たちの墓の門を開かれた。あの最後の大争闘において、「彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」という預言が成就するのを見る（創世記三ノ一五）。

「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである」（ヨハネ第一・三ノ二）。われわれの贖い主は、道を開いてくださった。それは、われわれがどんなに罪深く、どんなに困窮に陥り、どんなに圧迫を受け、さげすまれていても、父なる神に近づくことができるためである。

「主よ、あなたはわが神、

わたしはあなたをあがめ、み名をほめたたえる。

あなたはさきに驚くべきみわざを行い、

いにしえから定めた計画を

眞実をもって行われたから。」

（イザヤ書二五ノ一）

第五十九章 理想のイスラエル

今日地上の神の教会は、永遠の福音をあらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えて、「イスラエルは芽を出して花咲き、その実を全世界に満たす」という古代の預言を成就している（イザヤ書二七ノ六）。イエスの弟子たちは、天使たちと力を合わせて、急速に地の荒れ地を占領している。そして、彼らの働きの結果、多くの尊い魂が豊かに実りつつある。今日、献身的教会の働きによって、聖書の真理はこれまでになかったほどに広く伝えられて、幾世紀も前にアブラハムとすべてのイスラエル人、および各時代の神のすべての教会に与えられた約束の祝福を人々にもたらしている。「わたしは……あなたを祝福し……あなたは祝福の基となるであろう」（創世記一・二・三）。

この祝福の約束は、イスラエルの人々が、捕囚の国々から帰還したあとの何百年かの間に、その大半が成就すべきものであった。今日キリストの再臨のための準備が行われているように、全地がキリストの初臨に対して準備をすることが、神の計画であった。屈辱的捕囚の年月が終わったときに、神はゼカリヤによって、神の民イス

ラエルに恵み深い確証をお与えになった。「わたしはシオンに帰って、エルサレムの中に住む。エルサレムは忠信な町となえられ、万軍の主の山は聖なる山と、となえられる。」そして神の民について、「見よ、…わたしは彼らの神となって、共に真実と正義とをもって立つ」と言われた(ゼカリヤ書八ノ三、七、八)。

こうした約束は、服従を条件にしたものであった。イスラエルの人々の、捕囚前の特徴となっていた罪は繰り返してはならなかった。主は再建に携わっていた人々に次のように勧告をお与えになった。「真実のさばきを行い、互に相いつくしみ、相あわれみ、やもめ、みなしご、寄留の他国人および貧しい人を、しえたげてはならない。互に人を害することを、心に図ってはならない。「あなたがたは互に真実を語り、またあなたがたの門で、真実と平和のさばきとを。行わなければならない」(同七ノ九、一〇。八ノ一六)。

こうした義の原則を実行する者に約束された物質的また霊的報賞は、実に豊かなものであった。主は言われた。「そこには、平和と繁栄との種がまかれるからである。すなわちぶどうの木は実を結び、地は産物を出し、天は露を与える。わたしはこの民の残れる者に、これをことごとく与える。ユダの家およびイスラエルの家よ、あなたがたが、国々の民の中に、のろいとなっていたように、わたしはあなたがたを救って祝福とする」(同八ノ一二、一三)。

イスラエルの人々は、バビロンの捕囚によって完全に偶像礼拝から立ち直った。彼らは帰還後、宗教的教えに大いに心を用い、真の神の礼拝について、律法と、預言者によって記されたことを研究することに留意した。神殿の再建によって、彼らは聖所の儀式を十分に行うことができた。彼らはゼルバベル、エブラ、ネヘミヤなどの指導のもとに、主のすべての戒めとさだめを守ることを繰り返し契約した。その後の繁栄の時は、神が喜んで彼

らを受け入れ、許してくださったことの十分な証拠であった。しかし彼らは、致命的にも遠くを見ることができずに、幾度となく彼らの輝かしい運命に離反し、無数の群衆にいやしと霊的生命をもたらすところのものを、自分自身のものとしてしまったのである。

こうして神のみこころの達成の失敗が、マラキの時代に著しくあらわれた。主の使者は、イスラエルから物質的繁栄と霊的力とを奪っていた罪悪を厳しく責めた。預言者は、罪人を譴責するにあたって、祭司も国民も容赦しなかった。マラキによって、「イスラエルに臨んだ主の言葉の託宣」は、過去の教訓を忘れてはならないということと、主が、イスラエルの家となされた契約は忠実に守られるということであった。神の祝福は、真心からの悔い改めによってのみ与えられるものである。「あなたがたは、神がわれわれをあわれまれるように、神の恵みを求めてみよ」と、マラキは訴えたのである(マラキ書一ノ一、九)。

しかし、人類の贖罪のための代々にわたる計画は、イスラエルの一時的失敗によって挫折するものではない。預言者が語りかけた人々が、その言葉を無視したとしても、主のみこころは着実にその完遂に向かって進んでいかなければならなかった。主は、その使者によって宣言された。「日の出る所から没する所まで、国々のうちにわが名はあがめられている。また、どこでも香と清いささげ物が、わが名のためにささげられる。これはわが名が国々のうちにあがめられているからである」(同一ノ一一)。

神がレビの子孫と結ばれた「生命と平安」の契約、すなわち、もし守るならば限りない祝福をもたらしたものを、主は今ここで、かつては霊的指導者でありながら、罪のために「すべての民の前に侮られ、卑しめられるように」なった人々に更新しようと申し出られたのである(同一ノ五、九)。

悪を行う人々には、来たるべき審判の日と、すべての罪人を速やかに滅ぼされる主のみこころについて、厳粛な警告が発せられた。しかしだれひとりとして、希望を与えられずに放置されてはいなかった。マラキの審判の預言には、かたくなな人々に対して神と和らぐようにという招待が伴っていた。「わたしに帰れ、わたしはあなたにたがいに帰ろう」と主は言われるのであった(マラキ書三ノ七)。

このような招待には、すべての人が答えなければならないと思うのである。天の神は誤りに陥りやすい人々に神に帰るように訴えておられるのである。それは彼らが、地上における神の働きを推進するために、再び神と協力するためである。主は手をのばしてイスラエルの手を取り、彼らを克己と自己犠牲の狭い道に導き、主と共に神の子の相続権にあずからせようとしておられる。彼らは、その訴えに耳を傾けるであろうか。彼らは、彼らの唯一の望みを認めることであろうか。

マラキの時代のイスラエルの人々が、彼らの高慢な心を屈服させて直ちに愛の服従をなし、心から協力することを躊躇したとは、なんと悲しい記録であろう。「われわれはどうして帰ろうか」と彼らが答えていることは、彼らの自己弁護をあらわしている。

主は、神の民の特有の罪の一つを示されるのである。「人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる」と、彼は言われる。不服従な人々はなお罪を認めず、「どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか」と尋ねる(同三ノ七、八)。

まことに主の答えは明確である。「十分の一と、ささげ物をもってである。あなたがたは、のろいをもって、のろわれる。あなたがたすべての国民は、わたしの物を盗んでいるからである。わたしの宮に食物のあるように、

十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。わたしは食い滅ぼす者を、あなたがたのためにおさえて、あなたがたの地の産物を、滅ぼさないようにしよう。また、あなたがたのぶどうの木が、その熟する前に、その実を畑に落すことのないようにしようと、万軍の主は言われる。こうして万国の人は、あなたがたを祝福された者となえるであろう。あなたがたは楽しい地となるからであると、万軍の主は言われる」(同三ノ八下句一―二)。

神は人間の手のわざを祝福される。それは彼らが、神の分を神にお返しするためである。神は、彼らに日光と雨とお与えになる。神は草や木を繁茂させられる。神は、健康と財産を得る力をお与えになる。すべての祝福は、神の恵み深い手から来る。そして神は、男も女も、十分の一と献げ物、すなわち感謝の献げ物、心からの献げ物、また罪祭などによって神の分をお返しして、彼らの感謝を表すことを望まれるのである。彼らは、神のぶどう畑が荒れ果てたままにならないように、神の奉仕のために彼らの財産を献げなければならない。彼らは、もし神が彼らの立場にあれば、何をなさるであろうかを探り調べなければならない。彼らはあらゆる困難なことについて、神に祈り求めなければならない。彼らは、世界のあらゆる場所における神の働きを推進するために、私心のない関心を示さなければならない。

イスラエルの人々は、異教の敵の圧迫から学んだのと同じく、旧約聖書の最後の預言者マラキが伝えた言葉によって、真の繁栄は神の律法に従うことにあるという教訓を学んだ。しかし、多くの人々にとって服従は、信仰と愛からあふれ出るものではなかった。彼らの動機は利己的なものであった。国家を強大なものにするための手

段として、外面的奉仕が行われた。選民は世界の光とはならず、偶像礼拝に陥らない安全策として、自分たちを世界から隔離してしまった。神が、神の民と異邦人との雑婚を禁じ、イスラエルが周囲の国々の偶像礼拝の習慣に加わることを禁じてお与えになった制限命令は、はなはだしく曲解されて、イスラエルの人々と他のすべての国民とを隔離する壁が築かれるに至った。こうして神が、世界に与えることをイスラエルにお命じになった祝福そのものから、他の人々を締め出すに至った。

それと共にユダヤ人は、彼ら自身の罪のゆえに神から離反していった。彼らは、象徴的儀式の深い霊的意義を認めることができなかった。彼らは自らを義とし、自分たちの行為、犠牲や儀式そのものに頼り、こうしたことのすべてが指示していた主の功績に頼ることをしなかった。こうして彼らは、「自分の義を立てようと努め」自己満足的形式主義に凝り固まってしまった。彼らは、神の聖霊と恵みとに欠けていたので、その欠点を宗教的儀式と礼典を厳格に守ることによって補おうとした。彼らは、神ご自身がお命じになった儀式では満足せずに、彼ら自身が考案した無数の禁令によって、神の戒めを複雑なものにした。彼らは、神から遠く隔たれば隔たるほどますます厳格にこうした形式に固執したのである。

こうした微細な点にわたった複雑な禁令のために、人々が、実際に律法を守ることは不可能であった。十誠に示された義の大原則と、象徴的儀式に示されていた輝かしい真理は、共におびただしい人間の伝説と戒律の下に埋もれてわからなくなってしまった。真に神に仕えようと望む者、そして祭司やつかさたちの命じるおきてを全部守ろうと努めた人々は、重苦しい荷の下であえぎ苦しんだ。

イスラエルの人々は国をあげて、メシヤの来臨を待望しながらも、その心と生活においては、神から遠くかけ

離れていたので、約束の贖い主がどのようなかたで、どんな任務をもってあられるかを真に理解することができなかつた。彼らの心は、罪からの救いと潔めにあずかることの栄光と平和を求めるかわりに、国家的敵からの解放と、世俗的権力の回復に向けられていた。彼らは、メシヤが征服者として来られて、すべてのくびきを砕き、イスラエルを高めて、あらゆる国々を支配するに至ることを望んだ。こうしてサタンは、救い主が来られた時に、彼を否定するように人々の心を備えることに成功した。彼らはその心の誇りと、メシヤの性質とその任務についての誤った考寿とによって、主がメシヤであられることの証拠を正しく評価することができなかつたのである。

ユダヤ民族は一千年以上にわたって、約束された救い主の来臨を待望していたのであつた。彼らの最も輝かしい希望は、この出来事にかかつていた。一千年の長きにわたって、歌に預言に、神殿の儀式に家庭の祈りに、救い主の名は大切に覚えられてきた。それにもかかわらず、彼が来られたときに、人々は、彼が長く待望していたメシヤであることを認めることができなかった。「彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかつた」(ヨハネ一ノ一一)。愛する神のみ子は、世俗を愛する彼らの心にとっては、「かわいた土から出る根のよう」であつた。彼らの目にとつて、彼は、見るべき姿がなく、威厳もな」かつた(イザヤ書五三ノ二)。彼らは彼に慕うべき美しさを認めなかつた。

ユダヤ民族の中におけるナザレのイエスの全生涯は、彼らが農夫として雇われていたぶどう園の所有主の、正当な権利を快く認めようとしなかつた態度にあらわれた彼らの利己心に対する譴責であつた。彼らは、主の誠実と敬神の模範を憎んだ。そして、最後の試練がきたときに、すなわち服従して永遠の生命を受けるか、それとも服従しないで永遠に滅びるかを意味した試練に会ったときに、彼らはイスラエルの聖者を拒んで、彼をカルバリ

の十字架につけることになってしまった。

キリストは、彼の地上のお働きの終わり近くにおいて、ぶどう園のたとえをお語りになって、イスラエルに与えられた豊かな祝福にユダヤの教師たちの注意をおひきになった。そして、これらの祝福によって神が彼らに服従を求めておられることをお示しになった。キリストは、彼らが服従によって達成し得たはずの輝かしい神のみこころを彼らにお示しになった。彼は、将来の幕を開いて、彼らが神のみこころを達成しないために、国民全体が神の祝福を受け損じて、国家に破滅をもたらすことをお示しになった。

「ある所に、ひとりの家の主人がいたが、ぶどう園を造り、かきをめぐらし、その中に酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた」とキリストは言われた(マタイ二一ノ三三)。

こうして、救い主は預言者イザヤが幾世紀も前に、「イスラエルの家」であると言った「万軍の主のぶどう畑」に言及されたのである(イザヤ書五ノ七)。

キリストは引き続き言われた。ぶどう園の主人は、「収穫の季節がきたので、その分け前を受け取るうとして、僕たちを農夫のところへ送った。すると、農夫たちは、その僕たちをつかまえて、ひとりを袋だたきにし、ひとりを殺し、もうひとりを石で打ち殺した。また別に、前よりも多くの僕たちを送ったが、彼らをも同じようにあしらった。しかし、最後に、わたしの子は敬ってくれるだろうと思って、主人はその子を彼らの所につかわした。すると農夫たちは、その子を見て互に言った、『あれはあと取りだ。さあ、これを殺して、その財産を手に入れよう』。そして彼をつかまえて、ぶどう園の外に引き出して殺した」(マタイ二一ノ三四―三九)。

キリストは祭司たちの前に、彼らの罪惡の中の最も邪惡な行為を描き出された上で、彼らにお尋ねになるので

ある。「このぶどう園の主人が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか。」祭司たちは深い関心をもってこの物語に耳をかたむけていた。そして、扱われている主題が、彼ら自身に関することであるとも気づかずに、人々と共に答えた。「悪人どもを皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与えるでしょう」(同二一ノ四〇、四一)。

彼らははからずも、自分自身の運命を宣告したのである。イエスは、彼らをごらんになった。そして彼らは、彼の凝視のもとにあつて、彼が「彼らの心の秘密を読まれたことを知った。イエスの神性が、間違いを許さない力で彼らの前にひらめいた。彼らは、農夫が自分たちを指していることを認めて、思わず、「断じてそうではない」と叫んだのである。

キリストは厳粛に、そして悲しみながらお尋ねになった。「あなたがたは、聖書でまだ読んだことがないのか、『家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』。それだから、あなたがたに言うが、神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられるであろう。またその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう」(同二一ノ四二―四四)。

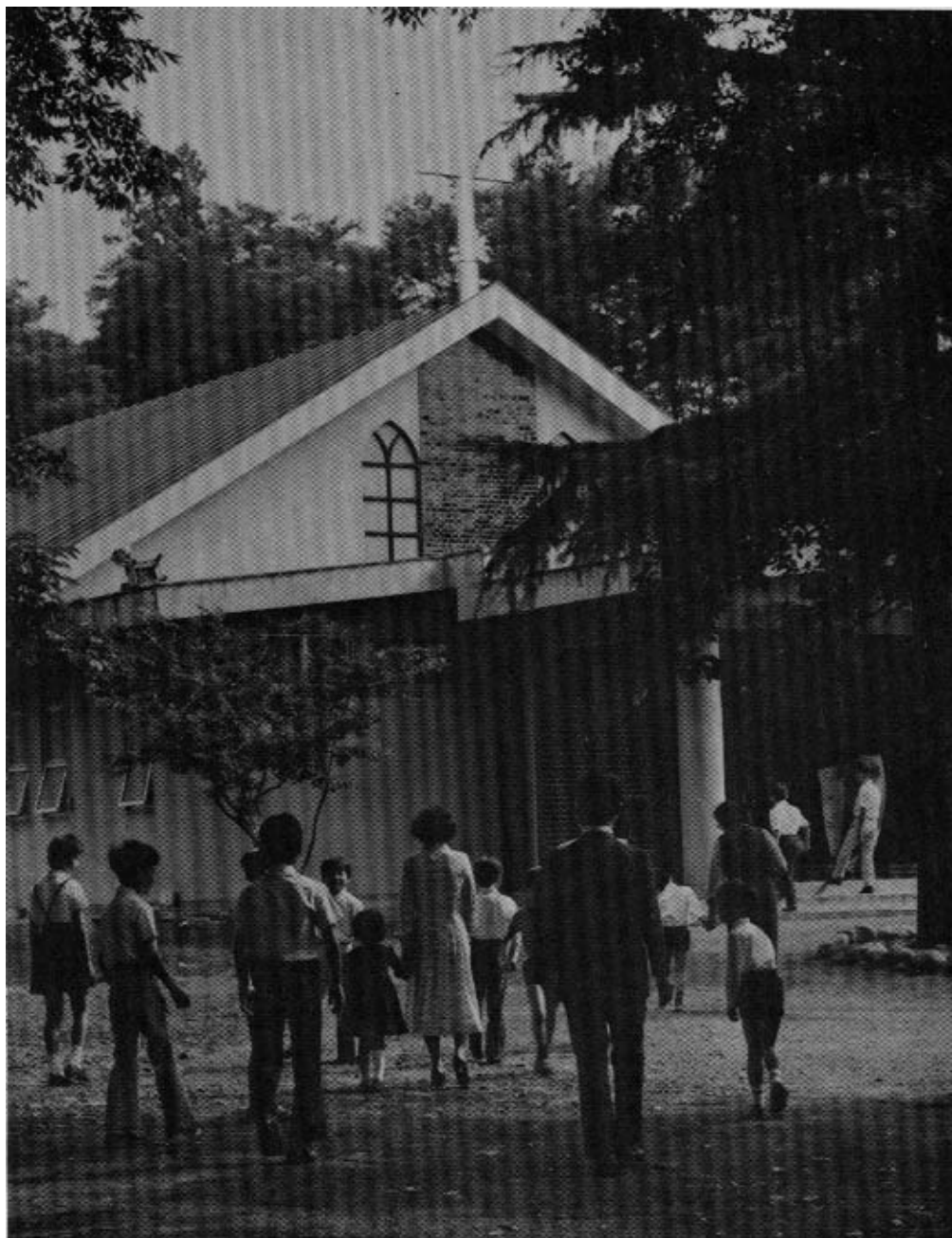
キリストは人々が彼を受け入れるならば、ユダヤ民族を破滅の運命から救いたいと望まれた。しかし、彼らはねたみとして心を抱いて和解しようとしなかった。彼らはナザレのイエスをメシヤとして受け入れないことを決意した。彼らは、世の光を拒んだのであるから、その後の彼らの生涯は真夜中のような暗黒に閉ざされてしまった。預言された破滅がユダヤ民族を襲った。彼ら自身の常軌を逸した恐ろしい怒りが彼らを滅ぼした。彼らは

盲目的激怒を抱いて互いに殺し合った。彼らはその反逆的で頑強な高慢さによって、ローマの征服者たちの怒りをつかした。エルサレムは破壊され、神殿は荒廃し、その場所は畑のように耕された。ユダの人々は最も恐るべき死に方をして滅び失せた。幾百万という人々が、異邦の地に奴隷として売られた。

選民であるイスラエルによって、神が世界のためになそうとご計画になったことを、神はついに今日の地上の教会によって達成なさるのである。神は忠実に「季節ごとに収穫を納める」神の契約を守る「ほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与え」られた。主のお働きを自分たちの働きとする真の代表者を、主がこの地上に持つておられなかった時はなかった。こうした神のための証人たちは、霊的イスラエルの中に数えられる。そして、主なる神が古代の人々に約束されたすべての契約が、彼らに成就するのである。

今日神の教会は、失われた人類に対する神の救いの計画を何の妨げもなく、その完成に向かって推進することができる。神の民は幾世紀にわたってその自由を束縛されてきた。福音をその純粋なままに説教することが禁じられて、人間の法律に従わない者には、最も厳しい罰が課せられた。そのために主の大いなる霊的ぶどう園はほとんど全くといっていいほど、働きが行われなかった。人々は神の言葉の光を奪われた。誤りと迷信の暗やみが真の宗教の知識を今にもめぐい去ろうとした。この地上の神の教会は、イスラエルの人々が、捕囚期間中バビロンに捕らえられていたのと全く同じように、この長い冷酷な迫害期間中、捕囚状態にあったのである。

しかしありがたいことに、神の教会はもはやつながれていない。バビロンから救い出されたときに、神の民に与えられた特権が、霊的イスラエルに回復された。地の至る所で、人々は、黙示録の筆者ヨハネが、キリストの再臨に先だって宣言されると預言した天からの使命に答えている。「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさば



教会は全世界に救いの福音を伝える任務を与えられている。だれでも望むならばその光を得ることができる。

きの時がきたからである」(黙示録一四ノ七)。

悪の軍勢は、もはや神の教会を捕らえておく力はない。なぜなら「その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた」「大いなるバビロンは倒れた」からである。そして、「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ」という言葉が、靈的イスラエルに与えられている(同一四ノ八。一八ノ四)。異国に捕らわれていた人々が、「バビロンのうちからのがれ出」よ、という言葉に従って、約束の国に回復されたように、今日、神を恐れる人々は、靈的バビロンから出よという言葉に心を留めている。やがて彼らは新たにされた地、すなわち天のカナンにおいて、神の恵みの記念として立つのである(エレミヤ書五一ノ六)。

マラキの時代に、悔い改めない人々はあざけりながら、「さばきを行う神はどこにあるか」と問うたが、それに対して厳粛な答えが与えられた。「主は、たちまちその宮に来る。…契約の使者が来る…その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきかける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のよつに彼らを清める。そして彼らは義をもつて、ささげ物を主にささげる。その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる」(マラキ書二ノ一七。三ノ一―四)。

約束のメシヤが現れようとしていた時に、キリストの先駆者ヨハネは、取税人と罪人よ悔い改めよ。パリサイ人とサドカイ人よ悔い改めよ、「天国は近づいた」と叫んだのである(マタイ三ノ二)。

今日、神の任命を受けた使者たちは、エリヤとバプテスマのヨハネの精神と力を持って、審判に当面した世

界の注目を、恩恵期間の終了と王の王、主の主としてのキリストの出現とに関して、やがて起ころうとしている厳粛な諸事件に向けている。間もなくすべての人は、その行為によってさばかれる。神のさばきの時がきた。そして、地上の神の教会の会員には、今にも永遠に滅びうせようとしている人々に、警告の言葉を発する厳粛な責任が負わせられている。われわれは広い世界で耳を傾けるすべての人に、今、行われている大争闘の問題点である原則と、全人類の運命にかかわる原則とを明らかにすべきである。

間もなくすべての人の運命が永遠に決定される人類最後の恩恵期間において、天地の主なる神は、神の教会がこれまでになかったような行動を起こすことを期待しておられる。主イエスは、現代の真理を知ってキリストにある自由を得た人々を、この地上の他のどんな民よりも恵まれた神の選民としてみなされるのである。そして彼は、彼らが暗やみから驚くべきみ光に招き入れてくださったかたのみわざを語り伝えることを期待しておられる。豊かに与えられた祝福は、他の人々に伝えなければならないのである。救いの福音は、あらゆる国民、部族、言語、民族に及ばなければならない。

キリストの再臨に先だつ暗黒と不信の時代において、栄光の主は、神の教会に特別の光をお与えになることがいにしえの預言者たちの幻の中で示されていた。彼は、「その翼には、いやす力を備えている」義の太陽として、神の教会の上にのぼられる（マラキ書四ノ二）。そしてすべての真の弟子からは、生命、勇気、援助、真のいやしのための力が発散するのであった。

キリストの来臨は、この地上歴史の最も暗黒な時代に起こるのである。人の子が来られる寸前の世界の状態は、ノアや口トの時代と同じである。聖書はその時を予見して、サタンはあらゆる偽りの力とあらゆる不義の惑わ

し」をもって活動すると言っている（テサロニケ第二・二ノ一〇）。暗黒、数々の誤った教え、異端、終末時代の惑わしなどの急速な増加によって、サタンの活動を知ることができる。サタンは、単に世俗を捕らえるだけでなく、彼の欺瞞はわれわれの主イエス・キリストの教会と称するところにまで及んでいる。大背教は真夜中の暗やみになるのである。神の民にとって、それは試練の夜、涙の夜、真理のための迫害の夜である。しかし、その暗い夜から神の光が輝き出るのである。

神は「やみの中から光」を照らし出される（コリント第二・四ノ六）。「地は形なく、おなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。神は『光あれ』と言われた。すると光があった」（創世記一ノ二、三）。そのように霊的暗黒の夜の中に、神の言葉が、「光あれ」と語られる。神は、神の民に、「起きよ、光を放て。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったから」と言われる（イザヤ書六〇ノ一）。

「見よ、暗きは地をおあい、やみはもろもろの民をおおう。しかし、あなたの上には主が朝日のごとくにのぼられ、主の栄光があなたの上にあらわれる」（同六〇ノ二）。神の栄光の輝きであられるキリストが、この世界に世の光として来られた。彼は人々に神を代表するために来られた。そして、彼は「聖霊と力とを注がれ…よい働きをしながら…巡回され」と記されている（使徒行伝一〇ノ三八）。彼は、ナザレの会堂で次のように言われた。「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してください。だからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせるのである」（ルカ四ノ一八、一九）。彼が弟子たちにせよとお命しになったのは、これであつた。「あなたがたは、世の光である。」「そして、人々があなたがたの

よいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」(マタイ五ノ一四、一六)。

預言者イザヤも、この働きを描写して次のように言っている。「また飢えた者に、あなたのパンを分け与え、さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、裸の者を見て、これに着せ、自分の骨肉に身を隠さないなどの事ではないか。そうすれば、あなたの光が暁のようにあらわれ出て、あなたは、すみやかにいやされ、あなたの義はあなたの前に行き、主の栄光はあなたのしんがりとなる」(イザヤ書五八ノ七、八)。

こうして、霊的暗黒の夜に、神の教会によって神の栄光が輝き出て、うずくまっている者をかかえ起こし、嘆き悲しむ者を慰めるのである。

われわれの周囲の至る所に、世界の嘆き悲しむ叫び声が聞こえる。どちらを向いても、貧しい者や困っている者がいる人生の苦労や悲惨に救いの手を伸べて和らげるのが、われわれの務めである。人の心の欠乏は、ただキリストの愛だけが満たすことができるのである。もしキリストがわれわれのうちに住んでおられるならば、われわれの心は、神からの同情心で満ちあふれる。閉じた泉が開かれて、キリストのような熱烈な愛の泉となる。

希望を失った者が多くいる。彼らに太陽の光を取りもどそう。勇気を失った者も多い。彼らに励ましの言葉を語ろう。彼らのために祈ろう。生命のパンが必要な人々もある。彼らに神の言葉を読んで聞かせよう。多くの者は、地上のどんな薬も医者もいやすことのできない心の病にかかっている。こうした人々のために祈ろう。彼らをイエスのところに連れていこう。グレアデに乳香あり、医者であられる主がおられることを彼らに告げよう。

光は、祝福、すなわち普遍的祝福で、感謝を知らず、汚れ、墮落した世界にその宝を注ぎかけている。義の太陽の光もそれと同じである。罪と悲しみと痛みの暗黒に包まれた全地は、神の愛を知る知識で照らされなければ

ならない。どのような宗派、また地位、階級の人々も、天の御座から出る光から除外されてはならない。

希望とあわれみの使命は、地の果てまで伝えなければならない。だれでも望む者は、手を伸ばして神の力に頼り神と和らぐことができる。異邦人たちは、もはや真夜中の暗黒に包まれていてはならない。暗黒は、義の太陽の輝かしい光の前から消え去らなければならない。

キリストは彼の教会が世の光に照らされ、インマヌエルの栄光に輝く改変された一団の人々となるために、あらゆる備えをなされた。すべてのキリスト者が、光と平和の霊的ふんい氣に包まれることをキリストは望まれる。彼は、われわれが彼自身の喜びをわれわれの生活にあらわすことを望んでおられる。

「起きよ、光を放て。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったから」(イザヤ書六〇ノ二)。キリストは力と大いなる栄光をもって来られる。キリストは、彼ご自身の栄光と父なる神の栄光とをもって来られる。そして聖天使たちが、彼につき従って来る。全世界が暗黒に閉ざされているときに、聖徒たちのすべての住居には光がある。彼らは、キリストの再臨の最初の光を認める。彼の華々しいお姿からは、汚れない光が輝き出る。そして、贖い主キリストは、彼に仕えたすべての人々からあがめられる。悪人たちは逃げるのであるが、キリストに従った人々は、彼のみ前で喜びに満ちるのである。

人々の中から贖われた者たちが約束の嗣業を受けるのは、この時である。こうして、彼のイスラエルに対するみこころは、文字通りに成就するのである。神がご計画になることを人間は取り消す力がない。悪の活動のさなかにあっても、神のみこころは着実にその完成に向かって進んでいった。これは分裂した王国の歴史全体を通じて、イスラエルの家について言えることであつた。それは今日の霊的イスラエルについても同じである。

パトモスの預言者は、地が新たにされてイスラエルが回復されるこの時を、はるか幾世紀のあなたに眺めて次のようにあかしした。

「その後、わたしが見てみると、見よ、あらゆる国民、部族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、白い衣を身にまとい、しゅろの枝を手にとって、御座と小羊との前に立ち、大声で叫んで言った、『救は、御座にいますわれらの神と小羊からきたる』。

御使たちはみな、御座と長老たちと四つの生き物とのまわりに立っていたが、御座の前にひれ伏し、神を拝して言った、『アアメン、さんび、栄光、知恵、感謝、ほまれ、力、勢いが、世々限りなく、われらの神にあるように、アアメン』」（黙示録七ノ九―一二）。

「わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものを聞いた。それはこう言った、『パレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつるう』」（同一九ノ六、七）。「小羊は、主の主、王の王であるから、彼らにうち勝つ。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る」（同一七ノ一四）。

第六十章 栄光にみちた国が来る

神の教会は、悪との戦いにおける最も暗黒な時代に、主の永遠の計画に関する啓示が与えられた。神の民は現在の試練のあなたに将来の勝利を見ることが許された。その時になれば、戦いは終わり、贖われた者は約束の国を領有するのである。将来の栄光に関するこれらの幻、すなわち神の手が描いた光景は、各時代の争闘が急速に終わりを告げ、約束の祝福があふるばかりに与えられようとしている今日、神の教会にとって貴重なものでなければならぬ。

いにしえの預言者によつて、教会に与えられた慰めの言葉は実に多かつた。イザヤは、「慰めよ、わが民を慰めよ」と語るように、神の命令を受けた(イザヤ書四〇ノ一)。そしてこの任命と共に、その後の各世紀を通じて信者の希望と喜びとなった驚くべき幻が与えられた。各時代の神の民は、人々から軽べつされ、迫害され、見捨てられたけれども、主の確かな約束によつてささえられてきた。彼らは信仰によつて、「わたしはあなたを、とこしえの誇、世々の喜びとする」という主の教会に対する確証を主が成就される時を待望したのである(同六〇

ノ一五)。

戦う教会はしばしば、試練と苦難に会うように召された。なぜならば、教会は激しい戦いを経ないでは勝利することができないからである。すべての者は、「悩みのパンと苦しみの水」を与えられなければならない(同三〇ノ二〇)。しかし、救いをほどこす力をお持ちであるかたに信頼する者は、だれひとりとして全く打ちひしがれることはない。「ヤコブよ、あなたを創造された主はこう言われる。イスラエルよ、あなたを造られた主はいまこう言われる、『恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ。あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共にいる。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない。あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない。わたしはあなたの神、主である、イスラエルの聖者、あなたの救主である。わたしはエジプトを与えてあなたのあがないしろとし、エチオピアとセバとをあなたの代りとする。あなたはわが目に尊く、重んぜられるもの、わたしはあなたを愛するがゆえに、あなたの代りに人を与え、あなたの命の代りに民を与える』」(同四三ノ一四)。

神はゆるしをお与えになる。十字架につけられ、よみがえられたわれわれの主イエスの功績によって、満ちあふれるばかりの嘉納が与えられる。イザヤは、主が彼の選民に宣言されるのを聞いた。「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない。あなたは、自分の正しいことを証明するために自分のことを述べて、わたしに思い出させよ。われわれは共に論じよう。」「主なるわたしが、あなたの救主、また、あなたのあがない主、ヤコブの全能者であることを知るにいたる」(同四三ノ二五、二六。六〇ノ一六)。

預言者は、「その民のはずかしめを全地の上から除かれる」と宣言した。「彼らは『聖なる民、主にあがなわれた者』となえられ」る。主は「灰にかえて冠を与え、悲しみにかえて喜びの油を与え、憂いの心にかえて、さんびの衣を与えさせるためである。こうして、彼らは義のかしの木となえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者となえられる」(イザヤ書二五ノ八。六二ノ一二。六一ノ三)。

「シオンよ、さめよ、さめよ、

力を着よ。

聖なる都エルサレムよ、美しい衣を着よ。

割礼を受けない者および汚れた者は、

もはやあなたのごころに、はいることがないからだ。

捕われたエルサレムよ、

あなたの身からちりを振り落せ、起きよ。

捕われたシオンの娘よ、

あなたの首のなわを解きすてよ。」

(同五二ノ一、二)

「『苦しみをうけ、あらしにもてあそばれ、

慰めを得ない者よ、

見よ、わたしはアンチモニーであなたの石をすえ、

サファイヤであなたの基をおき、

めのであなたの尖塔を造り、

紅玉であなたの門を造り、

あなたの城壁をことごとく宝石で造る。

あなたの子らはみな主に教をうけ、

あなたの子らは大いに榮なしえる。

あなたは義をもつて堅く立ち、

しえたげから遠ざかって恐れることはない。

また恐怖から遠ざかる、

それはあなたに近づくことがないからである。

たとい争いを起す者があっても

わたしによるのではない。

すべてあなたと争う者は、あなたのゆえに倒れる。...

すべてあなたを攻めるために造られる武器は、

その目的を達しない。

すべてあなたに逆らい立って、争い訴える舌は、

あなたに説き破られる。

これが主のしもべらの受ける嗣業であり、

また彼らがわたしから受ける義である』と

主は言われる。」

(イザヤ書五四ノ一一―一七)

教会はキリストの義の武具をまとして、最後の争闘を始めなければならない。「月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のよう」に、教会は全世界に出て行って、勝利に勝利を収めなければならない(雅歌六ノ一〇)。

教会と悪の勢力との闘いの最も暗黒な時は、教会が最後に救出される日の直前である。しかし、神に信頼する者はだれひとりとして恐れる必要はない。「あらぶる者の及ぼす害は、石がきを打つあらしのごとく」であつても、神は、神の教会にとつて、「あらしをさける避け所とな」られる(イザヤ書二五ノ四)。

その日、義人だけに救いの約束が与えられている。「シオンの罪びとは恐れに満たされ、おのきは神を恐れない者を捕えた。『われわれのうち、だれが焼きつくす火の中にあることができよう。われわれのうち、だれがとこしえの燃える火の中にあることができよう』。正しく歩む者、正直に語る者、しえたげて得た利をいやしめる者、手を振つて、まいないを取らない者、耳をふさいで血を流す謀略を聞かない者、目を閉じて悪を見ない者、このような人は高い所に住み、堅い岩はそのとりでとなり、そのパンは与えられ、その水は絶えることがない」

(同三三ノ一四―一六)。

主は、彼の忠実な人々に次のように言われる。「さあ、わが民よ、あなたのへやにはいり、あなたのうしろの戸を閉じて、憤りの過ぎ去るまで、しばらく隠れよ。見よ、主はそのおられる所を出て、地に住む者の不義を罰せられる」(同二六ノ二〇、二二)。

主の使者たちは靈感によって、大いなる審判の日の幻を与えられ、心安らかに主を迎える準備をしなかった人の驚く光景を示された。

「見よ、主はこの地をおなしくし、これを荒れすたれさせ、これをくつがえして、その民を散らされる。…これは彼らが律法にそむき、定めを犯し、とこしえの契約を破ったからだ。それゆえ、のろいは地をのみつくし、そこに住む者はその罪に苦しみ、…鼓の音は静まり、喜ぶ者の騒ぎはやみ、琴の音もまた静まった」(同二四ノ一―八)。

「ああ、その日はわざわざいだ。主の日は近く、全能者からの滅びのように来るからである。…種は土の下に朽ち、倉は荒れ、穀物がつきたので、穀倉はこわされる。いかに家畜はうめき鳴くか。牛の群れはさまよう。彼らには牧草がないからだ。羊の群れも滅びうせる。」「ぶどうの木は枯れ、いちじくの木はしおれ、ざくろ、やし、りんご、野のすべての木はしぼんだ。それゆえ楽しみは人の子らからかれうせた」(ヨエル書一ノ一五―一八、一二)。

エレミヤは、地上の歴史の終末における荒廃を眺めて叫んだ。「ああ、わがはらわたよ、わがはらわたよ…わたしは沈黙を守ることができない、ラッパの声と、戦いの叫びを聞くからである。破壊に次ぐ破壊があり、全地は荒され」た(エレミヤ書四ノ一九、二〇)。

イザヤは神の報復の日について次のように言っている。「その日には高ぶる者はかがめられ、おごる人は低くせられ、主のみ高くあげられる。こうして偶像はことごとく滅びうせる。…その日、人々は拝むためにみずから造ったしろがねの偶像と、こがねの偶像とを、もぐらもちと、こうもりに投げ与え、岩のほら穴や、がけの裂け目にはいり、主が立って地を脅かされるとき、主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける」(イザヤ書二ノ一七―二一)。

人々の誇りが低められる転換期について、エレミヤは次のようにあかししている。「わたしは地を見たが、それは形がなく、またむなしかった。天をあおいだが、そこには光がなかった。わたしは山を見たが、みな震え、もろもろの丘は動いていた。わたしは見たが、人はひとりもあらず、空の鳥はみな飛び去っていた。わたしは見たが、豊かな地は荒れ地となり、そのすべての町は、主の前に、その激しい怒りの前に、破壊されていた。」「悲しいかな、その日は大いなる日であって、それに比べるべき日はない。それはやコブの悩みの時である。しかし彼はそれから救い出される」(エレミヤ書四ノ二三―二六。三〇ノ七)。

神の敵にとつての怒りの日は、神の教会にとつては最後の救いの日である。預言者は言っている。

「あなたがたは弱った手を強くし、

よろめくひざを健やかにせよ。

心おののく者に言え、

『強くあれ、恐れてはならない。』

見よ、あなたがたの神は報復をもって臨み、

神の報いをもってこられる。

神は来て、あなたがたを救われる』と。」

（イザヤ書三五ノ三、四）

「主はとしえに死を滅ぼし、主なる神はすべての顔から涙をぬぐい、その民のはずかしめを全地の上から除かれる。これは主の語られたことである」（同二五ノ八）。そして、主が、すべての聖天使たちを率いて、地のすべての国々の中から残りの教会を集めるために、栄光の中に降って来られるのを預言者が見ていると、待望していた人々は声をそろえて、喜びの叫びをあげるのであった。

「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。これは主である。わたしたちは彼を待ち望んだ。わたしたちはその救を喜び楽しもう」（同二五ノ九）。

眠っている聖徒たちを呼ばれる神のみの声が聞こえる。そして預言者は、彼らが死の牢獄から出てくるのを見て叫ぶ。「あなたの死者は生き、彼らのなきがらは起きる。ちりに伏す者よ、さめて喜びうたえ。あなたの露は光の露であつて、地は亡き霊をいだす」（同二六ノ一九文語訳参照）。

「その時、目しいの目は開かれ、

耳しいの耳はあけられる。

その時、足なえは、しかのように飛び走り、

おしの舌は喜び歌う。」

（同三五ノ五、六）。

預言者は、罪と墓に勝利した人々が今、幸福そうに創造主の面前にあつて、人間が最初に神と語ったのと同じように親しく神と話し合っているのを幻の中で見た。主は、彼らにお命じになる。「しかし、あなたがたはわたしの創造するものにより、とこしえに楽しみ、喜びを得よ。見よ、わたしはエルサレムを造つて喜びとし、その民を楽しみとする。わたしはエルサレムを喜び、わが民を楽しむ。泣く声と叫ぶ声は再びその中に聞えることはない。」「そこに住む者のうちには、『わたしは病氣だ』と言つ者はなく、そこに住む民はその罪がゆるされる」(イザヤ書六五ノ一八、一九。三三ノ二四)。

「それは荒野に水がわきいで、

さばくに川が流れるからである。

焼けた砂は池となり、

かわいた地は水の源となり。」

「いとすぎは、いばらに代つて生え、

ミルトスの木は、おどろに代つて生える…

「そこに大路があり、

その道は聖なる道となえられる。

汚れた者はこれを通り過ぎることはできない、

愚かなる者はそこに迷い入ることはない。」

「ねんごろにエルサレムに語り、これに呼ばわれ、

その服役の時は終り、

そのとがはすでにゆるされ、

そのもろもろの罪のために二倍の刑罰を

主の手から受けた。」

(同三五ノ六、七。五五ノ一三。三五ノ八。四〇ノ二)

贖われた人々が、罪とのろ…のあらゆる傷あとから解放されて、神の都に住んでいるのを見た預言者は、喜びにわれを忘れて叫ぶのである。「すべてエルサレムを愛する者よ、彼女と共に喜べ、彼女のゆえに楽しみ」(同六六ノ一〇)。

「暴虐は、もはやあなたの地に聞かれず、

荒廃と滅亡は、もはやあなたの境のうちに聞かれず、

あなたはその城壁を『救』となえ、

その門を『誉』となえる。

昼は、もはや太陽があなたの光とならず、

夜も月が輝いてあなたを照さず

主はとこしえにあなたの光となり、

あなたの神はあなたの栄えとなられる。

あなたの太陽は再び没せず、

あなたの月はかけることがない。

主がとしえにあなたの光となり、

あなたの悲しみの日が終るからである。

あなたの民はことごとく正しい者となつて、

としえに地を所有する。

彼らはわたしの植えた若枝、わが手のわざ

わが栄光をあらわすものとなる。」

(イザヤ書六〇ノ一八―二二)

預言者は、その場所の音楽と歌を聞いた。それは、神の幻の中でなければ、どんな人間の耳も聞くことができず、また、どんな人間の心も想像することができないような音楽であり、歌であつた。「主にあがなわれた者は帰つてきて、その頭に、としえの喜びをいただき、歌うたいつつ、シオンに来る。彼らは楽しみと喜びとを得、悲しみと嘆きとは逃げ去る。」「その中に喜びと楽しみとがあり、感謝と歌の声とがある。」「歌う者と踊る者」がいる。「彼らは声をあげて喜び歌う。主の威光のゆえに、西から喜び呼ばわる」(同三五ノ一〇。五一ノ三。詩篇八七ノ七。イザヤ書二四ノ一四)。

贖われた人々は・新しい地において、最初アダムとエバに幸福をもたらした仕事と楽しみに従事する。彼らはエデンの生活をする。それは楽園と畑の生活である。「彼らは家を建てて、それに住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる。彼らが建てる所に、ほかの人は住まず、彼らが植えるものは、ほかの人が食べない。わが民の命は、木の命のようになり、わが選んだ者は、その手のわざをながく楽しむからである」(イザヤ書六五ノ二一、二二)。

そこではあらゆる能力が発達し、あらゆる才能が増し加わる。どんな大事業も遂行され、どんなに高遠な抱負も達成され、どんなに遠大な目的も実現される。それでもなお、さらに越えるべき新しい高さ、感嘆すべき新しい驚異、理解しなければならぬ新しい真理、知・徳・体の能力を要する新しい目的が現れる。

こうした偉大な光景が示された預言者たちは、その意味を十分に理解したいと願った。「預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、…いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。そして…自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された。それらの事は、…今や、あなたがたに告知知らされたのである」(ペテロ第一・二ノ一〇ー一二)。まさにその成就の瀬戸際に立っているわれわれにとって、来たるべきこれらの諸事件の描写はなんと意義深く、また生々しい関心事でなければならないことであろう。これは、われわれの祖先がエデンを去って以来、神の子供たちが待望し、祈ってきたことなのである。

旅行く友よ、われわれはまだ地上の活動の影と混乱のさ中にいる。しかし、間もなく救い主は現れて、救いと休息をお与えになるのである。われわれは信仰をもって、神のみ手によって描かれた幸福な将来を眺めよう。世

の罪のためになくられたかたは、彼を信じるすべての者に、パラダイスの門を広く開けておられるのである。やがて戦いは終わり、勝利を収める。やがてわれわれは永遠の生命の希望の中心であられるかたにお目にかかる。そして、彼のみ前において、この世の試練と苦難は無に等しく思われる。「さきの事はおぼえられること」がない。「だから、あなたがたは自分の持つている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴っているのである。神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。『もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。』」「しかし、イスラエルは…救われて、とこしえの救を得る。あなたがたは世々かぎりなく、恥を負わず、はずかしめを受けない」(イザヤ書六五ノ一七。ヘブル一〇ノ三五―三七。イザヤ書四五ノ一七)。

見上げよ、見上げよ、絶えず信仰を増し加えよ。この信仰に導かれて、都の門を通って大いなる将来へと続く狭い道を行こう。それは贖われた者のために備えられた広く限らない輝かしい将来である。「だから、兄弟たちよ。主の来臨の時まで耐え忍びなさい。見よ、農夫は、地の尊い実りを、前の雨と後の雨とがあるまで、耐え忍んで待っている。あなたがたも、主の来臨が近づいているから、耐え忍びなさい。心を強くしていなさい」(ヤコブ五ノ七、八)。

救われた諸国の人々は、天の律法のほかはどんな律法をも認めない。すべての者は賛美と感謝の衣服を着て、幸福な一致した家族となる。その光景に「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわる」(ヨブ記三八ノ七)。そして神とキリストとは、声を合わせて、「もはや罪もなく、もはや死もない」と宣言される。

『新月ごとに、安息日ごとに、すべての人はわが前に来て礼拝する』と主は言われる。『「こうして主の栄光

があらわれ、人は皆ともにこれを見る。」「主なる神は義と誉とを、もろもろの国の前に、生やされる。」「その日、万軍の主はその民の残った者のために、栄えの冠となり、麗しい冠となられる」(イザヤ書六六ノ二三。四〇ノ五。六一ノ一。二八ノ五)。

「主はシオンを慰め、またそのすべて荒れた所を慰めて、その荒野をエデンのように、そのさばくを主の国のようにされる。」「これにレバノンの栄えが与えられ、カルメルおよびシャロンの麗しさが与えられる。」「あなたもはや『捨てられた者』と言われず、あなたの地はもはや『荒れた者』と言われず、あなたは『わが喜びは彼女にある』となえられ、あなたの地は『配偶ある者』となえられる。…花婿が花嫁を喜ぶようにあなたの神はあなたを喜ばれる」(同五一ノ三。三五ノ二。六二ノ四、五)。

〔解
説〕

イスラエルの預言者

本書の原書名は「預言者と王」(Prophets and Kings)です。この書名は、紀元前十世紀から四世紀にいたるイスラエルとユダ王国の歴史の中で、預言者たちが果たした役割の重要さに焦点をあてています。実際この時代の歴史が後世に及ぼした影響を考えますと、政治的な権力をもつ王たちよりも、宗教的指導者であった預言者たちのほうが、はるかに大きい影響を及ぼしているのです。西欧文化の二つの柱―ギリシア思想とヘブル思想―のうち、ヘブル思想の基本となるものは、預言者の思想であり信仰でした。

すでにお気付きになった方もあると思いますが、預言者を予言者と書いていないことです。「予言」は辞典を見ますと「未来を予測して言うこと。その言葉」と書いてあります。もちろん「預言」にはこの意味も含むのですが、「預言」は「予言」に比べてより広い範囲の神のお告げ、あるいは託宣(聖書では神のことばと言っている)を指すものとして用いています。『広辞苑』には「預言」は「キリスト教で神の靈感に打たれたと自覚する者が神託として述べる言説」と説明されています。もちろん「予言」と「預言」の区別は便利だからこつしているのです、漢字を普通省略しないで書けばどちらも同じ「預言」となってしまいますから、もともと区別

があつたわけではありません。ただ聖書の預言者は、未来の予測を告げるものという意味ではなく、神のことばを閃いて語るものという意味ですから、「預」つまり「あずかる」という字をあてて、「預言者」つまり「ことばをあずかるもの」という意味に理解したほうがよいのかもしれませんが。

ここで「預言者」の原語をしらべてみますと、ギリシア語ではプロフエーテース(Prophetes)で「前に向かつて宣言する」という意味です。旧約聖書に用いられていることばはヘブル語で、ナービー(nabi)とローエー(ro'eh)です。ナービーは「(神によつて)呼出されたもの」「(神の代弁者として)呼ばれる者」という意味、ローエーは「見るもの」という意味です(類語に「ローゼー-rozenがある」)。「見るもの」として預言者は神の意志を明らかに悟り、「呼出されたもの・呼ばれる者」として、その神の意志を人々に伝えるというふうに考えますと、預言者の働きがどんなものかを理解することができます。

預言者の召し

預言者(ナビー)はもともと「呼出されたもの」という意味であることを知りましたが、誰によつて、いつ、どんなふうに出されたのかを見てみましょう。旧約聖書の中でも偉大な預言者の一人にイザヤがいます。イザヤという名の意味は「ヤーウエ(神)は救う」というのですが、紀元前八世紀の人です。聖書には書いていませんが、伝説によるとイザヤはウジヤといつ王のいとこにあたり、首都エルサレムで政治的・宗教的参事として三代の王に仕えたようです。このイザヤの若いときの体験が、旧約聖書イザヤ書第六章に書かれています。それを読むと、預言者というものが、どのように神に召されたかを知ることができます。

イザヤ書第六章一節から三節までを引用しましょう。

『ウジヤ王の死んだ年、わたしは主が高くあげられたみくらに座し、その衣のすが神殿に満ちているのを見た。その上にセラピム(註・天使)が立ち、おのおの六つの翼をもっていた。その二つをもつて顔をおおい、二つをもつて足をおおい、二つをもつて飛びかけり、互に呼びかわして言った。

『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、

その栄光は全地に満つ』(イザヤ書第六章一―三節)。

『ウジヤ王の死んだ年』は西暦紀元前七四〇年ごろのことです。イザヤは宮廷の青年貴族の一人でした。ウジヤ王はまたの名をアザリヤと言い、南王国ユダの国力を飛躍的に増大させた英明な王でした。しかし、この王の晩年は彼が行った不遜な行いのため神のさばきを受け、癩病になり、隔離されて生活しなければならませんでした。またユダ王国も、広大な中東の一角に細々と余命を保つような弱小国になり下がっていったのです。ひとたび強大な外国の侵略に会えば、ひとたまりもなく滅び去っていかねばなりません。その大国アッシリヤは東方にあつて、パレスチナ侵攻の準備をととのえていました。ウジヤ王の死後数年で、強国アッシリヤはアッシリヤ軍の侵攻をつけて滅びます。それから十年たつと、北王国イスラエルが滅ぼされます。その次はユダ王国が滅ぼされる番です。アッシリヤ軍は再三ユダに侵攻しました。ユダの王は重税をさし出してアッシリヤに屈従しました。しかしユダ王国滅亡の危機のときはありましたが、アッシリヤに隷属した百年以上ものあいだ、曲りなりにも王国の体面を維持していくことができました。こうしてユダ王国が大国アッシリヤに屈

従っていく過程に、預言者イザヤが生存したのです。国家の滅亡の危機が迫ったときに、この預言者は立つて、国を救ったのです。

今、青年イザヤの経験に帰ってみますと、このような内外の危機が風をはらんでいるとき、ウジヤ王の死は敏感なイザヤの心に鋭い危機のかけを感じさせたでしょう。彼は神殿に行つて神に祈るのです。

祈っているとき、突然イザヤはこの世ならざる光景を見るのです。それは神の御座の光景でした。

「わたしは主が高くあげられたみくらに座し、その衣のすそが神殿に満ちているのを見た」。

そこに天使が立ち、あるいは飛びかけり、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地に満つ」と互いに呼びかわしているのです。

何と厳肅な光景でしょう。大空いっぱいには神の御座の目をうばうような輝きを見、その威光に接したとき、誰しも「聖なるかな」と叫ばないわけには参りません。聖なるものはわれらから隔離しておられるお方です。われらの目をもってその本質を見ることができない方です。しかし、そこに限りない憧憬と恐れを感じさせるお方です。その力、その大いさを

われわれは測ることができません。その方の存在によって地の基はゆりうごき、天の栄光も消え去るのです。

青年イザヤの目前に現れた光景は、彼の魂を畏縮させるに充分でした。「その時わたしは言った、『わざわざいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから』」(イザヤ書六章五節)。

聖なるものが現れるとき、人間は直感的に自分の汚れを意識します。創造者が姿をあらわすとき、被造物は存在の根底をゆすぶられて恥辱にまみれます。絶対他者である神は、その現臨によって、どんなに力ある人間でも深い自己嫌悪に陥れるのです。すべての愛情の根源であり極致である方、知の全き徳を宿される方、あらゆる崇高美の極致である方。その方が立つて自己を現される。そのとき、被造物は塵に伏すのです。

イスラエルの預言者は自然界の原理を探究することに情熱を燃やしていません。万物の根本原理を考えつめるということにも余り興味はありません。世界は水から、火から、土から、空気から出来ているというような思弁はギリシア人にさせておけばいいのです。原理として神が存在するや否やとい

う議論はゲルマン人にまかせておけばよいのです。預言者は神が存在するか否かを問いません。彼らはそのように問うことができないのです。なぜなら、神は彼らが探し求める前にすでにそこに現在して、彼らに自らを啓示するのです。神が自己を啓示されたものは、もはや神の臨在から離れ去ることはできません。旧約聖書の詩人はいみじくも次のように歌っています。

「主よ、あなたはわたしを探り、わたしを知りつくされました。あなたはわがするをも、立つをも知り、遠くからわが思いをわきまえられます。あなたはわが歩むをも、伏すをも探り出し、わがもろもろの道をことごとく知ってあられます。わたしの舌に一言もないのに、主よ、あなたはことごとくそれを知られます。あなたは後から、前からわたしを囲み、わたしの上にみ手をおかれます。このような知識はあまりに不思議で、わたしには思いも及びません。これは高くて達することはできません。わたしはどこへ行って、あなたのみたまを離れましようか。わたしはどこへ行って、あなたのみ前をのがれましようか。わたしが天にのぼっても、あなたはそこにあられます。わたしが陰府に床を設けても、あなたはそこにあられます。わたしがあけぼのの翼をかって海のはてに

住んでも、あなたのみ手はその所でわたしを導き、あなたの右のみ手はわたしをささえられます。『やみはわたしをおおい、わたしを囲む光は夜となれ』とわたしが言っても、あなたには、やみも暗くはなく、夜も昼のように輝きます。あなたには、やみも光も異なることはありません。あなたはわが内臓をつくり、わが母の胎内でわたしを組立てられました。わたしはあなたをほめたたえます。あなたは恐るべく、くすしき方だからです。あなたのみわざはくすしく、あなたは最もよくわたしを知ってあられます」(詩篇一二九篇一一四節)。

もしこの詩篇に書かれていることが本当なら、何というおそろしいまでにすごい現実がここにあることでしょう。それは詩人の想像の世界のことでは決してありません。神が語り人が聞くといふことが、最もリアルなこととしてあるのです。

残念なことに日本人の宗教経験には、神が語り人が聞くといふことが全く希薄です。仏教にしても、その宗教経験は瞑想か帰依かですが、そこに現実の体験を媒介にした神と人の対話はありません。つまるところ仏教の宗教経験は内なるものの開明であり、信は悟りに根拠をもちます。それと対照的に預言者の経験は、自分の内面を掘りさげたり、悟りをひら

いたりという経験ではなく、自分に向かって外から語りかけてくるものに応答を迫られているものの体験です。彼の宗教体験は外から起こるのです。語りかけてくるものは神です。

ここで信ということが、宗教経験のもっとも大切な土台になります。なぜなら信じ合うということが人格者相互の対話の土台になるからです。預言者には全く孤独な瞑想家はいません。彼はどこにいても、いつでも、目に見えない神と対話しているのです。その対話をはじめたのは神であり、応答を迫るのも神であり、一方、預言者は神のことばを聞き、神に心を開き、訴え、願い、求めていくのです。瞑想家はついには孤独に陥るのですが、預言者は神と共にあるのです。

さて青年イザヤは、神の御座の光景を見、自分の汚れにそののいたとき、神のことばを聞いたのです。

「わたしはまた主の言われる声を聞いた、『わたしはだれをつかわそつか。だれがわれわれのために行くだろうか』。その時わたしは言った、『ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください』」(イザヤ書六章八節)。

こうして青年預言者イザヤが神に呼び出されることになったのです。それから数十年、イザヤは困難な時代に神の意志を国民に伝える預言者のつとめを忠実に果たしました。

いつどんな預言者があらわれたか

預言者は旧新約聖書のすべての時代に現れています。聖書は人類の歴史が始まって以来、神が人に語って来られたことを記録した書物ですから、このことは当然のことです。

たとえば旧約聖書の古い時代(紀元前一九世紀)に、メソポタミヤからパレスチナへ移住してきたセム族のアブラハムは多くの家畜と金銀を持ち、少なくとも数百人の「家の子」、部下をもつ族長でしたが、唯一の神への熱心な信仰があったので、預言者と呼ばれています(創世記二〇章七節)。またアブラハムは卓越した信仰によって「信仰の父」、また「神の友」と言われているのです。

モーセも預言者でした。彼は最大の預言者でした。聖書には「イスラエルには、このちモーセのような預言者は起らなかった。モーセは主が顔を合わせて知られた者であった」と書かれています(申命記三四章一〇節)。モーセは紀元前一五世紀に、イスラエル人をエジプトからパレスチナへ導き、彼らを奴隷の身分から解放しました。モーセは古今まれに見る偉大な指導者でしたが、その偉大さのヒケツは彼がつねに

神と語り、神の意志をあくまでも忠実に行ったことにありました。神はモーセを通して旧約聖書中最大の啓示を与えられました。その記録がモーセの五書と呼ばれている旧約聖書の初めの五つの書物です(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記がそれです)。

神のことはを聞き、これを人々に伝えるというつとめが預言者の本来のつとめとすれば、たしかにモーセは最大の預言者であつたわけです。この意味でそのあとの時代にも次々に預言者のつとめを果たした人物が現れています。たとえば、モーセの後継者のヨシユア、また「先見者」と言われたサムエルなどがいます。預言者の歴史を見る上で、このサムエルは大切な人物です。預言者がイスラエルの国において特定の身分とみなされるようになるのがサムエルの時代から始まったとされているからです。たとえば王とか祭司が国家および宗教上の身分をあらわすように、預言者もある定まった地位を占めるようになるのです。

サムエルの時代に国家としてイスラエルが統一されるのですが、そこで形成されたイスラエル王国はあくまでも預言者によって啓示される神の意志に従った国でなければなりませんでした。ですから王権の上に神権があつたわけです。王や

為政者たちが神のことはからはずれることがないように、預言者は常に王に対して勧告したり忠告したり警告したりしなければなりません。そこで預言者自身を訓練するいわば預言者塾がこの時代に現れています。

こうしてサムエルによってイスラエル統一王国がたてられ、初代の王サウルが選ばれます。しかしサウルは外敵との戦いに一生をついやしてしまい、王国統一の実をあげませんでした。次にサムエルによって任命されたのが有名なダビデ王です。ダビデは有能な人であつたばかりでなく、神を敬い信仰の篤い人でしたので、イスラエル統一王国は非常に強化され、その子ソロモンの時代は王国の繁栄の頂点に達しました。紀元前一〇世紀のことです。

ソロモン王の死後、イスラエル統一王国は分裂してしまいます。その結果、北にイスラエル王国、南にユダ王国となりました。このソロモン以後の分裂王国時代が「国と指導者」の主要な内容となるわけですが、これが人類の精神史においては意味深い高揚した時代でした。

北王国イスラエルは二世紀余り続きます。その歴史はちょうどわが国の戦国時代のようなものです。王朝は相次ぐクーデターによって次々にくつがえされていきました。はじめは分裂し

た相手のユダとの戦い、次はそれに加えて北方の雄国スリヤとの戦いにあけくれました。そうこうしているうちに、はるか東方から強大な帝国アッシリヤの圧迫の手がのびてきました。そこでイスラエルは地中海にのぞむフェニキヤと同盟を結び、一致してアッシリヤ軍に当たり、一度はアッシリヤの西方侵攻に歯止めをかけます。しかし、王朝が変わり、国力が弱まると共にアッシリヤへの従属が時の勢いとなってきました。そしてついに大軍をもってスリヤを落とし、パレスチナへ侵入したアッシリヤ軍によって、イスラエル王国は次々に領土を奪われ、ついに首都サマリヤは落城し、住民は東方に連れ去られ、王国は再び興えることはありませんでした。

この波乱に富んだイスラエル王国の二世紀にわたる歴史は宗教的にも動揺と背信の道をたどった歴史でした。もともとイスラエル人が砂漠からカナン（現在のパレスチナ）に侵入し、遊牧から農業に移ったとき、先住民カナン人について農業技術を学ぶことは自然の成り行きでした。しかし、古代の技術はすべて宗教と密接に結びついていましたから、イスラエル人は農業技術と共にカナン人の神バアルと女神アシュタルテを祭ることを学んだのです。バアルとアシュタルテは天候をつかさどり、植物の生育を支配し、すべての作物を豊か

にみのらせる豊じよう神でした。しかし、イスラエル人はこれらの神々を決して信仰してはならないと、モーセによって厳しく命じられていました。

イスラエル人はカナンに侵入して以来、三世紀かかってカナン征服をなし終え、統一国家をつくりあげたのですが、政治的にはカナンを征服したかに見えても宗教的にはむしろカナン人の宗教をとり入れ、名はイスラエルの神であっても、実はカナン人の神バアルを礼拝するようになったのでした。ここでイスラエル人がモーセと共に神の前に立てた契約、峻厳な人格的道徳宗教を守ることができなくなっていました。

そもそもバアルの宗教は自然宗教です。自然宗教の特徴は人間の欲望の満足です。それは人間の欲望の肯定から出発し、欲望による破局をいけません。これと対照的にイスラエルの宗教は信仰と道徳律がきびしく結び合わされていました。ことにバアルの宗教との対比で注目されることは、性道德のきびしい水準です。姦淫つまり正当な結婚による以外の性的交渉を、イスラエルではきびしく禁じていました。一方バアルの宗教では、宗教的儀式そのものが性的な類廃をもたらしていました。このことは宗教における信仰の純粋性を守る上で大切なことでした。唯一神への忠誠を保つものは、その結

婚生活においても真実な夫と妻としての信頼関係を維持していくのが当然だからです。宗教と道徳は遊離して存在するものではありません。真実な唯一神信仰は高い道德的水準をもつものです。

分裂後のイスラエル王国にかえってみますと、政治的経済的変遷の背後に、実に深刻な宗教的問題があつたのです。ソロモンの王朝に反旗をひるがえして自ら北王朝をたてたヤラベアム王は、金の牡牛をつくりこれを神として人民の前にかかげ、礼拝をしました。これは典型的なイスラエルの神のバアル化でした。牡牛は生殖力の象徴です。人々はそれを熱狂的に支持したのです。

古来、繁栄を望まない国民はありませんでした。しかし、その繁栄をどのようにして獲得するかが大切なことです。物質的に豊かになるためには何でもすると行って、がむしやりに働いても、精神的に得るものは少なかったという場合があります。わたしたちの周囲にもそういう例が多いのではないのでしょうか。

おそらく弱小国イスラエルにとって、周囲の国々に追いつき、追いこそうという国民的な願望があつたのではないのでしょうか。これは南王国ユダについても言えることです。いち

ばん手つ取り早く、また効果的に繁栄を得る方法は、カナン人及び周囲の国々のやり方をまねることです。同盟を結んで技術者を導入することです。これはソロモン王がしたことでした。外国と政略結婚をし、物資と技術者を迎え入れ、大事業をおこして国力を増大させました。

ただこの方法ですと、カナン人や外国の宗教も受け入れなければなりません。イスラエルはヤラベアム王が金の牡牛をつくつて以来、二百年後に滅びるまで、イスラエルの神を信じるよりはカナン人のバアル神の信仰への傾斜をずっと続け、全く異教化してしまつたのです。

このようなイスラエル王国に対して、神は預言者をつかわして、真の神を信仰するように語らせました。その第一人者というべき人物がエリヤ(870-850頃註・預言者の活動期間を示す、以下同じ)です。エリヤの使命はイスラエルの神とバアル神との対決を通して、真の神は誰かを力強く証言することでした。エリヤは力の預言者と呼ばれ、ただ一人でバアル神の預言者四百人とカルメル山(現在のイスラエルのハイファの近くにある)で対決し、真の神の力をあらわしました。またエリヤは人間としても学ぶ価値のあるものを多くもっています。

エリヤの弟子にエリシャ（852—798B.C.頃）がいました。この人も大預言者と呼ばれるにふさわしい人物でした。エリシャは信仰を説くだけでなく、民の福祉にも心を用いて働きました。彼の感化は外国にも及びました。

次はアモス（767—753B.C.頃）です。アモスはもともと農夫で、自分は預言者でないと言っているのですが、すさまじいばかりの預言をしました。彼の主題は「正義の神」です。彼は素朴な農夫のことばでイスラエルにみちている不正を糾弾しました。その言葉には現代の社会に住むわれわれの心を打ち襟を正させる力があります。神のさばきが近いから、用意していなさいと彼は勧告しています。

次に現れた預言者はホセア（755—725B.C.頃）です。彼は愛する妻にそむかれるという経験をもとにして、神にそむくイスラエル人の不信の罪を指摘しました。ホセアは愛の預言者と呼ばれます。彼は旧約聖書中、もっとも深く神の愛を説いた預言者でした。ホセアはイスラエルの真の神は慈愛深い父のようなお方であるばかりか、自分にそむくものに対してはも忍耐強く働きかけてやまめお方であることを熱心に語っています。そのような愛の神に対する反逆や忘恩がイスラエルの罪なのでした。この罪は偶像礼拝と国政の腐敗に現れてい

るとホセアは主張しました。偶像礼拝は真の神を敬わず、自分の欲望に仕えることであり、国政の腐敗は相次いで起こった権力闘争、陰謀、まちがった外国依存などに表れ、その結果正義の神の存在は忘れられ、恐怖政治が行われ、詐欺や盗み、殺人、姦淫が公然と行われるようになったのです。

このような国に神のさばきが下らないわけはありません。ホセアはアッスリヤの侵攻によるイスラエル王国の滅亡を予見しています。しかしホセアの預言の主題は滅びではなく、神の救いでした。「さあ、わたしたちは主に帰ろう」というのが彼の切実な叫びでした。神はイスラエルが心を変え、悔い改めることを期待しておられる。「エフライムよ、どうしてあなたを捨てることができようか。イスラエルよ、どうしてあなたを渡すことができようか。…わたしの心は、わたしのうちに変わり、わたしのあわれみは、ことごとくもえ起っている。…わたしは神であって、人ではなく、あなたのうちにいる聖なる者だからである。わたしは滅ぼすために臨むことをしない」と神は言われるのです。「イスラエルよ、あなたの神、主に帰れ」という神の呼びかけは、しかしながらついに拒否されました。紀元前七二二年に、ホセアの絶叫が鳴りやんでまもなく、アッスリヤ軍によってイスラエルは

滅ぼされたのです。

北王国イスラエルは流血の権力闘争がつづき、王権はめまぐるしく移りましたが、南のユダ王国はダビデ王家の血統が連綿とつづきました。北王国イスラエルが分裂してからユダ王国はかつてのダビデ、ソロモンによる統一国家にくらべると全くの弱小国となってしまいました。はじめ北王国との戦争がたえまなくありましたが、外国からの侵略にも度々でくわしました。エジプト、エチオピア、アッシリヤ、バビロニアなどによつて、ユダ王国はたえずおびやかされてきました。

北のイスラエルは偶像礼拝に全く陥ってしまいました、南のユダはアサ、ヨシヤパテ、ヒゼキヤ、ヨシヤなどの王たちが預言者の警告を聞いて改革に着手したので、ある程度偶像礼拝の腐敗がら守られましたが、その四百年の歴史は半ば異教化した状態にありました。

アモスもユダ王国に対して神の審判を語りましたが、ユダ王国において預言者が活発な働きをした二つの時期がありました。一つはアッシリヤの脅威のもとにあった時期で、もう一つはバビロニアの侵攻による亡国の危機のときでした。

アッシリヤが強大になって西のシリヤ、パレスチナ方面に侵攻してきたのは紀元前八世紀に入ってから間もなくでしたが、

ユダ王国がアッシリヤに影響を感じるようになったのは、アハズ王のときからで紀元前八世紀の後半でした。このころ貧農ミカと貴族イザヤが預言者として活躍しました。

ミカ (740—700BC頃)はイスラエルの罪を三つあげています。第一は金持ちや権力のあるものたちの高慢、第二は政治家の墮落、最後に宗教家の腐敗です。ミカは貧農の立場から神にそむいた都市の荒廃を語り、「悲惨な滅び」を預言しました。しかし彼の使信の中心は次のことばに要約されています。

「人よ、彼はさきによい事のなんであるかをあなたに告げられた。主のあなたに求められることは、ただ公義をおこなひ、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むことではないか」(ミカ書六章八節)。

イザヤ (740—685BC頃)は旧約聖書中最も深い洞察力をもった預言者であり、その神学思想は卓越したものがあります。イザヤの召命の体験についてはすでにのべましたが、彼はアッシリヤの圧倒的な脅威におのくユダ王国を、信仰によつて励まし、ついにその軍隊を敗走させました。また彼は神の救いの力と救いの確かさを強調しています。

以上、アッシリヤ支配下にあった時代の預言者についてのべました。つぎは、アッシリヤが衰亡して次の世界的な大国としてのし上がってきたバビロニアの時代に移ります。預言者イザヤの死後、数十年たっています。

すでにユダ王国は当時の世界的な大国の間であって、とるに足らない弱小国となっていました。それでも北王国が滅亡してから一世紀以上つづいたのは奇蹟に近いことでした。この間に、青年王ヨシヤによる真の神への信仰を回復させる改革が行われましたが、神の選民であることを自認していながら、ユダヤ人たちはなお不信仰の道を歩んでいました。

バビロニアがアッシリヤを滅ぼしたのは紀元前六一二年のことですが、その軍勢はまもなくシリヤ、パレスチナ方面の侵略を始めました。ユダ王国は長い間アッシリヤに重税をはらって、その属国となっていました。新しいバビロニアの出現によってユダ王国の対外政策は定まりのないものになってしまいました。国内にバビロン党とエジプト党ができて、争い合う結果になりました。

神はユダ王国のために何人も預言者を送られました。ナホム、ハバクク、ゼパニヤ、ヨエルなどの預言者がつかわされましたが、何といってもエレミヤがこの時代の最大の預言者

でした。

エレミヤ（627―580B.C.頃）はエルサレムからあまり遠くないアナトテという村で、祭司の子として生まれました。彼の青年時代には理想主義を掲げたヨシヤ王の改革が行われ、エルサレムの動きは若いエレミヤの心をゆすぶったにちがいありません。青年エレミヤはある日、神の声を聞くのです。「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、あなたを知り、あなたがまだ生れないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の預言者とした」（エレミヤ書一章五節）。

内気で細かい感受性をもっていたエレミヤは、この神の召しを前にして躊躇しました。しかし、神の命令は動きません。ついに彼は預言者として最も深刻な悩みを経験し、「涙の預言者」と呼ばれるのです。愛する母国、愛する町エルサレムがバビロニア軍によって破壊され、多くの同胞が捕らえられ、あるものは殺され、あるものはバビロンへ連れ去られていくのをエレミヤは悲痛な思いで目撃しました。そしてそれはエレミヤ自身が長い間神のさばきとして予言してきたことの現実であつたのです。

エルサレムがバビロニア軍の手に落ちて、ほとんどの住民がバビロンへ連れ去られたあとには、わずかな名もない人々

が住むだけとなっていました。バビロンでユダの人々は必ずしも奴隷のような生活をしたわけではありません。早くから異国の土地になれて、商業や金融業に頭角をあらわすものがありました。しかし亡国の民であることには変わりありません。彼らは、「バビロンの川のほとりにすわり、シオン（註・エルサレム）を思い出して涙を流した」のです（詩篇一三七篇一節）。

バビロン捕囚の民にも神は預言者をつかわされました。ダニエル（603―535B.C頃）とエゼキエル（593―570B.C頃）です。ダニエルはユダ王国の貴族の出身ですが、バビロニヤ王ネブカデネザルに捕虜として連れ去られたときは十八才のころと思われます。しかしバビロン王宮でめきめき頭角をあらわし、王の側近として高い地位を占めるものとなりました。のちにバビロニヤがペルシヤによって滅ぼされますと、ダニエルはペルシヤ王にも仕えるようになります。ダニエルの生涯を特徴づけるものは徹底した敬虔さです。彼もエレミヤと同じように「万国の預言者」として召され、世界の諸国の運命と世の終わりに起こることについて預言します。

エゼキエルもダニエルと同じ貴族の青年で祭司でした。彼はダニエルより数年あとにバビロンに連れ去られます。彼は

捕囚のユダヤ人のために励ましを与える預言者となりました。エゼキエルによってユダヤ人は祖国再建の希望を与えられます。

バビロニヤ王国は強大な国でしたが、短命でした。それを滅ぼしたのはペルシヤで、のちに大帝國となります。ペルシヤの英雄クロス王は異民族に寛容な政策をとり、ユダヤ人が父祖の地に帰還することを許しました。

ユダヤ人のエルサレム帰還は、決してやさしい事業ではありませんでした。さまざまな困難に直面して、ややもすると失望しがちな人々を励まし、エルサレム再建という民族的な仕事をするには、やはり預言者の活動が必要でした。ハガイ（520B.C頃）やゼカリヤ（520―518B.C頃）は外敵の妨害を受けながら神殿再建にとり組んでいるユダヤ人に、将来の光栄に満ちた神殿を画いてみせて彼らを励ましました。これらの預言者たちの働きによって、ユダヤ人は新しい力をつけ、神殿を立派に再建することができました。

このほかアスリヤの首都二ネベで預言したヨナとか、旧約聖書に出てくる最後の預言者マラキとかがいます。また預言書は書きませんでしたが、偉大な働きをした預言者のことも聖書は書いています。

新約聖書の時代の預言者

新約聖書の時代にも預言者が活躍しています。まずイエス・キリストの誕生の物語の中には、敬虔な老人シメオンのことや、女預言者アンナのことが出ています(ルカによる福音書二章二五・二八節参照)。シメオンは聖霊に感じて幼児イエスを見だし、神にさんびをささげました。彼は幼な子イエスと母マリヤの運命について不思議な預言をしました。

イエス・キリストの先駆者として現れたバプテスマのヨハネも預言者であり、「預言者以上の者」と呼ばれました。

イエス・キリスト自身も人々から預言者と見られましたが、イエスの自覚においては預言者以上のものでした。彼は自分を神との特別に親密な関係にあるものとして主張しました。神を父とし、自分を子とされました。それは他の誰も入りこむことができない独自の親密な関係で、聖書はそれを「父なる神と子なる神」の関係として述べています。

初期の教会の中にも預言者が活動していました。最も活発な教会の一つであったシリヤのアンテオケ教会にも預言者がいました(使徒行伝二三・一)。また当時名の知られた預言

者にはアガポ、ユダ、シラスなどがいます(使徒行伝一一・二七、二八。一五・三二)。また伝道者ピリピの四人の娘たちも預言をしたことが知られています(使徒行伝二一・九)。キリストの弟子であったヨハネは晩年に地中海の孤島パトモスで、神から特別な啓示を受け、『ヨハネの黙示録』を書きました。

このように新約聖書の時代にも、教会には神のことばを聞き、それを伝える預言者が、教会内で大切な働きをしていたことがわかります(コリント人への第一の手紙一一・二八)。

神はどの時代にもご自身の意志を示すために預言者を呼出し、神を信じる人々に語りかけて来ました。これは実に驚くべきことです。古代から現代に至るまで預言者の系譜をたどるときに、他の宗教には見られない神のわざの現実性を知ることができます。本書の著者であるエレン・の・ホワイト夫人は一八二七年に生まれ一九一五年に永眠しましたが、その八十八年にわたる生涯をくわしく辿ってみるとき、神の明らかな啓示がこの無学の女性に与えられたことを認めないわけには参りません。エレン・ホワイト女史には狂気の少しの痕跡もなく、長い一生の間神への変わらない信頼と敬虔に貫かれた歩みを残しました。

各時代にわたる預言者の記録は、神が神を信じる人々に、ご自分の意志と思想を啓示されたことの記録でもあります。つまり、こうして集められた記録が聖書なのです。

「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しく、義に導くのに有益である」と言われています(テモテへの第二の手紙三章一六節)。また預言については、「聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきある。なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものでなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである」とも言われています(ペテロの第二の手紙一章二〇、二二節)。

キリストが父と呼ばれた神は、神を信じる人々にご自身の現在、つまり現実の存在を示して来られました。それは預言者たちを通して示されましたが、そればかりでなく、イエス・キリストの生涯と教えによって最も完全な形でご自身を啓示されました。こうして啓示されたのは、神の現在だけでなく、人間の救いにとって必要な真理なのです。預言者はそのような神の現在と人間の救いについての真理を伝えるために召された聖なる人々といふことができるでしょう。

預言者はどんな宗教的真理を教えただか

預言者は教師であるよりは荒野に叫ぶ声でした。しかし彼らが語り書いたものによって、わたしたちは彼らが身をもって示した宗教的真理を学ぶことができます。これらの真理は古今まれにみる深さと高さをもっています。いま神についての真理に限ってこれを学んでみましょう。

預言者たちが神の存在について少しの疑いも示していないことは先に述べた通りです。これは旧新約聖書を通して言えることですが神が存在するか、存在しないかという議論は全くなりません。このことは現代人にとって何かもの足りないと感じさせることであるかも知れません。現代人はまず神が存在するかしないかと議論して、もし神があるという結論をみんなが持つなら信じようというのです。しかし神は議論して分かるようなものではありません。神を知るのは全人格的な出会いによるのです。自分にとって真実の友を見出したのが理詰めの議論によってではなく、彼との全人格的な交わりによってであったのと同じことです。イスラエルの預言者たちはすべて神との出会いを経験し、その圧倒的な力強い経験

によつて神に聞き、神を語ることができたのです。

さて預言者たちが信じた神は、その名をヤーウエと言いました。このヤーウエという名は旧約聖書の中に六千八百回以上も用いられていながら、誰もこれを読まなかったという不思議な名です。ヘブル語の聖書ではY H W Hと書かれています、これを聖四文字と言つて古来だれも口にしてはならない神聖な名として、その発音が禁じられていました。日本語の聖書では「主」となっています。

ヤーウエの語源は、「落す」とか「在る」ということばにあると考えられています。旧約聖書の出エジプト記三章に、モーセが神の啓示に接したとき、神の名をたずねたところ、「わたしは、有つて有る者」という名が示されました。この「有る者」というのは、哲学的な意味でとらえるのではなく、「わたしは現実にもたまたまここに在る」という意味であると言われています。旧約聖書にしばしば出てくる、「主は生きておられる」というのも同じことを示しています。

預言者たちはこの神の名が示す通りの神と出会う経験をしているのです。この神との出会いこそ彼らが伝えた第一の宗教的真理と言つことができてゐるでしょう。

次に預言者たちが信じた神は唯一の神でした。

「イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならぬ」(申命記六章四、五節)。

古代世界は神々の世界でした。ギリシヤ、ローマをはじめとして、それより古いエジプトやメソポタミヤには数えきれない神々と神々の像がありました。たとえば有名なミクのヴィーナスもその一つです。このような神々はすべて人間と自然の事物が神格化されたものでした。なぜ人間は神々をつつたのか。一つには人間がもつ強い願望です。人間は自分の強烈な願望を表現したいのです。そこで心にあるものの形像として神々をつくるのです。

もう一つは生存のための道具です。人間は自然と戦い、他民族と戦つて生きていくために必要な力を求めています。予想できない災害や敵に対して、有効な助けを与えてくれる運を期待します。運は神々がもたらすものとされました。また常人以上の能力も神々が与えるものとされました。

今日では、願望の表現としての神々は依然として有勢ですが、道具としての神々は大方姿を消しています。人間が生存のための有力な道具を発見していくにつれて、神々は姿を消

していきました。

唯一神教は多神教と全く異なっています。ここでは神は人間の生存のための道具ではありません。かえって神の意志を行う道具が人間です。また神は人間の願望の表現ではありません。かえって人間のあらゆる願望をはるかに超越した存在です。多神教は神々と人間と自然の融合の上に成り立っています。多神教は神々、人間と自然の融合であり、人間と自然は被造物であり、その間にこえることのできない質的な断絶があることを教えます。多神教の世界は人間と自然の写しですが、唯一神教ではこの世界をこえた超越する世界の存在を示します。多神教は結局人間が自分をあがめ、自分を拝んでいることになるのです。これに反し、唯一神教では人間は自分をこえた絶対者をあがめ拝んでいるのです。

人間とこの世界の根本に横たわっている問題のことを考えますと、多神教ではその解決はできません。「エチオピア人がその黒い肌を白くすることができようか」「それと同じように罪人が義人になることができようか」と聖書は問うています。人間とこの世界がもつ問題は政治的、経済的に解決できるものではありません。また教育によっても解決できません。それは人間自身の変革なしに解決不可能な問題です。そ

れを解決できるのは唯一の神以外にないのです。預言者の力の源泉はこの唯一の神への信念にあるのです。

預言者たちが信じた神、唯一の神はどんな性質をもったお方なのかということをしらべてみましょう。まずヤエーは「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神」と述べられています(出エジプト記三四章六節)。神が恵み深いお方だということを、預言者たちは身をもって体験しました。神の恵みは「真実な愛情」を意味すると言われています。父が子に対するように、夫が妻に向かうように、神は人間に「真実な愛情」をもって交わりをもたれるのです。

神はまた義の神です。神は恵み深く、愛の神ですが、同時に義の神でもあるのです。義の神といふとき預言者たちが語ることに二つの大切な意味がありました。一つは神は正しい神であるということ、もう一つは神は救いの神だということです。この二つは深いところでつながっていました。まず神は正しい神であって、そこに不正の何のかげも見出すことはできません。また神はその正しい性質から、すべての被造物が正しく生きることを求めています。この神の正しさの要

求が律法なのです。そしてこの律法こそ人間の道德の土台なのです。宗教と道德はしっかり結び合っていないければなりません。宗教的な確信のない道德は裏表のあるつわべだけのものになってしまいます。また道德のない宗教は迷信に陥るか、世俗と妥協するかします。預言者の偉大さは神の正しさを体現したことにあります。

神は正しい神ですから不正を行った罪人をさばきます。そのさばきはどんな立派な人間でも耐えることができないきびしいさばきです。心の思いまでもさばかれるからです。

それと同時に、神は正しい神ですから不正を行った罪人をゆるします。罪人をゆるすことができるのは、正しい神をおいて他にないのです。このことは新約聖書の時がきて、イエス・キリストが罪人の罪を負って十字架の死をとげられたときに、より明らかに理解されるようになりました。詩篇には罪をゆるされたものの幸いについて喜びの歌が書かれています。神はさばきまたゆるす神です。

神はまた聖なる神です。聖ということとは、今日の世界ではほとんど失われてしまいました。世俗の世界では聖なる場所も、聖なる時もなくなってしまいました。このことは人間の

世界が宗教の呪縛を破って、誰にでも開かれた平明な世界になったことを示しているようですが、一方、現代における精神性の萎縮も示しているようです。事実、ヤーウエとの人格的な出会いなしに、真実に聖ということは考えることができません。ヤーウエは人と出会うとき人の心を震撼させます。人は神の前におのき自己の汚れを意識します。聖なる神とはヤーウエの全存在性です。それは人の心を畏怖させてやまない限りなく大きいものの現臨です。そこでは人間はことばを失います。感情も凍ります。ただ自分の有限な被造物の意識をもってひれ伏すだけです。

預言者の神経験は宗教経験の極致を示しています。それは靈的アルプスの高山にたとえられています。幾世紀にわたって、人類はこの高峰から清冽ないのちの水を汲んできました。預言者たちは、各時代の人類に向かって呼びかけています。「あなたがたの神はこう言われた」と。

ゼバニヤ書		マタイによる福音書		17: 4, 1, 25, 26 …上 43		テモテへの 第一の手紙	
1: 14-16 ……下 11		2: 6 ……下 299		使徒行伝		3: 16 ……下 202	
: 17, 18 ……下 11		3: 2 ……下 316		8: 4 ……下 301		6: 10 …… 251	
2: 1-3 ……下 11		4: 10 ……下 226		9: 40 ……上 23		テモテへの 第二の手紙	
: 14 ……上 333		: 19 ……上 39		10: 38 ……下 318		2: 15 ……上 186	
: 15 ……上 332		5: 13 ……上 199		16: 30 ……下 55		4: 2 ……上 111	
3: 14-17 ……下 13		: 14, 16 ……下 319		17: 24-27 ……下 108		ヘブル人への手紙	
: 19, 20 ……下 12		: 17-19 ……上 152		: 24-28 ……上 24		2: 14 ……下 303	
ハガイ書		: 45 ……上 198		18: 9, 10 ……上 244		4: 13 ……上 219	
1: 2 ……下 180		6: 9 ……上 43		ローマ人への手紙		8: 2 ……下 283	
: 4-6 ……下 180		: 13新改訳 ……上 43		8: 31 ……下 246		9: 9, 23 ……下 283	
: 7, 8 ……下 181		: 24 ……上 34		10: 20 ……上 335		10: 35-37 ……下 334	
: 9-11 ……下 181		7: 12 ……下 253		21: 1 ……下 100		11: 6 ……上 125	
: 12 ……下 181		8: 20 ……上 47		コリント人への 第一の手紙		: 31 ……上 337	
: 13, 14 ……下 181		9: 1 ……上 47		3: 12 ……上 13		: 33, 34 ……上 125	
2: 4 ……下 181, 183		10: 40, 42 ……上 100		10: 11 ……上 146		: 36-38 ……下 2	
: 7 文語訳 ……下 298		: 41 ……上 100		15: 51, 52 ……上 195		12: 15 ……上 60	
: 9, 7 ……下 201		12: 41 ……上 238, 241		コリント人への 第二の手紙		13: 2 ……上 100	
: 19 ……下 183		15: 8 ……上 25		4: 4 ……下 280		ヤコブの手紙	
: 23 ……下 183		: 31 ……上 43		: 6 ……下 318		1: 5 ……上 8	
ゼカリヤ書		16: 18 ……下 200		6: 17, 18 ……上 34		: 10 ……下 157	
1: 12-16 ……下 186		17: 20 ……下 200		12: 9, 10 ……上 135, 下 6		5: 1-6 ……下 251	
: 13 ……下 189		19: 16, 21 ……上 189		ガラテヤ人への 手紙		: 7, 8 ……下 334	
: 17 ……下 186		: 22 ……上 189		4: 4, 5 ……下 301		: 17 ……上 125	
: 18-21参 ……下 186		21: 33 ……下 312		6: 10 ……下 253		ペテロの 第一の手紙	
2: 1-5 ……下 187		: 34-39 ……下 312		エペソ人への手紙		1: 10-12 ……下 333	
: 6-9 ……下 204		: 40, 41 ……下 313		1: 6 ……上 278		: 23 ……下 80	
3: 1, 3 ……下 189		: 42-44 ……下 313		: 14 ……下 280		ヨハネの 第一の手紙	
: 2 ……下 190		: 44 ……上 245		2: 7 ……上 278		1: 1-3 ……上 191	
: 4 ……下 192, 196		22: 36-40 ……上 292		: 20, 21 ……上 13		3: 2 ……下 303	
: 4, 5 ……下 190		24: 6, 7 ……下 144		3: 14 ……上 23		5: 14, 15 ……上 125	
: 7 ……下 190, 193		: 44 ……上 245		5: 11 ……上 219		ヨハネの黙示録	
: 8 ……下 190, 197		25: 23 ……上 112		: 27 ……下 100		1: 3 ……下 157	
4: 1-6 ……下 198		マルコによる福音書		6: 12 ……下 100		: 18 ……上 207	
: 6 ……下 200		1: 15 ……下 300		: 12参 ……上 82		2: 10 ……上 59	
: 7 ……下 199		8: 36, 37 ……上 241		ヒリヒ人への手紙		4: 11 ……上 44	
: 9, 7 ……下 200		9: 23 ……上 125		2: 7 ……下 302		7: 9-12 ……下 321	
: 9 ……下 201		14: 7 ……下 253		: 13 ……下 98		12: 10 ……下 191	
: 11-14 ……下 199		ルカによる福音書		: 15 ……上 157		: 17 ……下 208	
6: 12, 13 ……下 295		3: 7 ……上 110		コロサイ人への 手紙		13: 16 ……上 157	
7: 9, 10 ……下 306		4: 18, 19 ……下 318		2: 9 ……下 202		14: 4, 5 ……下 197	
8: 3, 7, 8 ……下 306		: 27 ……上 219		テサロニケ人への 第一の手紙		: 5参 ……上 219	
: 12, 13 ……下 306		6: 38 ……上 202		4: 16, 17 ……上 208		: 6, 7, 12 ……上 266	
: 16 ……下 306		9: 13 ……上 211		テサロニケ人への 第二の手紙		: 7 ……下 316	
9: 12 ……上 346		: 35 ……上 195		2: 10 ……下 318		: 7-10 ……上 155	
10: 11 ……上 334		10: 27 ……上 57		テサロニケ人への 第二の手紙		: 8 ……下 316	
13: 1 ……下 295		19: 14 ……上 109		2: 10 ……下 318		17: 14 ……下 321	
: 7 ……下 290		21: 16 ……下 193		テサロニケ人への 第二の手紙		18: 2, 4, 5 ……上 156	
マラキ書		22: 31, 32 ……上 144		2: 10 ……下 318		: 4 ……下 316	
1: 1, 9 ……下 307		: 41 ……上 23		テサロニケ人への 第二の手紙		19: 6, 7 ……下 321	
: 11 ……下 307		24: 32 ……下 227		2: 10 ……下 318		21: 27 ……上 58	
2: 5, 9 ……下 307		ヨハネによる福音書		テサロニケ人への 第二の手紙			
: 17 ……下 316		1: 9 ……上 345		2: 10 ……下 318			
3: 1-4 ……下 316		: 11 ……下 311		2: 10 ……下 318			
: 7 ……下 308		: 23 ……下 287		2: 10 ……下 318			
: 7, 8 ……下 308		4: 23 ……上 26		2: 10 ……下 318			
: 8下句-12 ……下 309		6: 37 ……上 283		2: 10 ……下 318			
4: 2 ……下 285, 317		8: 56 ……下 281		2: 10 ……下 318			
		11: 25 ……下 227		2: 10 ……下 318			

: 9下 137
: 14参下 137
: 31, 32下 137
: 41下 130, 138
: 58下 139
: 59下 64

哀 歌

1 : 1-5下 78
2 : 1-4, 13下 79
3 : 14下 41
: 18, 22-26 ..下 42
: 22上 290, 304
: 22, 40下 78
5 : 1-17下 79
: 19-21下 79

エゼキエル書

1 : 4, 26下 143
4 : 6参下 299
8 : 10下 65
: 11, 12下 66
: 13-16下 66
: 17, 18下 66
10 : 8下 143
12 : 22下 301
: 22-28下 67
17 : 15-18下 68
: 22, 23下 204
18 : 23上 95
: 31, 32上 95
20 : 12, 16, 19, 20 上 151
: 37文語訳参..下 109
21 : 3, 5-7, 31 ..下 69
: 25-27下 68
22 : 8, 31上 151
26 : 7下 122
28 : 7下 123, 130
29 : 3, 6下 71
30 : 25, 26下 71
31 : 3-9上 330
: 10-16上 333
: 18上 334
33 : 11上 76, 95, 290

ダニエル書

1 : 3-6下 92
: 7下 93
: 8下 94
: 9下 95, 156
: 10下 95
: 15下 95
: 19, 20下 97
2 : 1下 102
: 2, 3下 102
: 4下 102
: 5, 6下 103
: 7下 103
: 8, 9下 103
: 10, 11下 104
: 12下 104
: 14, 15下 104

: 17下 104
: 21下 111
: 20-23下 105
: 24, 25下 105
: 26-35下 106
: 37-45下 107
: 38下 113
: 44, 45下 112
: 46, 47下 108
: 47下 112
: 48, 49下 108
3 : 7下 114
: 9-12下 115
: 14下 115
: 15下 116
: 16, 17下 116
: 18下 116
: 19下 116
: 21, 22下 117
: 24, 25下 117
: 26下 118
: 27下 118
: 28下 118
: 29下 118
4 : 9, 18下 125
: 12下 123
: 13-17下 124
: 19上句下 125
: 19下句下 125
: 20-26下 126
: 27下 110, 126
: 30下 127
: 31下 139
: 31, 32下 127
: 33下 127
: 34-36下 128
: 37下 129
5 : 1下 131
: 2下 131
: 3, 4下 131
: 6下 132
: 7, 8下 134
: 10-16下 135
: 17下 135
: 22-24下 136
: 26-28下 136
: 29下 137
: 30下 137
6 : 4下 148, 156
: 5下 149
: 10上 23
: 12下 151
: 12下句下 152
: 13下 152
: 14下 152
: 15下 152
: 16-18下 152
: 20下 153
: 21, 22下 153
: 23, 24下 153
: 25-27下 154
: 26下 154

: 28下 154
7 : 28下 162
8 : 13下 162
: 14下 162
: 26, 27下 163
9 : 1, 2下 165
: 2下 163
: 3, 4下 163
: 4-9, 16-19 下 164
: 24下 299
: 25下 165, 299
: 27下 300
10 : 13下 178
11 : 1下 165
12 : 4下 156
: 9, 13下 156
: 10下 157
: 13下 156

ホセア書

1 : 10上 259
2 : 14-17上 265
: 18-23上 265
3 : 4, 5上 264
4 : 1, 2上 264
: 1, 6-9上 249
: 6上 263
: 16上 249
: 17上 253
5 : 7上 247
: 11上 248
: 13上 248
6 : 1-3上 251
: 3下 285
: 4上 253
: 5-7上 249
7 : 1, 10上 252
: 9上 248
: 11上 248
8 : 3上 248
: 4上 247
: 5, 6上 253
: 12上 263
9 : 7上 253
: 9上 250
: 17上 248
10 : 5, 6上 253
: 12上 250
: 13-15上 248
11 : 1上 277
: 3上 263
: 7上 249
12 : 1上 248
: 6上 250
13 : 9, 10英語訳..上 250
: 14新改訳....上 207
14 : 1, 2上 250
: 4上 59
: 4-9上 252

ヨエル書

1 : 15-18, 12

.....下 146, 327
2 : 15-17, 12-14
.....下 229

アモス書

3 : 15上 254
4 : 12上 254
5 : 4, 5, 14, 15 ..上 252
: 10, 12上 250
7 : 10上 252
: 11上 254
: 12, 13上 254
: 17上 254
9 : 5上 254
: 8-10上 253
: 13-15上 267

ヨ ナ 書

1 : 1, 2上 233
: 3上 233
: 4, 5上 234
: 6上 234
: 7-2 : 9上 237
3 : 1-3上 237
: 3上 232
: 4上 237
: 5-9上 238
: 10上 238
4 : 1, 2上 240
: 3-6上 240
: 7-11上 241

ミ カ 書

2 : 10上 283
3 : 11, 10上 287
4 : 8下 280
: 10-12下 147
5 : 2下 299
6 : 1-5上 290
: 6-8上 291
7 : 2, 4上 289
: 7-9上 298
: 8, 9上 346

ナホム書

1 : 3-6上 332
: 7, 8上 334
2 : 10, 11上 332
3 : 1-5上 331
: 1, 19上 232

ハバクク書

1 : 2-4下 5
: 7下 5
: 12下 5
: 13上 288
2 : 1-4下 6
: 3, 4下 7
: 20上 26, 下 7
3 : 2-6, 13, 17-19
.....下 9

： 6 ……上316,下 187	： 2 ……下 120	： 18-21 ……下 332	： 8-11 ……下 50
13 : 11,19-22 …下 139	： 21 ……下 109	61 : 1,2 ……下 287	： 12 ……下 161
14 : 23 ……下 139	： 25,26 ……下 323	： 3 ……下 324	25 参 ……下 50
： 28,24-27 …上 315	44 : 4,5 ……上 339	： 4 ……下 277	： 29 ……下 67
17 : 7,8 ……上 284	： 20 参 ……上 345	： 11 ……下 335	26 : 4-6 ……下 37
24 : 1-6 ……下 145	： 21,22 ……上 285	62 : 4,5 ……下 335	： 9 ……下 38
： 1-8 ……下 327	： 22 ……上 283	： 12 ……下 324	： 11 ……下 38
： 14 ……下 332	： 24 ……上 280	63 : 9 ……上 277	： 12-15 ……下 40
25 : 1 ……下 304	： 28 ……下 161	： 10 ……下 182	： 18,19 ……下 40
： 4 ……下 326	45 : 1-3 ……下 160	64 : 4,5 ……上 220	27 : 2,3 ……下 60
： 7 ……上 339	： 5 ……下 110	65 : 17 ……下 334	： 7 ……下 61
： 8 ……下 324,329	： 5,6,4,13 ……下 166	： 18,19 ……下 330	： 8-11 ……下 61
： 9 ……下 329	： 7,12 ……上 280	： 21,22 ……下 333	28 : 2-4 ……下 62
26 : 19 文語訳参 …下 329	： 13 ……下 161	66 : 10 ……下 331	： 9 ……下 62
： 20,21 ……下 327	： 17 ……下 334	： 12 ……上 342	： 11 ……下 62
： 21 ……上 245	： 22 ……上 344	： 19 ……上 342	： 13-17 ……下 64
27 : 5 ……上291,下 193	： 24 ……上 143	： 23 ……下 335	29 : 5-7 ……下 59
： 6 ……下 305	46 : 13 ……下 297		： 8 ……下 59
28 : 5 ……下 335	47 : 1-15 ……下 142		： 10-13 ……下 162
： 10 ……上 289	48 : 9,11 ……上 281		： 14 ……下 161
29 : 18,19,24 ……下 298	49 : 6 ……下 286		30 : 7 ……下 146,328
30 : 15 ……下 200	： 6,8,9,12 ……上 342		： 10,11,17 ……下 88
： 20 ……下 323	： 7-10 ……下 287		： 11 ……下 89
： 28 ……上 334	： 24,25 ……上 346		： 18 ……下 147
： 29-32 ……上 334	50 : 10 ……上 220		31 : 1,7-9 ……下 89
31 : 6 ……上 298	51 : 3 ……下332, 335		： 10-14 ……下 89
33 : 6 ……上 57	52 : 1,2 ……下 324		： 12 ……下 30
： 14-16 ……下 326	： 5 参 ……上 317		： 15-17 ……上 207
： 17 ……上 284	： 6 ……上 339		： 23-25 ……下 90
： 21,22 ……上 284	： 7 ……上 343		： 31-34 ……下 90
： 24 ……下 330	： 10 ……上 339		32 : 14,15 ……下 84
35 : 2 ……上278,下 335	： 14 ……下 284		： 17-23 ……下 85
： 3,4 ……下 329	53 : 1-9 ……下 290		： 24,25 ……下 85
： 5,6 ……下 329	： 2 ……下 311		： 26,27 ……下 86
： 6,7 ……下 331	： 3,4 ……下 284		： 37-44 ……下 86
： 8 ……下 331	： 7 ……下 284		33 : 1-14 ……下 88
： 10 ……下 332	： 10-12 ……下 291		35 : 6,7,12-14 ……下 44
36 : 13-20 ……上 318	54 : 2,3 ……上 342		： 14-17 ……下 45
： 21,22 ……上 318	： 11-17 ……下 326		： 18,19 ……下 46
37 : 3,4 ……上 319	55 : 1-3 ……下 296		36 : 2,3 ……下 52
： 38 ……上 327	： 3 ……上 283		： 3 ……下 54
38 : 1 ……上 303	： 4,5 ……下 296		： 4 ……下 52
： 10-20 ……上 308	： 6,7 ……上 283		： 9,7 ……下 52
39 : 2 ……上 309	： 7 ……上 59		： 23 ……下 54
： 3-8 ……上 311	： 13 ……下 331		： 24-26 ……下 54
40 : 1 ……下 322	56 : 3 ……上 339		： 28,32 ……下 56
： 2 ……下 331	： 6,7 ……上 21		： 30,31 ……下 55
： 5 ……下286, 335	： 6-8 ……上 340		37 : 9,10 ……下 70
： 9 ……上 280	57 : 15 ……上 279		： 15 ……下 70
： 9-11 ……下 298	： 18,19 ……上 280		： 17-20 ……下 71
： 15-17 ……上 153	58 : 7,8 ……下 319		： 21 ……下 71
： 25,26 ……上 280	： 10,11 ……上 100,292		38 : 2,3 ……下 72
： 27-31 ……上 280	： 12 ……下 277		： 6 ……下 72
41 : 10,13,14 ……上 281	： 12 参 ……下 278		： 15,16 ……下 73
42 : 1 ……下 292	： 13,14 ……下 277		： 17-20 ……下 73
： 2,3 ……下 292	59 : 1,2 ……上 288		39 : 11,12 ……下 77
： 4,21 ……下 293	： 16 ……下 292		43 : 5-7 ……下 77
： 5 ……上 280	60 : 1 ……下 318,320		44 : 28 ……下 77
： 6-9 ……下 295	： 1-4,10,11 ……上 344		50 : 23,46 ……下 138
： 16 ……上 347	： 2 ……下 318		： 24,25,33,34 ……下 138
： 17 ……上 346	： 15 ……下 322		51 : 6 ……下 316
43 : 1-4 ……下 323	： 16 ……下 323		： 8,56,57 ……下 138

エレミヤ書

1 : 5,6 ……下 29	29
： 7,8,17-19 ……下 30	30
： 9,10 ……下 31	31
： 14,16 ……下 31	31
3 : 12-14,19,22 ……下 32	32
： 22-25 ……下 32	32
4 : 3,14 ……下 33	33
： 19,20 ……下146, 327	327
： 23-26 ……下 328	328
5 : 3 参 ……下 36	36
6 : 16 ……下 33	33
： 27 ……下 41	41
： 30 ……下 31	31
7 : 2-7 ……下 34	34
： 23,24 ……下 36	36
： 28 ……下 36	36
8 : 5 ……下 36	36
： 7 ……下 36	36
9 : 24 ……下 35	35
： 1,2 ……下 41	41
： 9 ……下 36	36
： 23,24 ……上 44	44
10 : 6,7,10 ……上 70	70
： 11 ……上 70	70
： 12-16 ……上 71	71
： 23,24 ……下 42	42
11 : 2 ……下 82	82
： 6 ……下 35	35
14 : 19,21 ……下 78	78
15 : 1,2 ……下 36	36
： 20,21 ……下 41	41
17 : 24,25 ……下 33	33
19 参 ……下 51	51
20 : 9 ……下 51	51
： 7,10 ……下 41	41
： 11,13 ……下 42	42
22 : 13-19 ……下 49	49
： 14 ……下 49	49
23 : 3-6 ……下 47	47
： 7,8 ……下 47	47
： 11 ……下 66	66
25 : 2,3 ……下 50	50
： 5 ……上 281	281

6	: 3-5	下	166
	: 7-10	下	185
	: 12	下	185
	: 14参	下	299
	: 14, 15	下	201
	: 16, 19	下	201
7	: 1, 9 参	下	299
	: 6	下	212
	: 9, 13	下	214
	: 10	下	211, 224
	: 11, 12, 15, 20	下	213
	: 14, 23	下	213
	: 24	下	213
	: 24-26	下	214
	: 27, 28	下	214
	: 28	下	217
8	: 15	下	214
	: 16	下	217
	: 21, 23	下	218
	: 22	下	217
	: 24, 25	下	218
	: 28, 29	下	219
	: 31	下	219
	: 34	下	221
	: 35, 36	下	221
9	: 1, 2	下	221
	: 3, 4	下	222
	: 5 参	上	23
	: 6	下	222
	: 7-15	下	223
10	: 1	下	223
	: 2-5	下	223
	: 3	下	224

ネヘミヤ記

1	: 4	下	231
	: 11	下	231
2	: 2	下	232
	: 2下句, 3	下	232
	: 4	下	234
	: 8	下	234
	: 16	下	238
	: 18	下	239
	: 19, 20	下	240
	: 20	下	241
3	: 5	下	240
	: 30	下	241
4	: 2, 3	下	243
	: 6	下	243
	: 8	下	243
	: 9	下	244, 260
	: 10	下	244
	: 12	下	244
	: 13-18	下	244
	: 20	下	246
	: 21	下	245
5	: 5	下	249
	: 6	下	249
	: 9	下	250
	: 12, 13	下	251
6	: 3	下	255
	: 6, 7	下	255

	: 8	下	255
	: 10	下	257
	: 11	下	258
	: 12, 13	下	257
	: 16	下	258
	: 17, 18	下	258
8	: 3	下	263
	: 6	下	262
	: 8	下	263
	: 9, 10	下	263
	: 15-18	下	265
9	: 5	下	265
	: 5, 6	下	266
	: 38	下	266
10	: 29	下	266
	: 34, 35	下	267
13	: 8, 9	下	270
	: 11-13	下	270
	: 15, 16	下	271
	: 17, 18	下	271
	: 18	上	151
	: 19	下	271
	: 20	下	271
	: 21	下	273
	: 23, 24	下	273
	: 27, 25	下	273
	: 29	下	274

エステル記

3	: 6	下	205
	: 8	下	205
4	: 3	下	205
	: 14	下	206
	: 16	下	206
8	: 14, 17	下	208
9	: 2, 16	下	208
10	: 3	下	208

ヨブ記

3	: 3	上	131
6	: 2, 8-10	上	131
7	: 11, 15, 16	上	131
11	: 15-20	上	132
13	: 15, 16 新改訳	上	133
19	: 25	上	231
	: 25-27新改訳	上	133
28	: 10	上	233
38	: 1	上	133
	: 7	下	334

詩篇

3	: 8	上	237
9	: 20	下	48
15	: 5	上	57
17	: 15	上	231
19	: 7	下	225
	: 8	上	57
22	: 16-18	下	290
	: 27	上	338
33	: 12-14	上	25
	: 13	上	233
34	: 3	上	44

37	: 29	下	280
46	:	上	170
	: 1	上	303
48	: 10-14	上	171
49	: 15	上	231
51	: 7	上	283
65	: 5, 8-13	上	102
68	: 31	上	338
69	: 20, 21	下	290
	: 30	上	44
71	: 5, 6, 9, 12, 18	上	304
72	:	上	2
	: 4	下	284
	: 18, 19	上	278
76	:	上	329
	: 10	下	153
77	: 13, 14	上	25
78	: 7	上	346
80	:	上	323
82	: 1, 3, 4	上	164
83	:	上	167
86	: 12	上	44
	: 15	上	276
87	: 7	下	332
88	: 2, 3	上	304
91	: 9, 10	下	147
95	: 3-6	上	23
96	: 3	上	278
99	: 1-5	上	16
102	: 15, 18-22	上	338
103	: 19	上	25
104	: 5-9	上	103
	: 10-15	上	104
	: 24-28	上	104
105	: 2, 3	下	173
	: 44, 45	上	87
107	: 1, 2	下	173
	: 9	下	173
	: 10, 13, 14, 20	上	241
111	: 9	上	23
	: 10	上	10
112	: 4	上	346
116	: 15	上	230
126	: 1-3	下	167
144	: 12	上	13
146	: 3	下	200
	: 5	上	346

箴言

3	: 13-18	上	10
4	: 7	上	10
8	: 13	上	11
	: 31	上	179
10	: 22	上	35
14	: 32文語訳	上	230
	: 34	下	111
15	: 7	上	11
16	: 12	下	111
19	: 5	上	218
20	: 28	下	111
21	: 27	上	288
28	: 4	下	260

伝道の書

2	: 4-18	上	51
5	: 8	上	42, 52
8	: 11-13	上	53
9	: 3	上	53
	: 18	上	59
10	: 5, 6, 1	上	59
	: 16	上	288
11	: 7-10	上	56
12	: 1-7	上	56
	: 9-12	上	54
	: 13, 14	上	54

雅歌

4	: 15	上	202
6	: 10	下	326

イザヤ書

1	: 5, 18, 16, 17	上	279
	: 6 参	上	279
	: 9	上	289
	: 10-12	上	288
2	: 8, 9参	上	271
	: 11	上	154
	: 11, 12参	上	270
	: 17-21	下	328
3	: 1-4, 8	上	289
	: 12	上	289
	: 14, 15	上	270
	: 16, 18-23参	上	271
4	: 2-4	下	197
5	: 7	下	312
	: 8参	上	270
	: 22, 11, 12参	上	271
6	: 3	上	271, 275, 339
	: 5	上	272
	: 7	上	279
	: 7, 8	上	272
	: 9, 10	上	273
	: 11	上	273
	: 11, 12	上	274
	: 13	上	274
7	: 2	上	294
	: 4-7, 9	上	294
	: 14, 15	下	295
8	: 10, 13, 14	上	295
	: 22	上	340, 下 279
9	: 1, 2	上	340
	: 2	下	285
	: 6, 7	下	286
10	: 1, 2参	上	270
	: 5 新改訳	上	258
	: 5 参	上	314
	: 10, 11	上	316
	: 20	上	266
	: 24-27	上	315
11	: 1	下	295
	: 2-5, 10	下	295
	: 9	上	339
	: 10-12	上	345
12	:	上	286

: 22.....上 199	: 19, 20上 317	: 11.....上 13	: 4上 182
: 23.....上 203	19 : 1上 318	: 12-16.....上 21	: 10, 12上 183
: 24.....上 204	: 6, 7上 319	: 13, 14上 96	23 : 8上 183
3 : 2, 3上 180	: 10-13.....上 319	: 14.....上 300	: 12.....上 183
4 : 8-10上 205	: 14.....上 320	: 17, 18上 21	: 16, 21上 184
: 19-21.....上 206	: 15-19.....上 320	: 22, 20上 21	26 : 15.....上 268
: 25, 26, 29.....上 206	: 20-28.....上 326	8 : 4上 47	: 16.....上 268
: 30, 31上 206	: 29-34.....上 327	: 18.....上 47	: 16, 18上 269
: 33-35.....上 207	: 35.....上 327	9 : 1, 2上 41	28 : 2, 3上 289
: 36, 37上 207	20 : 2, 3上 303	: 3-6.....上 41	: 10.....下 250
: 38-41.....上 208	: 4-6.....上 305	: 23.....上 22, 42	: 15.....下 250
: 42-44.....上 209	: 8, 9上 305	: 28.....上 31	: 19, 22, 23.....上 295
: 44.....上 211	: 11.....上 305	10 : 1上 61	29 : 6, 10.....上 297
5 : 1上 212	21 : 11, 14下 2	: 3, 4上 63	: 8上 292
: 3上 212	: 16.....下 1	: 5上 63	: 11, 5.....上 297
: 5上 213	: 21, 22下 3	: 6, 7上 63	: 24, 29, 36.....上 298
: 6, 7上 214	22 : 2下 3	11 : 5, 11, 12上 66	30 : 5-9.....上 257
: 8上 214	: 13.....下 23	: 16, 17上 67	: 10, 11上 300
: 9, 10.....上 214	: 15-17.....下 24	12 : 1上 67	: 10-13.....上 257
: 11, 12上 214	: 19, 20下 24	: 2-5.....上 68	: 12.....上 300
: 13, 14上 215	23 : 2下 24	: 6-12上 69	: 20, 21上 301
: 15.....上 215	: 3下 25	: 14, 16上 69	: 26.....上 301
: 16.....上 215	: 15-18.....下 26	13 : 20.....上 79	: 27.....上 301
: 17, 18上 217	: 20, 24下 25	14 : 2-5.....上 81	31 : 1上 302
: 19.....上 217	: 22.....下 28	: 6-8.....上 81	: 20, 21上 302
: 20, 21上句 ..上 217	: 25, 26下 28	: 9上 81	32 : 3, 5, 6上 315
: 21下句-23..上 218	24 : 2下 57	: 11.....上 82	: 7, 8上 314
: 25.....上 218	: 15, 16, 13.....下 57	: 12, 13上 82	: 8上 316
: 26, 27上 218	25 : 1下 69	15 : 1, 2, 7上 83	: 8下句上 316
6 : 1, 2上 227		: 8-12, 15上 83	: 17.....上 319
: 5-7.....上 227	歴代志上	16 : 7-9.....上 84	: 20.....上 319
: 8-12上 223	5 : 26.....上 256	: 9上 345	: 21.....上 327
: 13-15.....上 223	21参.....上 14	: 10.....上 84	: 25上句.....上 311
: 15下句.....上 223	29 : 1上 13	: 12.....上 84	: 25下句.....上 311
: 16, 17上 223	: 5上 37	: 35.....上 169	: 26.....上 311
: 18-23.....上 224	歴代志下	17 : 3-5.....上 158	: 31.....上 309
7 : 5下句, 8, 9 ..上 225	1 : 1上 9	: 5, 6上 159	33 : 9下 1
: 6, 7上 225	: 2上 4	: 9上 159	: 11-13.....下 3
: 16.....上 225	: 7-12上 5	: 10.....上 161	: 23, 25下 3
8 : 24.....上 181	: 15.....上 30	: 12-19.....上 161	34 : 3-5.....下 22
: 27.....上 181	: 16.....上 31	18 : 1上 161	: 6, 7下 22
9 : 6-8.....上 182	: 17.....上 38	: 3上 162	35 : 24, 25下 28
10 : 11, 19, 28.....上 182	: 13, 14上 12	: 4, 5上 162	36 : 12, 13下 65
11 : 12.....上 183	: 14.....上 38	: 6上 162	: 14.....下 67
: 14.....上 183	4 : 17.....上 13	19 : 2, 3上 163	: 19.....下 76
: 18.....上 183	: 19.....上 12	: 4上 163	: 20, 21下 76
13 : 14.....上 227	: 21.....上 13	: 5-7.....上 163	
: 15-17.....上 228	5 : 5上 14	: 8上 163	エズラ記
: 18, 19上 228	: 7上 14	: 9-11上 164	1 : 1-4.....下 166
15 : 18, 24, 28.....上 256	: 12参.....上 15	20 : 1, 2上 164	: 5下 204
: 19, 20上 256	: 13, 14上 15	: 3, 4上 165	: 5-11下 168
: 29.....上 256	6 : 1, 2上 15	: 6-12上 165	2 : 64-70参.....下 168
: 34, 35上 269	: 4-6.....上 16	: 13.....上 166	3 : 1-6参.....下 168
16 : 3上 289	: 7上 40	: 14-21.....上 168	: 11.....下 169
: 5上 292	: 13, 3.....上 16	: 17.....上 170	: 12上句.....下 169
: 7上 294	: 14-42.....上 18	: 22-24.....上 169	: 12下句, 13 ..下 171
17 : 7-11, 14, 15, 16, 20	: 33.....上 42	: 27, 28上 170	4 : 1-3.....下 175
23.....上 258	7 : 1参上 299	: 29, 30上 171	: 4, 5下 178
: 23下句.....上 258	: 1-3.....上 20	21 : 6, 11.....上 180	: 4, 23.....下 199
18 : 5-7.....上 302	: 5上 20	: 12-15.....上 181	: 7参下 179
: 6, 7下 277	: 8, 10.....上 20	: 16-19.....上 181	5 : 2下 183
: 12.....上 258		22 : 3, 4上 181	: 5下 184

聖句索引

注・この索引中にある略号は次の通り。参=参照 上=上巻 下=下巻

創世記		29—31参…下 231	60…上 41	19…上 86, 113
		30, 31…上 299	61…上 32	21…上 115, 156
1 : 2, 3…下 318	5 : 12…上 149	9 : 16…上 29		22—24…上 116
2 : 1—3…上 148	6 : 1…上 262	26—28…上 47		25…上 116
3 : 15…下 279, 283, 303	7 : 2—4…下 175	10 : 1—3…上 41		27—29…上 117
6 : 7…上 264	8 : 19…上 263	4—8…上 41		30…上 120
12 : 2…下 305	10 : 12, 13…上 291	9…上 42		33—35…上 120
2, 3…上 336	11 : 10—17…上 105	11…上 47		36, 37…上 121
3…下 281	18, 19…上 106	26…上 31		41…上 123
13 : 10, 12…上 197	14 : 2…下 175	11 : 4, 5…上 32		43, 44…上 124
18 : 18…上 336	15 : 7, 8, 11…下 248	6—8参…下 26		44下句…上 124
22 : 9, 16—18参…上 14	17 : 17…上 28	7…上 32		45…上 126
18…上 336	18—20…上 28	9, 10…上 50	19 : 2…上 127	
28 : 16, 17…上 24	18 : 15, 18…下 282	11, 12…上 52	3, 4…上 127	
49 : 8—10…下 281	23 : 3—6参…下 269	14—28…上 52	4下句…上 129	
出エジプト記		19…下 248	5, 6…上 135	
3 : 5…上 24	28 : 12…上 103	28, 31…上 61	7…上 135	
7 : 5…上 337	15, 23, 24…上 106	33…上 62	9…上 136	
9 : 16…上 336	64—67…下 176	34, 35…上 62	10…上 137	
12 : 31, 32…上 337	30 : 19…下 15	43…上 61	11—13…上 137	
19 : 5, 8…上 260	31 : 6…下 15	12 : 9…上 63	14…上 138	
6…下 46	12, 13…下 81	12—14…上 63	14, 18…上 157	
20 : 3…下 225	32 : 1—4…下 16	15…上 64	15—17…上 138	
4, 5…上 73	7—10…下 17	16…上 64	16…上 185	
22 : 25…下 248	15—21, 23, 24下 20	18…上 66	18…上 139, 194	
24 : 3, 7…上 260	28—31, 34, 35下 20	21—24…上 66	20…上 188	
25 : 2…上 36	47…下 109	28…上 73	21…上 188	
8…上 36	ヨシュア記	31…上 73	32…上 74	21 : 2…上 173
28 : 36…下 190	1 : 8…下 81	32…上 74	13 : 2…下 26	3…上 173
29 : 45, 46…下 182	2 : 11…上 337	2, 3, 5…上 74	2, 3, 5…上 74	4…上 173
31 : 13, 17…上 153	6 : 26…上 197	4, 6…上 76	4, 6…上 76	7…上 173
13—17…上 148	8 : 35…下 81	7—9…上 77	7—9…上 77	9, 10…上 173
18…上 149	サムエル記上	18—22…上 78	18—22…上 78	11…上 174
32 : 26…上 116	2 : 30…下 96	23—26…上 78	23—26…上 78	17—19…上 174
33 : 14…上 277	サムエル記下	33, 34…上 78	33, 34…上 78	20上句…上 174
34 : 6, 7…上 263, 277	12 : 7…上 110	14 : 15, 16…上 79	14 : 15, 16…上 79	20下句—21…上 174
35 : 21…上 36	25英欄外…上 27	16…上 78	16…上 78	22…上 174
30—36 : 1…上 37	23 : 3, 4…上 2	15 : 11…上 158	15 : 11…上 158	23…上 175
レビ記	4…下 285	29, 30…上 80	29, 30…上 80	25…上 172
26 : 21, 28, 33…下 49	列王紀上	16 : 25…上 84	16 : 25…上 84	25, 26…上 85
民数記	3 : 1…上 28	31, 32…上 84	31, 32…上 84	27—29…上 175
14 : 12…上 277	5—14…上 5	31, 33…上 84	31, 33…上 84	22 : 8…上 162
17—19参…上 277	7…上 22	34…上 198	34…上 198	16, 17…上 162
20, 21…上 278	16—28参…上 32	17 : 1…上 90	17 : 1…上 90	29…上 162
34参…下 299	28…上 9	3, 4…上 91	3, 4…上 91	36…上 162
15 : 30…上 269	4 : 21, 24, 25…上 27	9…上 97	9…上 97	43上句…上 158
24 : 17…下 282	29—31…上 8	10…上 98	10…上 98	43下句…上 158
36 : 7…上 173	32, 33…上 10	12…上 98	12…上 98	46…上 159
申命記	5 : 17…上 12	13, 14…上 98	13, 14…上 98	52, 53…上 175
4 : 1—6…上 261	6 : 7…上 12	15—24…上 99	15—24…上 99	列王紀下
6…上 6, 57下 109	8 : 29…上 40	18 : 1…上 106	18 : 1…上 106	1 : 4…上 176
9…上 261	33, 34…上 299	4…上 95	4…上 95	7, 8…上 176
15, 16, 19, 23…上 262	33, 34参…上 323	6…上 107	6…上 107	13…上 176
26—28…上 262	42, 43…上 40	8…上 107	8…上 107	15, 16…上 176
29…下 176	59, 60…上 323	9—12…上 107	9—12…上 107	17上句…上 178
		12—14…上 108	12—14…上 108	2 : 1—11参…上 195
		15, 16…上 108	15, 16…上 108	12—15…上 196
		17…上 107	17…上 107	19—21…上 198
		18…上 109	18…上 109	

ホワイト選集

- 1 人類のあけぼの (上巻)
- 2 人類のあけぼの (下巻)
- 3 国と指導者 (上巻)
- 4 国と指導者 (下巻)**
- 5 各時代の希望 (上巻)
- 6 各時代の希望 (中巻)
- 7 各時代の希望 (下巻)
- 8 患難から栄光へ (上巻)
- 9 患難から栄光へ (下巻)
- 10 各時代の大争闘 (上巻)
- 11 各時代の大争闘 (下巻)

N D C 194/350P/22cm

転載複製を禁ず

1977年11月1日 発行

著	者	エレン・G・ホワイト
訳	者	清野喜夫
発行者		広田実
印刷所		福音社

	〒241 横浜市旭区上川井町1966
発行所	福音社
	電話(045)921-1414 振替横浜 599番

	〒241 横浜市旭区上川井町846
発売所	健康と品性向上協会本部
	電話(045)921-1121
